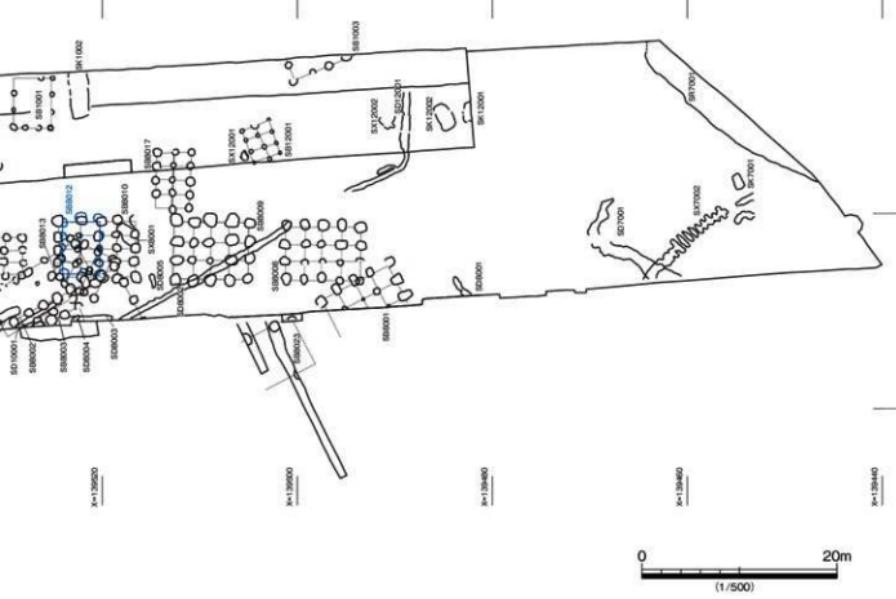


第 201 図 古代遺



構配図 (1/500)

2 古代（第201図）

1区～12区で検出した包含層1b層上面で検出した遺構である。検出遺構面は調査時の平面図の記録に掲げるが、調査区土層断面から、一部1b層下位層の上面で検出している遺構もあり、厳密には遺構面は単一ではない。

検出した掘立柱建物には多くの大型建物があった。主軸方位から大きく3時期が考えられる。1期は正方位・条里地割の方向を向かない建物群で、現市道より南側で1棟を検出した。2期は正方位を向く建物群で、大半が総柱建物である。すべて現市道より南側で検出した。建物の規格性が高く、側柱建物を含め20m程度の建物を4棟、45m程度の大型総柱建物を3棟検出した。45m規模の大型総柱建物のうち1棟は20m規模の建物から建て替えられており、正方位建物群が充実していく過程が窺える。これらは南海道成立以前の建物群と考えられる。3期は条里地割と同じ方向の掘立柱建物群と南海道に伴う溝群である。南海道が想定される現市道の北・南側では南海道の側溝と考えられる溝を検出した。現市道より北側では、延長26.27m以上の溝列とその北側に建て替えを伴う掘立柱建物3棟、南側では大型掘立柱建物を含め6棟検出した。

①掘立柱建物・欄列

1区・11区 SB1001（第202図）

1区から11区にかけて検出した掘立柱建物である。掘り込み面は1区では不明であるが、11区で確認した柱穴は1面で検出した。桁行3間×梁間3間の東西棟で、桁行5.06m、梁間3.84m、主軸方位は梁方向でN 27° Eで、ほぼ真北方向を指す。面積は19.89m²である。柱間は桁行は両端が1.59～1.60m、中央が1.82～1.87m、梁間は北から1.14m、1.48m、1.22mで、桁行・梁間とも中間がやや広い。柱穴はほぼ円形で、直径50～60cm、深さ20～30cm、柱痕跡は概ね直径10～15cm程度であった。

柱穴の埋土中からは土師器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、1面で検出したこと、建物方位が正方位を向くことから、条里地割施工以前（南海道敷設以前）の建物群と同時期の7世紀後半～末頃と考えられる。

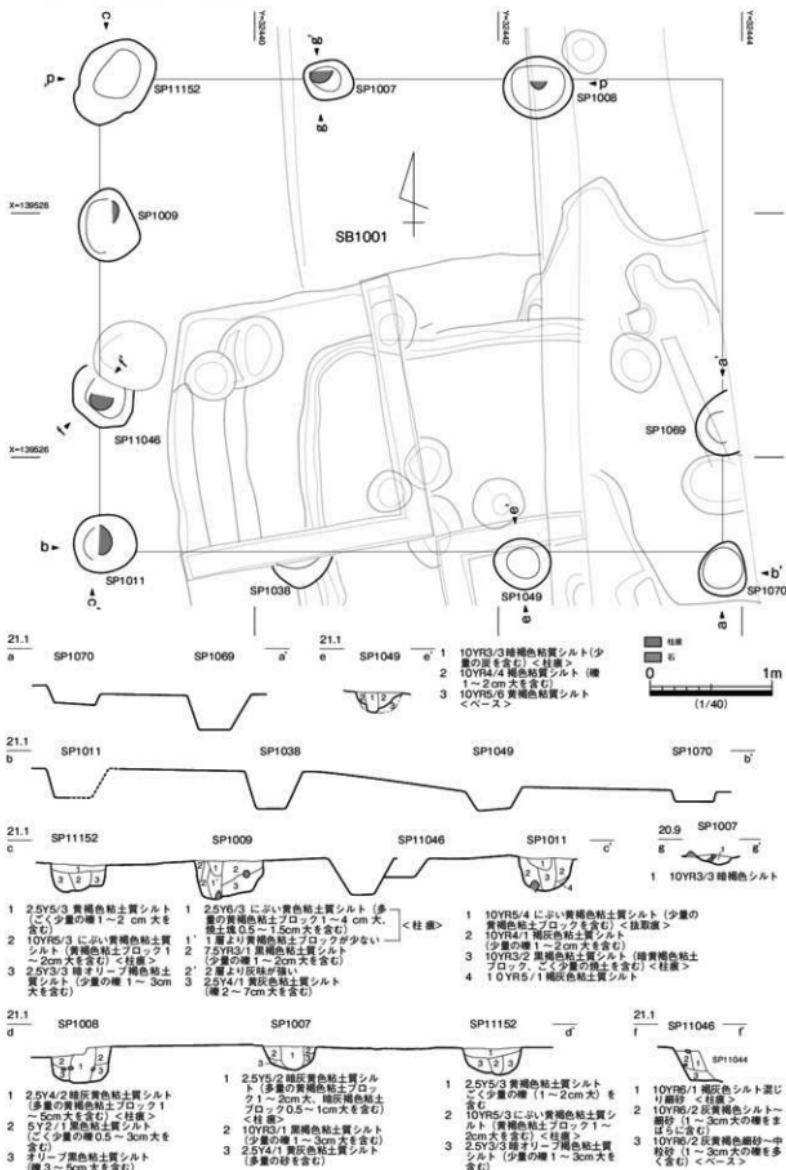
1区 SB1003（第203図）

1区南部で検出した掘立柱建物である。東半部は調査区外へ延びる。1区東壁土層から1面から掘り込まれることがわかる。3間以上×1間以上の側柱建物で、南北6.10m以上、東西2.14m以上、主軸方位はN 23.05° W、条里地割に近い方向で、面積は6.57m²以上である。柱間は南北方向が1.85～2.11m、東西方向が1.60m、柱穴は概ね楕円形～円形で、長軸70～80cm、深さ20～32cmを測る。柱痕はいずれも検出できなかった。

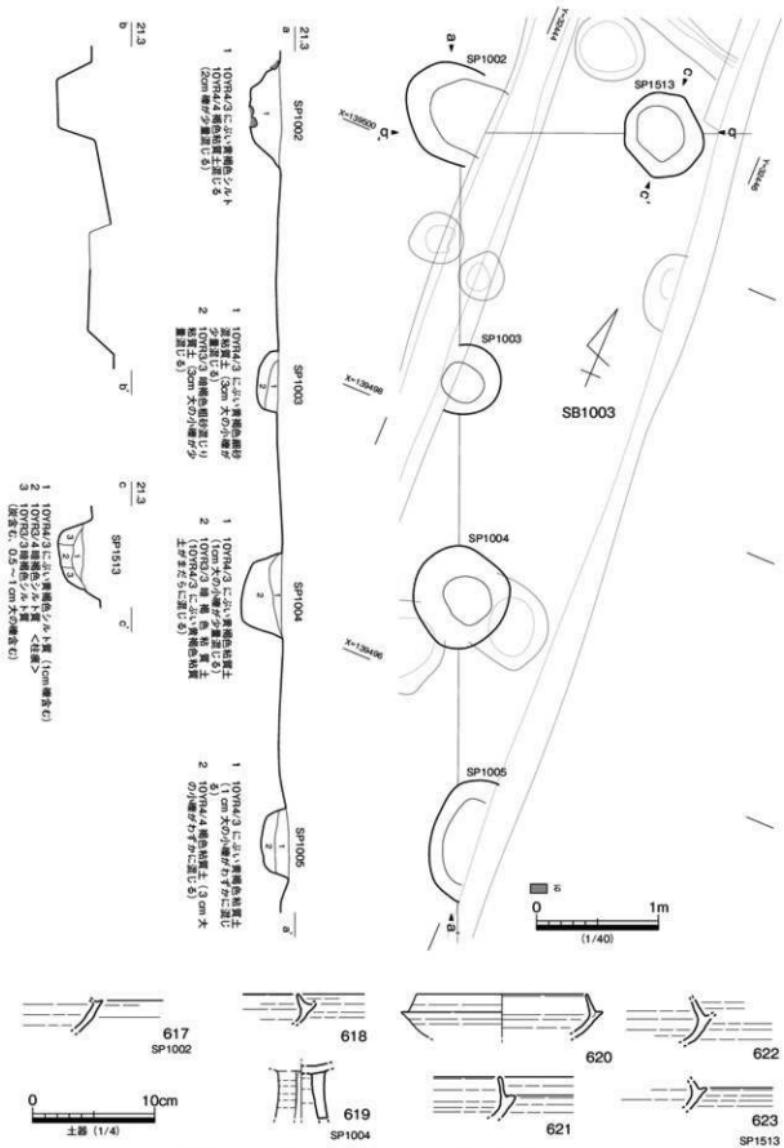
埋土中からは須恵器杯身・高杯が出土した。

617はSP1002から出土した須恵器杯身。体部外面には自然釉が付着する。上端部は欠損する。618・619はSP1004から出土した須恵器。618は杯身。619は高杯。長脚で、長方形の透かし孔が2ヶ所に認められる。620～623はSP1513から出土した須恵器杯身。621は焼成が不良で、内面は土師器の色調を呈する。6世紀末～7世紀初頭（II-4～5期）。

遺構の時期は、1面で検出したこと、建物方向が条里地割に近い方位を示すことから、南海道敷設以降、8世紀前半以降と考えられる。遺物は古墳時代後期の遺構や包含層からの混入と考えられる。



第202図 SB1001 平・断面図 (1/40)



第203図 SB1003 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/40)

2 区 SB2001a (第 204・205 図)

2 区北部で、1 面で検出した。SD2001・SD2010 の北側、直角に屈曲する SD2008 の南西方向に位置し、これらの溝に囲まれた区画に位置する。SB2001b と重複し、これより古い。SB2001b は、位置関係から SB2001a の建て替えと考えられる。桁行 3 間 × 梁間 2 間の東西棟で、桁行 6.41 ~ 6.49m、梁間は 4.55m ~ 4.58 m、主軸方位は梁方向で N27.90° W、概ね周辺の条里地割の方向と同じで、面積は 29.67m² である。柱間は桁行が 1.80m ~ 2.40m、梁間が 2.20 ~ 2.35m で、桁行柱間にややばらつきがあるが、柱筋は概ね揃う。形状は概ね隅丸方形、隅丸長方形で、長軸 55 ~ 80cm、短軸 50 ~ 70cm、深さ 10 ~ 40cm、柱痕跡の直径は概ね 20cm 程度である。横列と区画溝に囲まれた掘立柱建物であるが、大型の建物ではなく、付属的な建物と考えられる。

柱穴の埋土中からは須恵器杯・蓋、土師器杯・皿が出土した。

624 ~ 626 は SP2067 から出土した。624・625 は須恵器。624 は蓋小片。625 は高台付杯。626 は土師器皿。歪みが著しい。内面にはヘラ磨きが認められる。627 は SP2069 から出土した平瓦。摩滅が著しく、調整痕は残らない。628 は SP2162 から出土した土師器。高台付杯小片か。

遺構の時期は、出土遺物から 9 世紀中頃と考えられる。SB2001 の東側に隣接して検出した区画溝 SD2008 からも同時期の遺物が出土しており、区画の時期を示していると考えられる。

2 区 SB2001b (第 204・206 図)

2 区北部で検出した。1 面で検出した。SB2001a と重複して検出し、これより新しい。SB2001a の建て替えと考えられる。桁行 3 間 × 梁間 2 間の東西棟で、西側柱筋が東側に比べ 0.54m 程度短い。桁行 7.24 ~ 7.26m、梁間は西側が 3.91m・東側が 4.45m、主軸方位は柱列によりややばらつきがあるが、概ね梁方向で N25.42 ~ 30.17° W、周辺の条里地割と同じ方向で、面積は 30.31m² である。柱間は桁行が 1.56 ~ 3.21 m、梁間が 1.85 ~ 2.25m で、桁方向は中央の柱間が狭く、梁方向では東側の柱間が広い。柱穴の形状は概ね隅丸方形で、軸長 42 ~ 82cm、深さ 20 ~ 42cm、柱痕跡の直径は 16cm 程度である。掘立柱建物の形状は SB2001a に比べやや歪み、柱筋も揃わない。区画施設に囲まれた建て替えを伴う建物であるが、SB2001a 同様大型の建物ではなく、区画施設内の中心建物ではなく付属建物と考えられる。

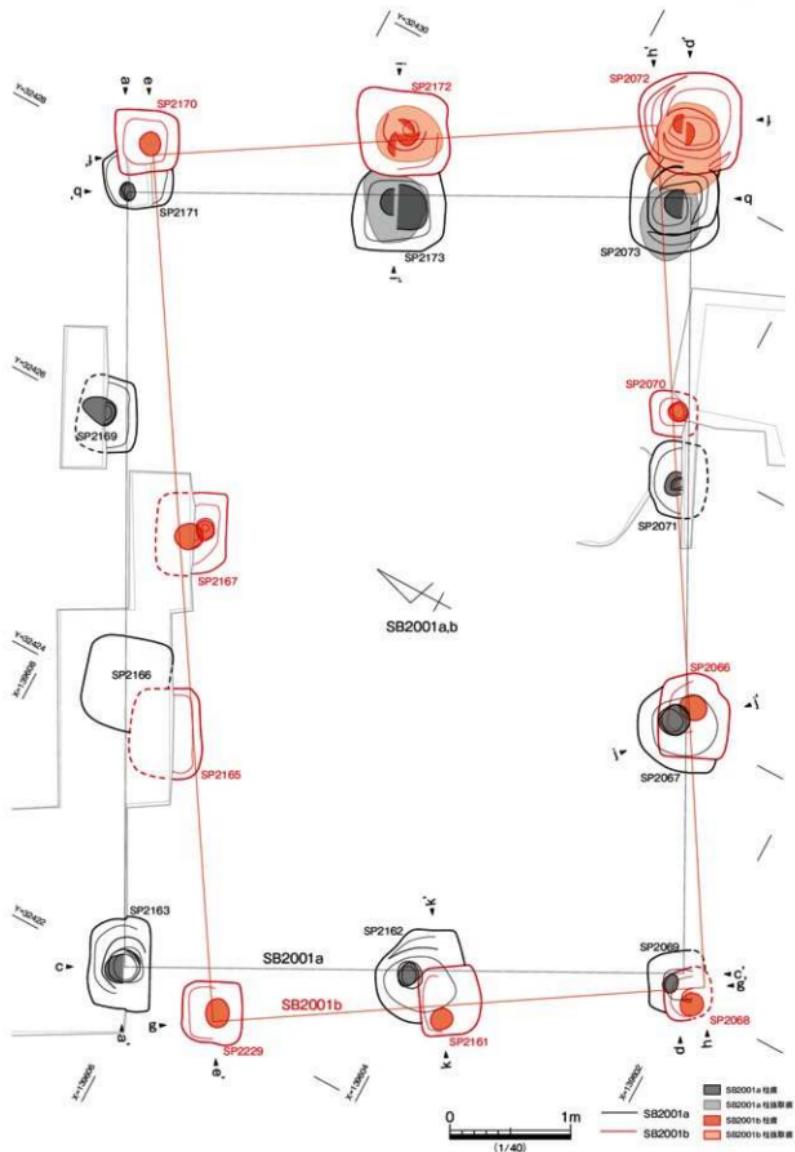
埋土中からは須恵器杯などが出土した。

629・630 は SP2066 から出土した。629 は須恵器杯小片。630 は土師器杯小片。631 は SP2068 から出土した。須恵器杯底部。見込みにヘラ描きが認められる。9 世紀後半頃。

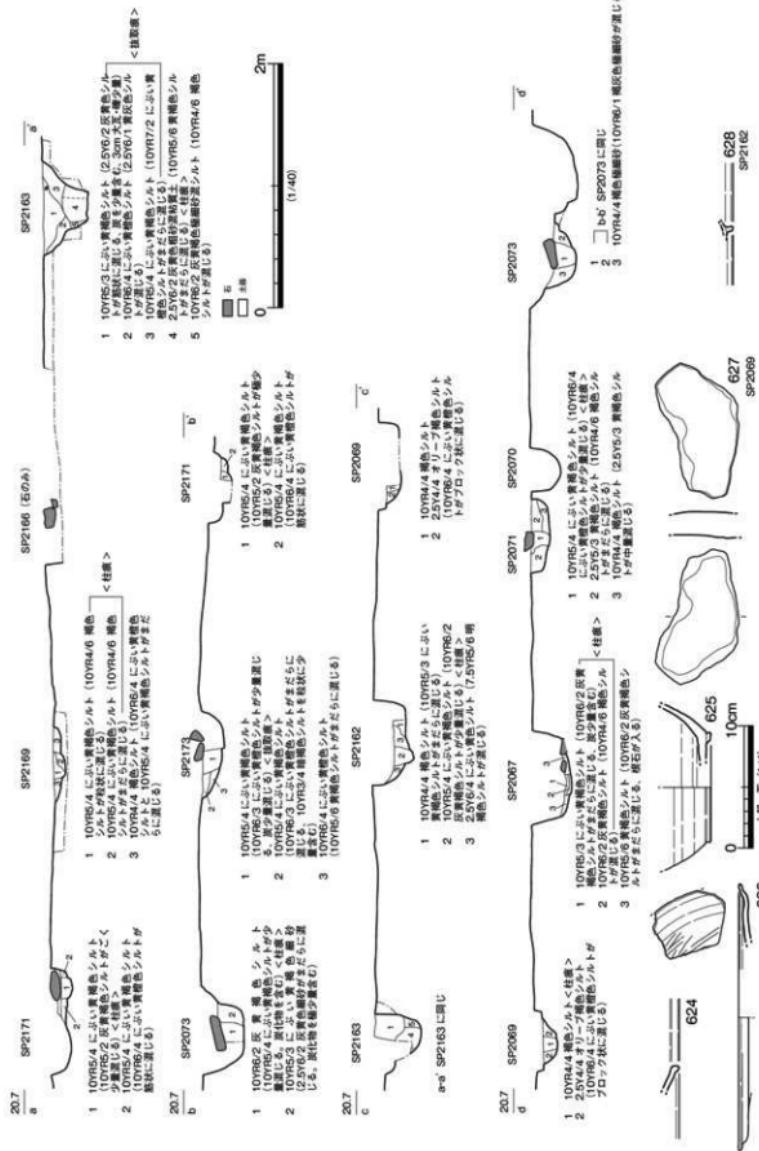
遺構の時期は、出土遺物により 9 世紀後半頃と考えられる。

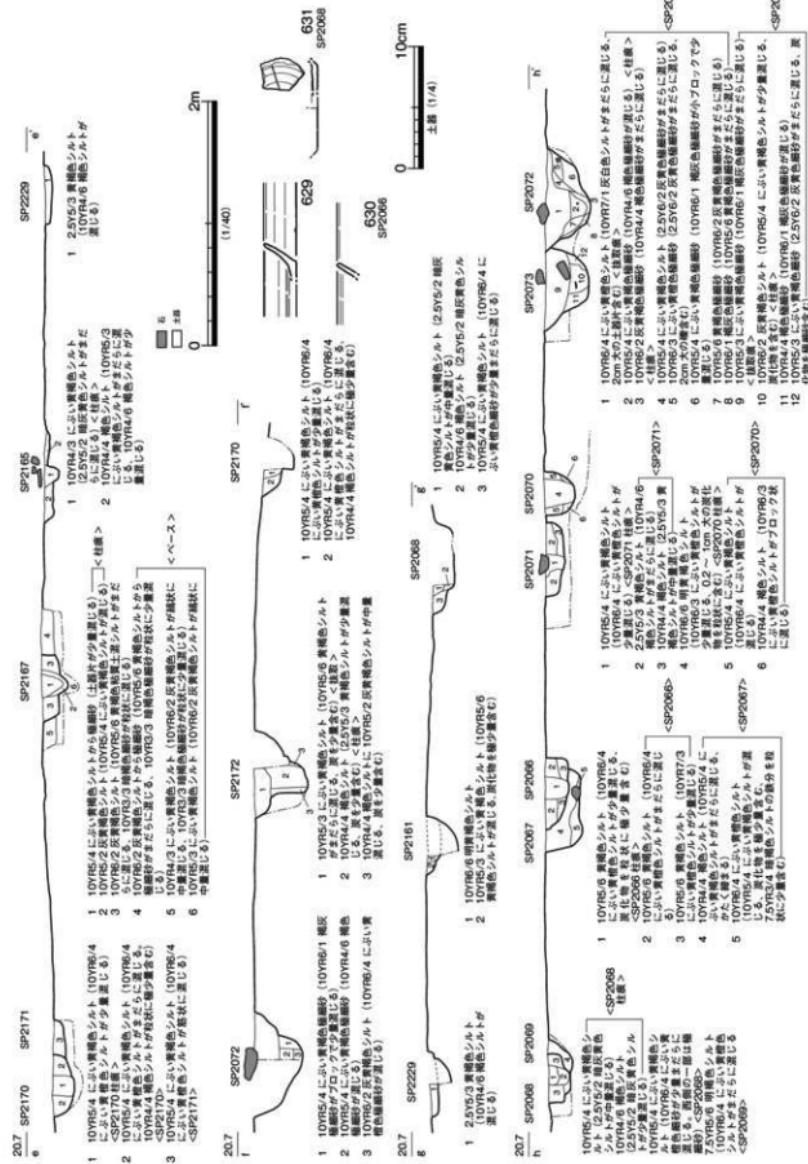
2 区 SB2002 (第 207・208 図)

2 区中央付近で検出した。1 面で検出した。桁行 3 間 × 梁間 2 間の南北棟と考えられるが、南側梁間の中央、東側桁行南から 2 穴目、東南隅の柱穴は検出できなかった。桁行 5.22m、梁間 4.31m、主軸方位は N28° W、概ね条里地割と同じで、面積は約 22.11m² である。柱間は西側の桁行 1.61 ~ 1.89m、東側の桁行柱間は 2.11m、北側の梁間柱間は 1.80 ~ 2.51m で西側がやや広い。柱穴の形状は隅丸方形または隅丸長方形で、軸長 50 ~ 80cm、深さ 24 ~ 36cm、柱痕の直径は 18cm 程度である。SA2001 および SD2001 を掘り込み、これらより新しい。SD2001・SA2001 の一部を撤去後に、区画の南辺部に沿わせて配置された建物と考えられる。

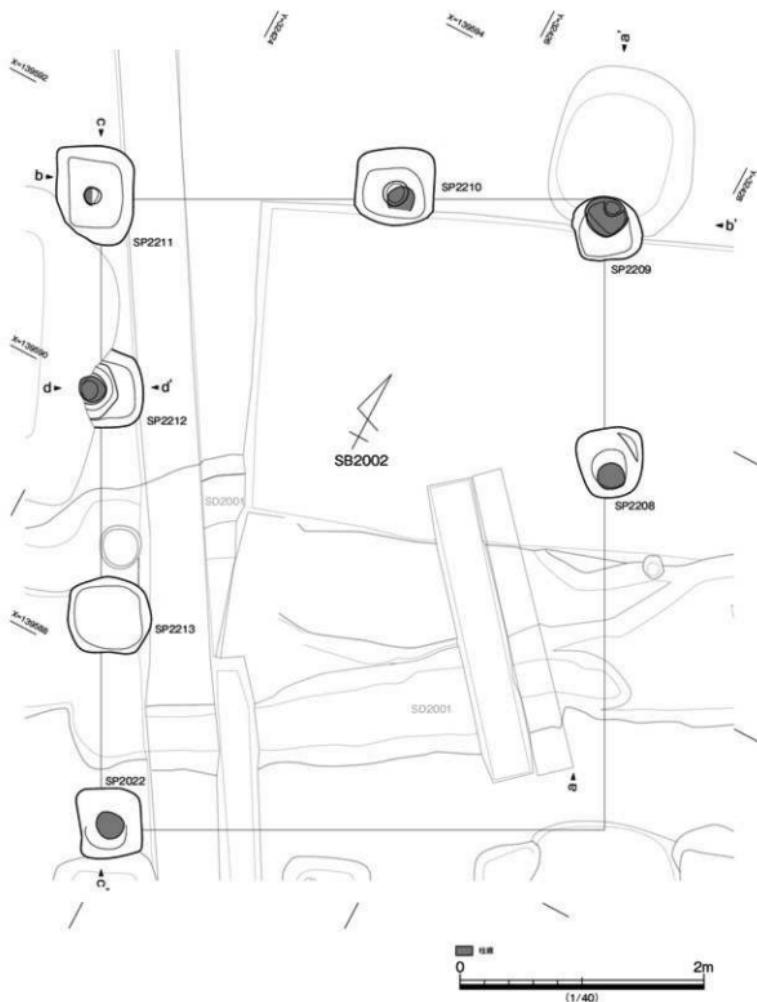


第204図 SB2001a・b 平面図 (1/40)

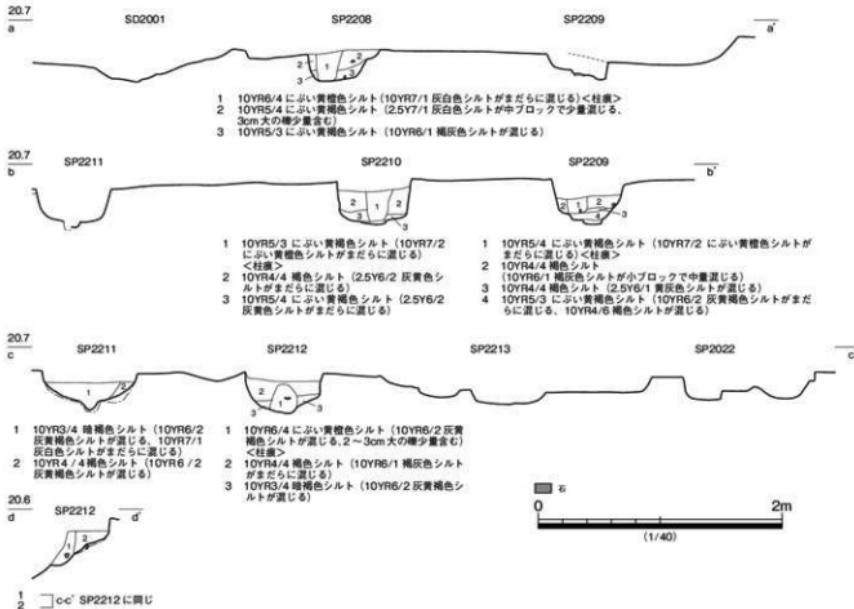




第206図 SB2001b断面図(1/40)、出土遺物(1/4)



第207図 SB2002 平面図 (1/40)



第208図 SB2002断面図 (1/40)

柱穴埋土中からは須恵器、土師器小片が出土した。

遺構の時期は、主軸方位が条里地割の方向であること、SD2001より新しいことから、南海道敷設以降、8世紀前半以降と考えられる。

2区 SA2001a・b (第209図)

2区南部で検出した。1面で検出した。東・西側とも調査区外へ延びる。延長 26.27m を検出した。主軸方位は W 26.29° S である。西・東側では構成する柱穴に前後関係が認められ、1度の建て替えが考えられるが、西から 7 ~ 9 穴目、SB2002 と重複する部分には SA2001 に重複する柱穴ではなく、SA2001a・b どちらの時期の属するかは定かではない。SA2001a・b による柱穴の特徴に差は認められない。

構列の南側には芯々距離で 1.17m の位置に SD2002、北側の芯々距離 1.68m には SD2001、SD2010 があり、これらは SA2001 に伴う溝と考えられる。南へ 16.7m の位置には、古代南海道側溝と考えられる SD2004 が、北側 14.65m の位置には SB2001 がある。これらの施設群を区画する、南海道に面した構列と考えられる。

SA2001a は、古い方の柱穴で構成される構列である。16 間分を想定している。柱間は 1.18m ~ 1.98m であるが、概ね 1.38m ~ 1.84m、特に 1.7m 前後が多い。西から 7 穴目 ~ 9 穴目は重複する柱穴がないが、この位置で重複する SB2002 の柱穴が SA2001 の柱穴を掘り込むことを考えれば、SA2001 の一部を撤去して SB2002 が設置されたことが考えられるため、これらの柱穴は SA2001a に属すると考えられる。

柱穴は隅丸方形、隅丸長方形で、概ね長辺 47.5 ~ 64.9cm、短辺 41.6 ~ 55.9cm、深さ 20cm程度、柱痕跡の直径は 18 ~ 20cm程度である。柱穴埋土中からは須恵器壺片・杯蓋または杯身片、土師器片が出土した。

SA2001b は、新しい方の柱穴で構成される柵列である。15間分を想定している。柱間は 1.45m ~ 2.16m であるが、1.64 ~ 1.77m に集中する。SA2001a よりはやや柱間は広めである。柱穴は SA2001a よりやや大きく、隅丸方形、隅丸長方形で、概ね長辺 60.4 ~ 77.0cm、短辺 46.8 ~ 61.8cm、深さ 26 ~ 36cm、柱痕跡の直径は 16cm程度である。西から 3 穴目は抜き取り痕が認められ、4 穴目は、何らかの理由で柱穴が 2 穴重複していると考える。7 ~ 9 穴目は SA2001b の柱穴は存在しないと考えられ、この部分には SB2002 が配置されると考えられる。

柱穴埋土中からは須恵器壺片・杯蓋または杯身片、土師器片、鉄滓片が出土した。

632 は SA2001b-SP2023 から出土した須恵器杯蓋小片。633 は SA2001b-SP2006・SA2001a-2007 から出土した須恵器杯身小片。634 は SA2001a-SP2011 から出土した。サヌカイト製石鎌の欠損品か。874 は SA2001b-SP2015 から出土した鉄滓。

SA2001 には SD2001・2002・2010 が付随することを考えれば、遺構の時期はこれらの溝と同じ 8 世紀代と考えられる。

2 区 SA2002a・b (第 210 図)

2 区東端で検出した南北方向の柵列である。1 面で検出した。SD2008 と SD2011 に挟まれた空闊地に位置する。北から約 6m の位置から始まり、南側は調査区外へ延びる。SD2008 の東側 1.5 ~ 1.7m、SD2011 の西側 0.5 ~ 1.0m 位置で検出した。区画の東側を限る溝に伴う施設と考えられる。北側 3 穴は柱穴に前後関係がなく、完全に同位置に建てられたまたは存在しなかったと考えられる。SA2002a・b とも柱通りはやや悪い。

SA2002a は、古い方の柵列である。延長 9.77m、主軸方位は N30.86° W である。柱間は前後関係がある柱穴が検出された南側 4 穴は 1.46 ~ 1.49m、それ以北は 1.60 ~ 2.13m でばらつきが大きい。柱穴は梢円形で、長軸 30.5 ~ 48.4cm、短軸 28.1 ~ 48.3cm、深さ 10 ~ 42cm、柱痕跡の直径は 14cm程度である。埋土中からは須恵器、土師器小片、サヌカイト製石鎌が出土した。

SA2002b は、柱穴の前後関係から新しい方の柵列である。延長 9.83m、主軸方位は N28.76° W で、SD2011 へ寄る。柱間は南側 4 穴までは 1.43 ~ 1.77m、それ以北は 1.32 ~ 2.13m である。柱穴は梢円形で、長軸 34.6 ~ 55.4cm、短軸 29.7 ~ 49.1cm、深さ 14 ~ 42cm、柱痕跡の直径は 16cm程度を測る。

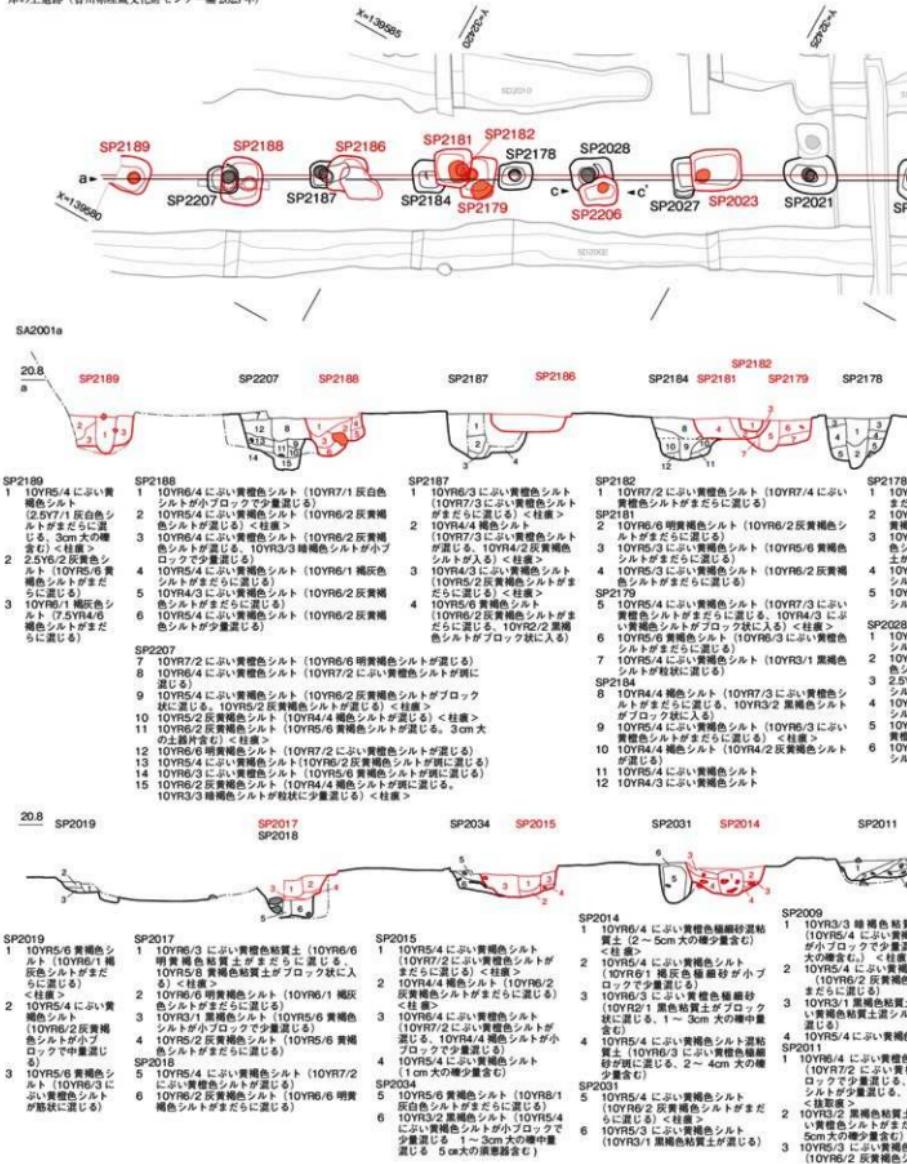
埋土中からは土師器小片のほかサヌカイト製石鎌が出土した。

635 は SA2002b-SP2243 から出土した。サヌカイト製石鎌。凹基式。

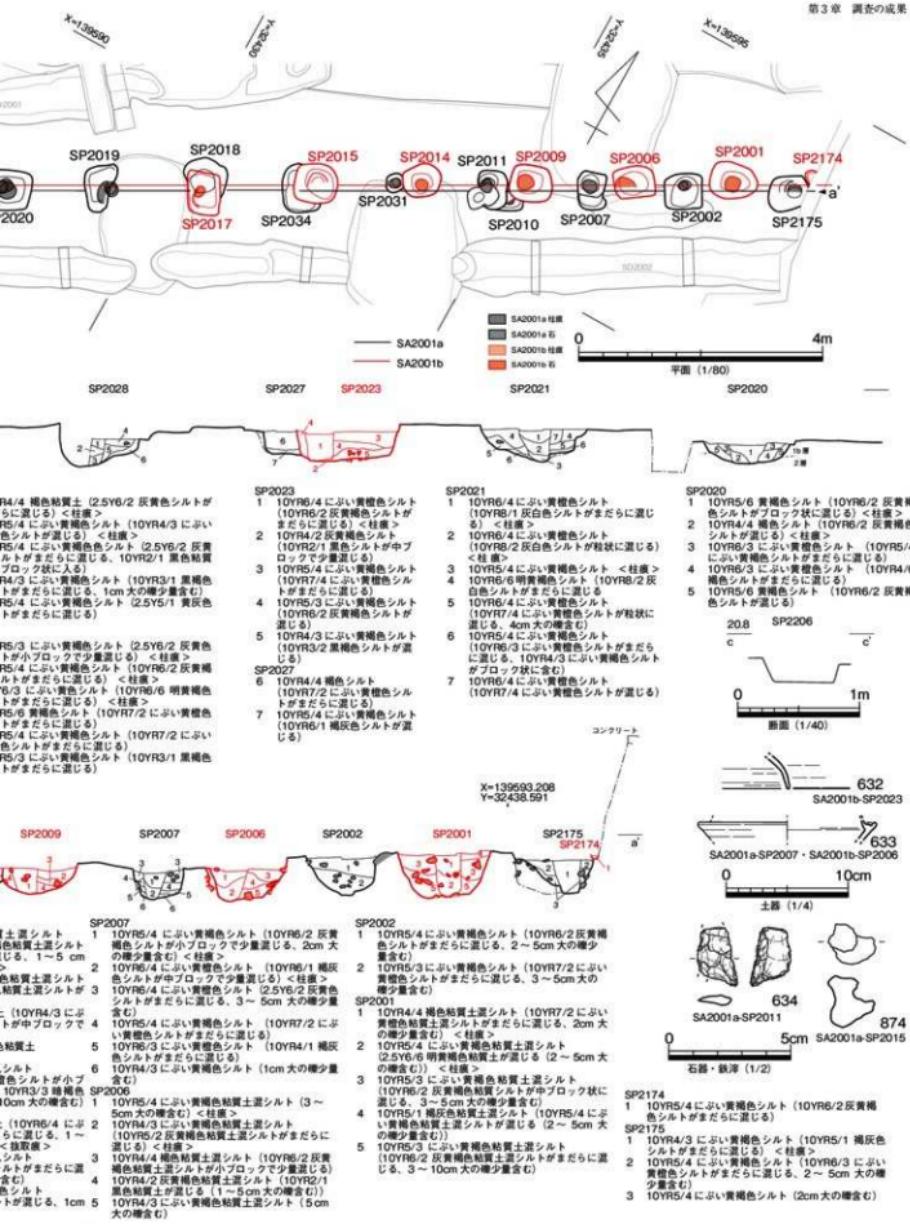
遺構の時期は、SD2008・SD2011 と強い関連性が認められることから、これらと同じ 9 世紀中頃と考えられる。

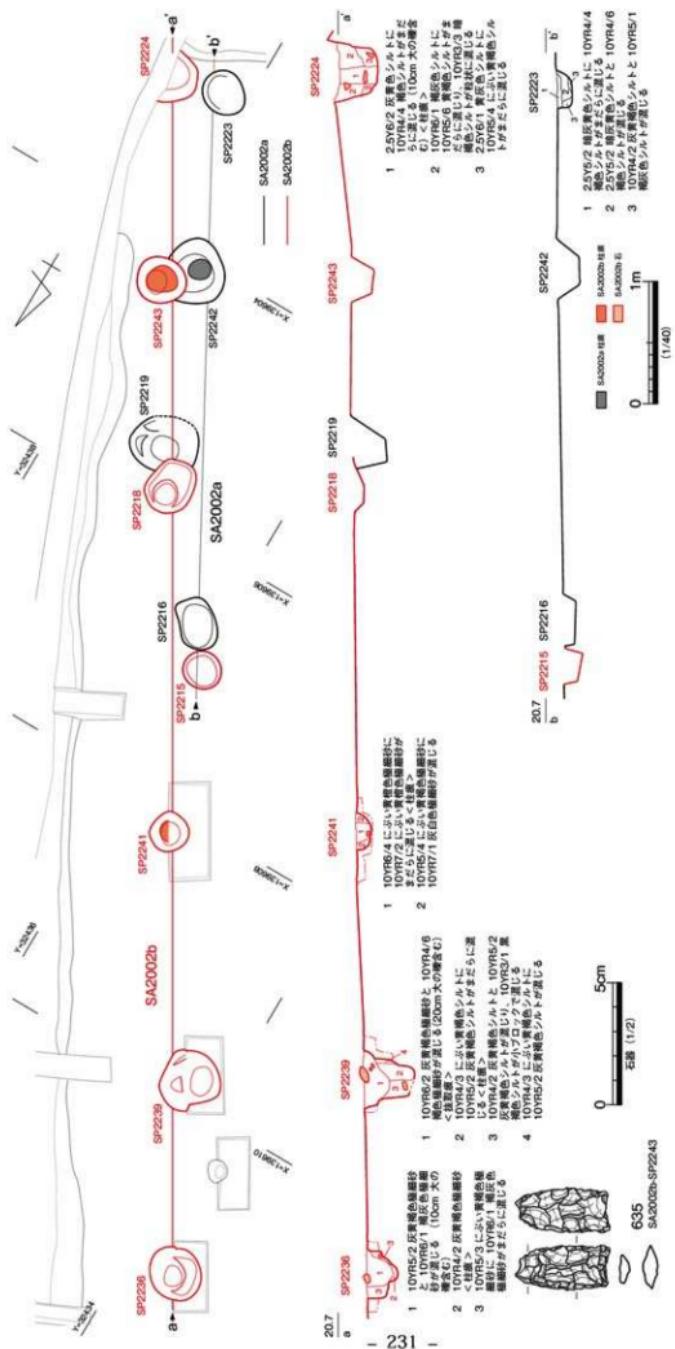
8 区 SB8001 (第 211・212 図)

8 区南部で検出した。西壁断面図によれば包含層 1b 層の堆積が認められない場所で、包含層 1a 層よりは古い。桁行 4 間 × 梁間 2 間以上の総柱建物である。約 5.5m 北側で検出した SB8023 と方位、東側の側柱の柱筋を揃え、さらに北側約 18.7m で検出した SB8002 と方位を揃え、これらの大型建物と強い関連性が窺える。桁行 7.71m、梁間 3.62m 以上、主軸方位は N28.48° W で条里方向に近く、面積は

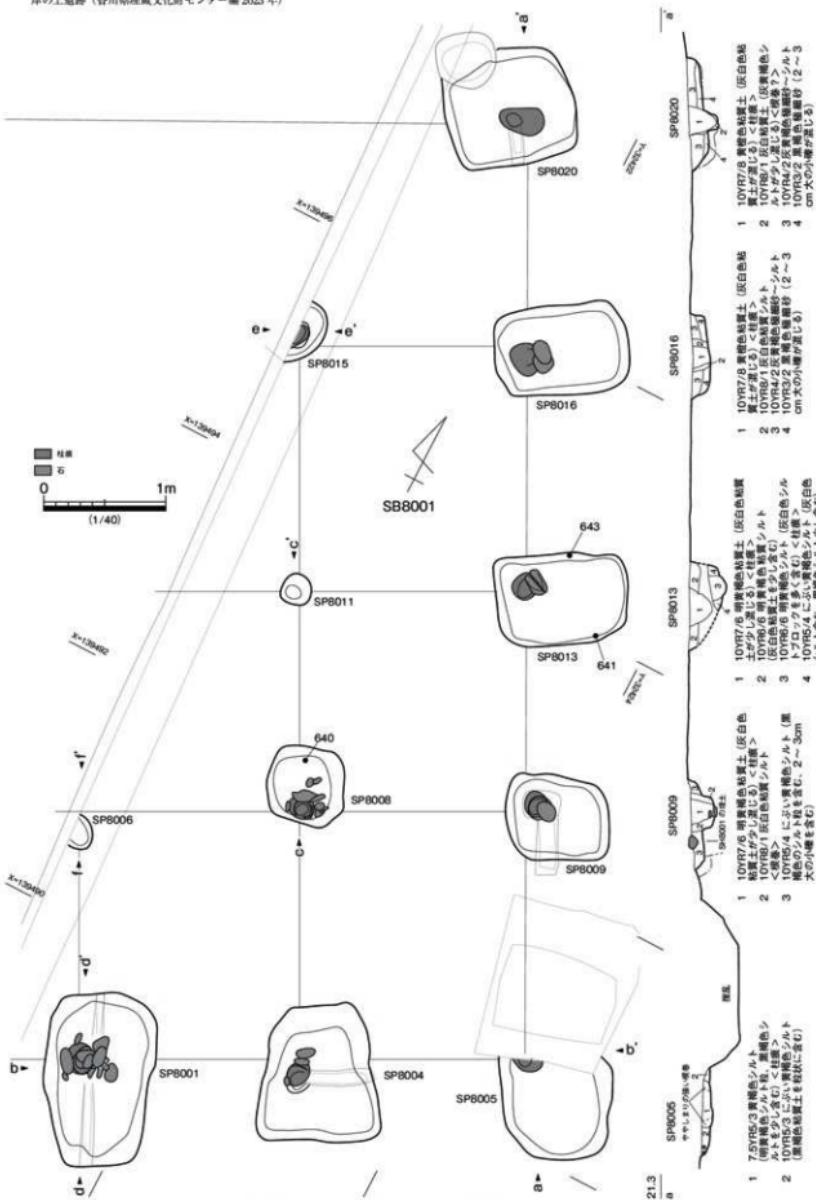


第209図 SA2001a・b平・断面図

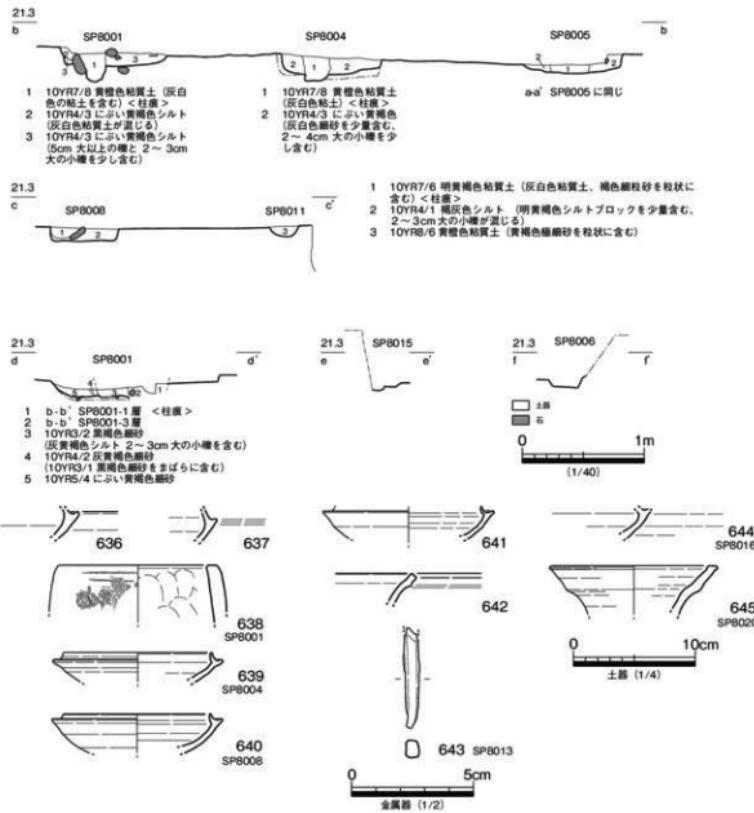




第210図 SA2002a・b平・断面図(1/40)、出土遺物(1/2)



第211図 SB8001 平・断面図1 (1/40)



第212図 SB8001断面図2(1/40)、出土遺物(1/4・1/2)

27.91m²以上である。柱間は桁方向の北側3間は1.82～1.92mで、最も南側のみ2.01mでやや広い。梁間は東から1.78m、1.84mである。柱穴の形状は、側柱は隅丸方形を呈し、長軸84～142cm、短軸74～92cm、深さ12～24cmで、柱痕跡は直径24～26cmである。東柱は不整円形で、長軸60～64cm、短軸54～64cm、深さ10cm、柱痕跡の直径は20cm程度である。埋土中からは須恵器、土師器、鉄器などが出土した。土器はいずれも小片であった。

梁間を、北側に位置する SB8023 に揃えて 3 間に復元すれば、面積は 42.16m² 程度を測り、正方形の大型純柱建物である SB8008 と同じ規格になる。これらの建物群の機能の一部を引き継いだ可能性がある。

636～638はSP8001から出土した。636・637は須恵器杯身小片。638は土師質の円筒状の土器。

種不明。639はSP8004から出土した須恵器杯身。640はSP8008から出土した須恵器杯身。641～643はSP8013から出土した。641・642は須恵器。641は杯身。642は甕口縁部。643は棒状鉄片。644はSP8016から出土した須恵器杯身。645はSP8020から出土した須恵器甕口縁部。出土遺物は概ね7世紀初頭～前半頃（II-5～6期）である。

出土遺物は7世紀初頭～前半頃であったが、条里地割の方位を示す建物であることから、8世紀前半～中頃と考えられる。

8区・10区 SB8002（第213～215図）

8区北部から10区南部で検出した掘立柱建物である。西半部は調査区外へ延びる。1面で検出した。西壁断面図によれば、SP10038はSD10001より古く、包含層1b層を掘り込む。桁行7間以上×梁間3間以上の側柱建物で、桁行11.55m以上、梁間6.05m以上、主軸方位はN28.29°Wで条里地割とほぼ同じ方向を示し、面積は31.41m²以上である。7間×3間を想定すれば、71.22m²を測る大型建物である。柱間は、桁行が北から2間目のみ1.41mで、他は1.62～1.76m、梁間は、北側は不明であるが、南側では東から1間目のみ1.72m、2間目より西は2.10m程度である。柱穴は円形、不整円形、隅丸方形で、長軸76～124cm、短軸76～93cm、深さは桁方向の柱は40～70cm、梁方向の柱は26～30cm、柱痕跡の直径は20cm程度である。SP8068・8195・10015・10030・10006には柱痕跡の周囲に疊が置かれていた。

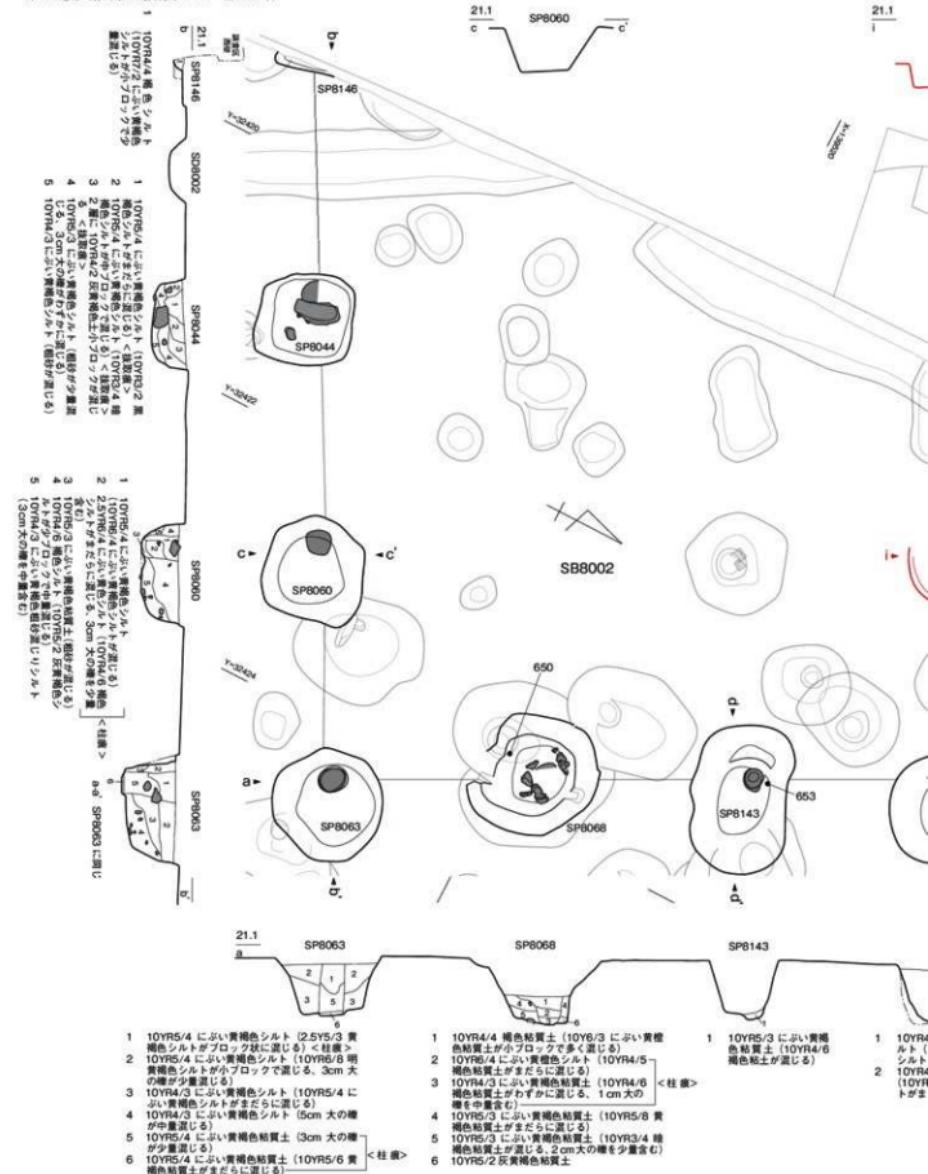
近接するSB8001・SB8023とは建物の主軸方位がほぼ同じ条里方向を示す大型建物であり、関連する建物群の一部と考えられる。庇は付かないが、建物規模から中心的な役割を果たした建物と考えられる。

646はSP8044から出土した須恵器杯身。647はSP8060から出土した須恵器杯蓋。口縁端部がわずかに外反する。648はSP8063から出土した須恵器甕。孔部分は残らないが、体部に沈線が2条残る。649～652はSP8068から出土した。649・650は須恵器。649は杯蓋。650は高杯脚部小片。651は平瓦。凸面には格子タタキ痕が残る。凹面には摩滅のため布目痕は残らない。652はふいご羽口。ガラス質を呈する部分が残る。653・654はSP8143から出土した。653は須恵器甕口縁部か。654は土師器甕。657～660はSP10006から出土した。657～659は須恵器。657は蓋。口径が小さく、壺の蓋と考えられる。口縁端部は断面四角形にする。658は杯身小片。659は杯底部。内面には摩滅痕があり、転用硯として使用されたことがわかる。660は鉄滓。661・662はSP10015から出土した須恵器。661は杯身小片、662は高杯脚部。663～665はSP10030から出土した。663・664は須恵器。663は杯蓋。664は蓋。665は平瓦。土師質の焼成。凸面は平行タタキ痕、凹面は布目痕が残るが、摩滅が著しい。出土遺物は6世紀末～7世紀中頃（II-4～III-1期）が多く、包含層1b層からの混入と考えられるが、664は8世紀中頃と考えられ、遺構の時期を示すと考えられる。

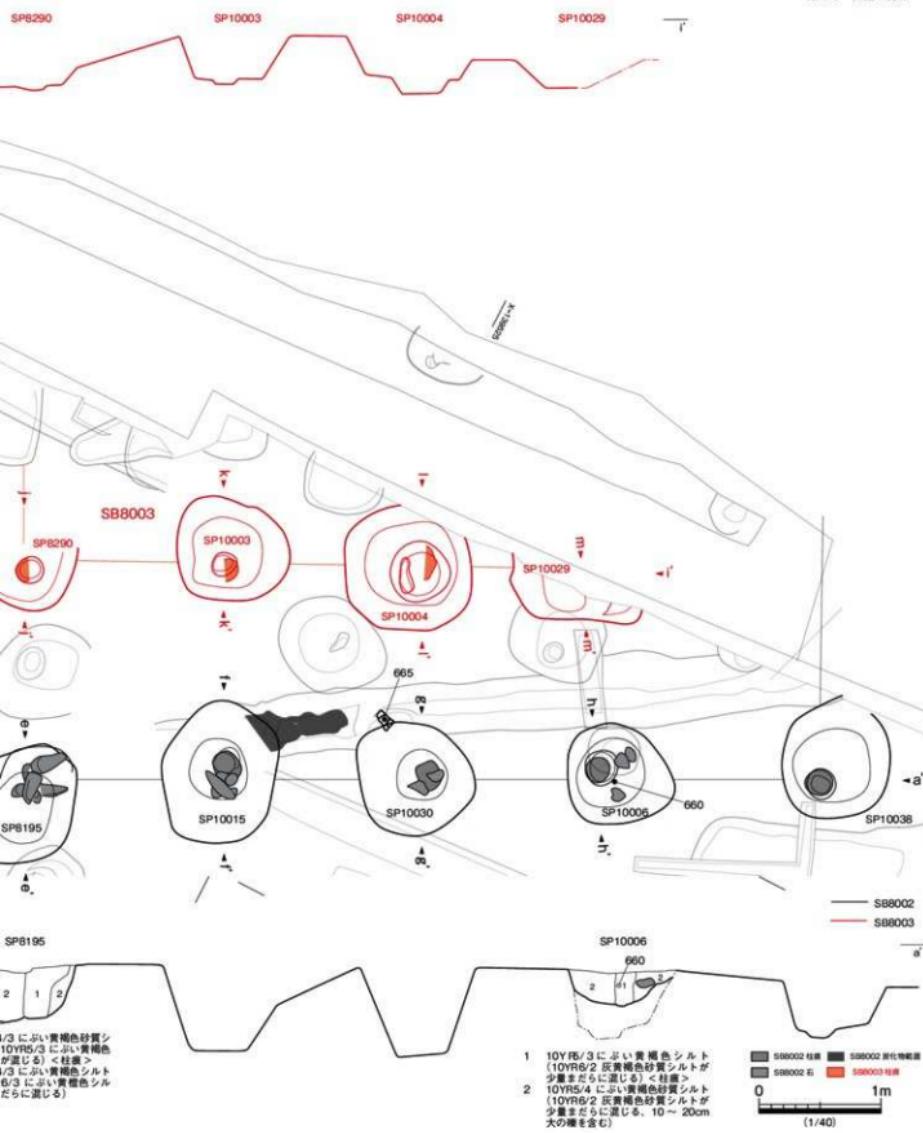
遺構の時期は、包含層1b層上面で検出したこと、建物の主軸方位が条里方向を向くこと、出土遺物から8世紀中頃と考えられる。摩滅が著しい平瓦片や転用硯が出土したことも注目される。

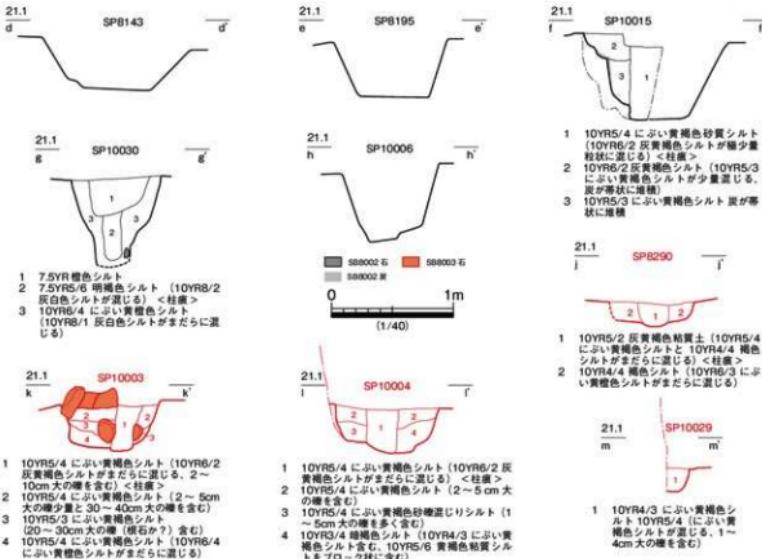
8区 SB8003（第213～215図）

SB8002の西側で、SB8002東側柱列に柱筋を揃えて検出した。SP8290・10003・10004・10029は、SB8002の東柱列と柱通りがよいが、西壁土層図によれば、SP10004・10029は1b層下位層から掘り込まれ、1b層上位層部分により覆われており、SB8002-SP10038とは掘り込み層位が異なるため、SB8002に先行する別の建物の一部と考えられる。



第213図 SB8002・SB8003





第214図 SB8002・SB8003断面図2(1/40)

南北方向3間以上、東西方向不明で、南北方向4.49m以上、東西方向1.69m以上、主軸方位はN27.29°Wで条里方向とほぼ同じである。柱間は1.17～1.65m、柱穴は概ね不整円形で、軸長80～102cm、深さ40～50cm、柱痕跡の直径は18～20cmである。SB8002の前身施設、または、検出した柱列が梁間となる掘立柱建物となる可能性もあるう。

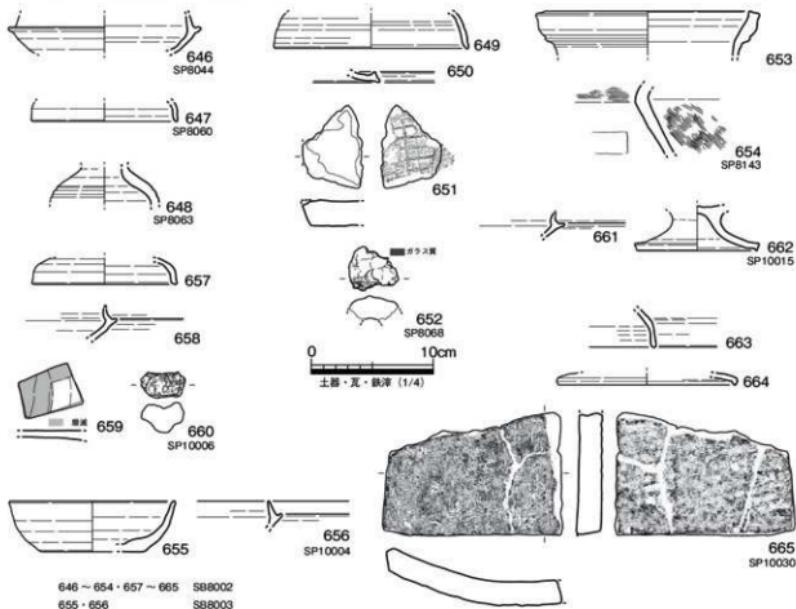
655・656はSP10004から出土した須恵器。655は杯。656は杯身。出土遺物は7世紀初頭～中頃（II-5～III-1期）と考えられ、包含層1b層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、条里地割施工後でSB8002よりやや早い8世紀前半頃と考えられる。

8区 SB8008 (第216・217図)

8区南部で検出した。1面で検出した。SB8001と重複し、これより古い。桁行4間×梁間3間の南北棟の総柱建物である。桁行7.61m、梁間5.60m、主軸方位はN022°Wで、ほぼ正方位を指し、面積は42.62m²である。柱間は桁行が北から1.98m・1.66m・2.11m・1.86m、梁間は西側と東側が1.96mで、中央が1.68mである。柱間ににはややばらつきがあるが、柱筋は揃う。柱穴は不整円形、隅丸方形で、後世の段下げで壊されてやや柱穴が小さめの西側から2列目の柱列の柱穴を除けば、概ね長軸84～120cm、短軸70cm～110cm、深さ12～50cm、柱痕跡の直径は26～30cmである。北側約3.89mの位置にはほぼ同規模で柱筋が揃う総柱建物SB8009が、さらにその北3.96mには、側柱の柱筋が揃うSB8010を検出した。これら3棟は計画的に配置された規格性の高い建物群と考えられる。

666 は SP8017 から出土した須恵器杯身。667 は SP8021 から出土した須恵器杯蓋小片。668 は SP8022



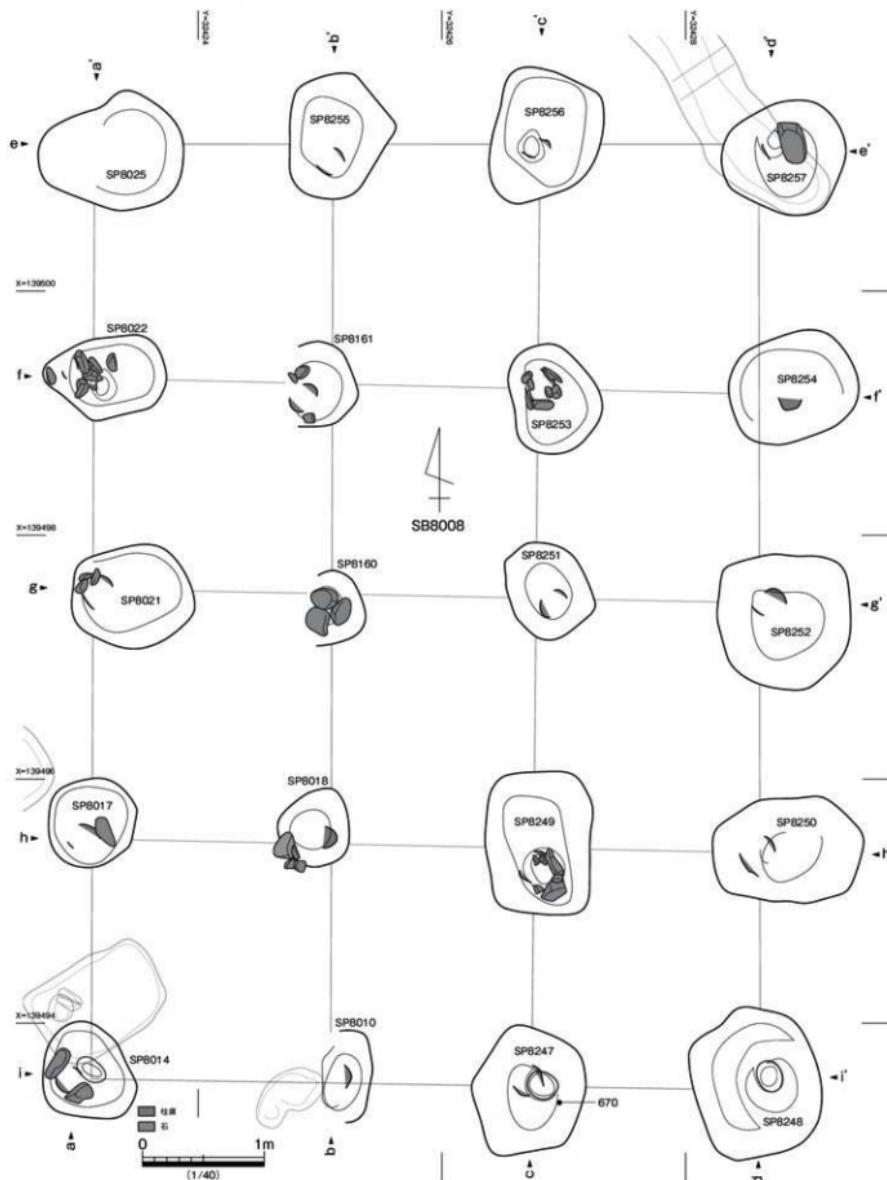
第215図 SB8002・SB8003出土遺物 (1/4)

から出土した土師器壺または瓶把手。669はSP8025から出土した須恵器杯身。670はSP8247から出土した須恵器提瓶小片。把手部分の退化が著しい。671はSP8248から出土した須恵器杯身。672はSP8250から出土した須恵器杯身小片。673はSP8251から出土した須恵器杯蓋。674はSP8252から出土した須恵器杯身。675はSP8254から出土した須恵器杯蓋。676はSP8257から出土した須恵器杯身。675以外はいずれも小片であるが、杯身の口縁端部の立ち上がりの退化が著しく、7世紀初頭～前半（Ⅱ-5～6期）頃の須恵器が多い。いずれも包含層1b層からの混入と考えられる。

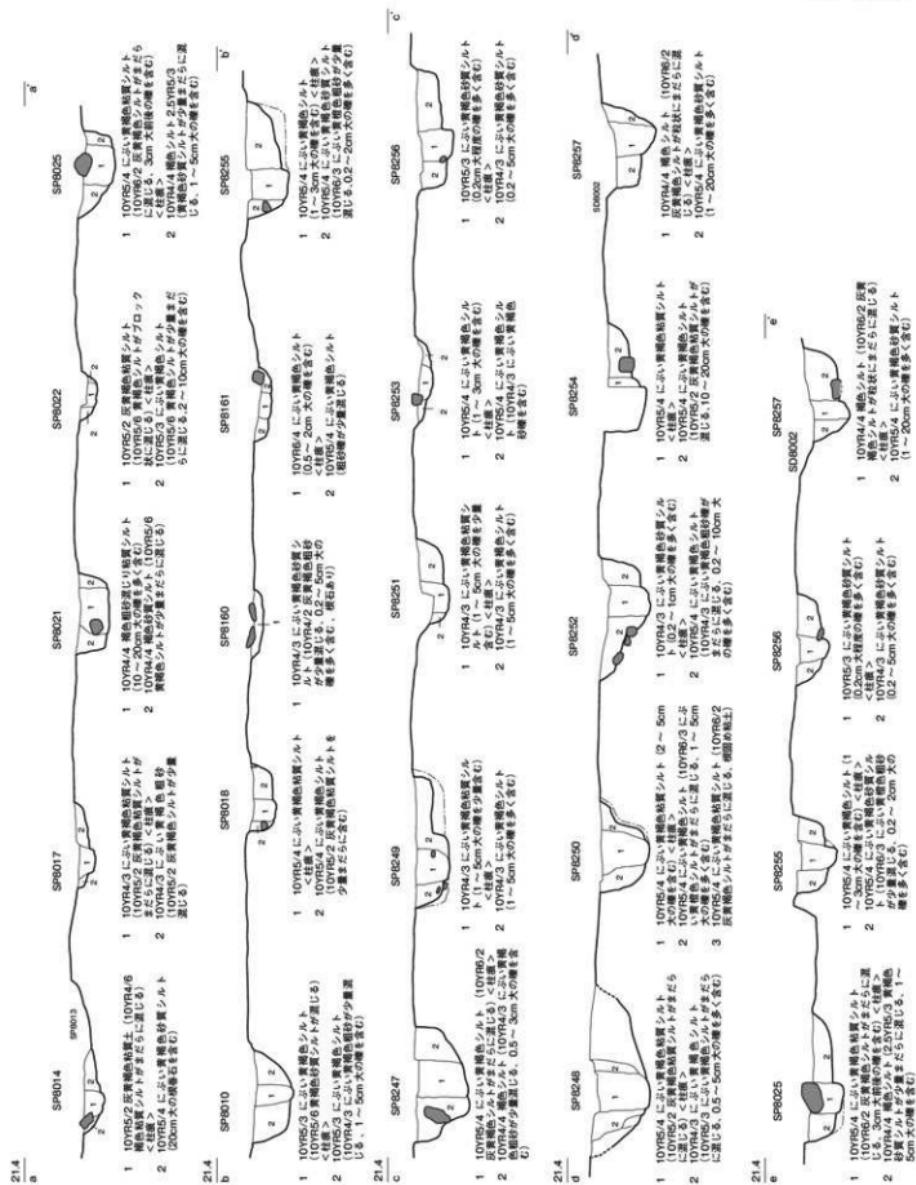
造構の時期は、1面で検出したこと、条里方向を示すSB8001より古く、正方位を示すことから、7世紀後半～8世紀初頭頃と考えられる。

8区 SB8009（第218～220図）

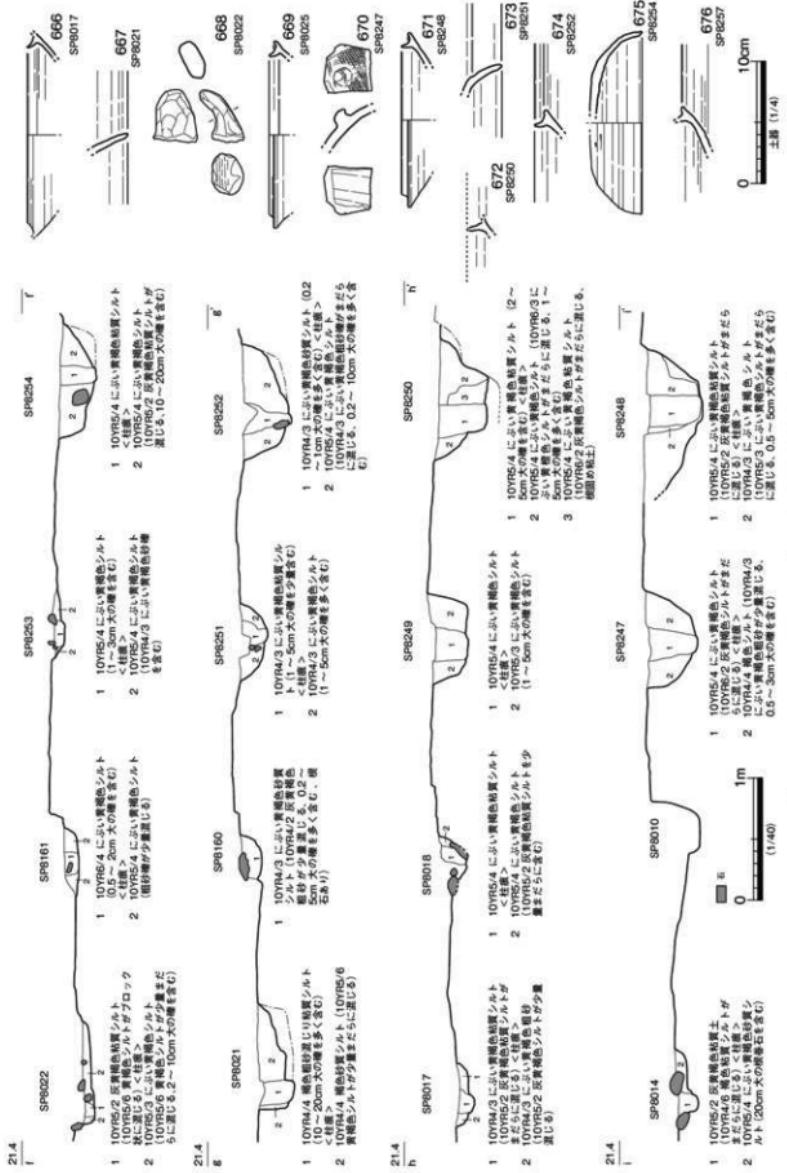
8区中央付近で検出した。1面で検出した。造構の前後関係により、SD8002より古く、SB8007より新しい。桁行4間×梁間3間の総柱建物で、桁行7.50m、梁間5.66m、主軸方位はN144°E、面積は42.45m²である。柱間は、概ね、桁行が北から2.01m・1.71m・1.94m・1.84mを測り、梁間が西から1.86・1.82m・1.98mである。柱間にはややばらつきがあるが、柱通りはいい。柱穴の形状は概ね不整円形で、長軸102～136cm、短軸82cm～126cm、深さ20cm～44cm、柱痕跡の直径は24～30cmである。方位と側柱の柱筋をほぼ揃えて約3.96m北側にSB8010、約3.89m南側にSB8008を検出した。これら3棟は建



第216図 SB6008



平・断面図 1 (1/40)



第217図 SBB8008断面図2 (1/40)、出土遺物 (1/4)

物配置の規格性の高さから、強い関連性があると考えられる。

677・678はSP8034から出土した須恵器。677は杯蓋。678は高杯杯部と脚部の連結部分。679はSP8035から出土した高杯脚端部小片。680はSP8165から出土した須恵器高杯脚部片。長方形の透かし孔が2ヶ所に残る。681はSP8260から出土した須恵器杯蓋。682・683はSP8262から出土した須恵器。682は杯蓋片。683は杯身片。684はSP8264から出土した須恵器高杯。出土した須恵器は概ね小片で、6世紀末～7世紀前半（II-4～6期）頃と考えられる。これらは包含層1b層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、SB8008と同様で、7世紀後半～8世紀初頭と考えられる。

8区 SB8010（第221～223図）

8区中央付近で、1面で検出した。北半分のはば同位置でSB8012と重複し、これより新しい。また、条里地割の建物方位を持つSB8002・SB8022と一部重複し、これより古く、SB8013より新しい。桁行4間×梁間4間の総柱建物で、桁行7.80m、梁間5.88m、主軸方位はN0.29°Eで、ほぼ正方位を向く。面積は45.86m²である。柱間は、桁行は最も北側のみ2.34mを測り、その他は1.80m～1.86m、梁間1.38m～1.52mである。北側の柱間が広めなのは、SB8012から建て替えた際に柱列をやや北へずらしたことと関係していると考えられる。柱筋は概ね揃うが、北から2列目の柱穴列のみよくない。柱穴の形状は隅丸方形、不整円形で、概ね長軸72cm～128cm、短軸66cm～108cm、深さは東柱の一部は10cm程度のものもあるが概ね30cm～54cm。柱痕跡の直径は20～30cmを測る。SB8008の3.96m北側に主軸方位と側柱の柱筋をほぼ揃えて検出した。SB8008・SB8009とは、梁間の間数が異なるものの、側柱の柱筋と主軸方位、建物規模がほぼ揃うことから、規格性の高い遺構群と考えられる。先行するSB8012とは北半分ではば柱穴の位置が重なるため、SB8010はSB8012を建て替えに伴い拡張した建物と考えられ、柱間数がSB8008・SB8009と異なるのはSB8012に合わせたからと考えられる。

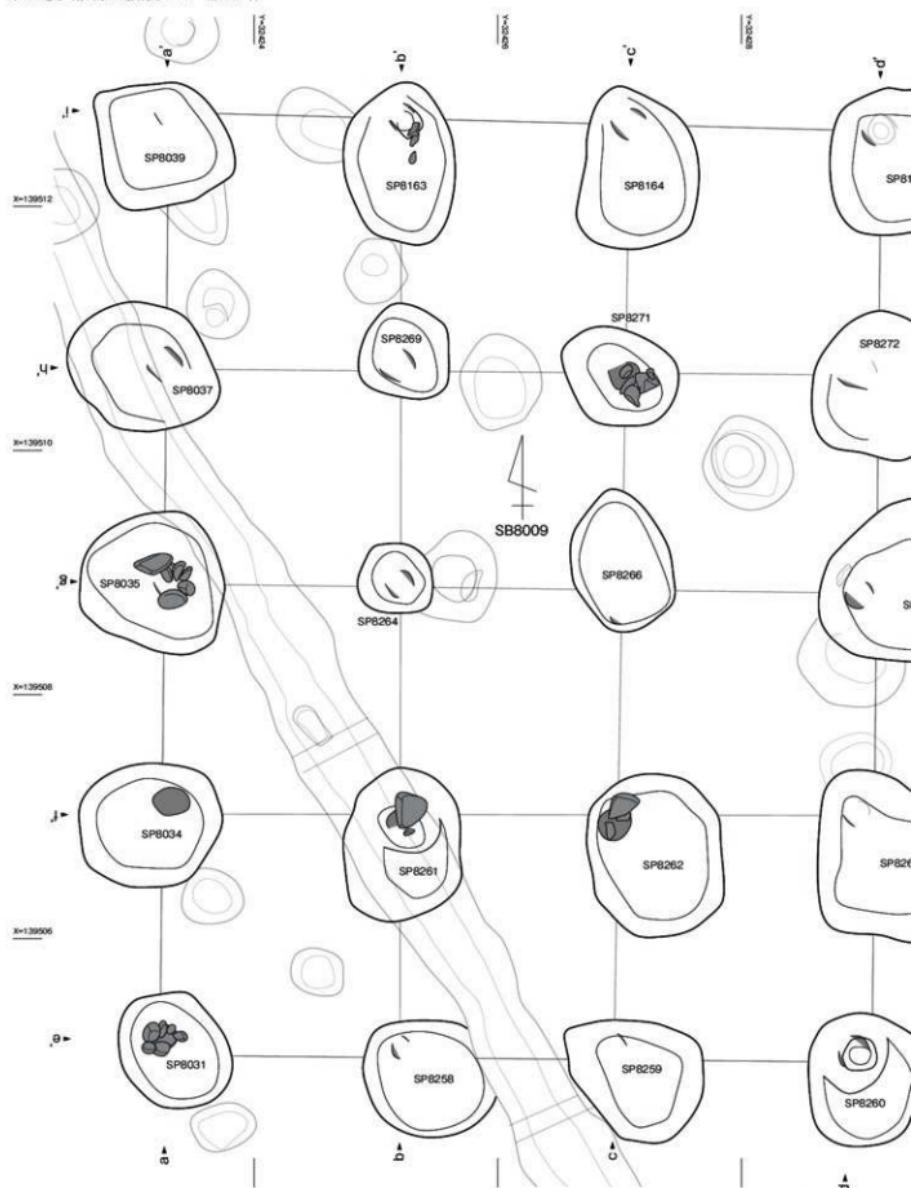
685・686はSP8052から出土した須恵器。685は高杯脚部。686は杯身。焼成状況が悪い。687はSP8086から出土した壺。688はSP8132から出土した須恵器。杯身として図化したが、蓋の可能性もある。689～691はSP8188から出土した。689は須恵器杯身。690・691は土師器。690は高杯脚部。691は壺または瓶把手。692はSP8274から出土した須恵器杯身。出土した土器は小片が多いが、7世紀初頭～前半（II-5～6期）と考えられる。包含層1b層からの混入を考える。

遺構の時期は、SB8008、SB8009との強い関連性から、これらと同じ7世紀後半～8世紀初頭頃と考えられる。

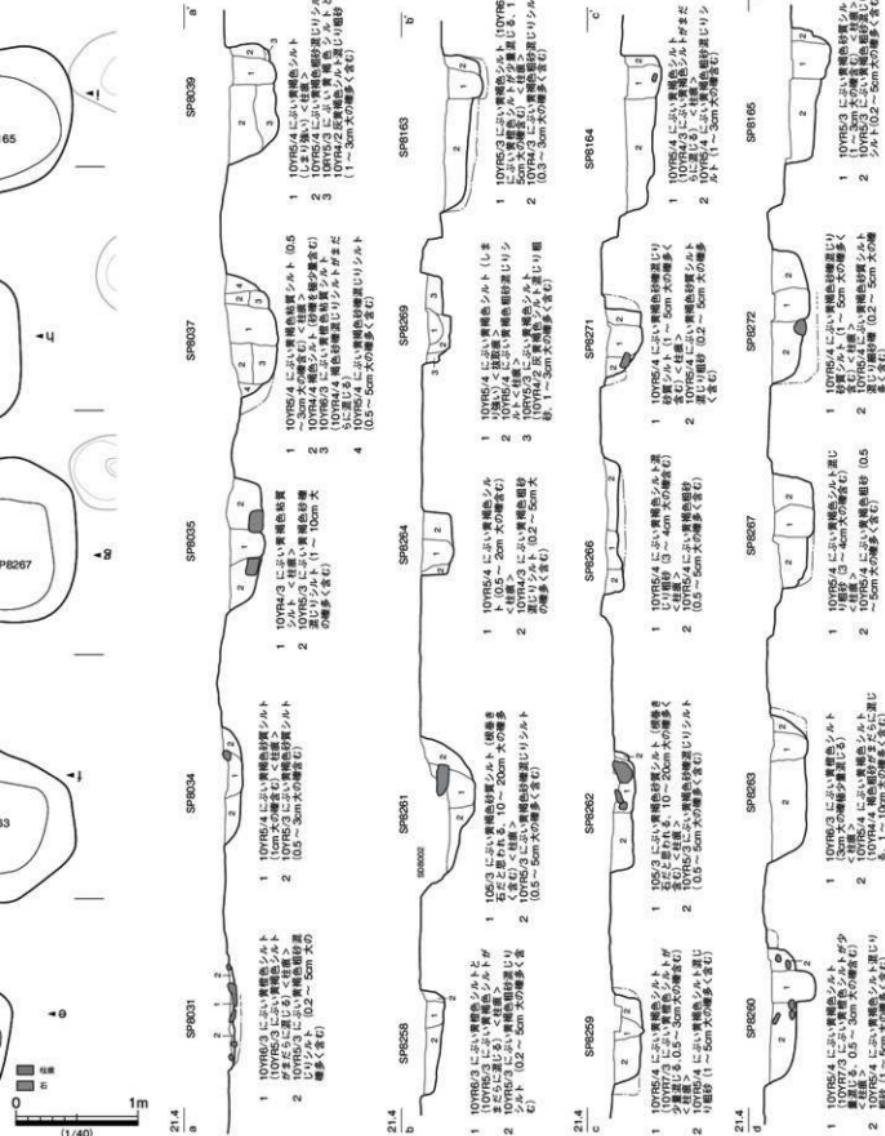
8区 SB8012（第221・223図）

8区中央付近で、1面で検出した。SB8010のはば北半部に重複して検出した。桁行4間×梁間2間の東西棟の総柱建物であるが、東柱の柱通りはやや悪い。桁行5.33m、梁間3.78m、主軸方位はN0.38°E、面積は20.15m²である。柱間は桁行1.20m～1.56m、梁間1.82m～1.96m、柱穴は、大部分がSB8010を構成する柱穴に壊されているため明らかでない部分も多いが、概ね隅丸方形または不整円形で、側柱は長軸80cm～126cm、短軸56cm～96cm、深さ22～44cm、東柱は軸長40cm～46cm程度、深さ15cm程度で規模が小さい。柱痕跡の直径は16cm～20cmである。SB8010の北半分ではば重複して検出したことから、SB8010の前身となる建物で、SB8012を2倍以上に拡張してSB8010としたと考えられる。

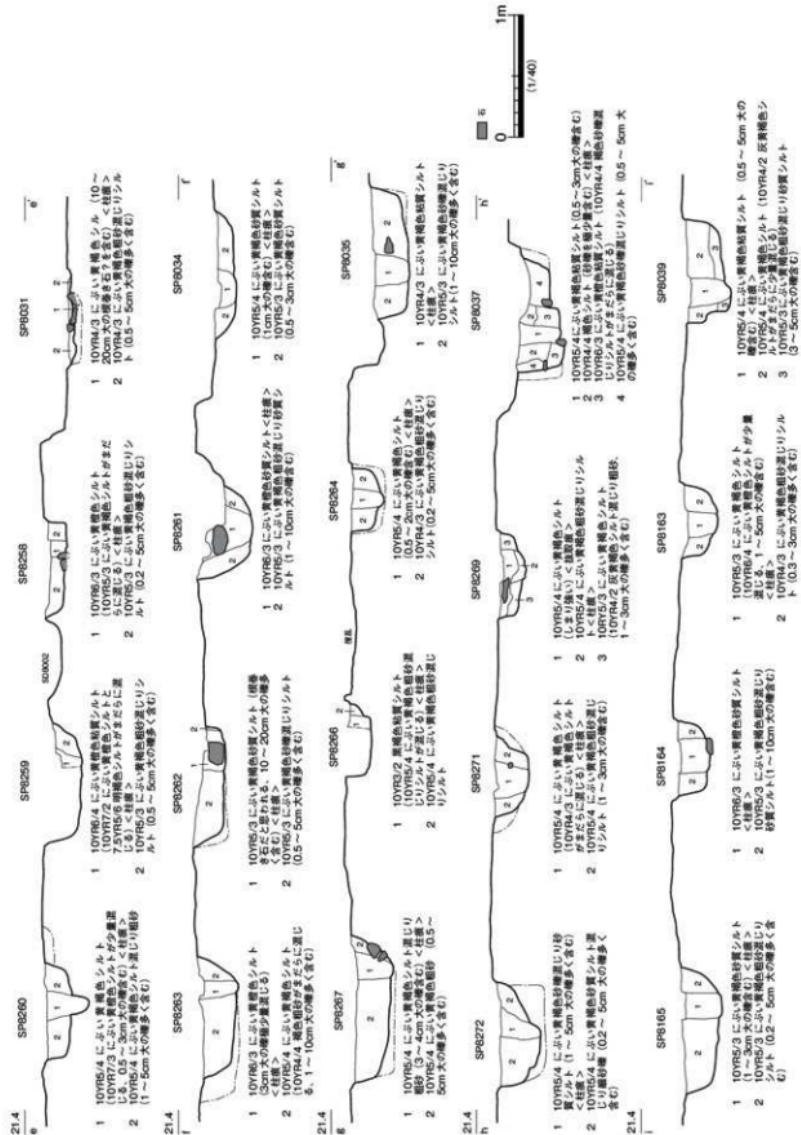
693はSP8053から出土した須恵器平瓶の口縁部で、7世紀後半～8世紀初頭頃。694はSP8194か

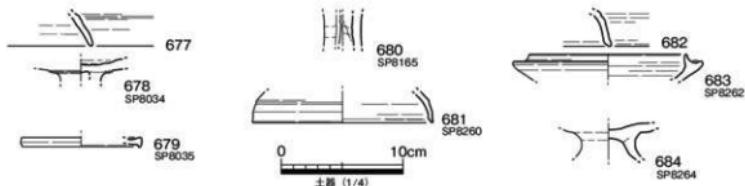


第218図 SB8009



第3章 調査の成果





第220図 SB8009出土遺物 (1/4)

ら出土した須恵器杯身。695はSP8284から出土した須恵器杯蓋。出土遺物は少なく破片も小さい。概ね7世紀初頭～前半(II-5～6期)頃と考えられ、多くは包含層1b層からの混入と考えられようが、693が遺構の時期を示していると考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方向が正方位であること、SB8010より古いことや出土遺物から、7世紀後半～末頃と考えられる。

8区 SB8013(第224・225図)

8区中央付近で検出した。1面で検出した。SB8002・SB8010・SB8012・SB8022と重複し、いずれより古い。南側の柱穴列のうち中央の柱穴は、他の建物の柱穴に掘り込まれ残らない。桁行3間×梁間2間の総柱建物で、桁行4.85m、梁間4.38m、主軸方位はN25.80°Eで、正方位・条里方向のいずれでもない。面積は21.24m²で、重複するSB8012の規模とはほぼ同規模である。柱間は桁行が1.54m～1.70m、梁間2.10～2.28m、柱穴の形状・規模は不整円形、隅丸方形で、長軸66cm～92cm、短軸58cm～76cm、深さ26cm～40cm、柱痕跡の直径は20cm～24cmである。柱穴からは須恵器杯蓋または杯身片、甕片、土師器小片が出土した。

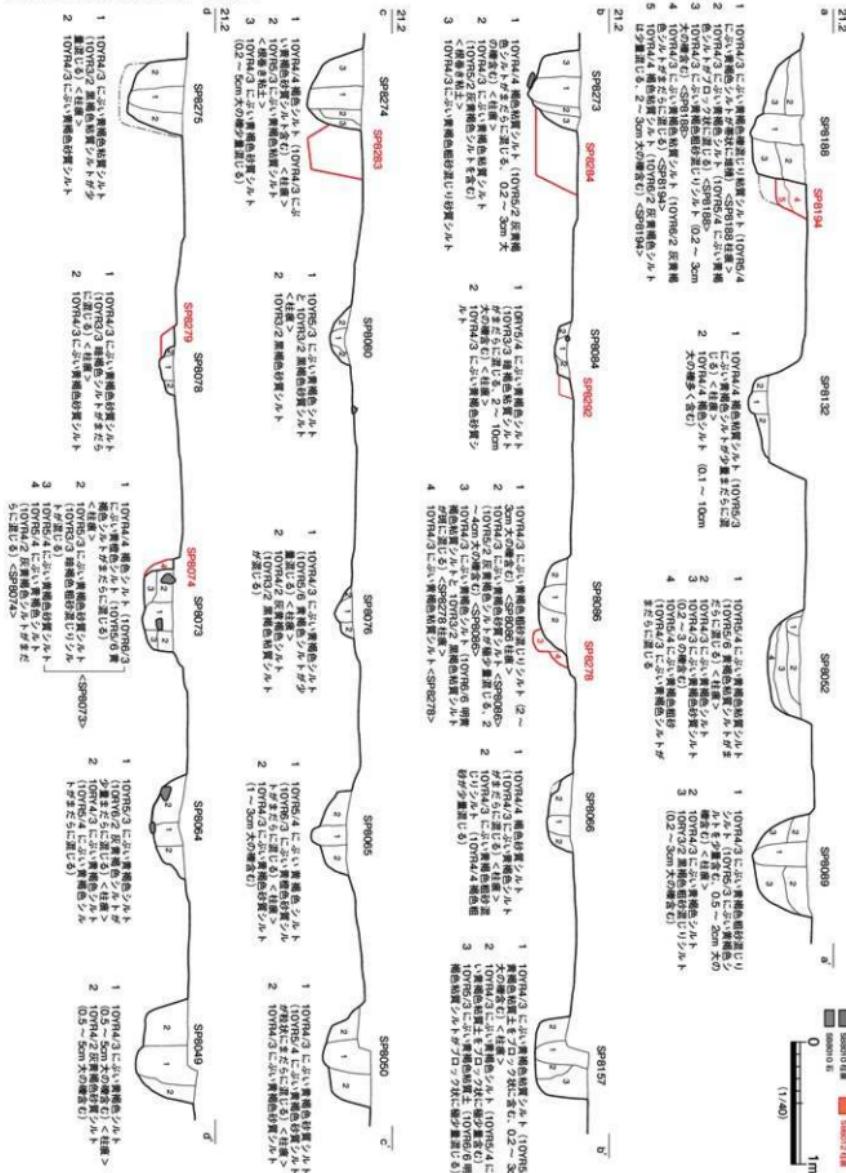
遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が正方位・条里方向とは異なり、遺構の切り合い関係からこれらより古いことから、1面の遺構の中では最も古い7世紀中頃～後半と考えられる。

8区・11区 SB8017(第226・227図)

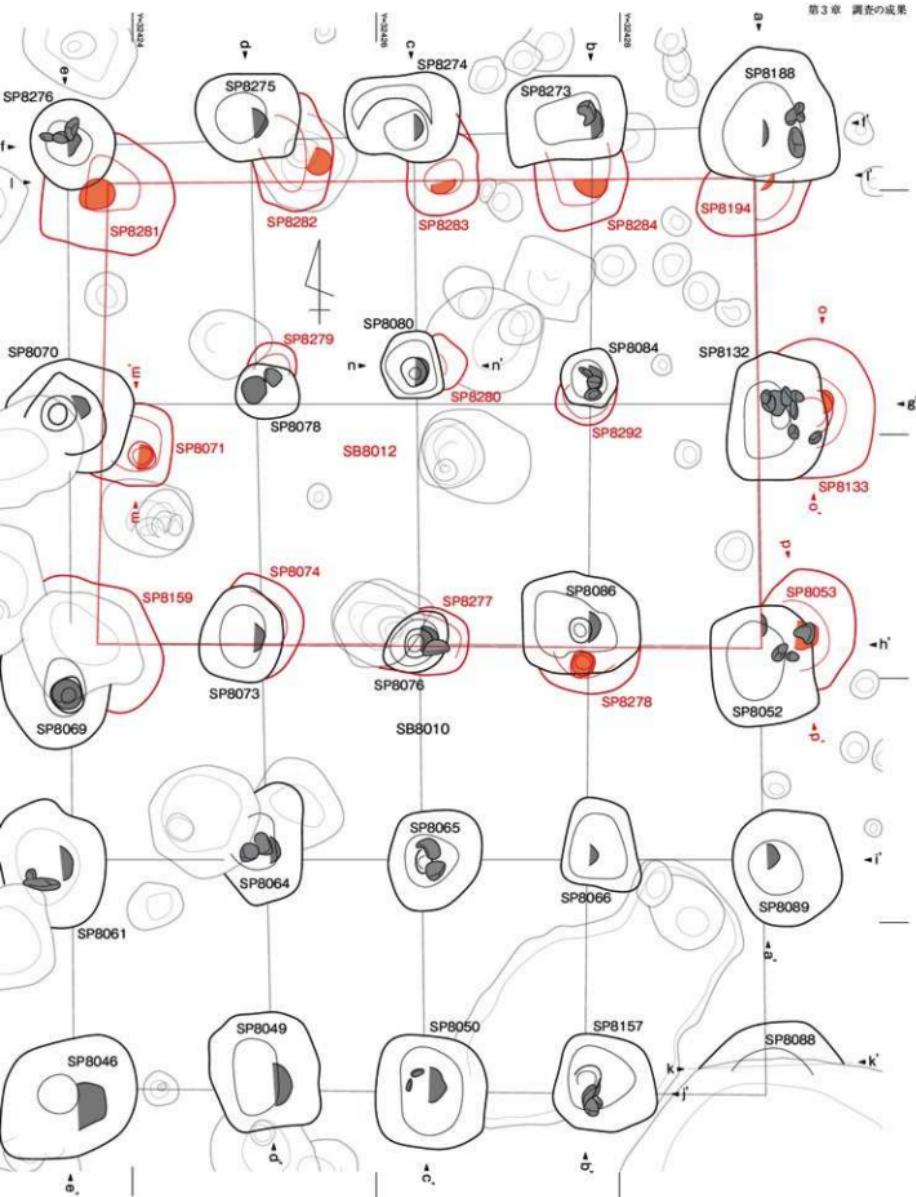
8区と11区に跨って検出した掘立柱建物である。1面で検出した。桁行4間×梁間2間の東西棟の総柱建物で、北西隅の1穴はSX8009により消失する。桁行5.77m、梁間3.50m、主軸方位はN1.19°Eで、面積は20.20m²である。柱間は桁行1.39m～1.52m、梁間は1.75m、柱穴の形状は円形または不整円形で、側柱の長軸64～110cm、短軸56～86cm、深さ30～52cm、東柱の長軸は48～60cm、短軸は48～60cm、深さ10～20cmである。柱痕跡の直径はいずれも概ね20cm程度である。SP8472・8475・11001は柱穴の底に石を置く。

北西側に位置するSB8012・SB8020・SB8021とは、桁行・梁間の柱穴数はやや違いがあるものの、規模・方位はほぼ同じである。これらは関連性をもって配置されたと考えられる。これよりも大型の総柱建物であるSB8009とは、切合い関係はないもののほぼ接しており、同時並存はしないと考えられる。

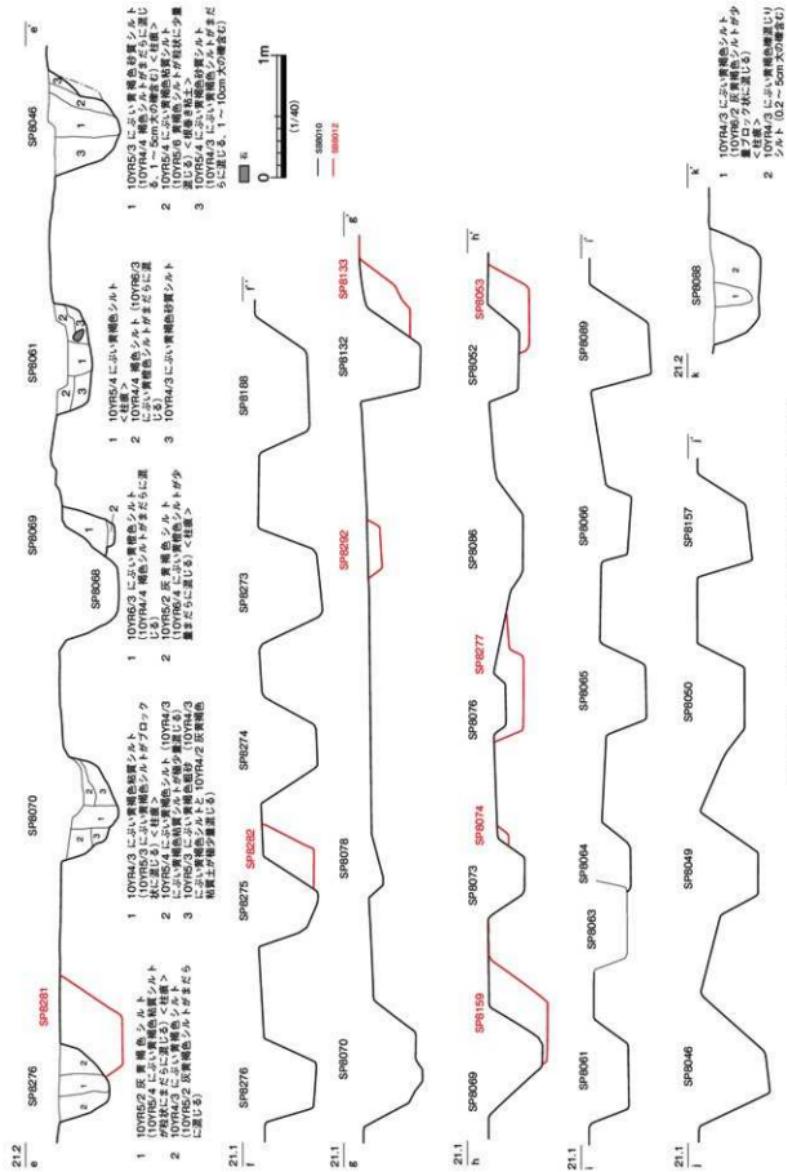
696はSP8287から出土した須恵器杯蓋小片。697はSP8473から出土した須恵器杯身小片。698はSP8476から出土した須恵器杯身小片。699はSP11004から出土した須恵器杯身小片。700はSP11005から出土した鉄滓。一部にガラス質化が認められる。須恵器はいずれも小片で、7世紀初頭～前半(II)



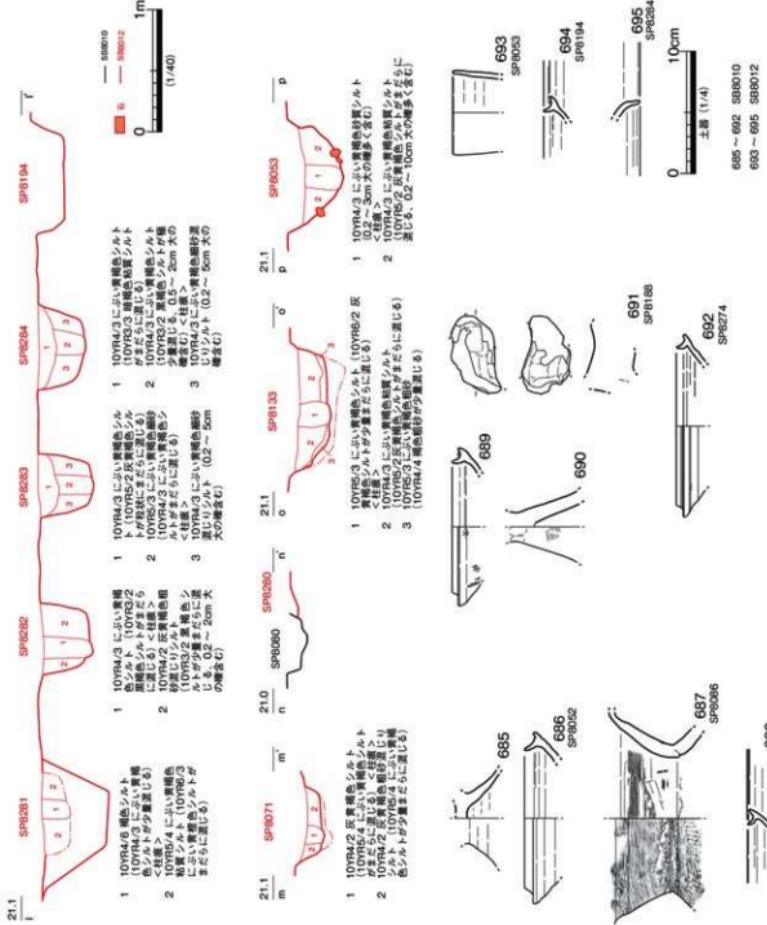
第221図 SB8010・SB8011



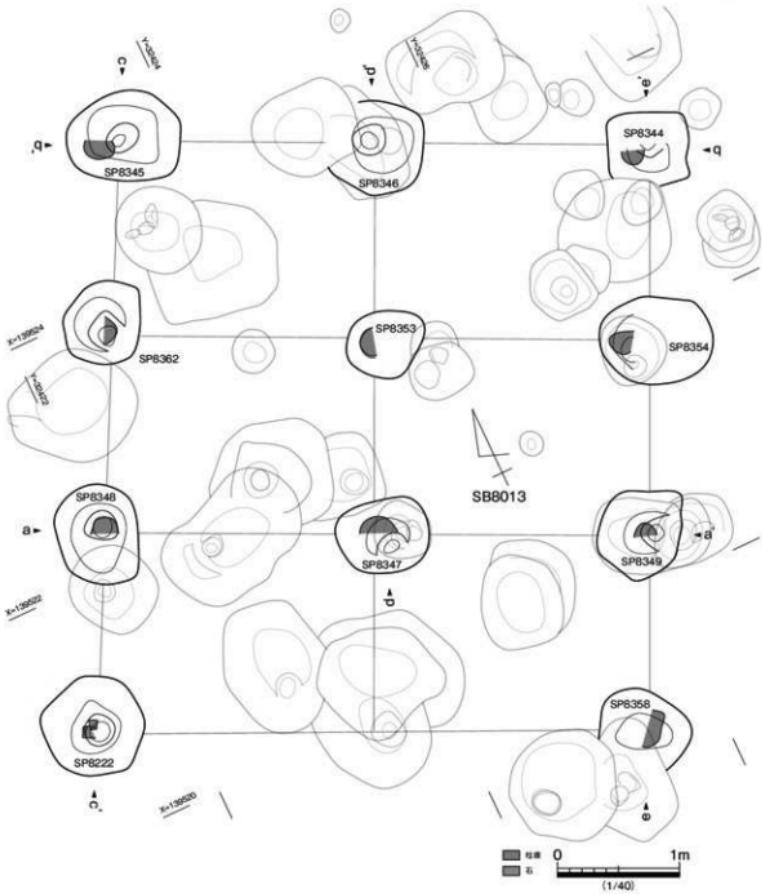
3012 平・断面図 1 (1/40)



第222図 SB8010・SB8012断面図2(1/40)



第223図 SB8010・SB8012断面図3 (1/40)、出土遺物 (1/4)



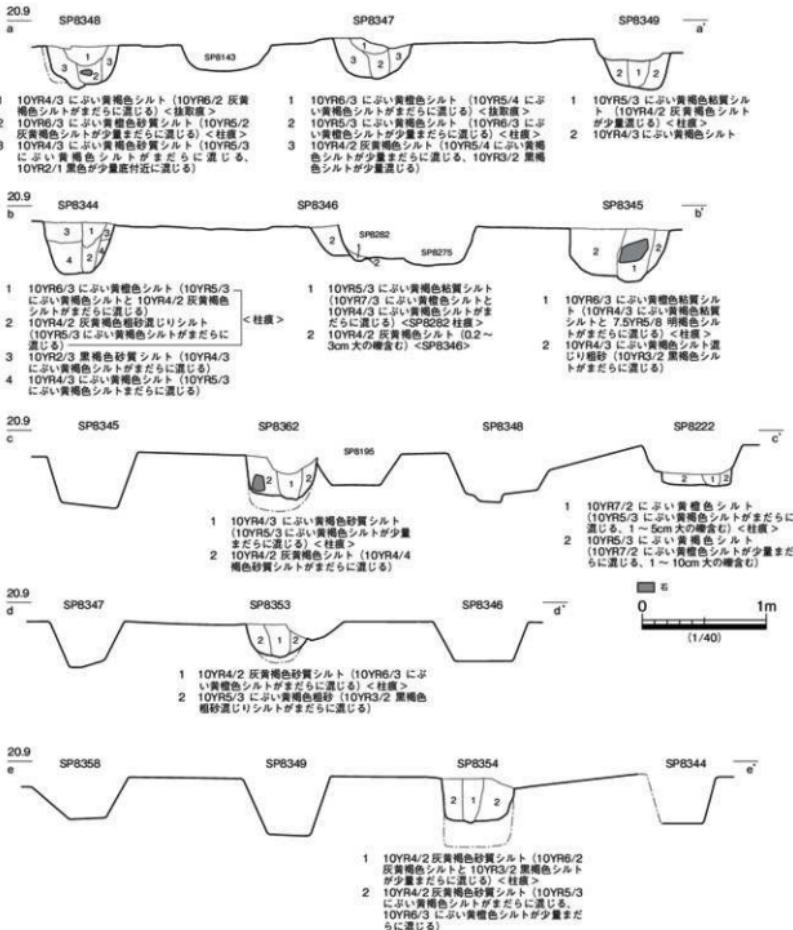
第224図 SB8013平面図(1/40)

-5～6期)頃と考えられるが、いずれも包含層1b層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、建物方位が正方位を示すこと、SB8012・SB8020・SB8021との関連性が高いと考えられることから、これらと同時期である7世紀後半～末頃と考えられる。

8区 SB8020(第228・229図)

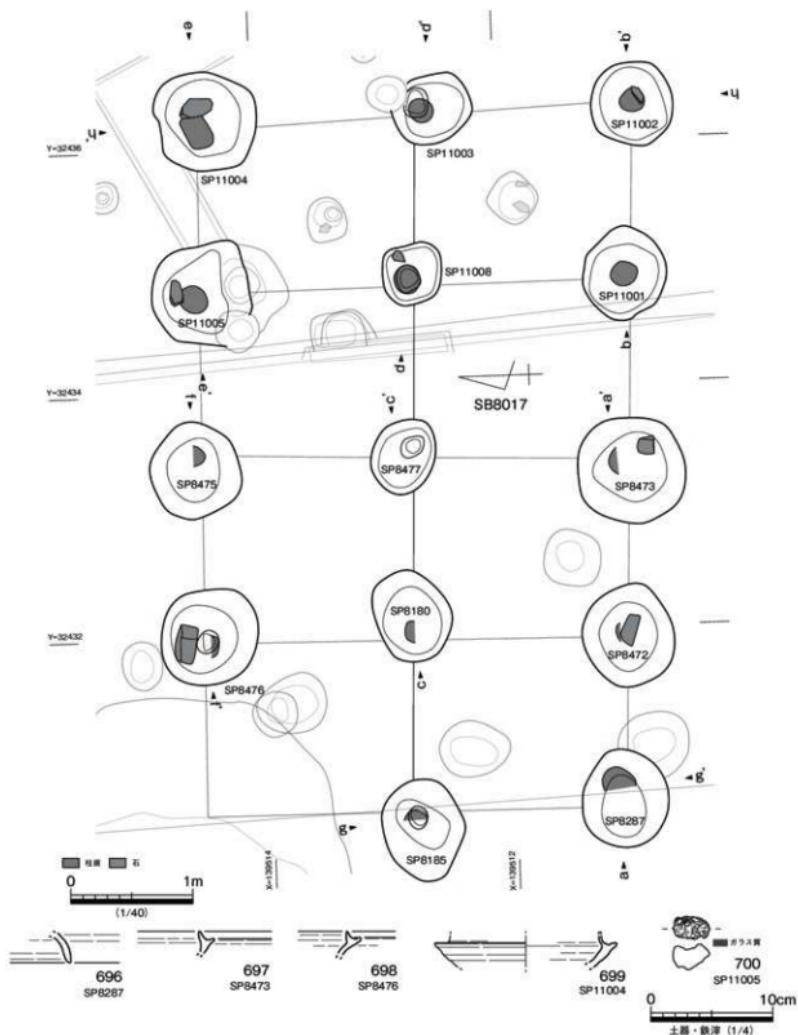
8区北端付近で、1面で検出した。南約4mの位置では、柱筋を揃えた、ほぼ同規模のSB8021がある。また、さらに南に位置するSB8012・SB8017とは主軸方位、建物規模がほぼ同じである。桁行3間×梁間3間の南北に長い総柱建物で、桁行5.60m、梁間3.82m、主軸方位はN144°W、面積は21.39m²であ



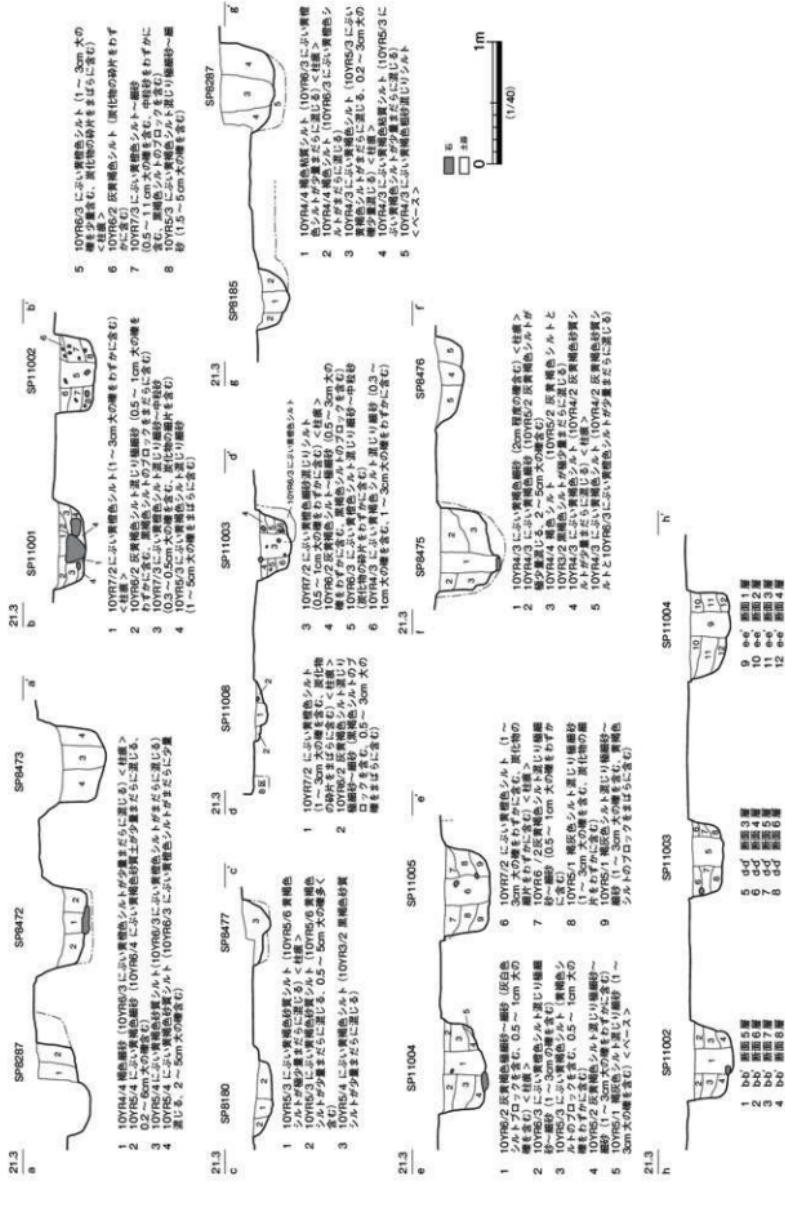
第225図 SB8013断面図(1/40)

る。柱間は、桁行が中央が 1.64m、両端が 1.90 ~ 2.06m、梁間は中央が 1.18m、両端が 1.28m ~ 1.38m で、いずれも中央の柱間がやや狭い。柱穴は西・東側柱が最も大きく、北・南側柱列のそれぞれ中央 2 穴、東柱の順に小さくなる。柱穴の形状は不整円形・楕円形で、側柱が概ね長軸 100cm ~ 132cm、短軸 68 ~ 100cm、深さ 20cm ~ 40cm、柱痕跡の直径は 26cm 程度、東柱は長軸 48cm ~ 80cm、短軸 46cm ~ 60cm、深さ 10cm ~ 16cm、柱痕跡の直径は 20cm 程度である。西側および東側の側柱は柱の周間に根石を置く場合が多い。

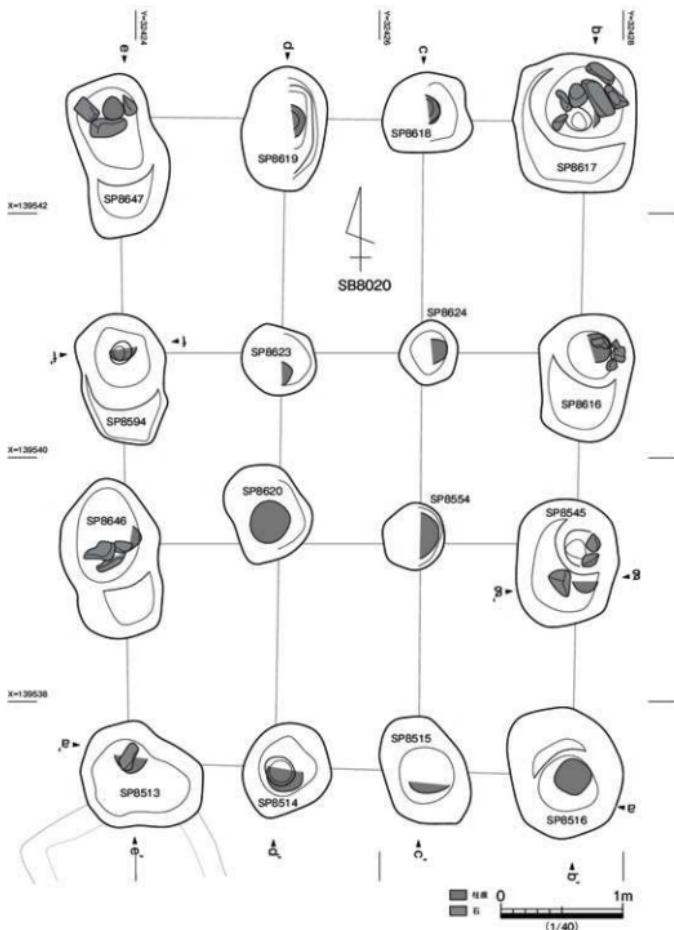
西側柱列は断面観察から柱抜取痕が観察される。平面形状では、東側柱列と西側柱列に長軸方向に段



第226図 SB8017 平面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



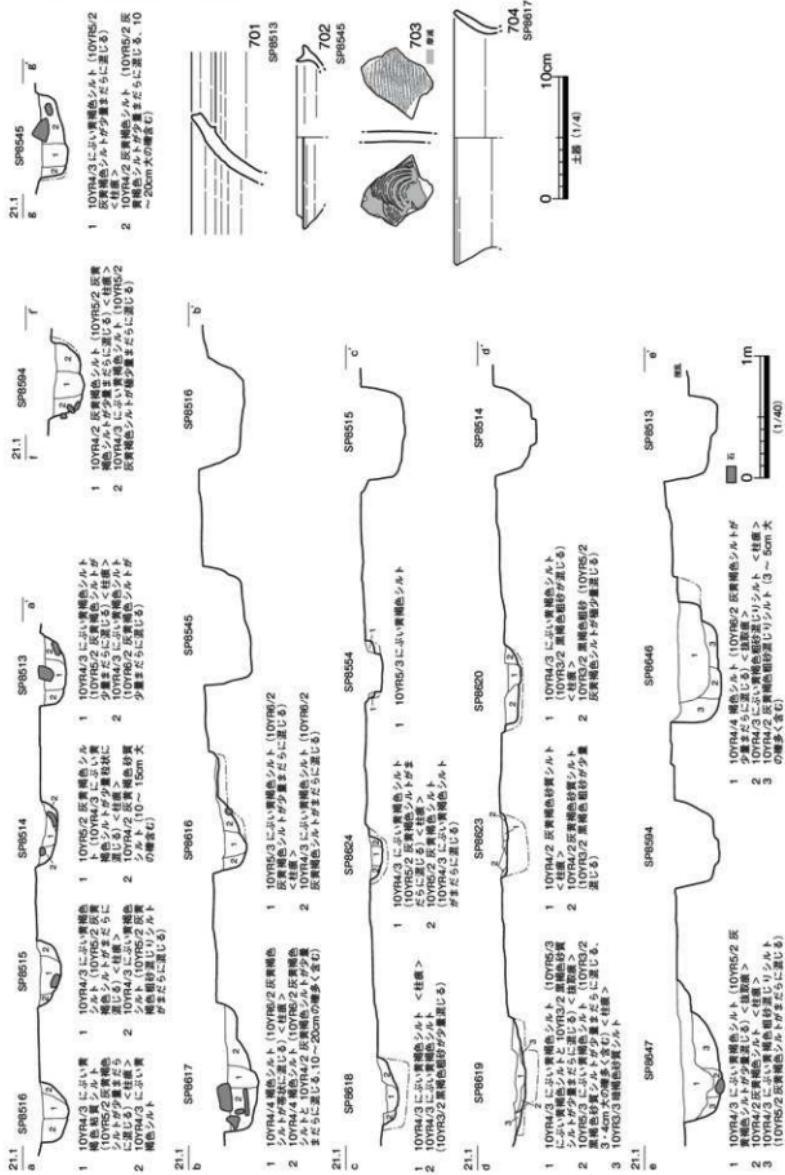
第227圖 SB8017斷面圖 (1/4)



第228図 SB8020平面図(1/40)

掘り状に呈する場合が多く、柱の抜き取りによる可能性が考えられる。抜取痕と考えれば、柱は後継する建物群への転用の可能性が考えられよう。

701はSP8513から出土した須恵器壺。外面上端部付近に突帯が巡る。702はSP8545から出土した須恵器杯身。703・704はSP8617から出土した。703は須恵器壺片。内面は摩滅が著しく、転用硯として使用されたと考えられる。704は土師器壺。遺物は概ね7世紀初頭～前半(II-5～6期)頃と考えられ、包含層1b層からの混入が考えられる。転用硯(703)の出土は注目される。

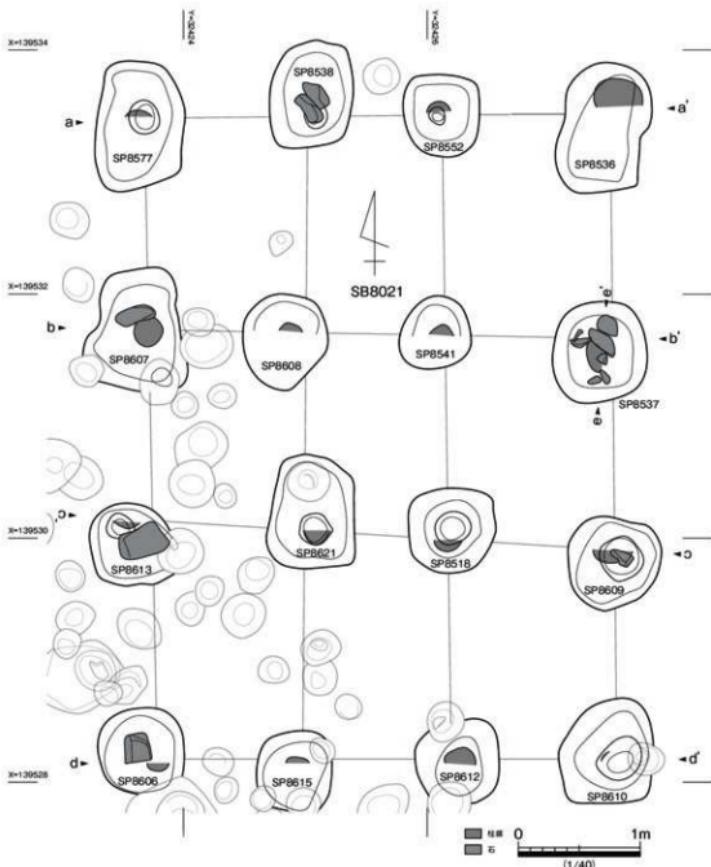


第229図 SB8020断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

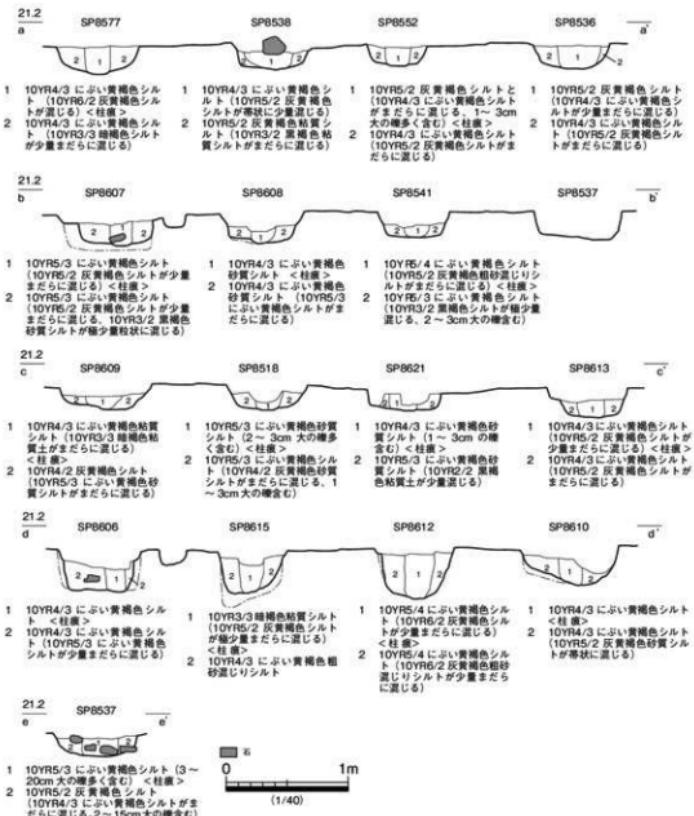
遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が正方位を示すこと、SB8012・SB8017・SB8021と関連性が高いことから、これらと同時期の7世紀後半～末頃と考えられる。

8区 SB8021 (第230・231図)

8区北部で、1面で検出した。北側約4mの位置では、柱筋を描えたほぼ同規模のSB8020がある。また、さらに南約3.9mに位置するSB8012、さらに約5.3m程度南側に位置するSB8017とは主軸方位、建物規模が類似する。桁行3間×梁間3間の南北に長い総柱建物で、桁行5.17m、梁間3.90m、主軸方位はN0.91°E、面積は20.16m²である。柱間は、桁行が1.64m～1.78m、梁間は、両端が1.45m、中央が1.00mである。柱穴の形状は概ね不整円形で、長軸70cm～110cm、短軸56cm～76cm、深さ16～44cm、柱



第230図 SB8021 平面図 (1/40)



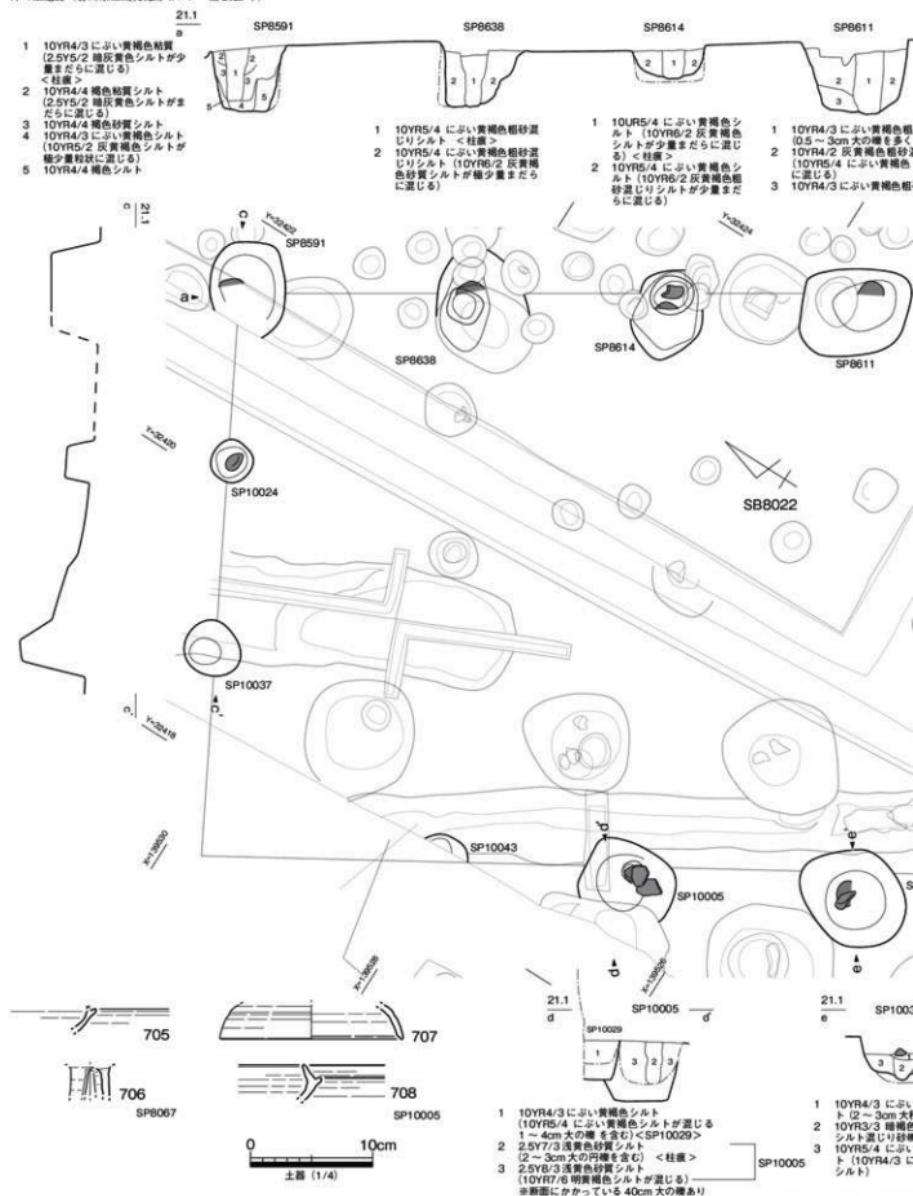
第231図 SB8021断面図 (1/40)

痕跡の直径 20~24cm である。側柱と東柱の規模はほぼ同じである。埋土中からは須恵器杯身片、甕片、土師器片が出土した。

遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が正方位を示すこと、SB8020、SB8012 等と強い関連性が考えられることから、これらと同時期の 7世紀後半~末頃と考えられる。

8区 SB8022 (第232図)

8区中央西寄りで検出した。SB8003と同じく検出面は包含層 1b 層下位層で、SB8002 の検出面よりは下位の層で検出したことが、8区西壁土層図からわかる。北西部部分は調査区外へ延びる。SB8003・SB8010・SB8012・SB8013 と重複し、平面図によれば、柱穴の切合の関係から SB8012・SB8013 より新しく、SB8003 より古い。SB8002 とは、遺構の掘り込み面の差によりこれより古い。桁行 6間 × 柱間 3間に復



第232図 SB8022平・断面

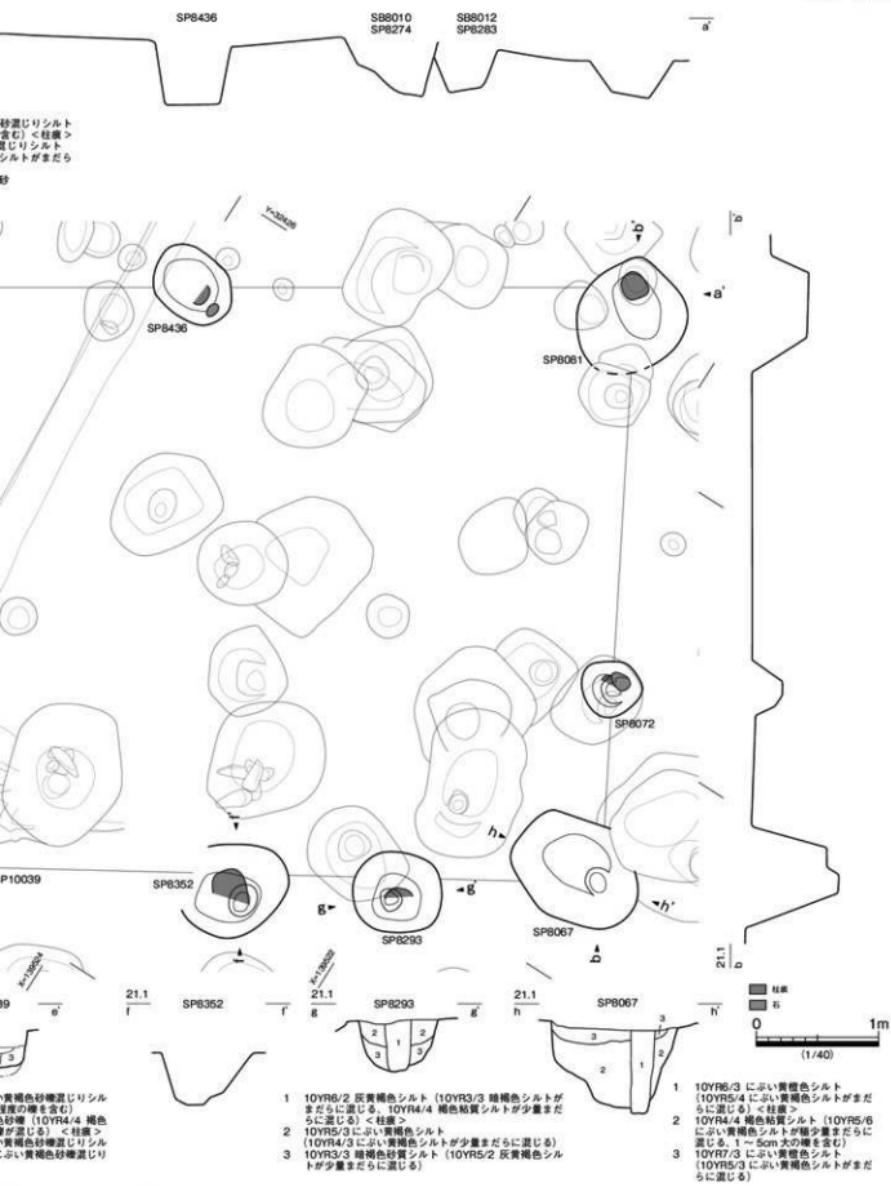


図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

元したが、柱間がやや不揃いで、桁行と梁間の柱筋が正確に直交しない。調査区外へ延びる北西隅の柱穴のほか、南側梁間の東から2穴目及び、東側桁行の南から2穴目は検出できなかった。桁行10.66m、梁間4.85m、主軸方位はN29.63°～32.08°Wで、概ね条里地割と同じ方向を示し、面積は51.70m²を測る。柱間は桁行が南から3間目のみ2.24m～2.47mで、他は1.22m～1.90m、梁間が1.46m～1.56mである。柱穴は、桁方向が不整円形で長軸70cm～112cm、短軸54cm～84cm、深さ34～68cm、柱痕跡の直径は20cm程度、梁間の柱穴は直径34cm～44cm、深さ43～71cm、柱痕跡の直径は20cm程度である。

西側に隣接するSB8002とは、主軸方位や桁行が長大な建物であるといった類似点があり、SB8002の前身となる建物の可能性があろう。SB8003とは遺構の掘り込み面は同一であるが、柱穴に切り合い関係により、SB8003より古い。

705・706はSP8067から出土した須恵器。705は杯身。706は高杯脚部。脚部に透かし孔が2ヶ所残る。680と同一個体の可能性がある。707・708はSP10005から出土した須恵器。707は杯蓋。708は杯身。いずれも小片である。6世紀末～7世紀初頭（II-4～5期）で、包含層1b層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が条里方向を向くこと、SB8002より古いことから8世紀初頭～前半頃と考えられる。

8区 SB8023（第233図）

8区中央付近西側拡張区で検出した。1面で検出した。掘削範囲の制約から部分的な検出に留まり、全体の規模は明らかではない。東側桁行は3穴、西側桁行は1穴を検出した。東側桁行は北端の柱穴と中央の柱穴の間に1穴が想定でき、3間（5.2m）以上が考えられる。東西の柱列の間に柱穴が認められず、側柱建物と考えられる。梁間は、2穴間が5.56mであることから、3間が想定できる。主軸方位はN26.32°Wで、条里方向を示す。面積は29.08m²以上と考えられる。

柱穴は円形または不整円形と考えられ、軸長100cm～120cm、深さ16cm～54cm、柱痕跡の直径は23cm程度である。東側の柱列はSB8001と柱筋が揃い、両者の間隔は3.4mを測る。SB8001が総柱建物であるのに対し、SB8023は東柱を持たないことから、両者は別々の建物と考えられるが、計画的に配置された規格性の高い建物群と考えられる。調査範囲が狭く、推測の域を出ないが、SB8001と並列し、42m程度の規模になる可能性があろう。SB8001・SB8002とともに大型の掘立柱建物群を構成すると考えられる。柱穴埋土中からは須恵器杯蓋または杯身片、瓦片などが出土した。

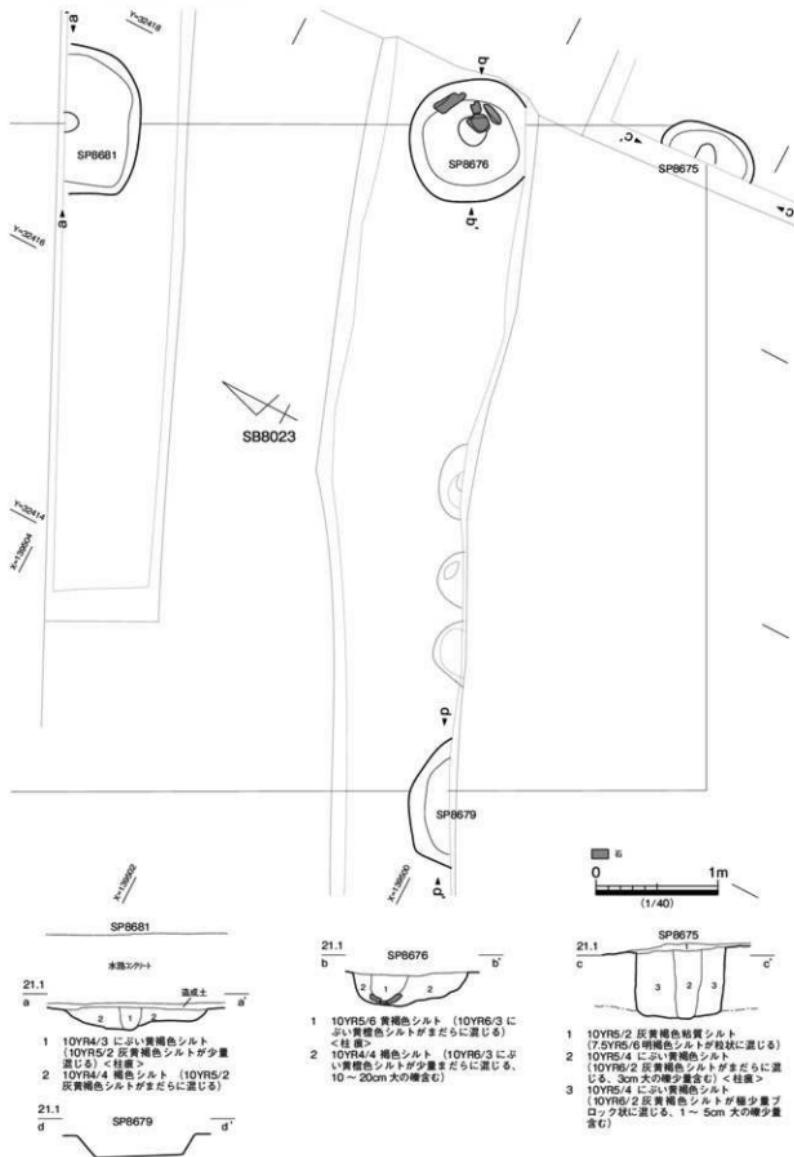
遺構の時期は1面で検出したこと、SB8001・SB8002との関連性から8世紀前半～中頃と考えられる。

12区 SB12001（第234・235図）

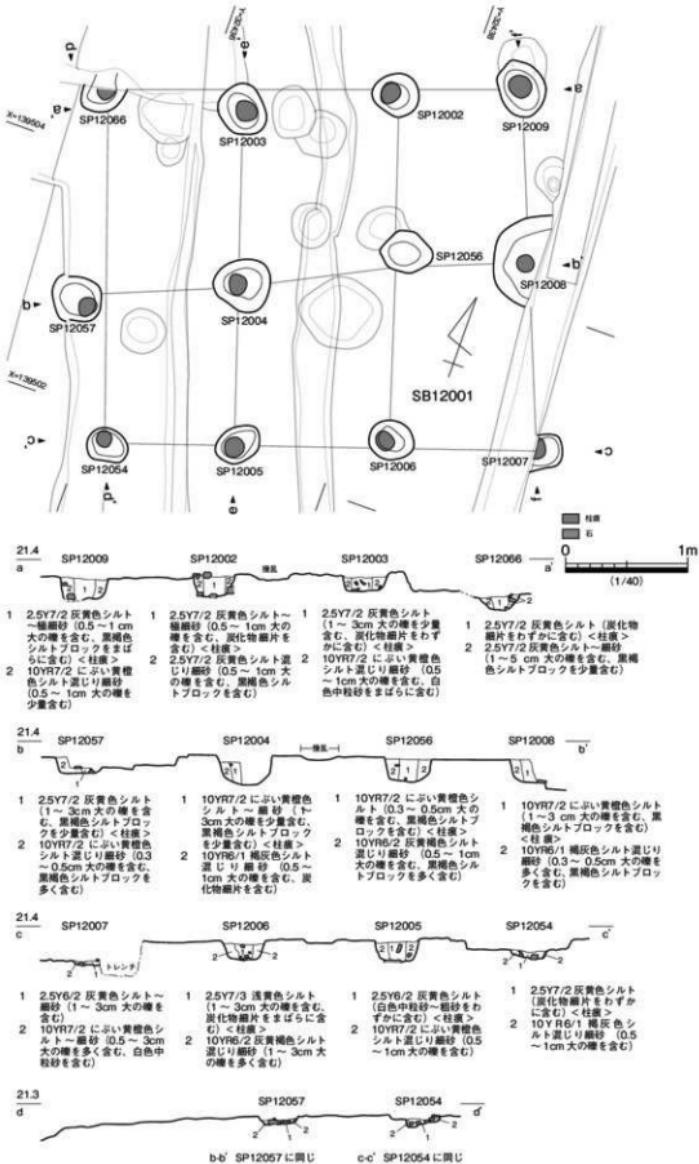
12区中央付近で検出した。1面で検出した。桁行3間×梁間2間の総柱建物として復元したが、西側の梁間柱列はやや柱通りが悪く、桁行の中央柱列は北・南の柱列と平行ではない。桁行3.38～3.54m、梁間2.88～2.96m、主軸方位はN19.19°Wで、条里方向よりやや東へ偏る。面積は10.16m²である。柱間は、桁行1.03m～1.26m、梁間は1.18～1.70m、柱穴は円形、不整円形で、長軸34cm～48cm、短軸26～42cm、深さ10～22cm、柱痕跡の直径は16cm程度である。

709はSP12005から出土した須恵器杯蓋。710はSP12054から出土した板状鉄片。

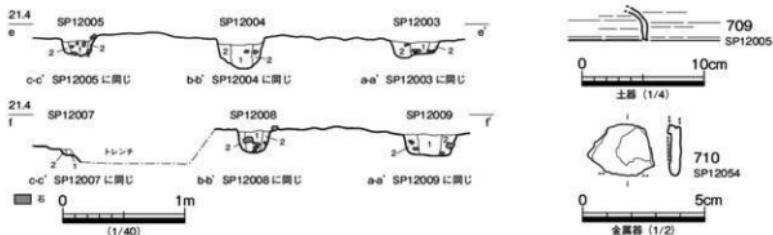
遺構の時期は、1面で検出したことから7世紀中頃以降と考えられるが、主軸方位は正方位や条里方向を示さず、近接して建物の主軸方位が類似するSB8018やSB8004は2面で検出した遺構であり、同



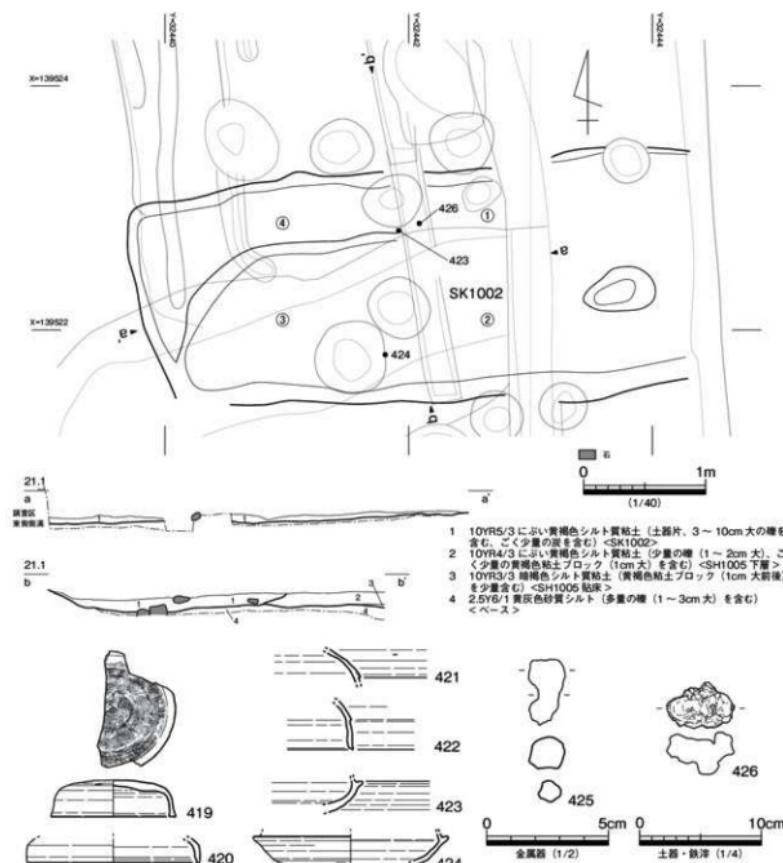
第233図 SB8023 平・断面図 (1/40)



第234図 SB12001平・断面図1 (1/40)



第235図 SB12001断面図2(1/40)、出土遺物(1/4・1/2)



第236図 SK1002平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4・1/2)

時期とは考えにくい。詳細な時期は不明である。

②土坑

1区 SK1002 (第236図)

1区中央付近で検出した。SH1005に重複して検出した。東側は調査区外へ延びる。1区東壁土層図から包含層1b層を掘り込むことが、b-b'断面からSH1005より新しいことがわかる。長方形を呈し、長辺約4.57m以上、短辺1.79m、深さ6~10cmである。

419~424は須恵器。419は壺の蓋。頂部外面に刻み目を施す。420~422は杯蓋。420・422は口縁端部内側に、421・422は肩部に段を有する。423・424は杯身。425は棒状鉄片。426は鉄滓。須恵器の時期は概ね6世紀後半~末(II-3~4)頃と考えられるが、SH1005を掘り込むことから、出土した遺物はSH1005、SH1015からの混入と考えられる。

遺構の時期は、包含層1b層を掘りこむことから、7世紀中頃以降と考えられる。

7区 SK7001 (第237図)

7区南部付近で検出した。1面で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸1.56m、短軸0.85m、深さ6cmを測る。主軸方位はW27.44°Sである。埋土中からは、須恵器、土師器小片が出土した。

遺構の時期は、1面で検出したことや主軸方位が条里地割の方位に近いことから、8世紀前半以降と考えられる。

11区 SK11002 (第238図)

11区北端で検出した。1面で検出した。東半部は後世の溝により消失する。直径0.8m程度の円形と考えられ、深さは6cmを測る。埋土中からは土師器小片が出土した。

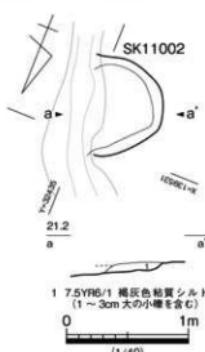
遺構の時期は、1面で検出したことから、7世紀中頃以降である。

12区 SK12001 (第239図)

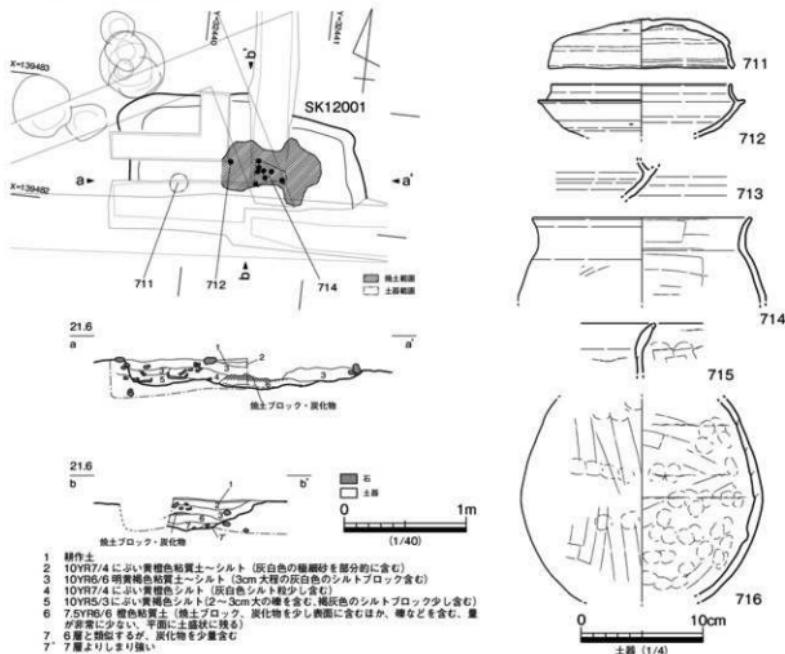
12区南端部で検出した。1面で検出した。2面で検出したSH12004を掘り込む。南接する7区では検



第237図 SK7001 平・断面図 (1/40)



第238図 SK11002 平・断面図 (1/40)



第239図 SK12001 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

出していない。7区北壁土層図でも該当する遺構は認められず、遺構は12区の中で收まると考えられる。隅丸長方形で、南北方向 0.79m ~ 1.14m、東西方向 1.88m、深さ 25cmを測る。主軸方位は W35° S である。検出範囲内のやや東寄りで、焼土・炭化物の集中部が認められた。埋土中からは須恵器、土師器が出土した。

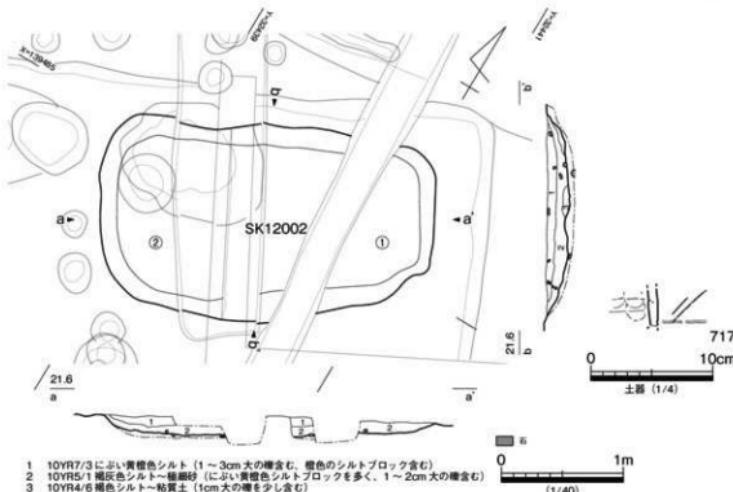
711 ~ 713は須恵器。711は杯蓋。肩部に明瞭な段を持つ。歪みがある。712・713は杯身。6世紀後半(II-3期)頃。714 ~ 716は土師器甕。716は内面の指抑え痕は顕著で、粘土紐の継ぎ目痕が残る。土器は、SH12004に由来する可能性が高い。

遺構の時期は、1面で検出したことから、7世紀中頃と考えられる。

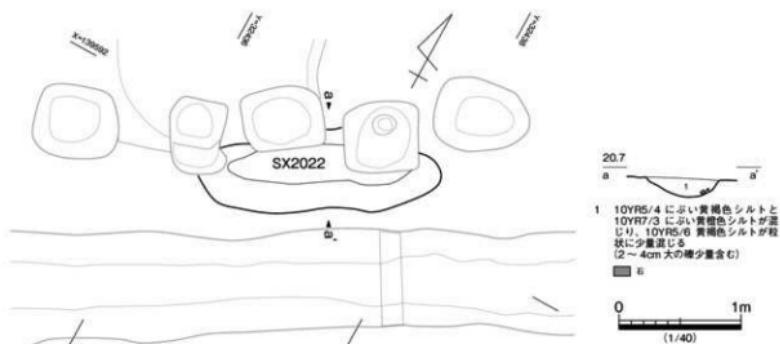
12区 SK12002 (第240図)

12区南端部で検出した。1面で検出した。2面で検出したSH12004を掘り込む。隅丸長方形で、長軸 2.74m、短軸 1.60m、深さ 18cmである。主軸方位は W30.93° S である。埋土中からは弥生土器壺、須恵器杯身、甕、土師器が出土した。

717は弥生土器二重口縁壺口縁部小片。立ち上がり部分が剥離したもので、鋸歯文が残る。弥生時代後期後半。



第240図 SK12002 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



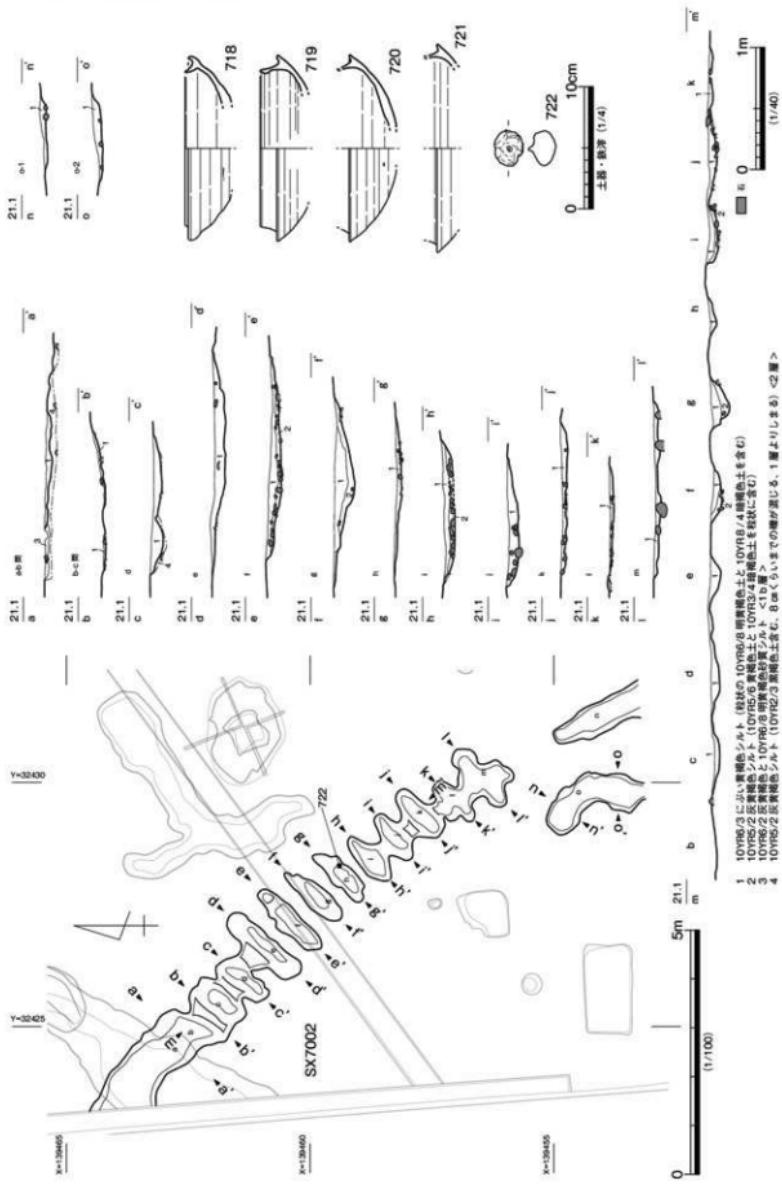
第241図 SX2022 平・断面図 (1/40)

遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が条里地割の方位に近いことから、8世紀前半以降と考えられる。

③性格不明遺構

2区 SX2022 (第241図)

2区北東部1面で検出した。溝状で楕円形を呈し、延長1.95m、幅0.61m、深さ15cmを測る。SA2001により掘り込まれる。SD2002とは主軸方位は同じで、SD2002の概ね0.97m程度北東側に位置



第242図 SX7002平・断面図 (1/100・1/40)、出土遺物 (1/4)

する。埋土中からは須恵器杯身・甕片が出土した。

SA2001を構成する柱穴に掘り込まれるもの、SD2002・SA2001との位置関係から関連する遺構と考えられ、遺構の時期もこれらと同じ8世紀前半以降と考えられる。

7区 SX7002（第242図）

7区南部、1面で検出した。北西部は調査区外へ延びる。包含層1b層を掘り込む。長軸1.06～1.84m、幅0.33～0.66m、深さ5～16cm程度の小土坑が12基連なる形状で、南端のみ方向の異なる、長軸1.89m～2.08m、幅0.55～0.59m、深さ5.3～6.5cmの小土坑が2基平行する。延長13.73m程度を検出した。緩く弧を描く形状で、主軸方位はN35°～42°W程度である。埋土は概ね黄褐色シルト層で明黄褐色土、暗褐色土を粒状に含む。周辺の条里地割の方向に概ね揃う。

波板状遺構と類似する形状で、SX7002を北へ延長させれば、条里地割方向を示す大型掘立柱建物群の西側を通る位置関係である。側溝となる溝は認められず道路とは言い難いかもしれないが、路盤を補修した痕跡の一部の可能性が考えられる。SB8001・SB8002・SB8023の西側を通る南海道から延びる通路の可能性も考えられるかもしれない。

各小土坑の埋土中から須恵器、土師器の小破片が一定量出土したほか、鉄滓片が1点出土した。

718～721は須恵器杯身。6世紀後半～7世紀初頭（II-3～II-5期）頃。包含層1b層からの混入と考えられる。722は鉄滓小破片。北東約2mの位置には鍛冶炉と考えられるSF7001を検出しておらず、それに由来する可能性が高いと考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、主軸方位が

周辺の条里地割に揃うことから、8世紀前半以降と考えられる。

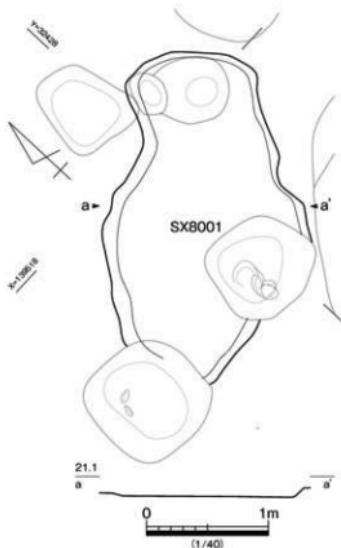
8区 SX8001（第243図）

8区中央付近で1面で検出した。SB8010の南東隅付近で、SB8010により一部消失する。不整形で、長軸2.76m、短軸1.63m、深さ4.3cmを測る。埋土中からは須恵器杯身または杯蓋・甕小片、土師器小片が出土した。

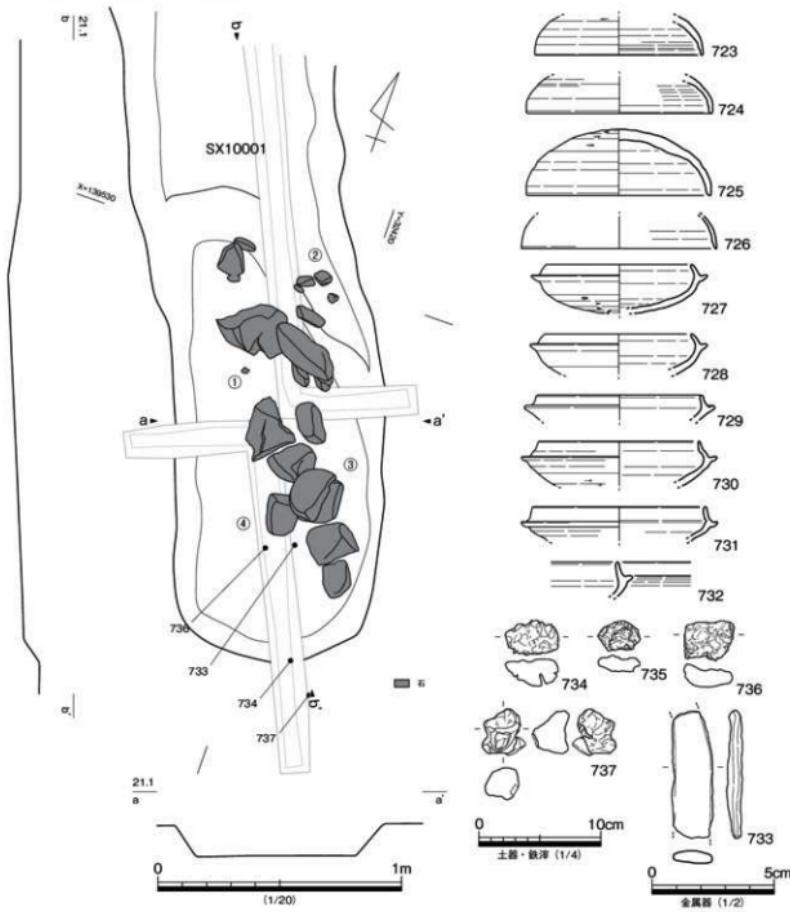
遺構の時期は、1面で検出したこと、SB8010以前であることから7世紀中頃～後半頃と考えられる。

10区 SX10001（第244図）

10区南西部で、1面で検出した。SB8022を構成する柱穴の上面で検出した。主軸方位は、概ねSB8022に近い条里地割の方位を示す。SB8002の東側柱列の北端付近にはほぼ沿って、またSB8022北側柱列の南側ではほぼ直交して検出した。楕円形を呈し、



第243図 SX8001 平・断面図 (1/40)



第244図 SX10001 平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4・1/2)

北側は1段高い。長軸2.58m、幅1.87m、深さは1段高い北西側が8.2cm、南東側は12.8cmである。南側の深い部分では南北方向に列状の石の集中部を検出した。埋土からは須恵器杯身・杯蓋、棒状鉄片、鉄滓が出土した。SX10001の南半付近では鉄滓が集中して出土しているが、SX10001の直下付近でこの遺構のベースである包含層1b層またその下層の2層で多量の鉄滓、滑石製白玉が出土しており、出土遺物は包含層1b・2層からの混入と考えられる。

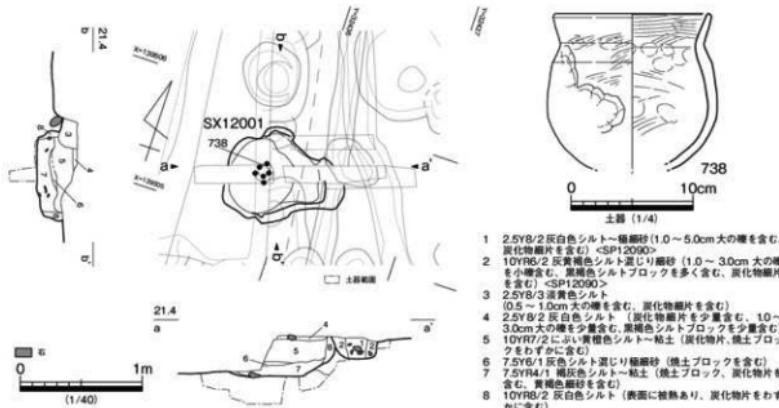
723～732は須恵器。723～726は杯蓋。727～732は杯身。6世紀末(II-4期)頃と考えられる。733は板状鉄片。734・736・737は分析試料。734は鋳造鉄器破片。上面表層にガラス質滓が付着する

ことから、再利用するため鍛冶炉内に投入された可能性が考えられるが、鉄器表層には脱炭等の痕跡がなく、この鉄片自体はあまり加熱されずに取り残されたものの可能性が考えられる。(第4章第3節参照)
735は鉄滓。736は精練鍛冶滓。737は含鉄鉄滓。

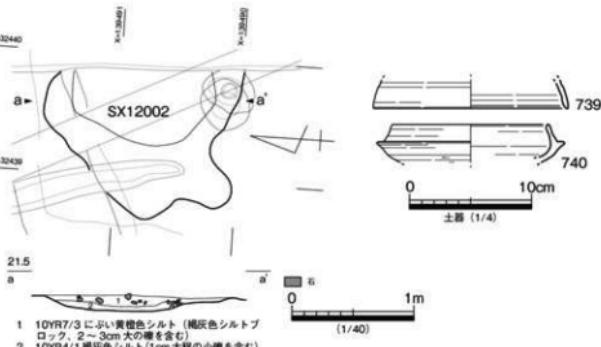
出土遺物は6世紀末頃と考えられるが、SB8022の上面で検出したことから、遺構の時期は8世紀初頭以降と考えられる。

12区 SX12001 (第245図)

12区北部付近で、1面で検出した。主軸方位はW19.1°S、遺構の形状は不整形で、西側の円形に近い形状と東側の隅丸方形に近い形状が合体した形状である。長軸0.96m、幅は西側で0.71m、東側で0.39m、深さは32cmを測る。埋土の下半部には焼土ブロック、炭化物を含む。遺構の側部分には幅7cm程度



第245図 SX12001 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第246図 SX12002 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

で灰白色シルトが認められ、表面には被熱痕が認められる。西側の円形部分の中央付近からは焼成破裂痕がある土師器甕が出土した。遺構の壁面に被熱痕があることや焼土ブロック・炭化物が出土していること、焼成破裂痕がある土師器が出土していることから、土器の焼成に関わる遺構と考えられる。

738は土師器甕。ほぼ完形に復元できた。7世紀代。体部外面に焼成時破裂痕が残る。

遺構の時期は、1面で検出したことから7世紀中頃以降と考えられる。

12区 SX12002（第246図）

12区南部で、1面で検出した。平面プランは不整形であるが、底部分は梢円形を呈し、もとは梢円形を呈する遺構と考えられる。遺構の東部は後世の削平により消失する。東西方向は1.11m、南北方向は1.54m、深さは12cmである。埋土中からは、須恵器杯身・杯蓋・甕片、土師器小片が出土した。

739・740とも須恵器。739は杯蓋。740は杯身。6世紀後半～末（II-3～4期）頃。

遺構の時期は、1面で検出したことから、7世紀中頃以降と考えられる。

④溝

2区 SD2001（第247・249図）

2区中央部付近で、1面で検出した。SB2002を構成する柱穴に掘り込まれており、SB2002より古い。中央付近、SB2002を検出した付近では、溝は南側と北側に分岐するような形状で、断面観察から北側の溝が古いことがわかる。平面形は、分岐するようにみえる中心部分の、特に北側の溝のラインがやや不明瞭で、中央付近から東側にかけては底部の凹凸が顕著である。検出長約11m、幅は、西側が0.66m程度、中央付近が1.54m程度、東側が0.92m程度で、深さは西側が12cm、中央付近は26～32cm、東側は20cmを測る。主軸方位はW26.53°Sで、周辺の条里地割に近似する。

SD2001は、SA2001a・bの、芯々距離で約1.8m（6尺）北側で検出した。SA2001a・bの北側に付随する溝の一部と考えられる。SD2001の西端付近では南側でSD2010と約1.1m分重なっており、それ以西ではSD2010がSA2001a・bに付随する溝となる。SD2001の東端から東側にはSA2001a・bに付随する溝は認められない。SD2001が途切れる付近から約12.6m北にはSB2001a・bがあり、これらの建物との関連が考えられるかもしれない。

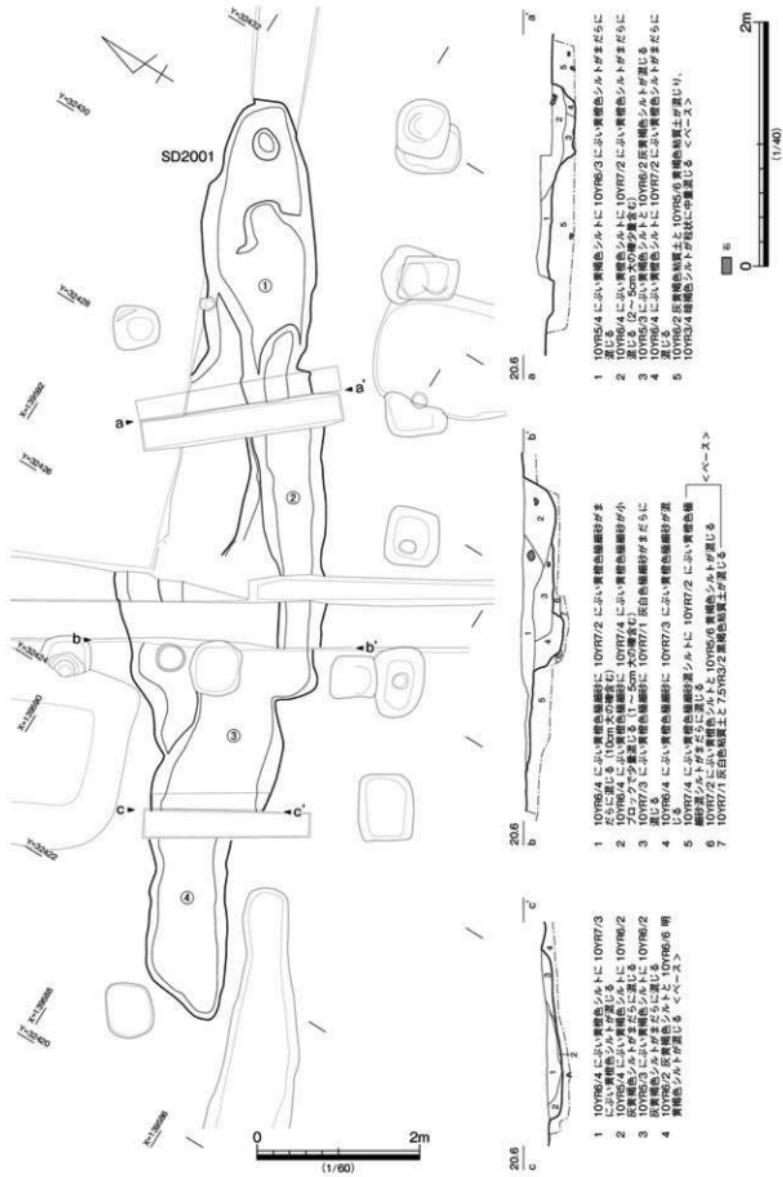
741～743は須恵器。741は杯小片。742は杯身小片。743は高台付杯小片。742は混入と考えられる。

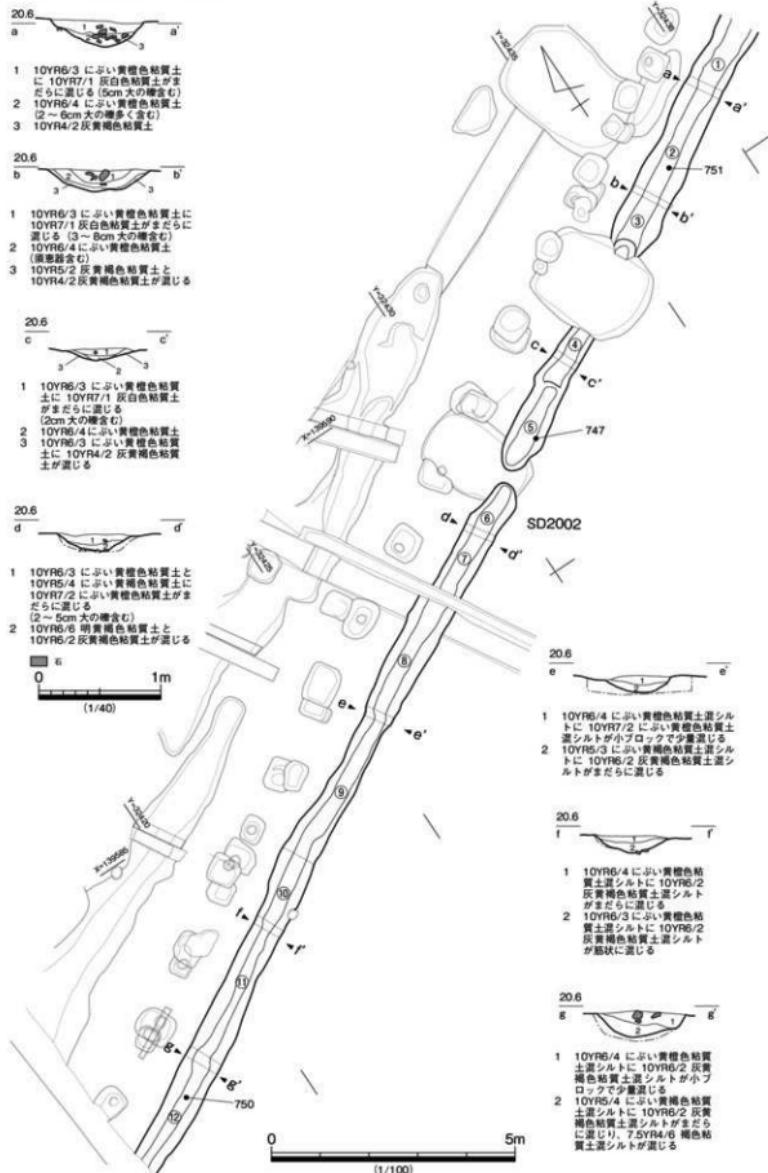
遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、SD2002と関連する遺構と考えられることや出土遺物から8世紀前半以降と考えられる。

2区 SD2002（第248・249図）

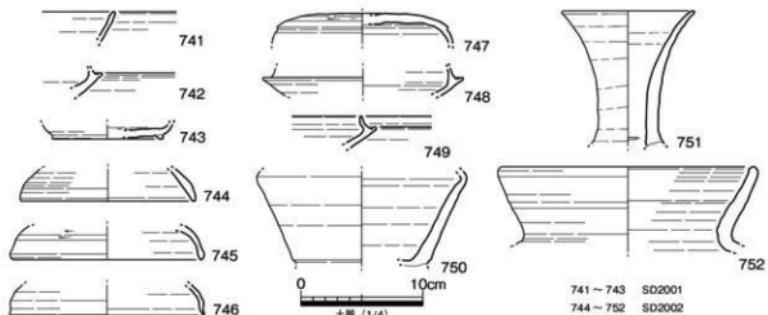
2区中央付近で、1面で検出した。主軸方位はW28.59°Sで、西部、東部とも調査区外へ延びる。SD2001・SD2010から芯々距離でほぼ3m（10尺）南側で、SA2001a・bからは芯々距離でほぼ1.2m（4尺）南側に位置する。SA2001a・bの南側に付随する溝と考えられる。北側の溝であるSD2001・SD2010に比べ、形状や深さが一定する。古代南海道と推定される現市道の中心からは約21m北側に位置する。

溝の延長26.5m以上、幅0.52～0.84m、深さ10～22cmを測り、直線的に掘削される。中央付近で途切れるように見られるが、SX2007（近世の土坑）の底のレベルとほぼ同じであり、これにより消失したものと考えられる。





第248図 SD2002 平・断面図 (1/100・1/40)



第249図 SD2001・SD2002出土遺物 (1/4)

744～752は須恵器である。744～747は杯蓋。748・749は杯身。6世紀末～7世紀初頭(II-4～5期)頃。750は壺体部。体部肩部付近で屈曲するもので、高台の剥離痕が認められる。751は長頸壺の頸部。750と同一個体の可能性がある。8世紀前半(IV-1期)。752は壺口縁部。

遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、750・751により8世紀前半頃と考えられる。

2区 SD2004 (第250・251図)

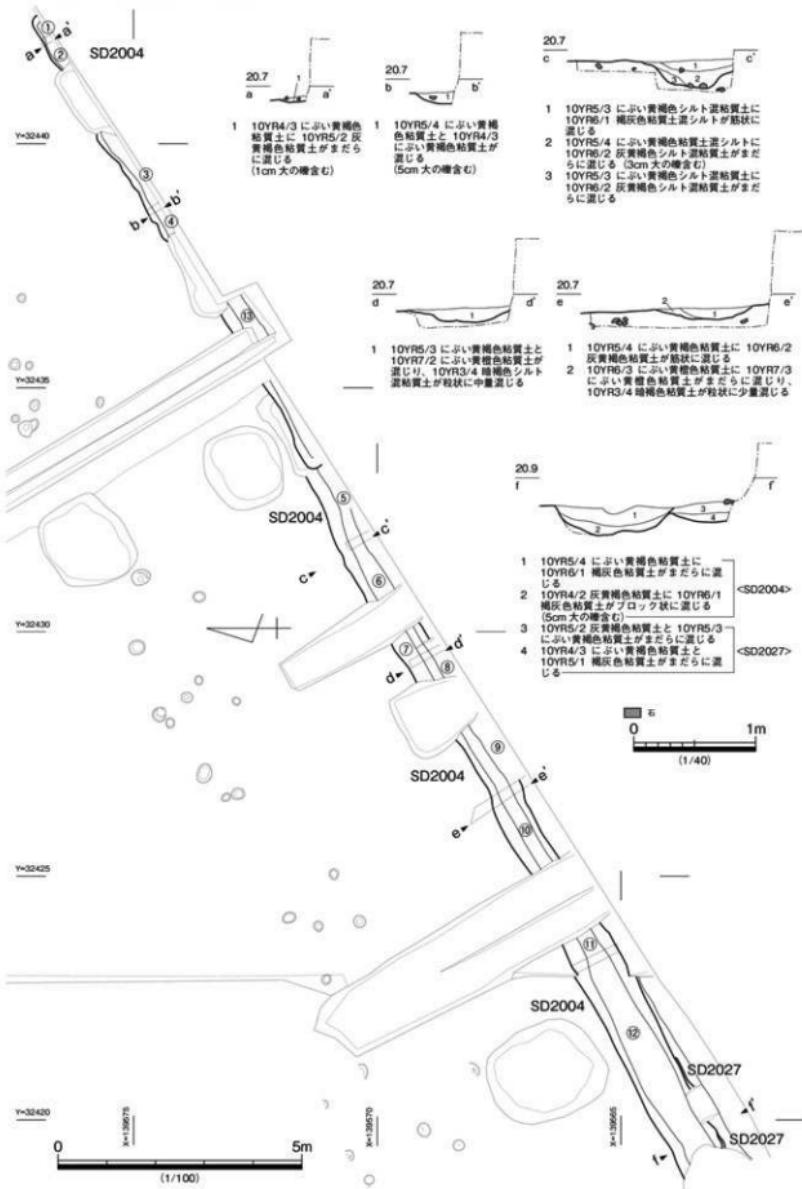
2区南端、1面で検出した。主軸方位はW29.66°Sで、周辺の条里地割と同じである。南海道に想定されている南側の現市道とは、東でわずかに南へ振るもの、北側にはほぼ沿って検出した。西・東側と東半部の南肩は調査区外に延びる。北側に位置するSA2001北側の溝であるSD2002との芯々距離はほぼ15.6m(52尺)である。検出長27.3m、幅0.80～0.96m、深さ10～24cmで、底のレベルには緩い凹凸がみられる。ほぼ直線的に掘削され、東端付近で現市道下へ延びる。

現市道は古代南海道の推定され、SD2004は、現市道との位置関係から南海道の北側溝が想定される。SD2004の西端では、これに壊され、また大半が現市道下へ延びるSD2027があり、SD2004の前身の北側溝が想定できる。現市道の南側では、南海道の南側溝が想定できるSD3001～SD3003を検出している。溝の切り合い関係からは、SD2004はSD3001と組み合う可能性が高いと考えられる。両者の溝の芯々距離で約8.2mを測る。

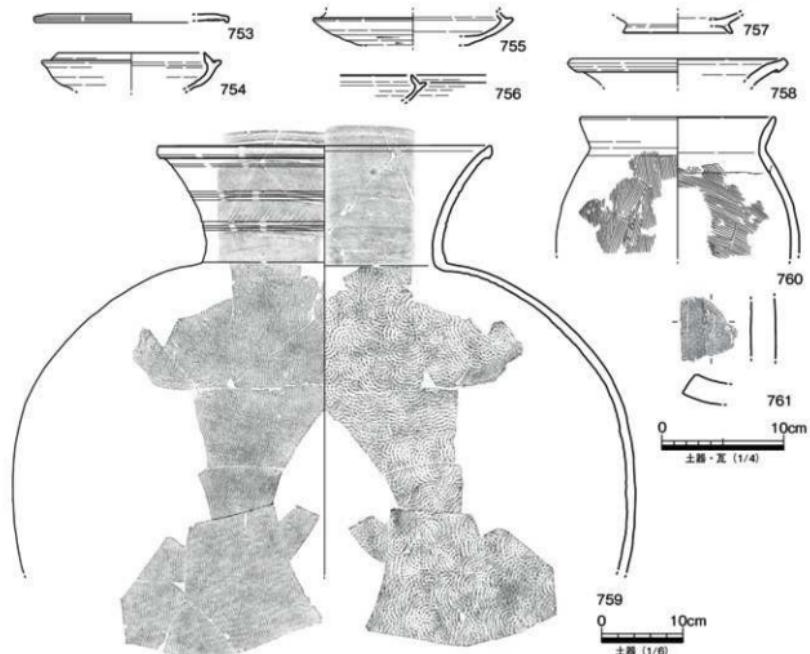
埋土からは、須恵器杯身、蓋、高台付杯、壺、土師器壺、古代瓦等が出土した。

753～759は須恵器。753は蓋口縁部小片。8世紀。754～756は杯身。7世紀初頭～前半(II-4～5期)。757は高台付杯底部。758は壺口縁部。759は壺。頭部に2条の沈線を施し、沈線と沈線の間に波状文を施す。7世紀前半。包含層1b層との接合資料。760は土師器壺。761は平瓦。凹面には布目が残る。

遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、出土遺物から8世紀代と考えられる。7世紀前半頃の遺物は包含層1b層からの混入と考えられる。



第250図 SD2004・SD2027 平・断面図 (1/100・1/40)



第251図 SD2004出土遺物 (1/4・1/6)

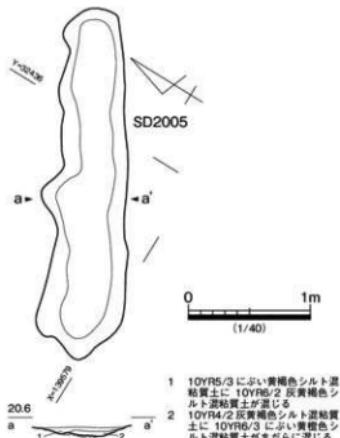
2区 SD2005 (第252図)

2区南東部で検出した。1面で検出した。SD2002とSD2004の間の空閑地に位置し、芯々距離でSD2002から南へ9.2m、SD2004から北へ6.4mを測る。検出長2.9m、幅0.70m、深さ7cm、主軸方位はW28.99°Sで、周辺の条里地割に沿う。SD2005とSD2004の間には小ピットが条里方向に散在する。埋土中からは須恵器杯身・甕、土師器片が出土した。

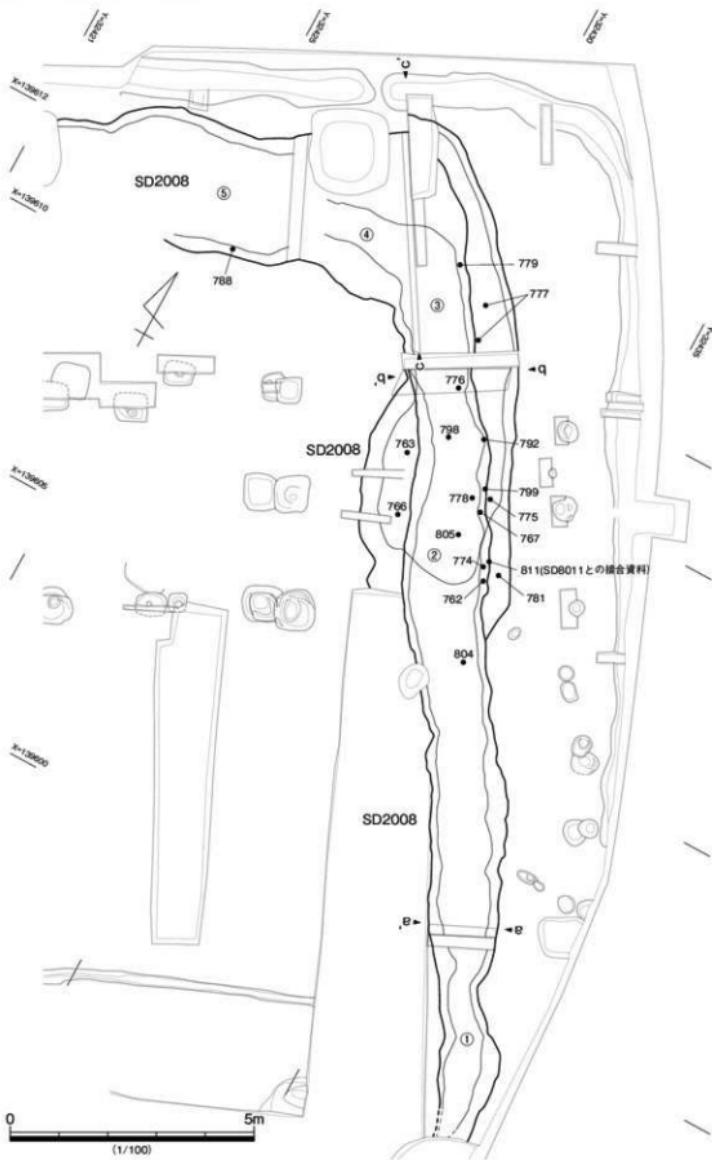
遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方針を指すことや周辺の遺構の検出状況から、8世紀代と考えられる。

2区 SD2008 (第253～256図)

2区北東端で、1面で検出した。条里地割の方向を示す溝で、調査区東端付近では南北方向を向き、調



第252図 SD2005平・断面図 (1/40)



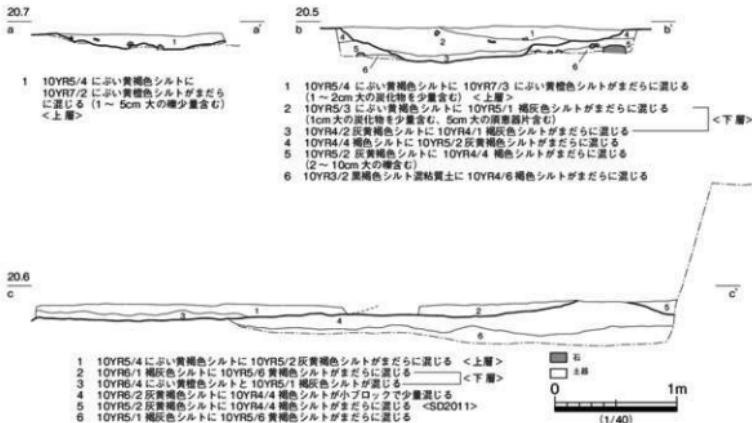
第253図 SD2008 平面図 (1/100)

査区北東隅付近で直角に西へ屈曲し、調査区北端付近では東西方向を向くL字型の溝である。SD2008とSB2001 東側柱穴列の芯々距離で3.2m程度、SB2001 北側柱穴列と東西方向の溝部分の芯々距離で3.8~4.0m程度である。検出長は、南北方向部分が19.13m、東西方向部分が7.48m、幅1.6~2.7m、深さ12~30cmを測る。東側約1.5~1.7mの位置ではSA2002a・bを検出し、芯々距離で約3.7m東側ではSD2011を検出した。SD2011は、調査区北東隅でSD2008に平行して西へ屈曲し、芯々距離は2.3m程度に狹まる。

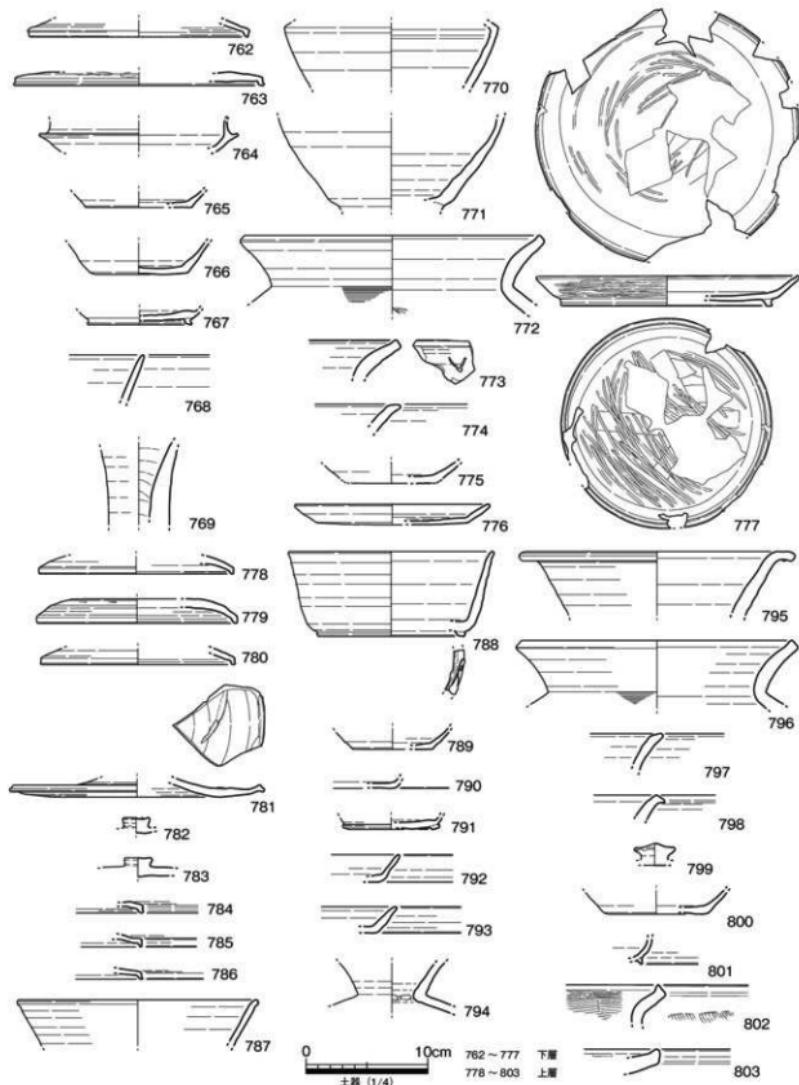
南側のSD2002・2001・2010、東側のSD2011とともに、SB2001を検出した区画を開く施設と考えられる。浅い溝ではあるが、特にSB2001の東側部分で遺物が多く出土した。SB2001からの廃棄である可能性があり、SB2001の時期を知る手掛かりとなろう。遺物の取り上げは、上層、下層に分けて取り上げた。

762~777は下層から出土した。762~774は須恵器。762・763は蓋。762には重ね焼き痕が残る。764は杯身。765・766は杯。765は内外面に火摺が残る。767は高台付杯。768は杯底部。769は長頸壺頭部か。770・771は壺体部。肩が張り、頸部がすぼまる器形で、長頸壺または広口壺の体部。770は肩部に稜線が残り、771は高台の一部がわずかに残る。772~774は蓋。773は頸部に「レ」点状のヘラ描きが残る。775~777は土師器。775は杯。776は皿。ともに須恵器と同じ器形である。777は高台付皿。口縁端部内面を丸く肥厚させる。内外面にヘラ磨きを施す。764を除き、概ね8世紀中頃~9世紀後半頃の遺物が出土する。

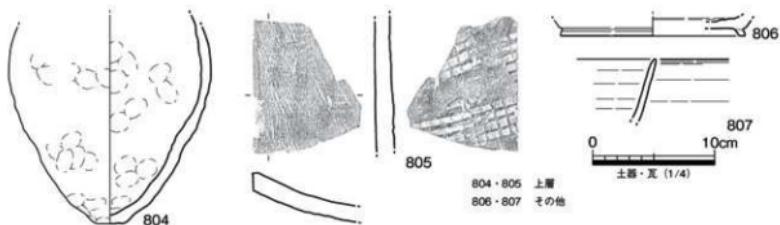
778~805は上層から出土した。778~798は須恵器。778~786は蓋。781は歪みが著しく、外面に他の須恵器の溶着痕が残る。782・783はつまみ部分。787~791は杯。788・791は高台付杯。788の高台部裏には他の須恵器の溶着痕が残る。789は内外面に火摺が残る。792・793は皿。794は壺頭部。795~798は壺口縁部小片。799~803は土師器。799は蓋摘み部分。800は杯。須恵器と同じ形態のものである。801は高台付底部。802・803は蓋。804は製塙土器。内外面とも指頭痕が著しい。805は平瓦。須恵質の焼成で薄手である。凹面は布目痕、凸面は格子タタキ痕が残る。806・807は層位不明の遺物で、いずれも須恵器。806は高台付杯。807は杯口縁部。出土遺物は概ね8世紀代と考えられる。



第254図 SD2008 断面図 (1/40)



第255図 SD2008出土遺物1 (1/4)



第256図 SD2008出土遺物2(1/4)

遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、出土遺物から、8世紀～9世紀後半頃と考えられる。遺物の多くはSB2001a・bに近接する部分で出土しており、SB2001a・bの時期を示す可能性が考えられる。

2区 SD2010（第257図）

2区中央付近で、1面で検出した。検出長7.8m、幅1.08～1.80m、深さ13cm程度を測る。主軸方位はW25.09°Sで、条里地割に沿う。

SD2010は西側から7.8mの位置で途切れ、それに続くようにSD2001を検出した。南側約3mに位置するSD2002とともにSA2001に伴う溝と考えられる。また、SD2008・SD2011とあわせて、SB2001を含む区画を画する溝としての役割を果たしていたと考えられる。埋土中からは、須恵器片が出土した。

808は須恵器片小片。8～9世紀。

遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、SA2001・SD2001・SD2004と関連性が強いと考えられることから、8世紀代頃と考えられる。

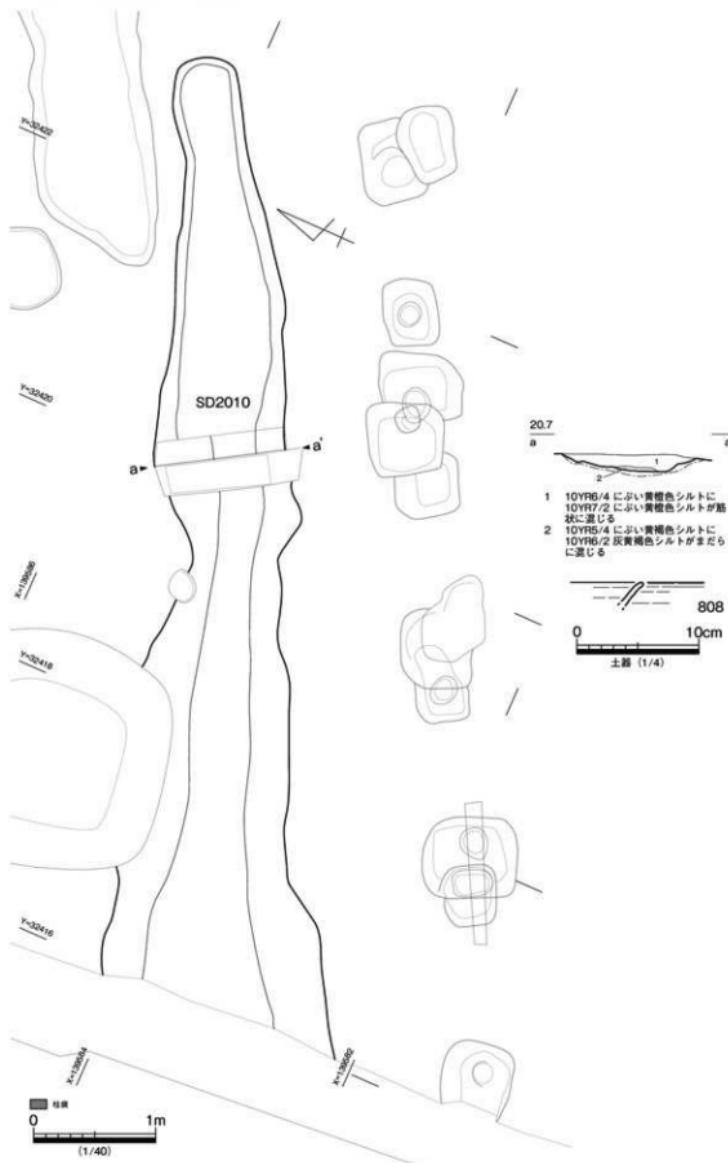
2区 SD2011（第258・259図）

2区北端から東端で、SD2008に平行して検出した。1面で検出した。SD2008と平行して南から北へ向き、2区北東隅付近ではほぼ直角に屈曲し、西へ向くL字型の溝である。溝の東肩は調査区外へ延びる。検出長は南北方向が14.98m、東西方向が9.66m、幅0.2m程度、深さ16cm程度を測る。主軸方位はW27.01°Sで、条里地割に沿う。

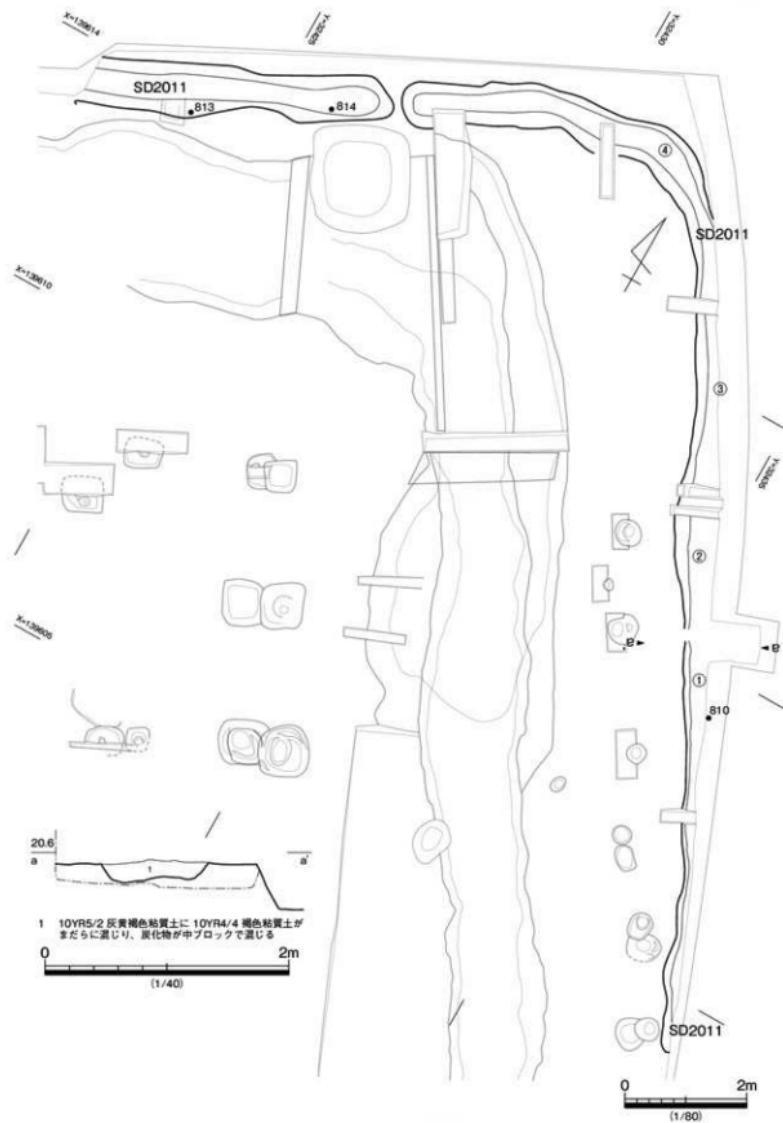
SD2008からは、芯々距離で東へ約3.7m、北へ約2.3mの位置で検出した。西側約0.5～1mの位置、SD2008との間でSA2002a・bを検出した。SD2008とは重複関係はないが、北端で検出した東西方向の部分では両者の溝の肩から肩までの距離が0.5m程度で非常に近接する。埋土中からは須恵器片、土師器片が出土した。

809～817は須恵器。809～813は蓋。809・813は内面の摩滅が著しく、転用硯として利用されたと考えられる。814は高台付杯。815は高杯脚部。816は壺口縁部か。817は壺体部。818は土師器甕口縁部。遺物の時期は概ね8世紀中頃～9世紀前半頃と考えられる。

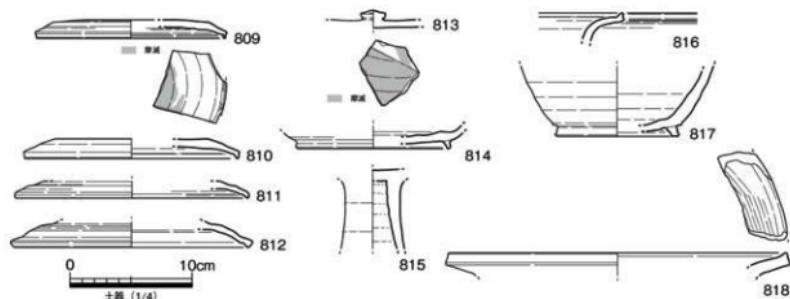
遺構の時期は、1面で検出し、条里地割の方位を指すこと、SD2008との関係、出土遺物から、8世紀中頃～9世紀前半頃と考えられる。転用硯が2点出土しており、SB2001からの廃棄の可能性もある。



第257図 SD2010 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第258図 SD2011 平・断面図 (1/80・1/40)



第259図 SD2011出土遺物 (1/4)

2区 SD2027 (第250図)

2区南西端付近で検出した溝である。1面で検出した。主軸方位は現市道とほぼ同じ W29.05° Sあるが、SD2004 同様、現道より西でやや北に振れる。東側は SD2004 により消失し、SD2004 より古い。検出長3.5m程度、幅0.32m以上、深さ17cm以上を測る。

溝の検出位置から、SD2027はSD2004の前身の溝であり、現市道が想定されている南海道の北側溝と考えられる。SD2027と組む南側溝は、遺構の切り合い関係や位置関係からSD3003と考えられる。埋土中からは須恵器杯身・甕、土師器小片が出土した。

遺構の時期は、1面で検出し、南海道の北側溝が想定されること、SD2004より古いことから、8世紀代と考えられる。

3区 SD3001 (第260・261図)

3区北端で現市道の南側に沿う位置で、1面で検出した。重複・近接して検出したSD3001～SD3003のうち、最も北側で検出した。断面観察により、SD3003より新しく、SD3002との前後関係は不明である。北側の溝の肩は現市道の下に延びる。検出長15.4m、幅0.92m以上、深さ36～40cm以上で、主軸方位はW30.89° Sである。

SD3001の北側に接する現市道は古代南海道に想定されており、SD3001は南海道の南側の側溝に想定できる。現市道の北側では、南海道の北側溝と考えられるSD2004、SD2027を検出しており、遺構の切り合い関係や位置関係からSD2004と組み合うと考えれば、芯々距離は82m程度と考えられる。

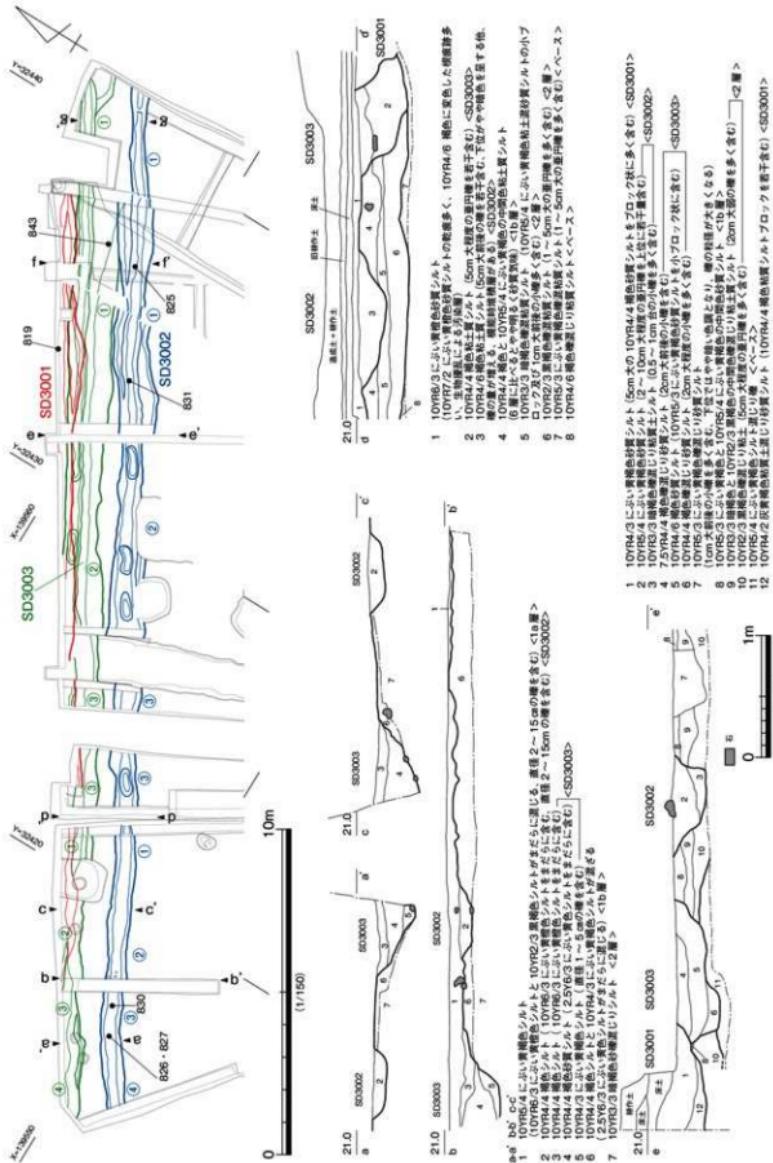
埋土からは須恵器杯身・甕片、土師器片、鉄滓が出土した。

819は鉄滓小片。6世紀後半～7世紀初頭には、2面の同一位置で鍛冶関連遺構であるSF3001・SF3002が検出されており、鉄滓はそれらからの混入と考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、南海道の南側溝と考えられること、SD2004と同時期でSD3003より新しいことから、8世紀中頃と考えられる。

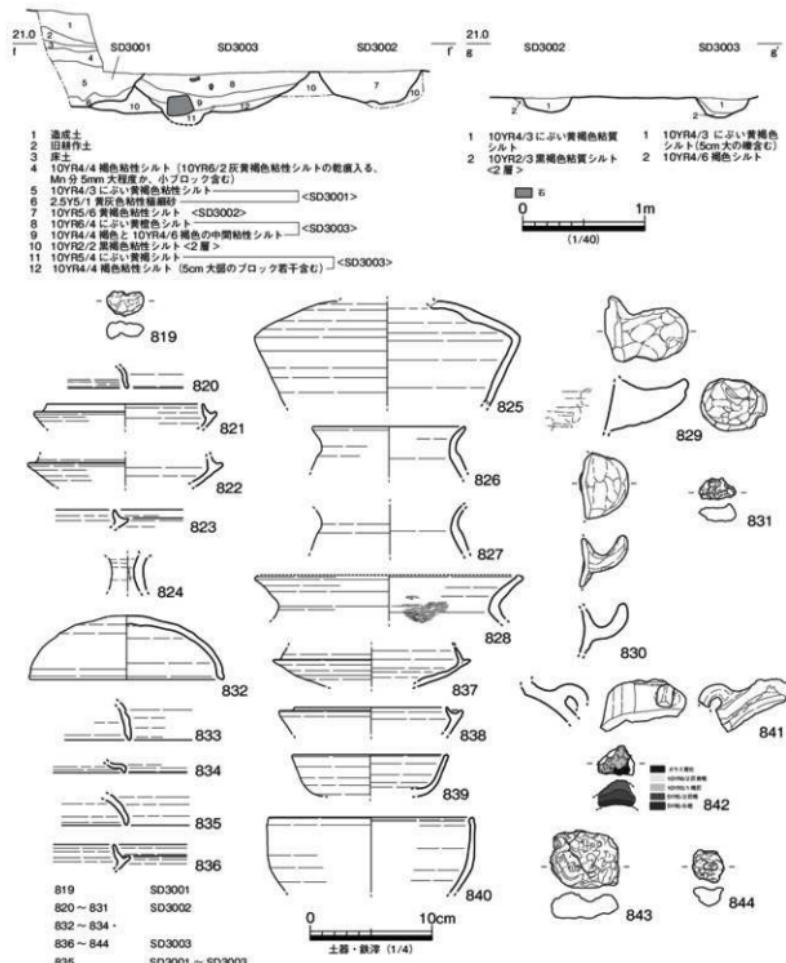
3区 SD3002 (第260・261図)

3区北端、現市道の南側に沿う位置で、1面で検出した。近接・重複して検出したSD3001～SD3003



第260図 SD3001・SD3002・SD3003平・断面図1 (1/150・1/40)

のうち、最も南側に位置する。遺構の切り合い関係によりSD3003より新しく、SD3001との前後関係は不明である。検出長31.26m、遺存状態の良好な場所で幅は0.82m程度、深さは22~26cm、主軸方位はW30.02°Sである。SD3003との芯々距離は約1.3m、SD3001との芯々距離は約2.2m、SD2004との芯々距離は約10.2mである。溝底部では、長軸0.85~1.00m、短軸0.26~0.31m、深さ2.5~5.5cmの浅い窪みが4ヶ所で認められた。



第261図 SD3001・SD3002・SD3003断面図2(1/40)、出土遺物(1/4)

検出位置から、古代南海道に関連する遺構が考えられ、これと組む北側溝は現市道の下に存在する可能性がある。あるいは、SD3003に比べて規模がやや小さく、SD3001とは、溝の端の幅で1.0～1.3m程度の距離で並行しており、SD3001はSD3002と併存し、SD3002はSD3001に付随する溝とは考えられないであろうか。

820～825は須恵器。820は杯蓋小片。821～823は杯身。7世紀初頭～前半（II-5～6期）頃。824は高杯脚部。825は長頸壺の体部と考えられる。8世紀前半頃。SD3003の上面精査で出土したものと接合関係にある。826～828は土師器壺。829・830は土師器壺または瓶把手。831は鉄滓。

遺構の時期は、1面で検出したこと、南海道側溝が想定され、SD3003より新しいこと、出土遺物から、8世紀中頃と考えらえる。6世紀末～7世紀初頭の須恵器は、包含層1b・2層からの混入と考えられ、鉄滓はSF3001・SF3002に関わる遺物と考えられる。

3区 SD3003（第260・261図）

3区北端で現市道の南側に沿う位置で、1面で検出した。SD3001・SD3002と切り合い関係があり、いずれよりも古い。検出長31.55m、遺存状態の良好な場所で、幅1.40m、深さ36～40cm、主軸方位はW30.81°Sである。検出位置から古代南海道の南側溝と考えられ、遺構の前後関係からSD3001の前身遺構と考えられる。北側溝では、同様に重複関係にあるSD2004とSD2047が検出されており、SD2047に対応すると考えられる。両者の芯々距離は約8.4mである。溝底部には、SD3002と同様の、長軸1.06～1.20m以上、短軸0.23～0.25m、深さ3.2～4.5cmの楕円形の窪みが2ヶ所で認められた。

832～841は須恵器。832・833・835は杯蓋。7世紀初頭（II-5期）頃。834は蓋小片。8世紀代。835はSD3001～SD3003上面を精査中に出土した遺物。須恵器杯蓋小片。836～838は杯身。7世紀初頭（II-5期）頃。839は杯。8世紀中頃。840は鉢。7世紀末頃。841は提瓶肩部分。把手部分が僅かに残り、体部は器形に沿った円弧上のヘラ削り痕が残る。842～844は鋳治関連遺物。842は輪羽口小片。外面は一部ガラス質化する。843・844は鉄滓。843は分析試料。

遺構の時期は、1面で検出したこと、南海道側溝が想定されること、出土遺物から、8世紀前半～中頃と考えらえる。7世紀初頭～前半の須恵器は包含層1b・2層からの、鉄滓はSF3001・SF3002からの混入と考えられる。

7区 SD7001（第262図）

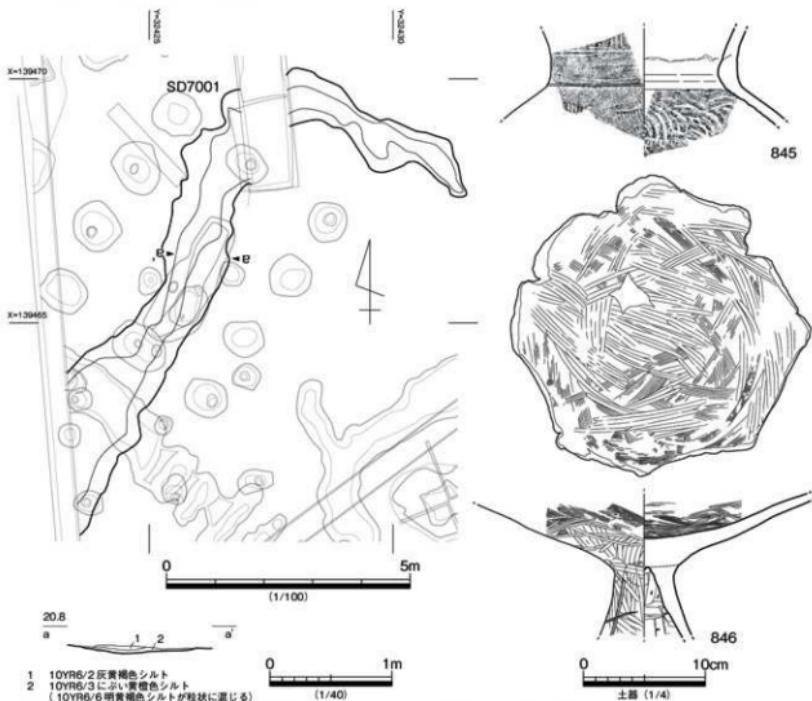
7区中央附近で、1面で検出した。西側は調査区外へ延びる。検出長12.6m、幅0.92m、深さ6cm、主軸方位はN30°Eおよびそれに直交する方向である。遺構の重複関係により、SX7002より古くSB7002より新しい。埋土中からは須恵器壺、土師器高杯が出土した。

845は須恵器壺。小片のため、径はやや不確か。頸部上方に縱方向の刻み目が残る。7世紀中頃。846は土師器高杯。内外面ともにヘラ磨きを密に行う。

遺構の時期は、1面で検出したこと、SX7002より古いことから、7世紀中頃以降と考えられる。

8区 SD8001（第263図）

8区南部で検出した。1面で検出した。西側は調査区外へ延びる。検出長2.24m、幅64cm、深さ6cm、主軸方位はN54.04°Eである。溝の方位はSD7001に近似する。埋土中からは須恵器壺片、土師器小片



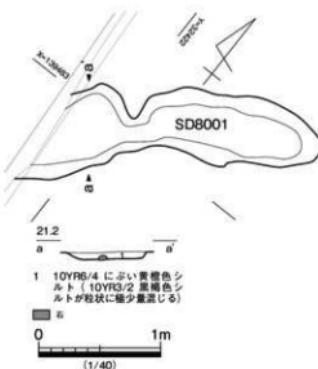
第262図 SD7001 平・断面図 (1/100・1/40)、出土遺物 (1/4)

が出土した。

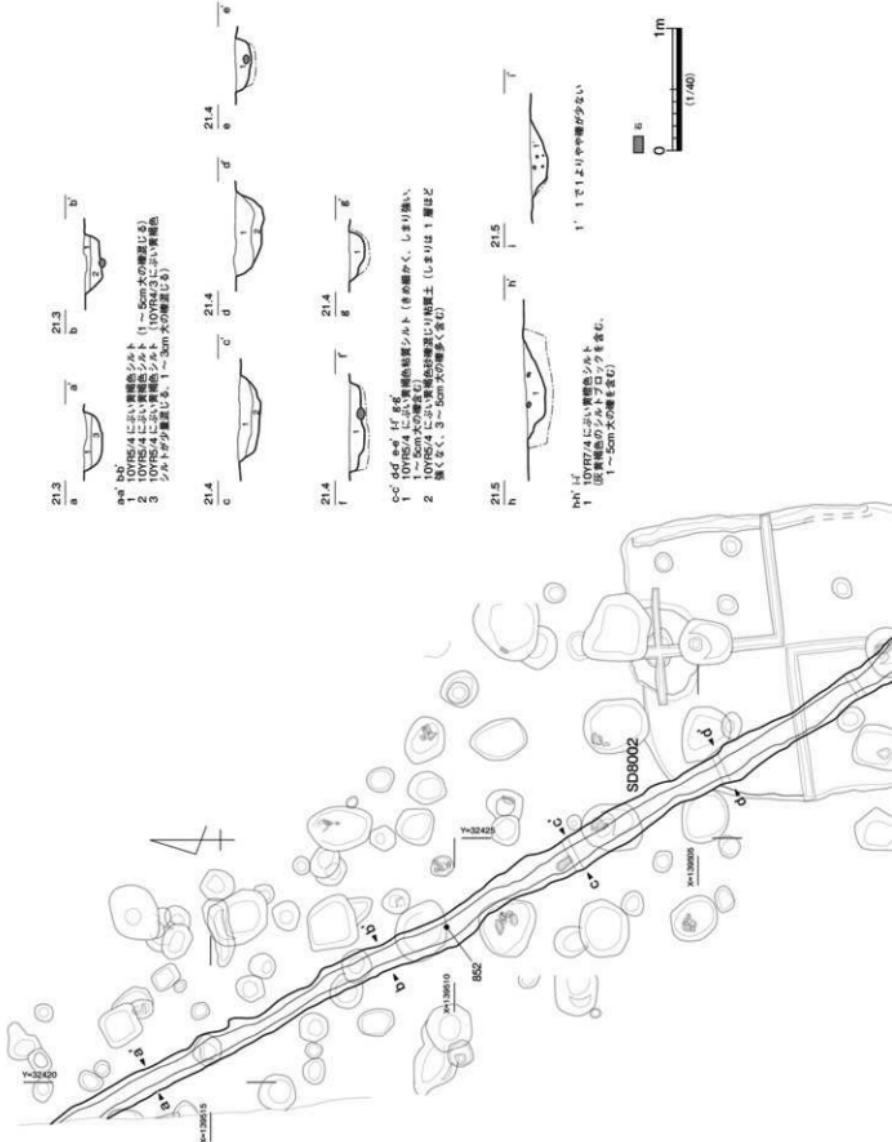
遺構の時期は、1面で検出したことから、7世紀中頃以降と考えられる。

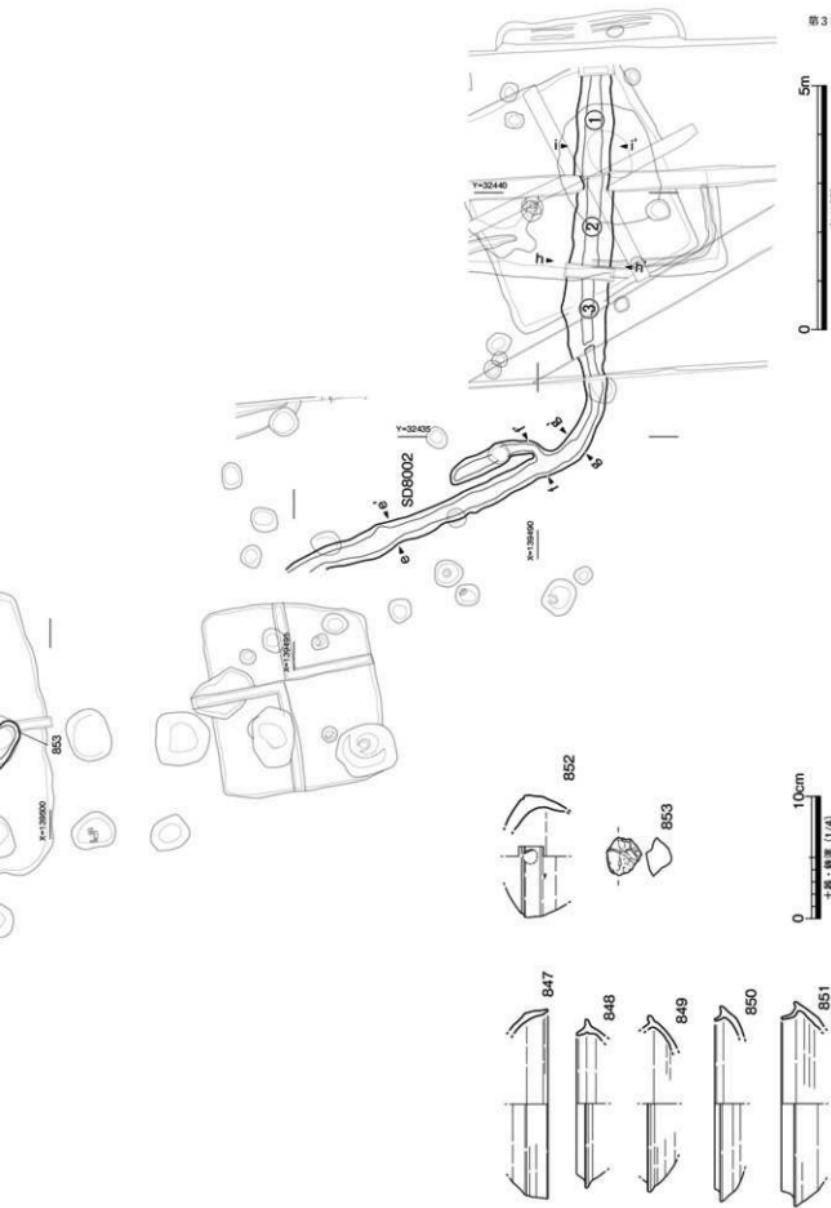
8・12区 SD8002（第264図）

8区から12区にかけて、1面で検出した。遺構の重複関係により、SB8008・SB8009より新しい。SB8002とは、切り合い関係はないが、重複する位置関係にあることから同時併存はない。12区部分では東から西へ8区方向へ延び、8区南東隅付近で北西方向へ屈曲し、調査区外へ延びる。屈曲部分から12区では、検出長6.95m、幅0.56～0.80m、深さ14cm、主軸方位は真東西方向である。東に隣接する1区では検出しなかった。8区の屈曲部分までは延長32.40m、幅0.42～0.72m、深さ12～22cm、主

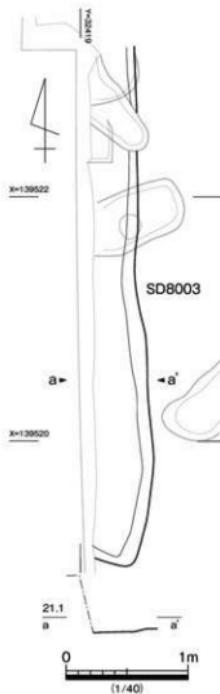


第263図 SD8001 平・断面図 (1/40)

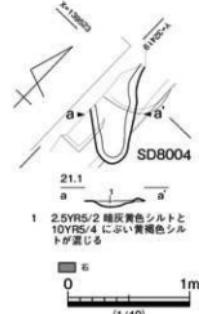




第264図 SD8002 平・断面図 (1/100・1/40)、出土遺物 (1/4)



第265図 SD8003 平・断面図 (1/40)



第266図 SD8004 平・断面図 (1/40)

軸方位は N28.55° W である。8区中程でいったん消失するが、8区南東部で再度検出した。8区屈曲部付近で二股に分かれ、北西方向へ2m程度検出し消失する。埋土中からは、須恵器杯身、杯蓋、甕など、土師器小片が出土した。

847～852は須恵器。847は杯蓋。848～851は杯身。852は甕。肩部と体部に沈線が1条ずつ巡る。6世紀末～7世紀前半(II-5～7期)頃。853は分析試料。鍛錬鍛冶跡。出土遺物はいずれも包含層1b・2層からの混入と考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したこと、SB8008・8009より新しいことから、8世紀前半以降と考えられる。

8区 SD8003 (第265図)

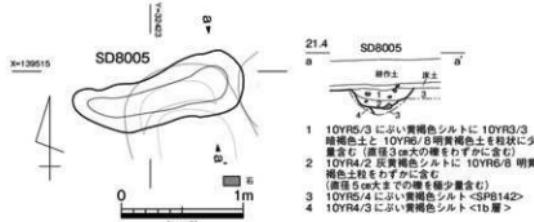
8区北部西側調査区際で、1面で検出した。SP8214と重複し、これより上面で検出したことが西壁土層断面図からわかる。また、遺構の前後関係からSD8004より古い。主軸方向はほぼ真北方向で、検出長4.3m、幅0.34m以上、深さ8.3cmを測る。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。主軸方位や残存状況から、浅い窪み状の落ち込みと考えられる。

遺構の時期は、1面で検出したことから7世紀中頃以降である。

8区 SD8004 (第266図)

8区北西端付近で、1面で検出した。北西側は調査区外へ延びる。検出長0.64m、幅0.30m、深さ5cm、主軸方位はN44.17° Wである。SB8002の内側で検出したが、これとの前後関係は明らかではない。遺構の前後関係からSP8215、SD8003より新しいと考えられる。SD8004の検出長は短いものの、2.4m南側には、SD8004とほぼ平行すると考えられるSD8002を検出し、これと対になる可能性もある。埋土中からは土師器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は、1面で検出したこと、溝の主軸方位が概ね条里方向を向くことから、8世紀以降と考えられる。



第267図 SD8005 平・断面図 (1/40)

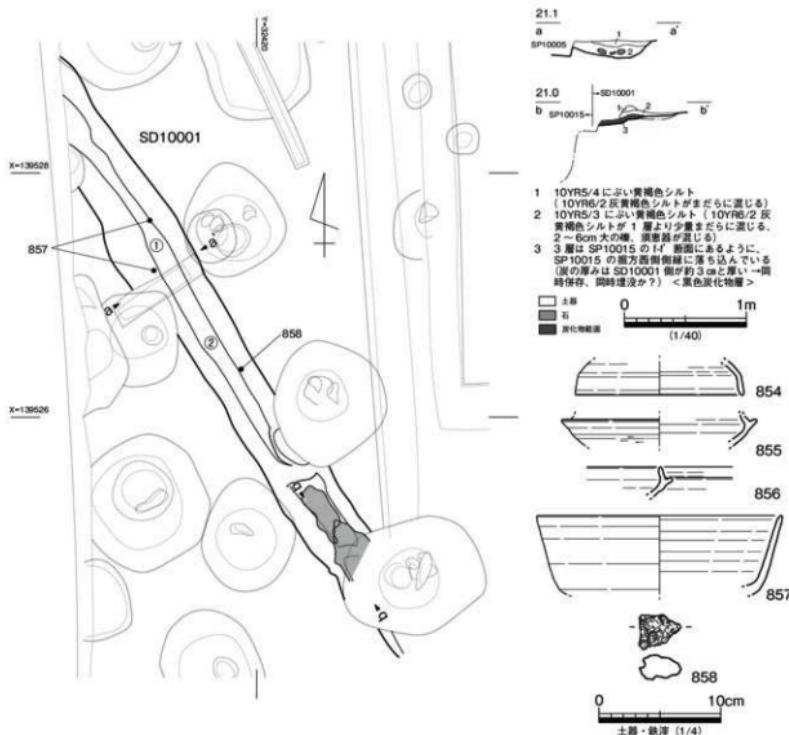
8区 SD8005（第267図）

8区中央付近で、1面で検出した。遺構の切り合い関係により、SB8009とSB8010の間に位置する大型柱穴SP8142より新しい。検出長1.4m、幅0.50m、深さ20cmを測る。埋土中から出土遺物はなかった。

遺構の時期は、1面で検出したことから、7世紀中頃以降と考えられる。

10区 SD10001（第268図）

10区南部で、1面で検出した。SB8002の東側柱列の東側にはほぼ平行して検出した。検出長5.23m、幅0.60m、深さ14cm、主軸方位はN33.33°Wである。溝の南東部の最下層には長軸70cm、幅20cm、厚さ3cm程度の範囲で炭化物層が堆積していた。西壁土層断面から、SD10001はSB8002-SP10038を掘り込んでおり、SB8002より新しいと考えられる。SD10001b-b'断面では、調査時の所見では、SB8002-SP10015のSD10001に連続する部分には炭化物が帯状に堆積していることから、SD10001とSP10015は同時埋没であるとしている。南側5.04mには、SD10001と同方向のSD8002が存在する。埋土中からは須恵器、土師器小片、古代瓦片、鐵滓片が出土した。



第268図 SD10001 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

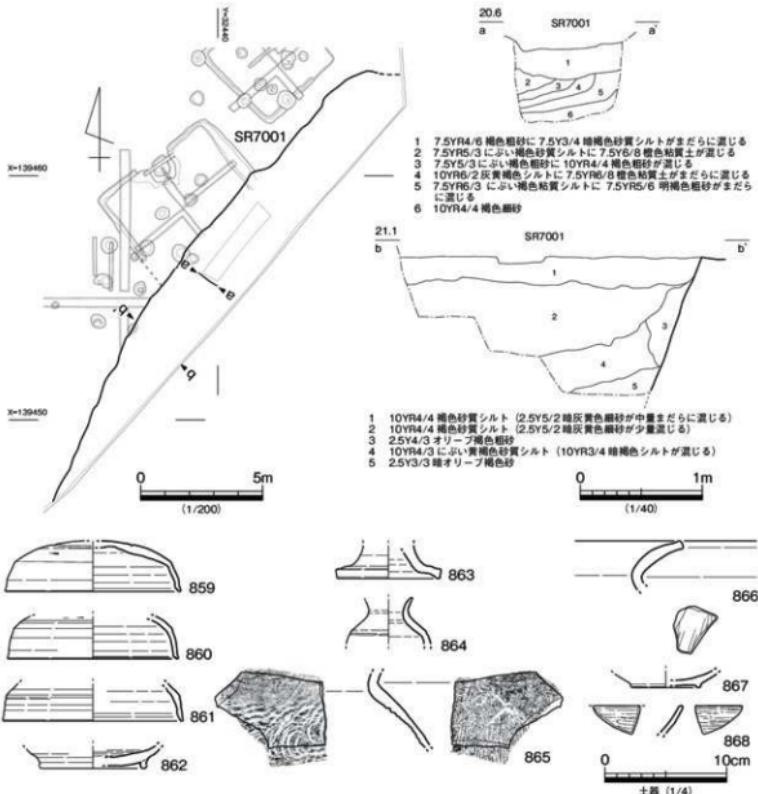
854～857は須恵器。854は杯蓋。855・856は杯身。いずれも7世紀初頭～前半(II-5～6期)。857は杯。8世紀中頃。858は鉄達。

遺構の時期は、1面で検出したこと、SB8002と同時併存が想定されること、溝の主軸方位が概ね東里方向を向くことから8世紀中頃と考えられる。

⑤自然流路

7区 SR7001 (第269回)

7区南東端で検出した。7区では、流路の北西肩を検出しており、これより南東側が自然流路である。SH7007、SB7011はSR7001により南東部が消失する。作業の安全を確保するため掘削は一部に止め、トレンチ調査により土層堆積状況の確認と遺物の収集を行った。埋土中からは須恵器、土師器、黒色土器片が出土した。



第269図 SR7001 平・断面図 (1/200・1/40)、出土遺物 (1/4)

859～865は須恵器。859～861は杯蓋。6世紀後半(II-3期)。周辺の2面遺構からの混入と考えられる。862は須恵器高台付杯。863は高杯脚部。7世紀初頭。864は小形壺。865は甕。866は土師器甕。867・868は黒色土器碗。

流路の時期は、黒色土器の時期である10世紀中頃と考えられる。6世紀～7世紀の遺物は、SR7001により消失した遺構群に由来するものと考えられる。

⑥柱穴（第270～291図）

1面で検出した、掘立柱建物や柵列を構成しない柱穴を掲載した。掲載した柱穴は、断面図が作成された柱穴と遺物実測図を掲載した柱穴である。このうち、2区SD2004とSD2002の間、及び8区で、明確な役割は不明であるものの、集中して帯状に連なる柱穴群が検出された。これらはそれぞれ、関連する柱穴群として捉えられるかもしれない。

遺構の説明は、2区および8区の柱穴群を除き、一覧表にて掲載する。報告は1区から行う。

2区南部小穴群（第271～273図）

2区南部、1面で小柱穴群を検出した。SD2004とSD2002の間で、SD2004から約4.7m北側、SD2002より約10.9m南側で検出した。これら一直線状に配置されておらず間隔も一定しないが、概ね条里地割と同じ方向に幅約2.1mの範囲で帯状に並ぶ。柱穴は概ね直径20～30cm程度の円形で、深さは8～22cm程度を測る。機能については不明であるが、SD2004に関連する一連の遺構である可能性もある。

埋土中からは、下層遺構からの混入と考えられる須恵器杯蓋・杯身片、土師器杯片、鉄滓片が出土した。個々の遺構については、表7～8にまとめた。

これらの柱穴に時期は、875の時期である概ね9世紀後半頃と考えられる。

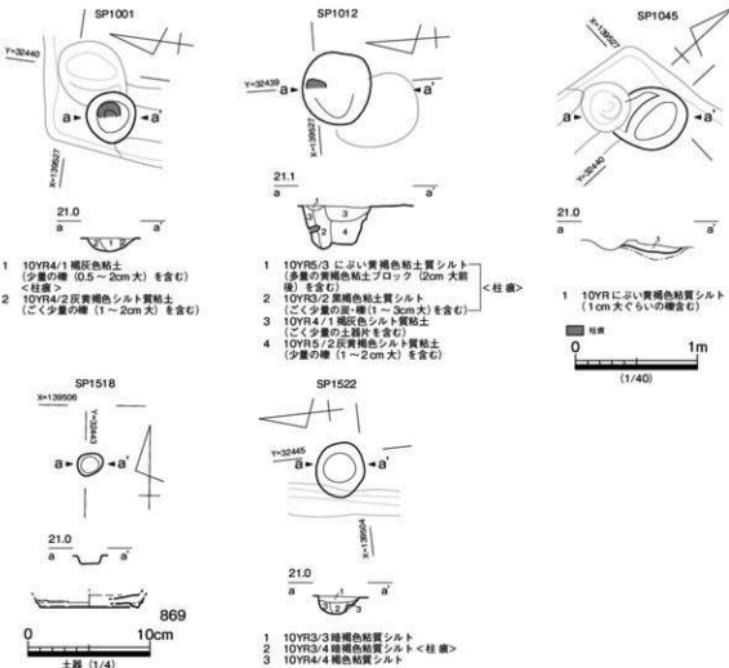
8区小穴群（第274～279図）

10区・8-2-3区・8-2-2区にわたって、1面で検出した小穴群である。2区南部小穴群同様直線状に、幅約1.4mの範囲で、約23mにわたって密集して検出した。方位は概ね条里方向と近いN34.56°Wを指す。

柱穴は規模が小さく、直径20～60cm程度、深さ8～35cm程度である。掘り込み面は1b層または1bt層で、1a層により覆われることが8-2-3区西壁土層断面からわかる。SB8022の東柱列と重複する部分があり、SB8022柱穴の方が古い。SB8002の東柱列と小穴群の南北ラインの距離は35～45m程度で、概ね平行する。

埋土中からは、下層遺構からの混入と考えられる須恵器片が出土した以外は時期が特定できる遺物は出土しなかった。

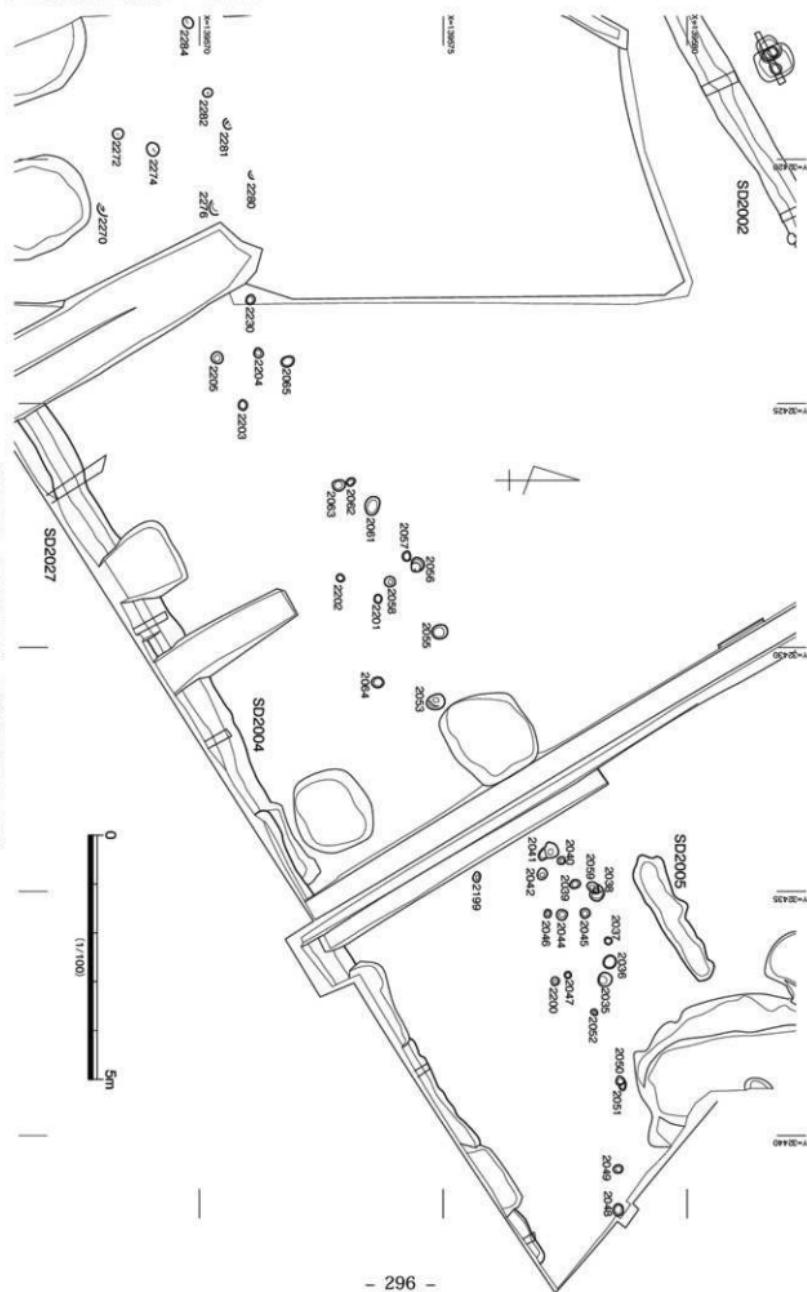
これらの柱穴に時期は、検出層位やSB8002との関連性を考えれば、8世紀中頃と考えられる。



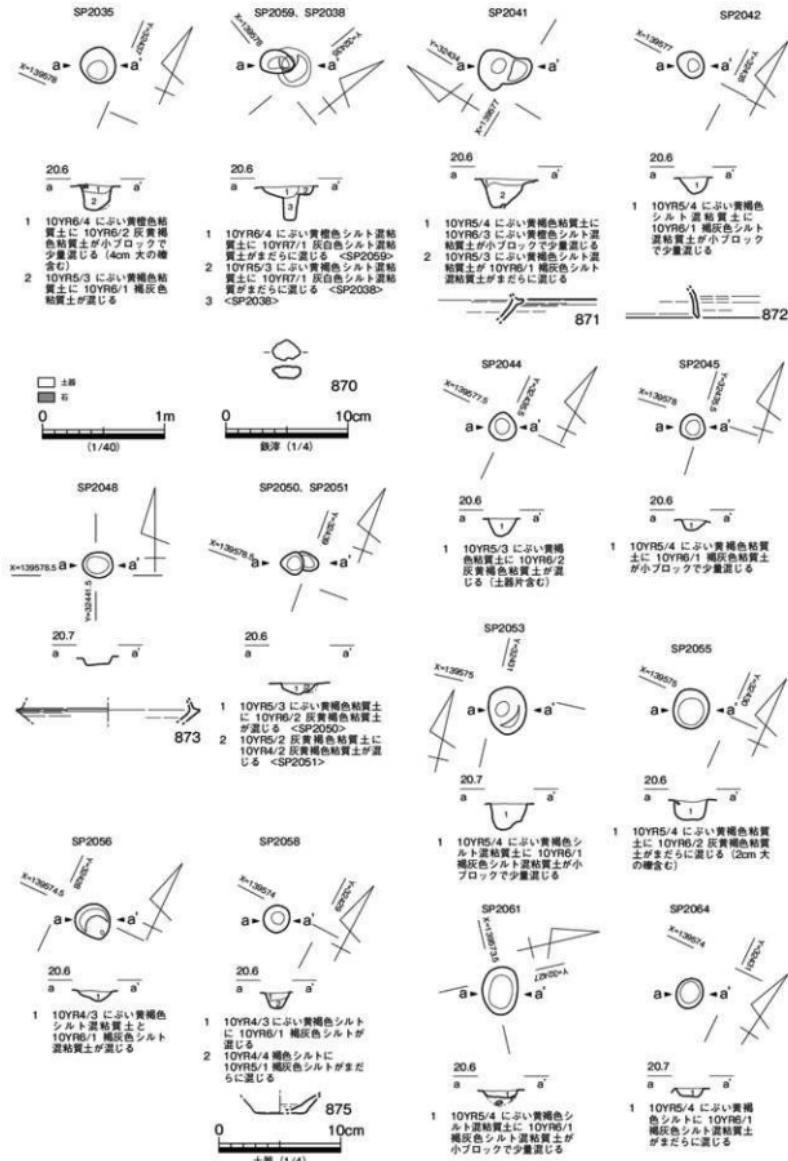
第270図 1区ピット(古代) 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

第7表 報告ピット一覧(古代) 1

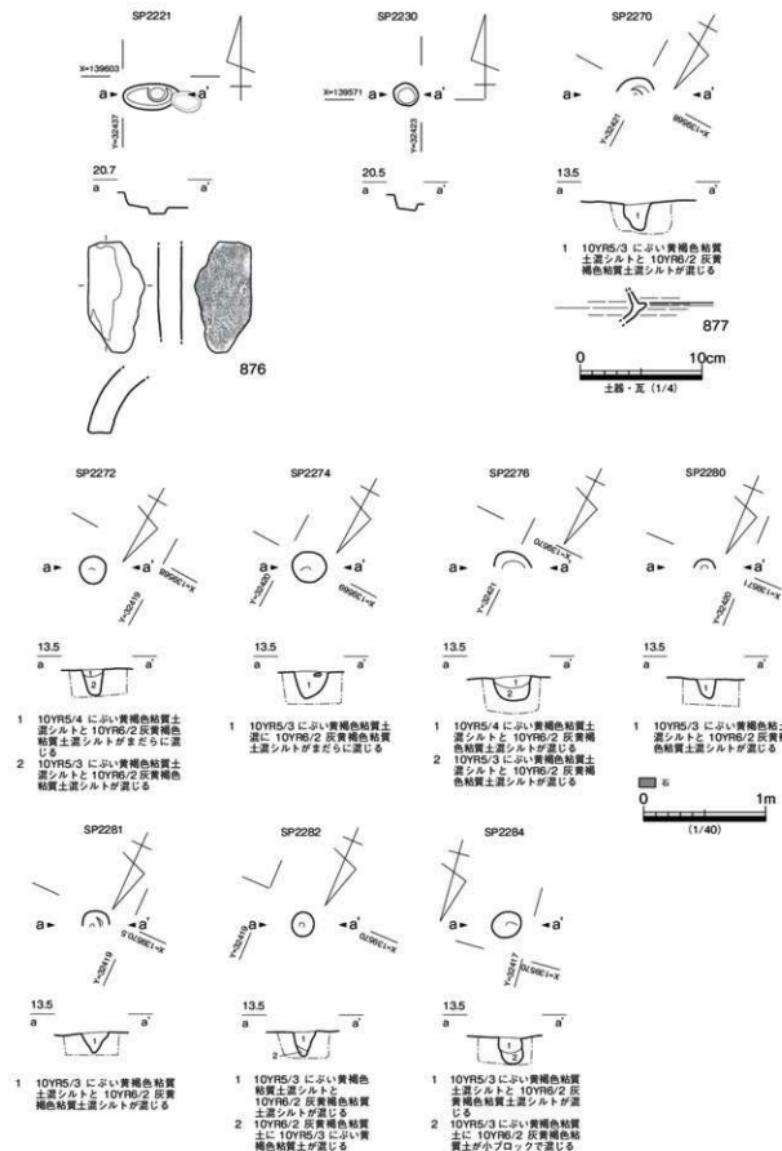
区名	通標名 (SP番号)	面	平面形	規模(cm) (長軸×短軸)	深さ(cm)	掲載遺物 (報告番号)	その他の出土遺物
1区	1001	1	円形	42	11		須恵器要素片 (土師質焼成)
1区	1012	1	円形	61	36		小片
1区	1045	1	椭円形	53 × 51	11		
1区	1518	1	椭円形	21 × 17	8	869 (須恵器高台付杯)	須恵器高台付杯片
1区	1522	1	円形	44	15		須恵器杯身又は杯蓋片
1区	1552	1	-	-	-		須恵器杯身又は杯蓋片
2区	2035	1	円形	30	21		
2区	2038	1	円形	34	28	870 (鉄滓)	
2区	2041	1	椭円形	43 × 33	24	871 (須恵器杯身)	
2区	2042	1	円形	24	14	872 (須恵器杯)	小片
2区	2044	1	円形	23	15		
2区	2045	1	円形	20	10		
2区	2048	1	円形	25	8	873 (須恵器杯身)	
2区	2050	1	円形	19	10		
2区	2051	1	椭円形	19 × 14	8		
2区	2053	1	椭円形	38 × 31	22		須恵器片
2区	2055	1	円形	33	18		須恵器要素片
2区	2056	1	円形	30	9		須恵器要素片
2区	2058	1	円形	22	14	875 (土師器杯)	
2区	2059	1	椭円形	28 × 19	9	870 (鉄滓)	須恵器片



第271図 2区南部小ビット群検出状況 (1/100)



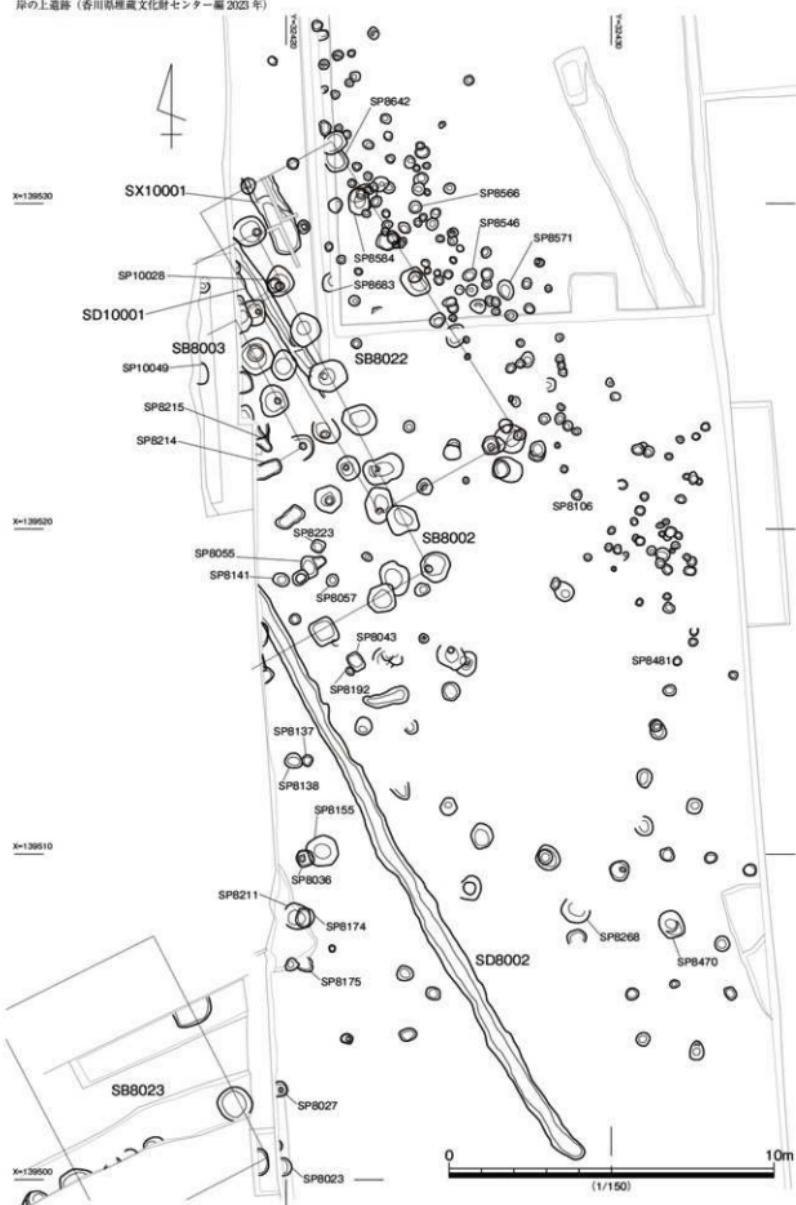
第272図 2区ピット(古代) 平・断面図1 (1/40)、出土遺物1 (1/2・1/4)

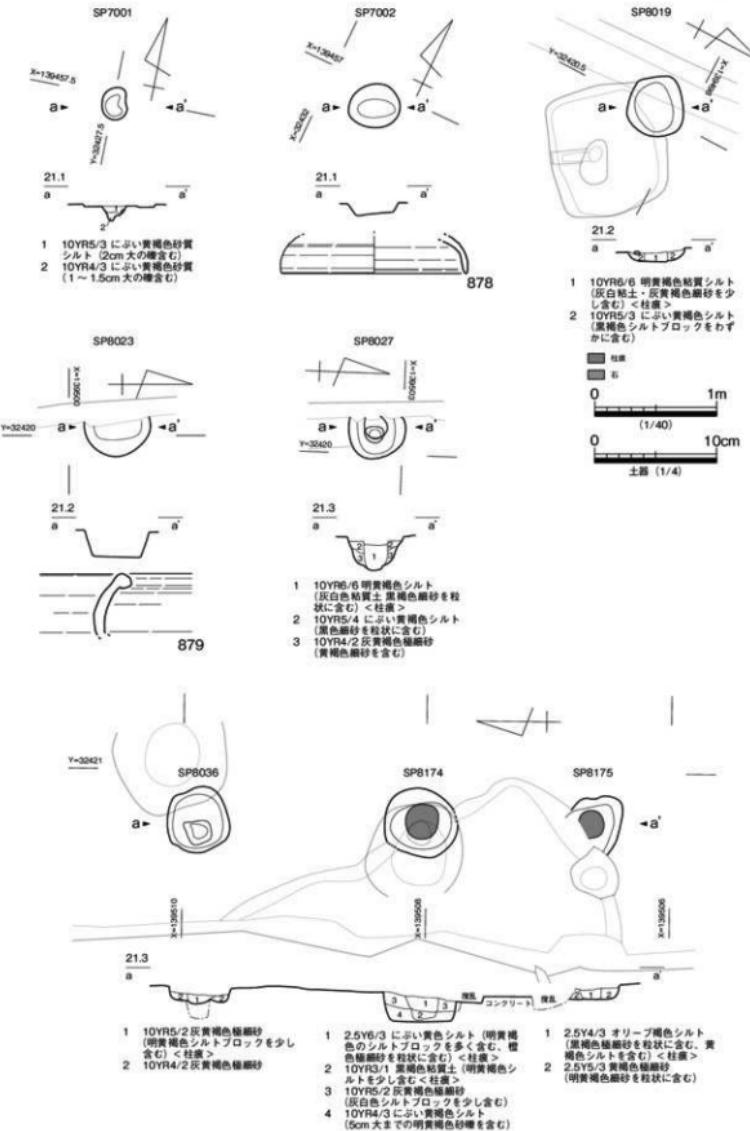


第273図 2区ピット（古代）平・断面図2 (1/40)、出土遺物2 (1/4)

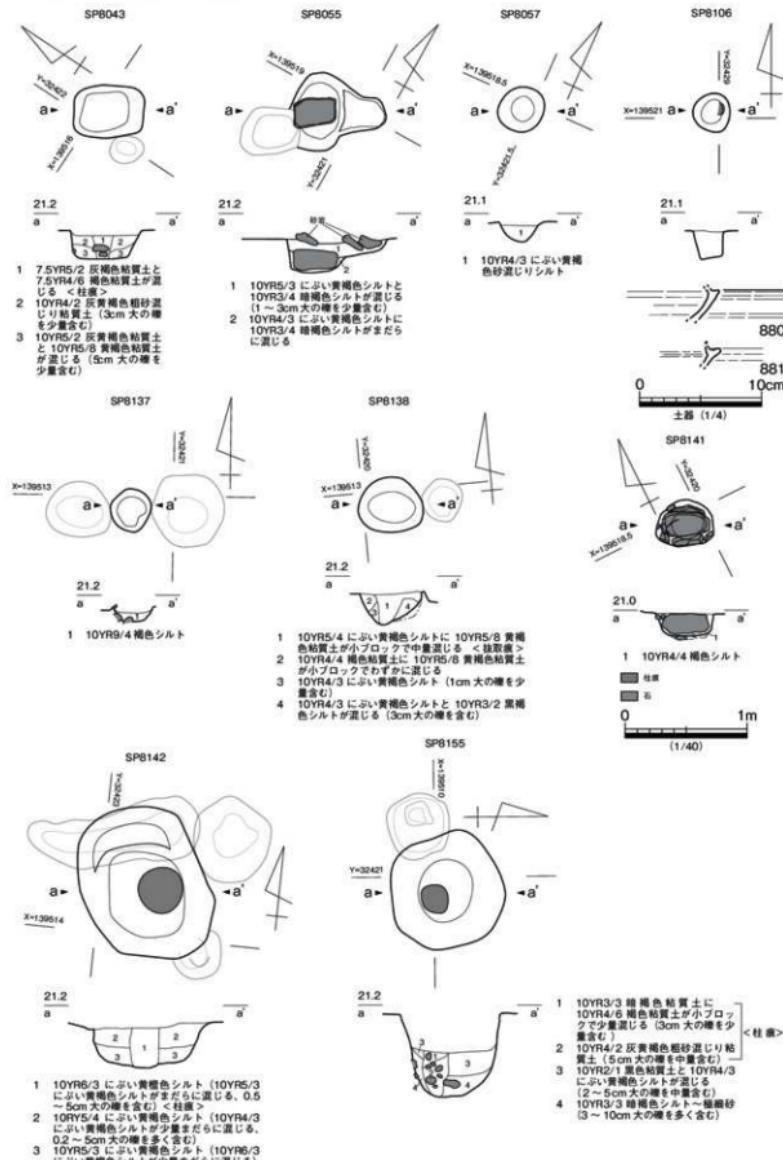
第8表 報告ピット一覧（古代）2

区名	遺構名 (SP番号)	面	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (報文番号)	その他の出土遺物
2区	2061	1	楕円形	40 × 29	7		
2区	2064	1	円形	26	7		須恵器片
2区	2221	1	楕円形	46 × 21	19	876 (丸瓦)	小片
2区	2230	1	円形	19	14		
2区	2270	1	-	30 × 14	25	877 (須恵器杯身)	
2区	2272	1	円形	23	22		
2区	2274	1	円形	28	23		
2区	2276	1	-	30 × 13	21		
2区	2280	1	-	17 × 8	16		
2区	2281	1	-	22 × 13	17		
2区	2282	1	円形	20	21		
2区	2284	1	円形	24	23		
7区	7001	1	楕円形	27 × 21	14		
7区	7002	1	円形	42	11	878 (須恵器杯蓋)	須恵器杯身片
8区	8019	1	円形	49	12		
8区	8023	1	-	54 × 32	23	879 (須恵器蓋)	
8区	8027	1	-	47 × 35	29		土器片
8区	8036	1	不整円形	55 × 52	15		
8区	8043	1	隅丸方形	57 × 43	24		須恵器蓋片
8区	8055	1	不整円形	78 × 64	28		須恵器片
8区	8057	1	円形	38	17		
8区	8106	1	円形	32	25	880 (須恵器杯身)	
8区	8137	1	円形	34	12	881 (須恵器杯身)	
8区	8138	1	円形	51	27		土器片
8区	8141	1	円形	48	19		土器蓋片
8区	8142	1	楕円形	132 × 99	38		須恵器蓋片、サヌカイト片
8区	8155	1	円形	101	68		須恵器杯身又は杯蓋片
8区	8174	1	円形	59 × 53	30		土器小片
8区	8175	1	-	41 × 44	13		
8区	8192	1	楕円形	28 × 22	12		
8区	8211	1	円形	80	55		土器小片
8区	8214	1	隅丸方形	83 × 46	20	882 (須恵器杯身)	須恵器蓋片
8区	8215	1	-	42 × 40	38	883 (須恵器杯身)	
8区	8223	1	隅丸方形	38 × 38	27	884 (須恵器杯身)	須恵器蓋片
8区	8228	1	楕円形	39 × 33	11	885 (平瓦)	
8区	8231	1	円形	72	25		
8区	8232	1	楕円形	75 × 57	16		
8区	8234	1	-	43 × 25	42		
8区	8268	1	-	87 × 60	25		須恵器蓋片
8区	8289	1	楕円形	63 × 36	8		
8区	8294	1	隅丸方形	147 × 104	35		須恵器杯身又は杯蓋片・要片。
8区	8295	1	不整円形	143 × 118	28	886 (須恵器杯身)	
8区	8470	1	楕円形	84 × 71	19		土器小片
8区	8481	1	円形	27	7	887 (須恵器蓋)	須恵器蓋片
8区	8546	1	楕円形	45 × 34	35	888 (須恵器蓋)	
8区	8566	1	円形	38	20		
8区	8571	1	楕円形	62 × 46	27		土器小片
8区	8584	1	隅丸方形	82 × 62	28	889 (須恵器蓋)	
8区	8642	1	円形	67	42		
8区	8683	1	-	56 × 23	43	890 (須恵器杯身)	炭化物、磁着鉄
10区	10009	1	円形	42	26		
10区	10010	1	円形	33	45		
10区	10028	1	円形	44	24	891 (須恵器杯蓋)	
10区	10049	1	-	66 × 28	49	892 (鉄錆)	須恵器杯身又は杯蓋片

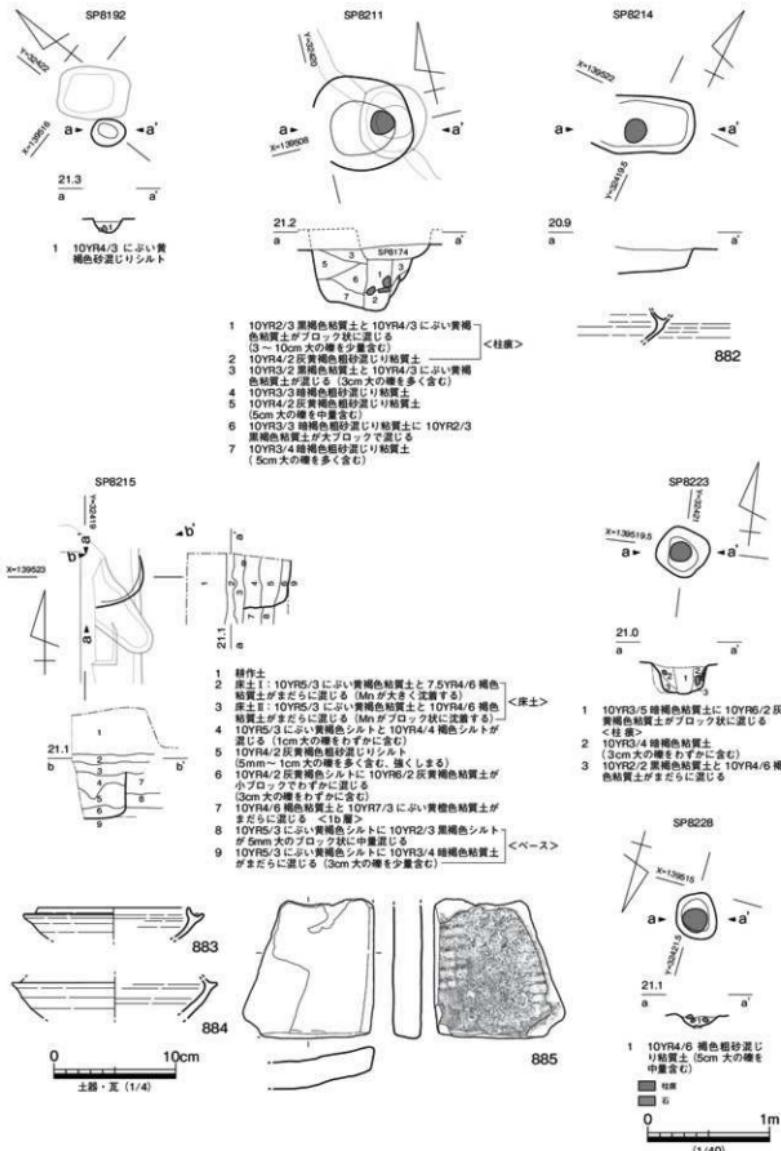




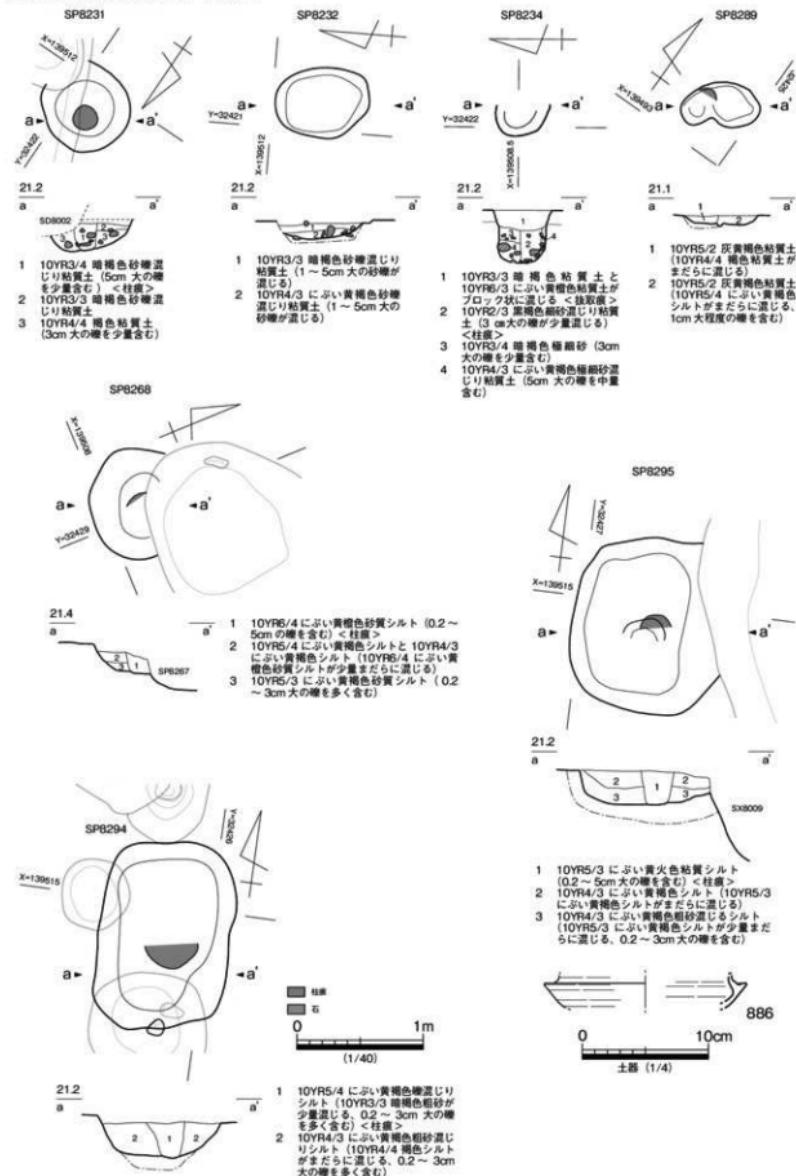
第275図 7区ビット(古代) 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)、
8区ビット(古代) 平・断面図1(1/40)、出土遺物1(1/4)



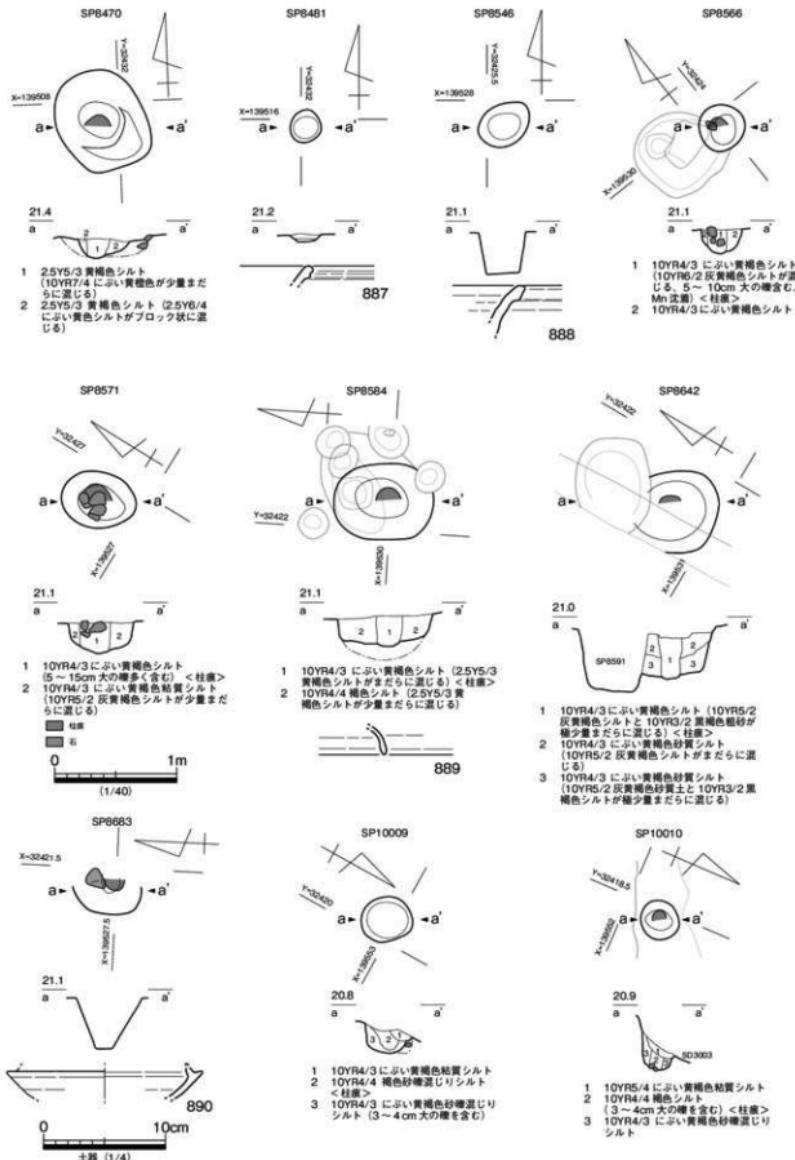
第276図 8区ピット（古代）平・断面図2 (1/40)、出土遺物2 (1/4)



第277図 8区ピット(古代) 平・断面図3(1/40)、出土遺物3(1/4)



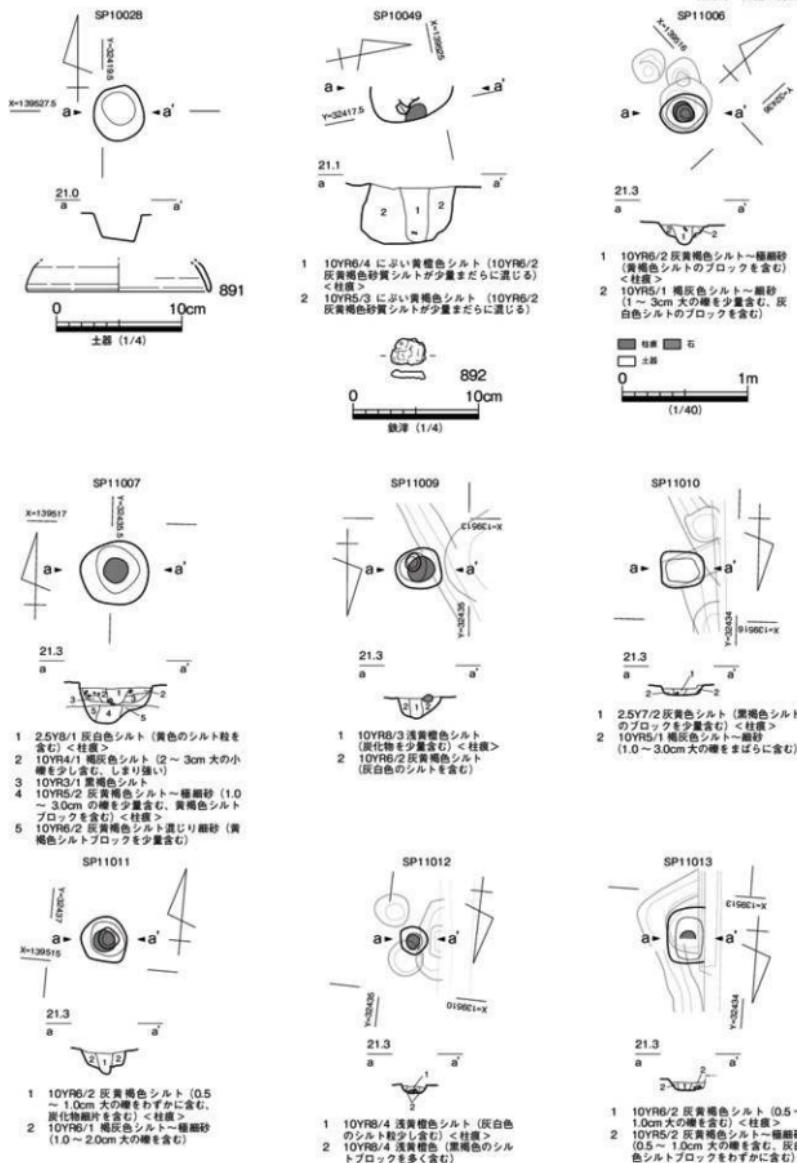
第278図 8区ピット(古代) 平・断面図4 (1/40)、出土遺物4 (1/4)



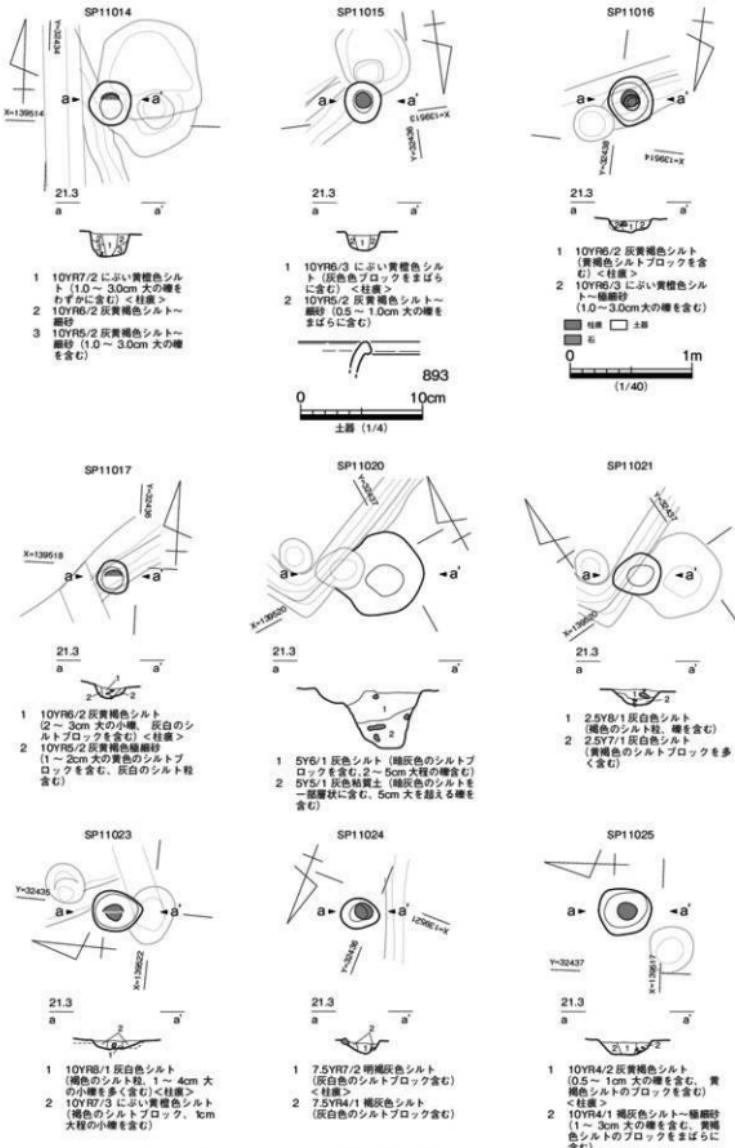
第279図 8区ピット(古代)平・断面図5(1/40)、出土遺物5(1/4)
10区ピット(古代)平・断面図1(1/40)

第9表 報告ピット一覧（古代）3

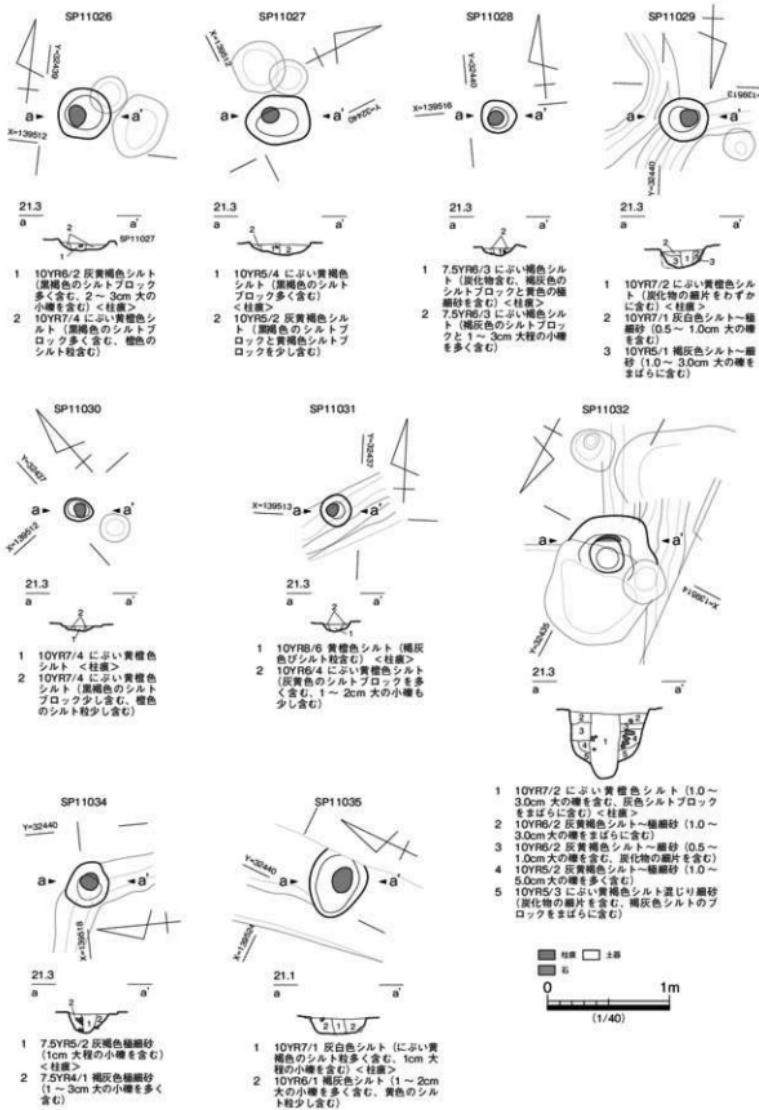
区名	通撰名 (SP番号)	面	平面形	規模 (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物 (組文番号)	その他の出土遺物
11区	11006	1	楕円形	36 × 31	18		須恵器杯身又は杯蓋片
11区	11007	1	円形	53	33		須恵器片
11区	11009	1	円形	36	17		土器小片
11区	11010	1	椭丸方形	34 × 28	8.36		須恵器片
11区	11011	1	不整円形	39 × 35	21		須恵器杯身片
11区	11012	1	円形	23	8		
11区	11013	1	-	44 × 30	10		土器小片
11区	11014	1	円形	36	23		土器小片
11区	11015	1	円形	33	16	893 (須恵器窓)	
11区	11016	1	円形	39	12		土器小片
11区	11017	1	円形	27	14		
11区	11020	1	不整円形	72 × 67	48		土器小片
11区	11021	1	不整円形	41 × 33	12		
11区	11023	1	楕円形	41 × 33	9		
11区	11024	1	椭丸形	32 × 25	12		
11区	11025	1	円形	42	13		土器小片
11区	11026	1	円形	43	10		
11区	11027	1	椭円形	53 × 40	12		須恵器蓋片
11区	11028	1	円形	29	9		須恵器片
11区	11029	1	円形	39	19		須恵器杯蓋片
11区	11030	1	椭円形	24 × 18	7		
11区	11031	1	円形	25	8		
11区	11032	1	-	75 × 48	58		須恵器杯身又は杯蓋片・葉片
11区	11034	1	不整円形	38 × 32	17		土器小片
11区	11035	1	椭円形	52 × 46	15		土器小片
11区	11039	1	椭円形	29 × 23	20		土器小片
11区	11040	1	円形	44	15		土器小片
11区	11041	1	円形	31	11		土器小片
11区	11042	1	円形	45	14		土器小片
11区	11047	1	円形	48	9		土器小片
11区	11048	1	椭丸方形	38 × 37	26		
11区	11050	1	楕円形	34 × 24	8		須恵器杯蓋片
11区	11051	1	-	88 × 85	41	894 (須恵器杯身)	
11区	11053	1	-	30 × 14	8		須恵器杯身又は杯蓋片
11区	11054	1	椭円形	34 × 25	9		土器小片
11区	11055	1	椭円形	48 × 36	15		
11区	11056	1	円形	29	17		
11区	11057	1	不整円形	30 × 33	9		
11区	11058	1	円形	30	36		須恵器片
11区	11059	1	椭丸方形	36 × 33	7		
11区	11060	1	-	25 × 14	5		
11区	11061	1	椭円形	45 × 29	6		
11区	11062	1	円形	50	17		土器小片
11区	11063	1	円形	38	11		土師器葉片
11区	11064	1	-	44 × 22	16		
11区	11065	1	円形	20	13		
11区	11066	1	円形	27	13		
11区	11070	1	円形	20	9		
11区	11073	1	円形	32	10		
11区	11074	1	椭円形	48 × 36	19		
11区	11078	1	円形	28	8		土器小片
11区	11079	1	円形	31	18		
11区	11080	1	-	61 × 35	18		
11区	11081	1	-	26 × 17	19		
11区	11082	1	-	45 × 44	17		
11区	11083	1	-	31 × 17	16		
11区	11084	1	円形	27	31		須恵器葉片・土師器葉片
11区	11085	1	円形	35	8		
11区	11086	1	円形	35	11	895 (弥生土器葉) 896 (土師器ミチュア土器)	
11区	11087	1	円形	44	24		土器小片
11区	11088	1	円形	34	13		土師器葉片
11区	11090	1	円形	36	11		
11区	11092	1	円形	23	4		
11区	11093	1	円形	30	6		
11区	11094	1	円形	20	12		土器小片



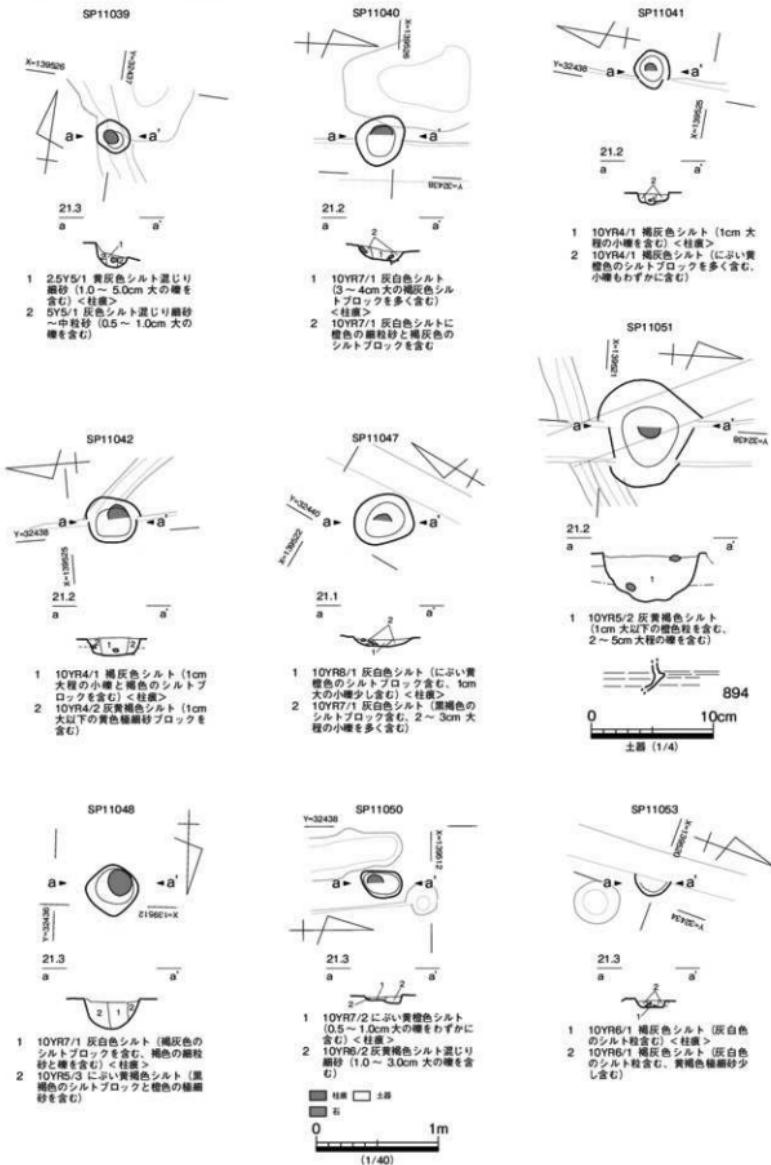
第280図 10区ピット(古代)平・断面図2(1/40)、出土遺物(1/4)、
11区ピット(古代)平・断面図1(1/40)



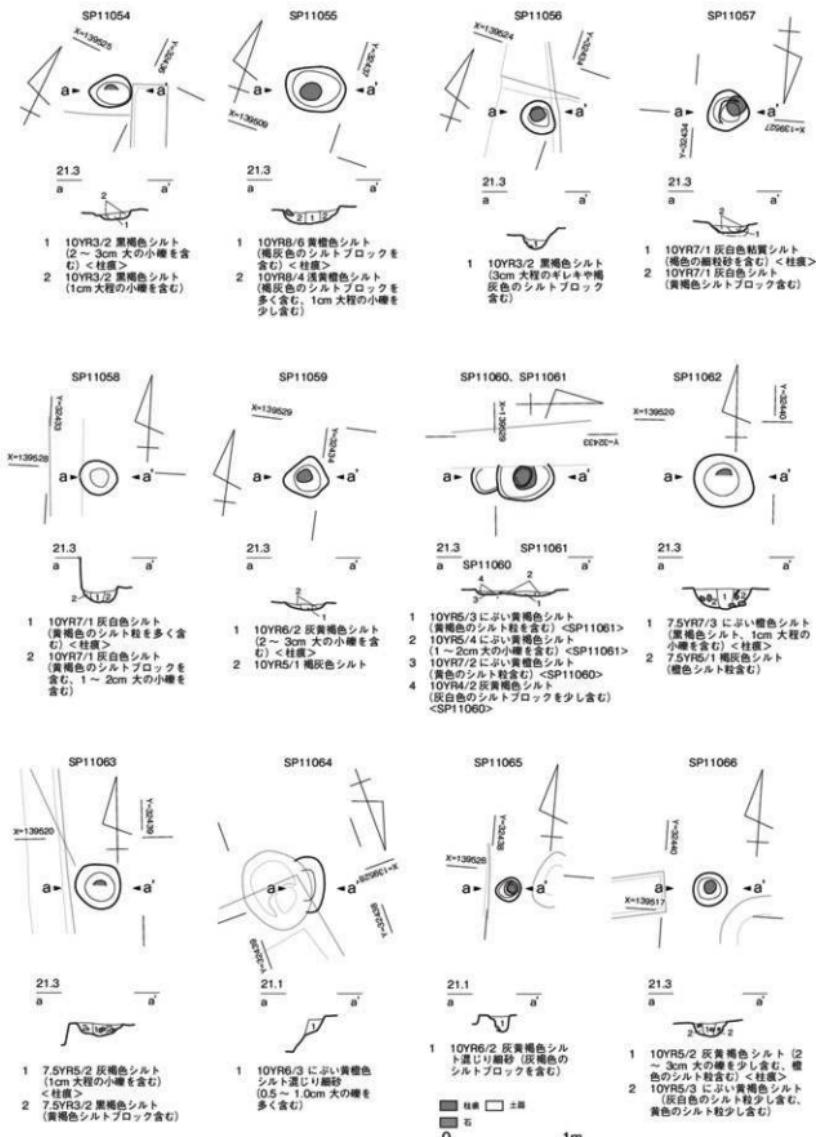
第281図 11区ピット(古代) 平・断面図2(1/40)、出土遺物1(1/4)



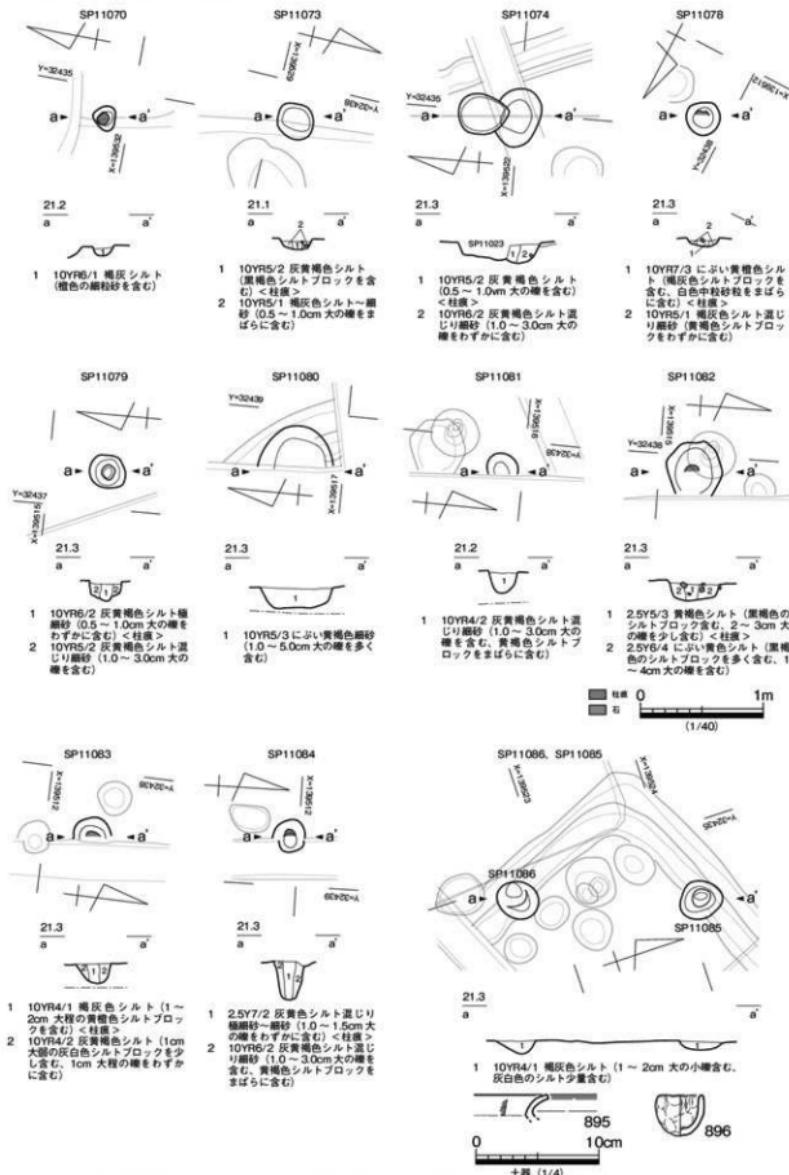
第282図 11区ピット(古代) 平・断面図3 (1/40)



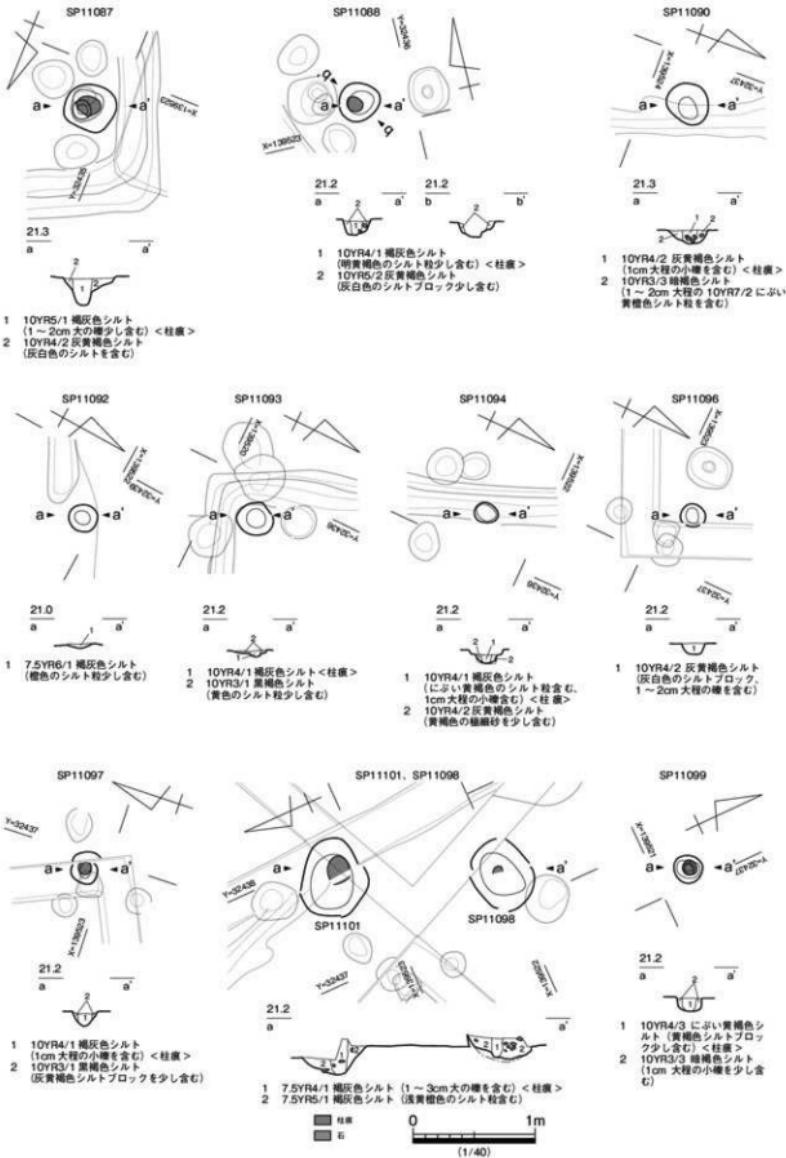
第283図 11区ピット（古代）平・断面図4 (1/40)、出土遺物2 (1/4)



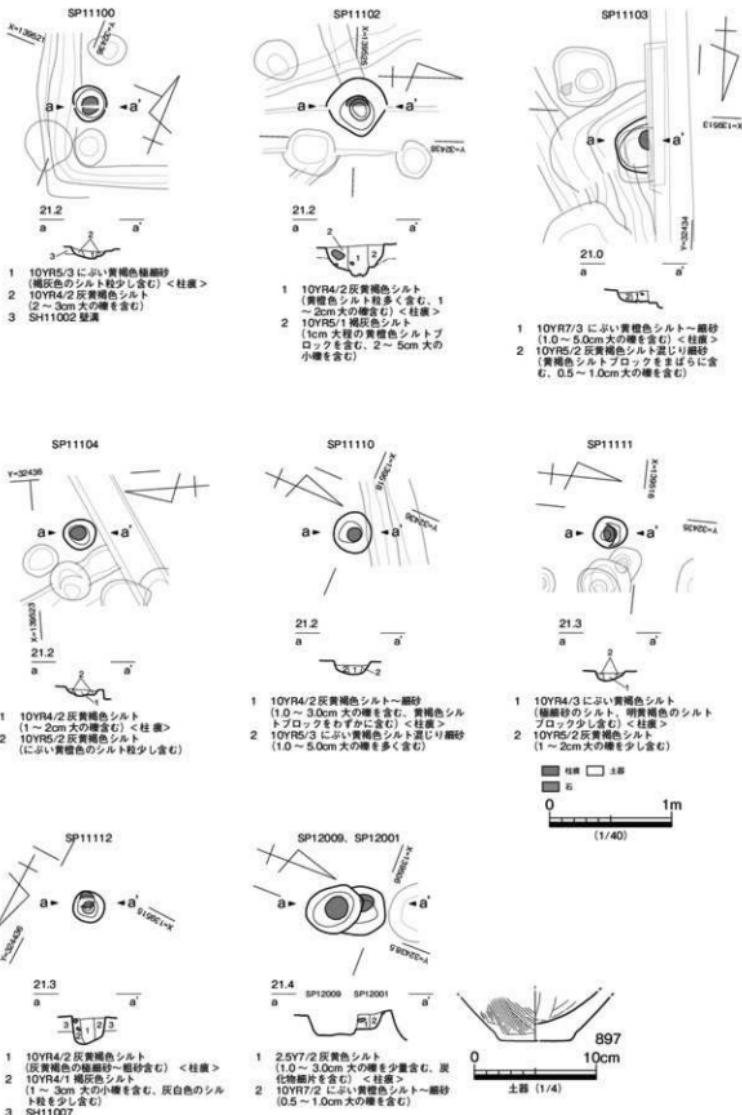
第284図 11区ピット(古代) 平・断面図5(1/40)

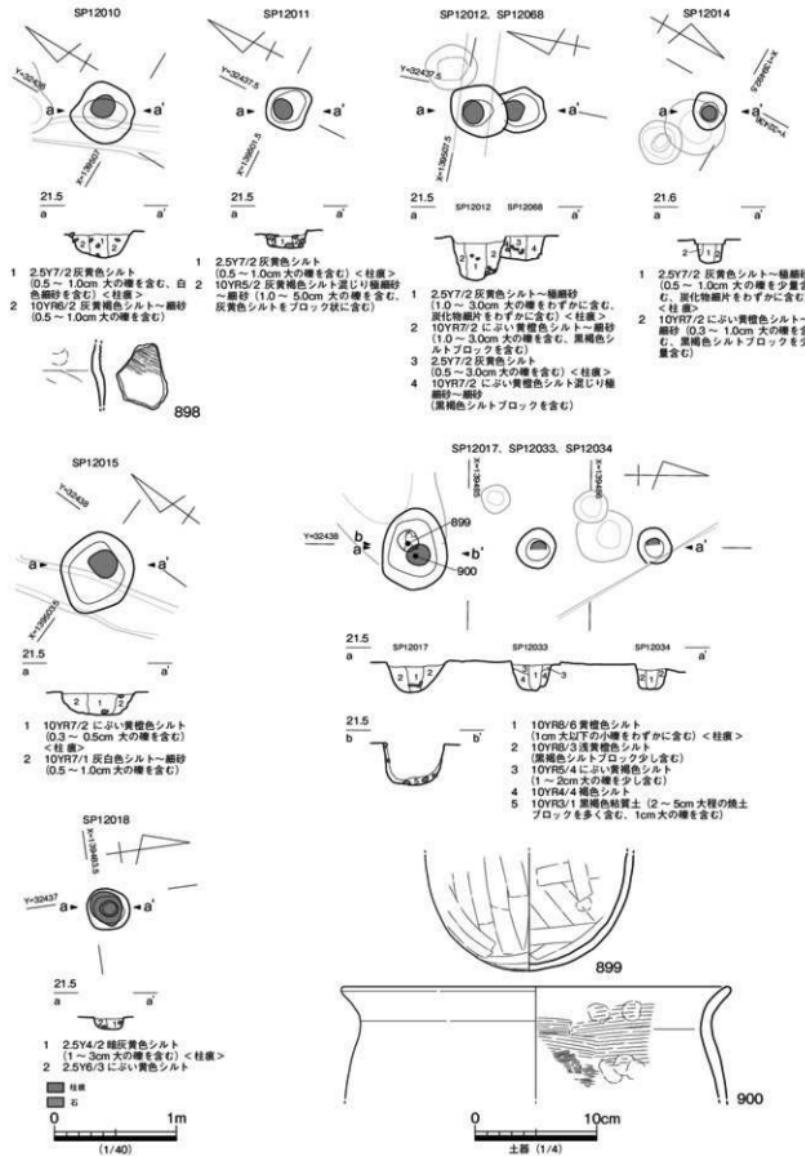


第285図 11区ピット(古代) 平・断面図6(1/40)、出土遺物3(1/4)

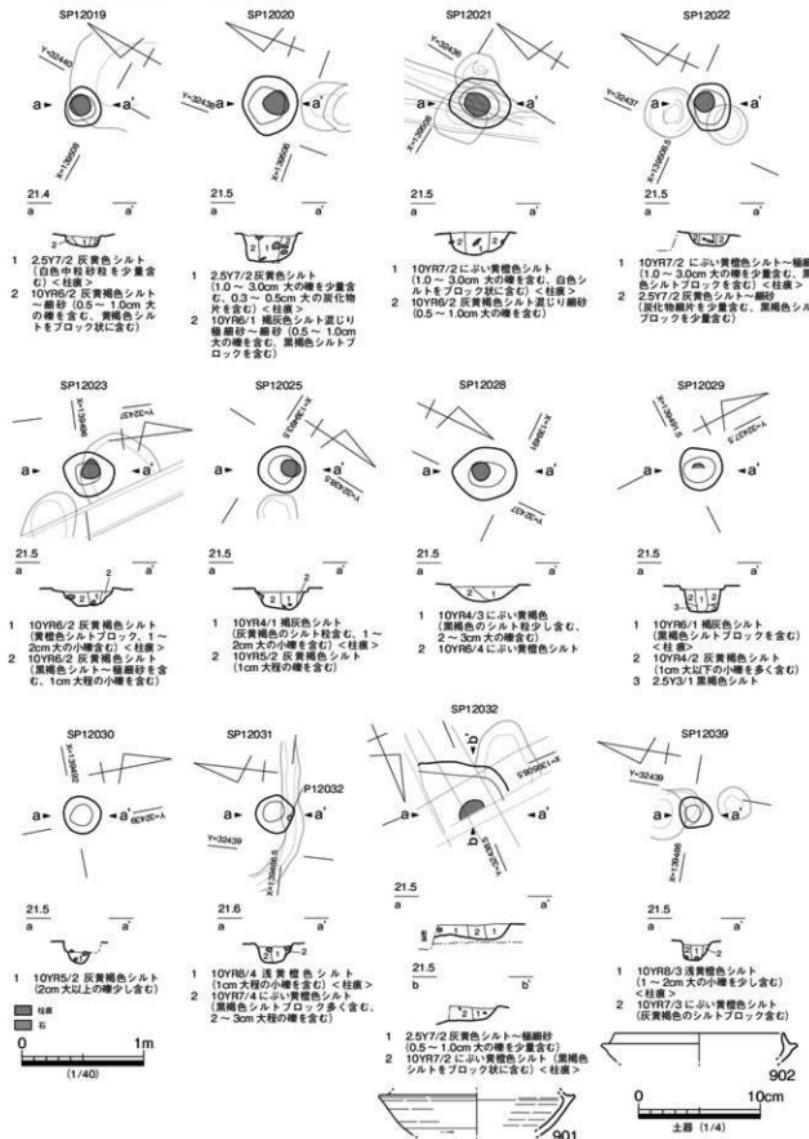


第286図 11区ピット(古代) 平・断面図7 (1/40)

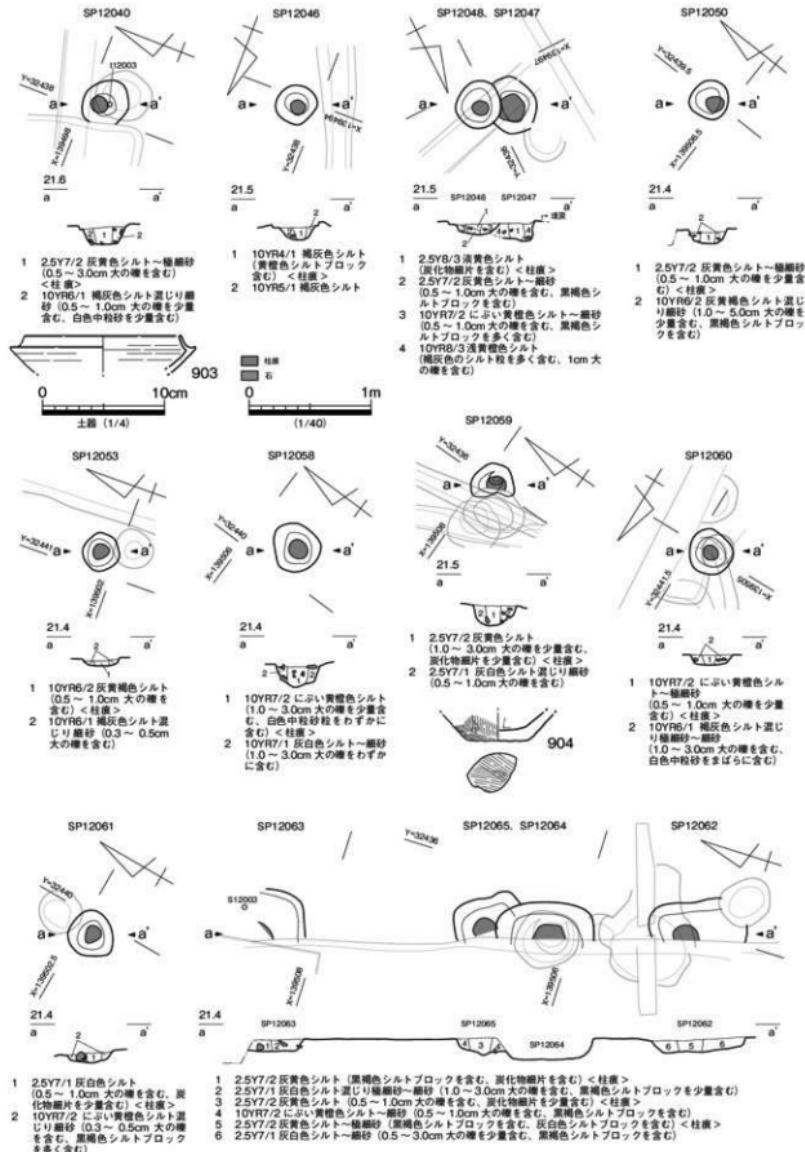




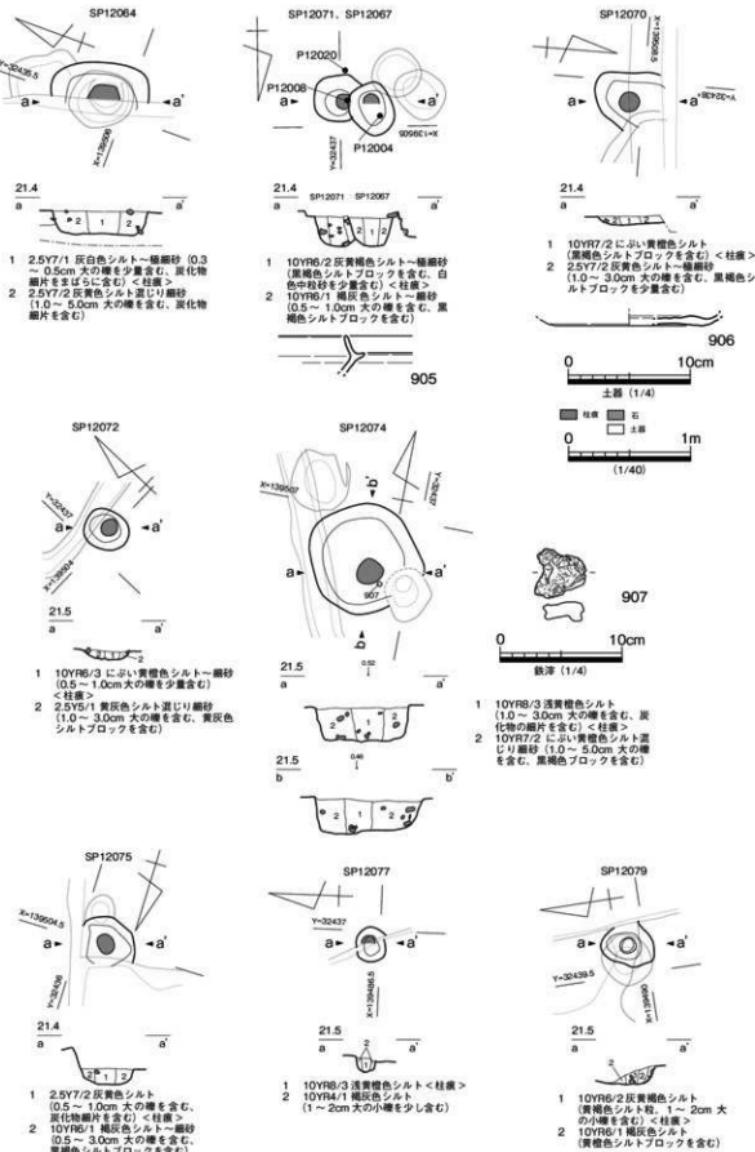
第288図 12区ピット(古代) 平・断面図2 (1/40)、出土遺物2 (1/4)



第289図 12区ピット(古代) 平・断面図3(1/40)、出土遺物3(1/4)



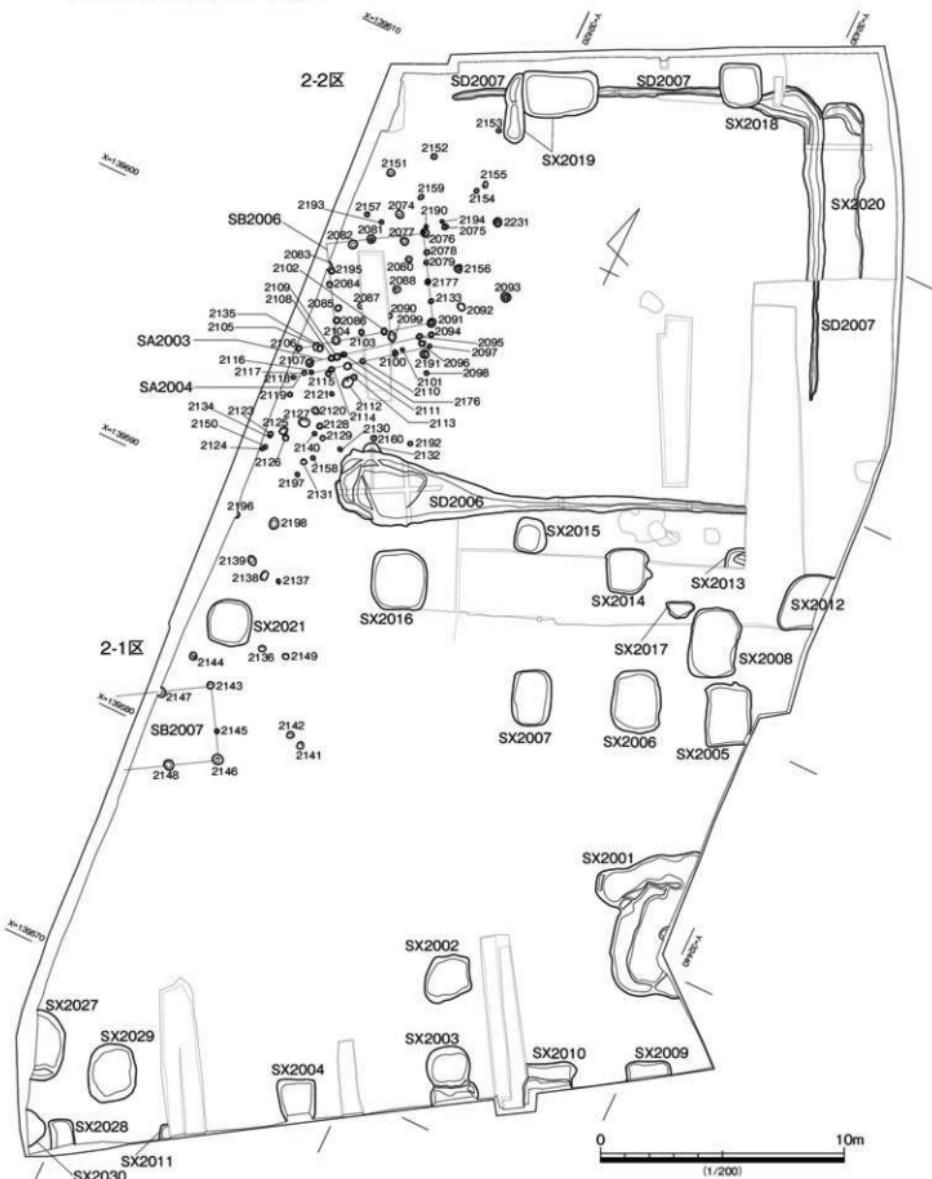
第290図 12区ピット(古代) 平・断面図4(1/40)、出土遺物4(1/4)

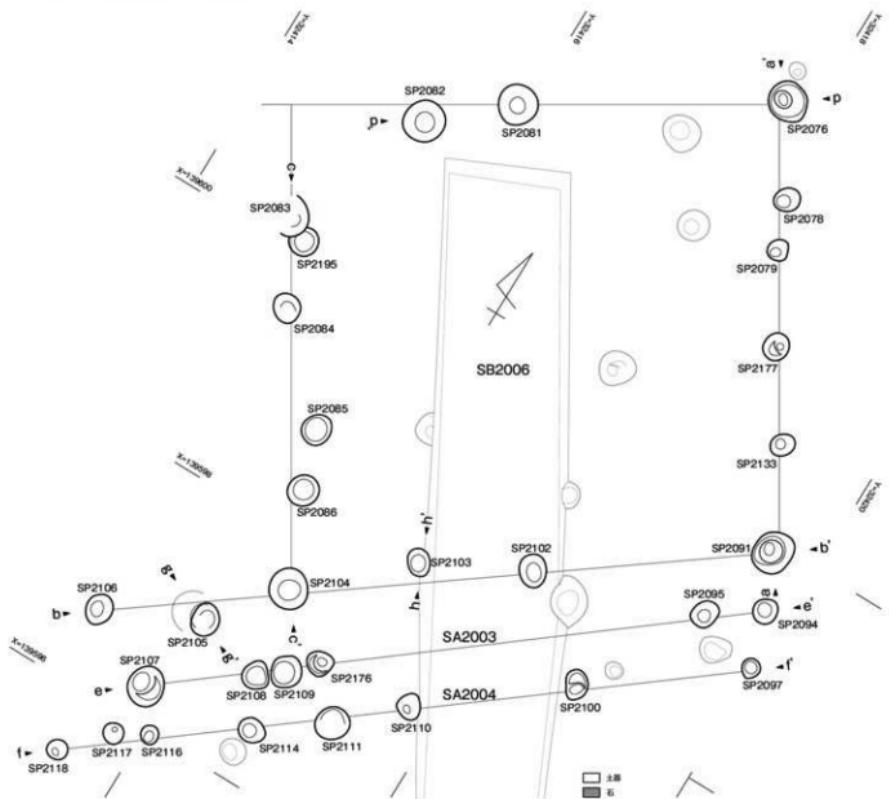


第291図 12区ピット(古代) 平・断面図5(1/40)、出土遺物5(1/4)

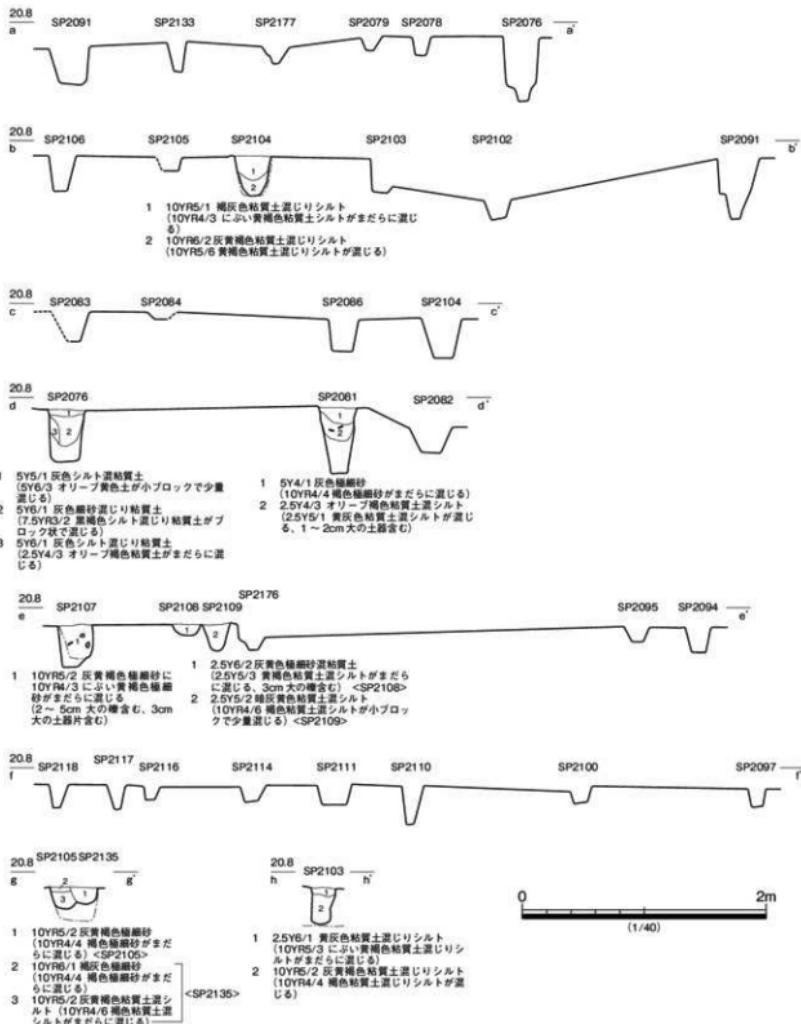
第10表 報告ピット一覧（古代）4

区名	遺構名 (SP番号)	面	平面形	規模(cm) (長軸×短軸)	深さ(cm)	掲載遺物 (標本番号)	その他の出土遺物
11区	11096	1	円形	21	9		
11区	11097	1	円形	26	13		土器小片
11区	11098	1	椭丸方形	57 × 47	18		
11区	11099	1	円形	24	13		土器小片
11区	11100	1	円形	29	10		土器小片
11区	11101	1	不整円形	63 × 55	29		土器小片
11区	11102	1	不整円形	45 × 42	27		
11区	11103	1	円形	46 × 28	11		土師器裏片
11区	11104	1	円形	26	9		
11区	11110	1	円形	33	12		
11区	11111	1	円形	28	9		
11区	11112	1	円形	27	23		
12区	12001	1	-	40 × 35	15	897(弥生土器底底部)	
12区	12010	1	不整円形	53 × 51	22	898(製埴土器)	
12区	12011	1	椭丸方形	40 × 36	16		土器小片
12区	12012	1	円形	51	37		土器小片
12区	12014	1	円形	31	20		土器小片
12区	12015	1	不整円形	68 × 59	19		須恵器片
12区	12017	1	椭円形	67 × 53	34	899(土師器裏) 900(土師器裏)	燒土
12区	12018	1	円形	36	11		土器小片
12区	12019	1	円形	32	11		土器小片
12区	12020	1	円形	48	24		土器小片
12区	12021	1	椭円形	47 × 40	19		土器小片
12区	12022	1	円形	38	12		須恵器裏片
12区	12023	1	円形	41	15		須恵器片
12区	12025	1	円形	39	18		
12区	12028	1	椭円形	53 × 43	15		
12区	12029	1	円形	36	23		土器小片
12区	12030	1	円形	31	19		
12区	12031	1	円形	32	16		土器小片
12区	12032	1	-	57 × 56	14	901(須恵器杯身)	
12区	12033	1	円形	33	25		須恵器杯身又は杯蓋片
12区	12034	1	円形	30	24		土器小片
12区	12039	1	円形	29	16	902(須恵器杯身)	
12区	12040	1	椭円形	41 × 36	17	903(須恵器杯身)	鐵滓
12区	12046	1	円形	34	15		
12区	12047	1	椭円形	47 × 40	16		土器小片
12区	12048	1	円形	39	12		
12区	12050	1	円形	32	13		土器小片
12区	12063	1	円形	32	7		土器小片
12区	12068	1	円形	41	20		土器小片
12区	12069	1	-	35 × 28	18	904(弥生土器底底部)	須恵器杯蓋片
12区	12060	1	円形	37	8		土器小片
12区	12061	1	円形	39	11		
12区	12062	1	-	80 × 35	13		土器小片
12区	12063	1	-	42 × 37	11		土器小片
12区	12064	1	-	80 × 30	20		土器小片
12区	12065	1	-	58 × 29	15		須恵器片
12区	12067	1	椭円形	42 × 35	29		土器小片
12区	12068	1	-	37 × 35	21		須恵器片
12区	12070	1	-	54	9	906(須恵器杯)	
12区	12071	1	円形	39	29	905(須恵器杯身)	
12区	12072	1	椭円形	37 × 32	10		土器小片
12区	12074	1	円形	86	30	907(分析試料・鉄冶滓)	弥生土器片・須恵器裏片
12区	12075	1	-	43 × 39	30		土器小片
12区	12077	1	椭円形	28 × 25	14		
12区	12079	1	不整円形	44 × 35	16		土器小片





第293図 SB2006・SA2003



3・SA2004 平・断面図 (1/40)

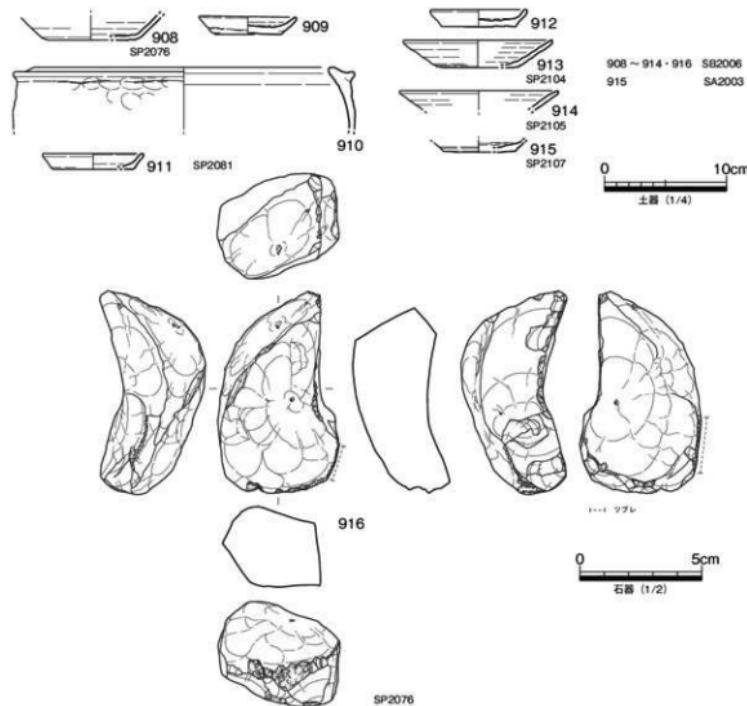
3 中世の遺構・遺物（第294図）

中世の遺構群は2区北部で検出した。遺構の掘り込み面は1a層である。遺構面の表記は0面とした。掘立柱建物1棟とそれに伴う柵列2条、それらを囲う溝を検出した。また、溝の外側でも掘立柱建物1棟を検出した。

①掘立柱建物・柵列

2区 SB2006（第293・294図）

2区北部で、0面で検出した。北側5.16m・東側15.88mにはSD2007、南側6.99mにはSD2006があり、これらで区画された内側で検出した。柱通りや、桁行と梁間の角度が直交しないいびつな形状ではあるが、周囲の柱穴の検出状況から桁行5間以上、梁間5間の東西棟で、東から4穴目(4.02m)で間仕切りを持つ建物を復元した。西側は調査区外へ延びる。桁行6.28m以上、梁間3.64m、主軸方位は概ねW32°～37°Sで周辺の条里地割と同じである。面積は17.73m²以上である。柱間のばらつきは大きいが、桁行は、東端の柱間のみ2.07～2.15m、他は0.78～1.06m、梁間は北から2間目の柱間は0.42m、他は0.78～0.87mである。柱穴は概ね円形で、直径0.20～0.34m、深さ12～50cm、柱痕の直径は16cm程度である。



第294図 SB2006・SA2003・SA2004出土遺物（1/4・1/2）

SB2006 の南 0.55m・1.00m の位置 SA2003・2004 を検出している。SA2003 は SB2006 から距離がやや近いものの、両者は SB2006 の目隠し塙などの役割を果たしたと考えられる。柱穴埋土から土師質土器杯・足釜が出土した。

908 は SP2076 から出土した土師質土器杯。909～911 は SP2081 から出土した。909・911 は土師質土器小皿。910 は土師質土器足釜。912・913 は SP2104 から出土した土師質土器。912 は小皿。913 は杯。914 は SP2105 から出土した土師質土器杯。916 は SP2076 から出土した。サヌカイト製火打石。小皿は 13 世紀後半、杯・足釜は 14 世紀中頃と考えられる。火打石は 18 世紀代と考えられる。

遺構の時期は、出土遺物や SD2006・SD2007 と同時期と考えられることから、14 世紀前半と考えられる。火打石は混入であろう。

2 区 SA2003・SA2004（第 293・294 図）

2 区北部、SB2006 の南側に接して検出した。0 面で検出した。

SB2006 の 0.55m 程度南側で検出した、直線状に並ぶ 6 穴を SA2003 とした。東端の柱穴は概ね SB2006 の東側柱筋に揃う。延長 6.25m 以上、主軸方位は W38.58° S である。柱間は一定しない。柱穴は概ね円形で直径 0.24～0.30m、深さ 12～26cm を測る。SP2107 から土師質土器杯底部が出土した他は、柱穴の埋土中からは土器の細片が出土したのみであった。

SA2003 の南側 0.45m でこれに平行する直線状に並ぶ 8 穴を SA2004 とした。東端の柱穴は SB2006 よりやや西側へ位置する。延長 6.13m、主軸方位は W38.22° S である。柱間は東側 2 間は 1.42～1.45m、その他は、西から 2 柱間目が 0.26m であるのを除き、0.53～0.80m である。柱穴は概ね円形で、直径 0.16～0.30m、深さ 16～30cm を測る。柱穴の埋土中からは土器細片が出土しただけであった。

SA2003・SA2004 の柱穴には前後関係はないが、互いに近接するため、同時併存とは考えにくい。建て替えによるものと考えられよう。

915 は SP2107 から出土した土師質土器杯底部。

遺構の時期は SB2006 と同じ 14 世紀前半と考えられる。

2 区 SB2007（第 295 図）

2 区南西部で、0 面で検出した。西側は調査区外へ延びる。桁行 1 間以上 × 梁間 1 間の東西棟で、桁行 2.08m 以上、梁間 3.62m、主軸方位は W 31.8°～33.74° S、面積は 9.20m² 以上である。柱間は桁行 2.00～2.08m、梁間 3.62m、柱穴は円形で、直径 0.30～0.42m、深さ 20～32cm、柱痕は直径 14cm である。SP2148 から土師質土器皿が出土した。

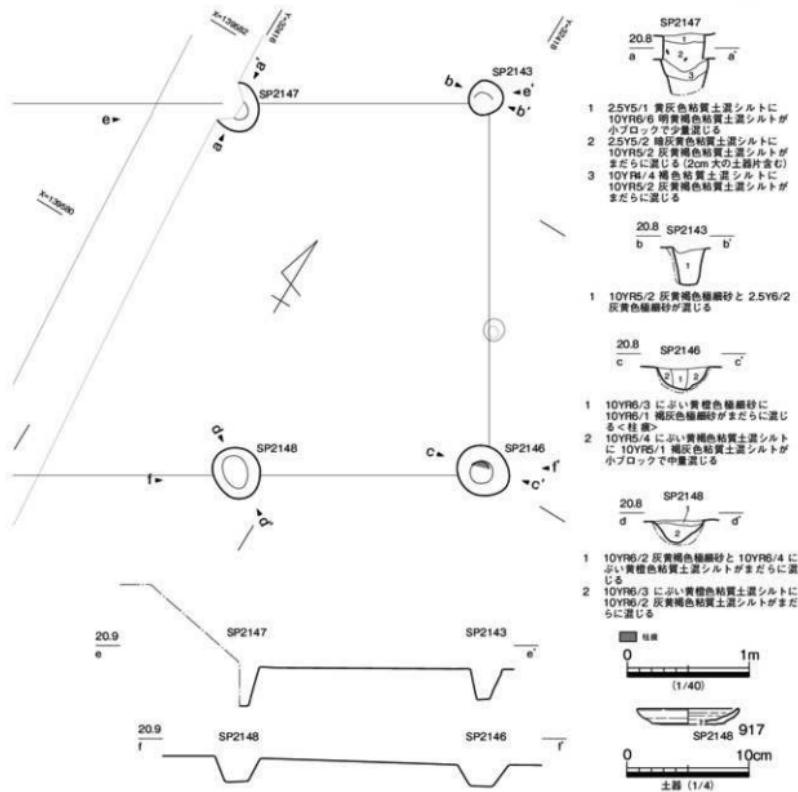
917 は土師質土器小皿。12 世紀後半～13 世紀代。

遺構の時期は、出土遺物から 12 世紀後半～13 世紀代と考えられる。

② 性格不明遺構

7 区 SX7001（第 296・297 図）

7 区北部で検出した。7 区西壁土層断面により 1a 層を掘り込むことがわかり、中世以降の遺構と考えられる。北東隅は後世の削平により消失するものの、概ね台形に近い形状と考えられ、南側には長方形の落ち込み、西側には溝状の落ち込みがみられる。遺構の西辺は 5.00m、東辺 2.43m、南辺 4.85m、深

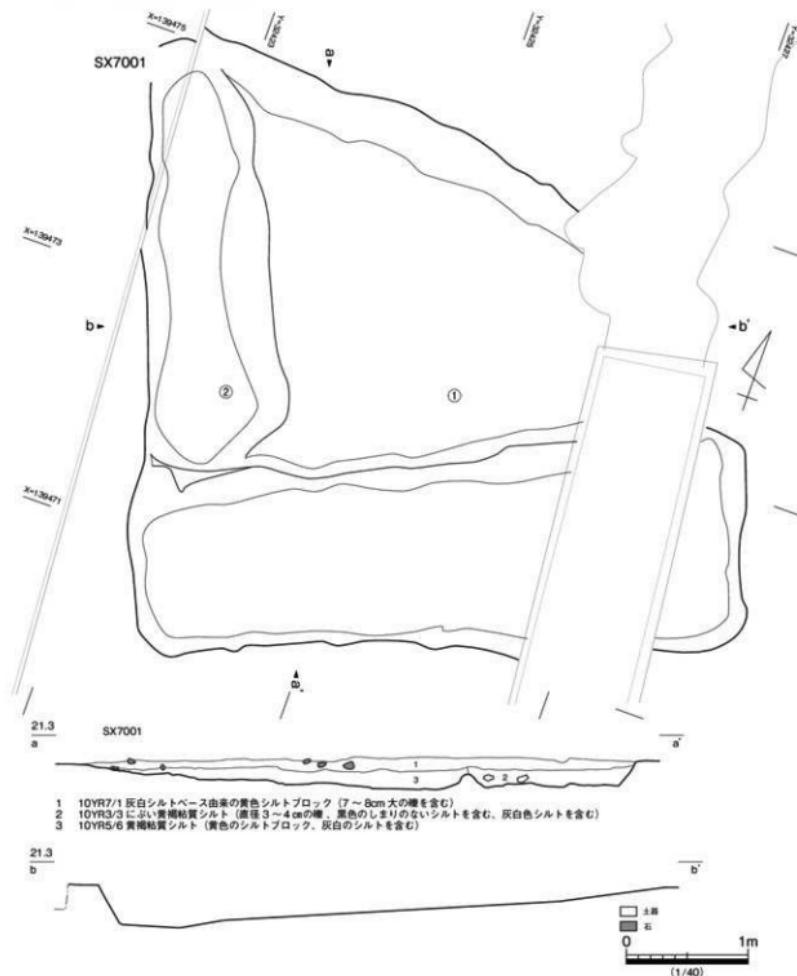


第295図 SB2007 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

さは、北から南へ傾斜し、南側で26cm程度である。埋土中からは須恵器、土師器などが出土した。一定量の遺物が出土したが、いずれも下層の包含層等の遺物の混入と考えられ、時期を示す遺物は出土しなかった。

918～931は須恵器。918は杯蓋。肩部はわずかに段を持つ。6世紀末(II-4期)頃。919～925は杯身。919以外は口径13cm前後である。6世紀後半～7世紀初頭(II-3～5期)頃。926は高杯。7世紀中頃(II-6期)。927は高杯脚部。長方形の透かし孔が1ヶ所に残存する。928は甌。胴部に沈線を施し、その下部に原体圧痕を残らせる。929～931は甌。931は頸部に沈線を2ヶ所に巡らせ、口縁部直下に波状文、2条の沈線の間に原体圧痕を施す。7世紀前半(II-6期)。932は土師器甌。933は土師器甌または甌把手。934はサヌカイト製石鋸。凹基式で端部は欠損する。

出土遺物の時期は概ね6世紀後半～7世紀中頃と考えられるが、1a層を掘り込む遺構であることから、遺構の時期は中世以降である。

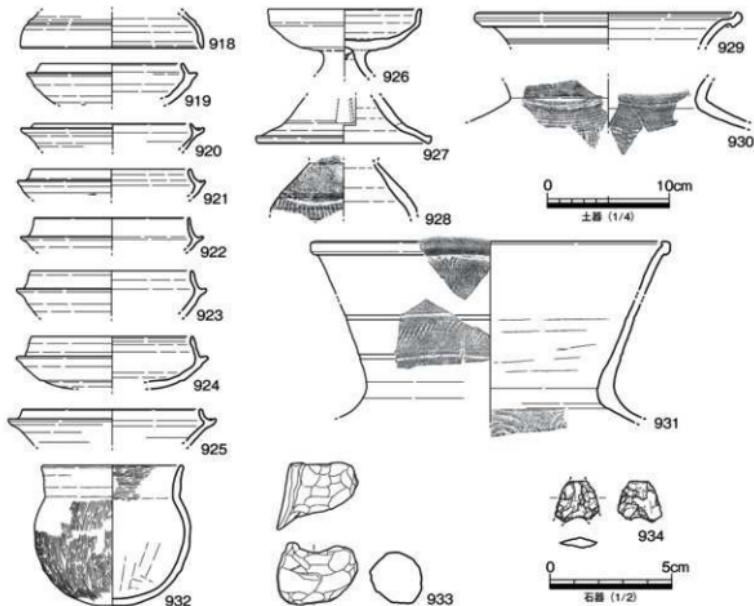


第296図 SX7001 平・断面図 (1/40)

③溝

2区 SD2006 (第298～300図)

2区中央部付近で、0面で検出した。溝の西端は石組み遺構に連続し、東端は削平のため明らかではない。石組み遺構を含めた検出長は 16.65m、溝状部分は検出長 11.58m、幅 0.36～0.46m、深さ 10～12cm を測る。石組み遺構部分は、隅丸方形に近い不整形を呈する掘方で、長軸 5.07m、短軸 2.85m、深



第297図 SX7001 出土遺物 (1/4・1/2)

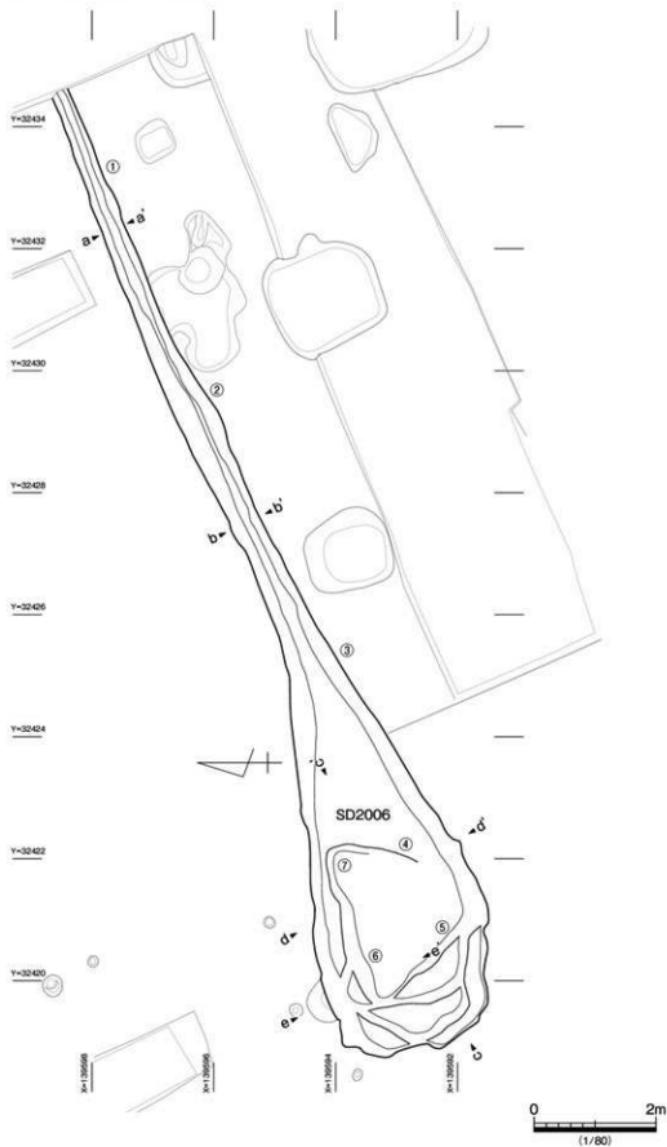
さ22cmを測る。掘方内は石が散乱した状態であったが、南辺では一部列状に並び、石組みが残存する。北東部はややいびつであるものの、石組み部分を南辺とした長方形の落ち込みが認められ、もとは、石組みにより長方形に囲われていたと考えられる。石組みが想定される部分は、長辺3.00m、短辺1.60mと考えられる。石組み遺構は、出水、または水溜のための施設と考えられ、それに続く溝は導水路と考えられる。出土遺物の大半は、石組み遺構の部分から出土した。

935～937は石組みの裏込土から出土した土師質土器。935は鍋。把手が2ヶ所に付く。936は擂鉢。4条1単位と考えられる卸目を施す。937は足釜。14世紀末～15世紀初頭。混入か。938～943は、石組み内の埋土から出土した。938～942は土師質土器。938は小皿。13～14世紀前半。939は鍋小片。14世紀前半。940・941は擂鉢。940は見込みに4条1単位と考えられる卸目を、941は5条1単位と考えられる卸目を施す。14世紀前半。942は足釜脚部。943は龍泉窯系青磁碗。体部小片。外面には退化した蓮弁を施す。14世紀代。

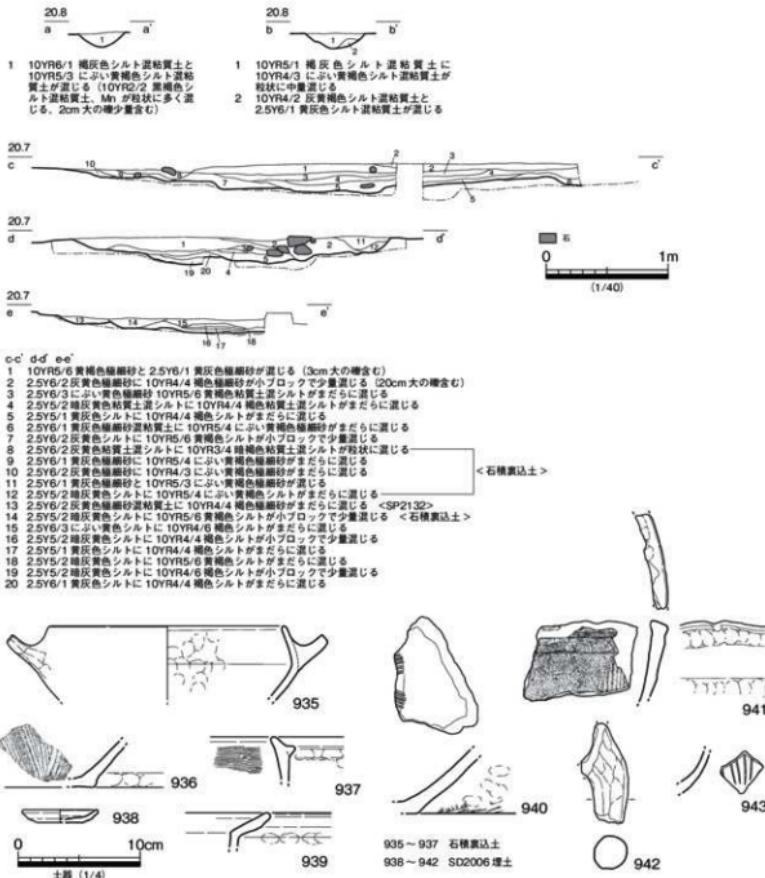
遺構の時期は、出土遺物から14世紀前半頃と考えられる。

2区 SD2007 (第301・302図)

2区北・東端付近で、0面で検出した。方向は概ね条里地割の方向で、調査区北端では東西方向、東端は南北方向を向く、東北端で直角に屈曲する溝である。検出長は東西方向部分が14.49m、南北方向



第298図 SD2006 平面図 (1/80)



第299図 SD2006断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

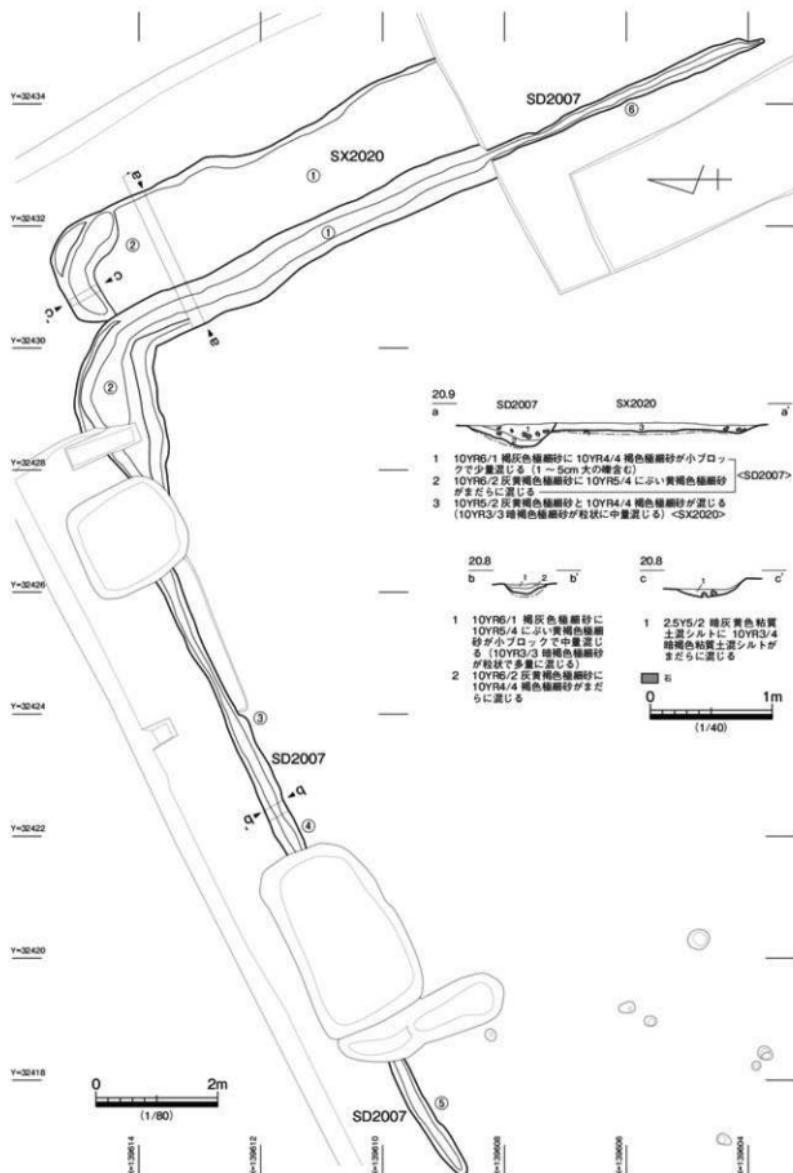
部分が11.95m、幅0.60～0.80m、深さ20cm程度である。屈曲部付近は幅が広がり、西側及び南側は削平のため消失する。a-a'断面により、東側で検出した主軸方向が同じSX2020より新しい。SD2006とともに土地を区画する役割を果たしたと考えられる。

944～951はSD2007から出土した。944・945・947は須恵器。944は高台付杯。945は杯。947は皿。いずれも9世紀中頃。946・948～951は土師質土器。946は小皿。13世紀代。948は擂鉢。4条1単位と考えられる鉢目が1か所で確認できる。949は足釜口縁部小片。950・951は鍋口縁部。948～951は14世紀前半頃。

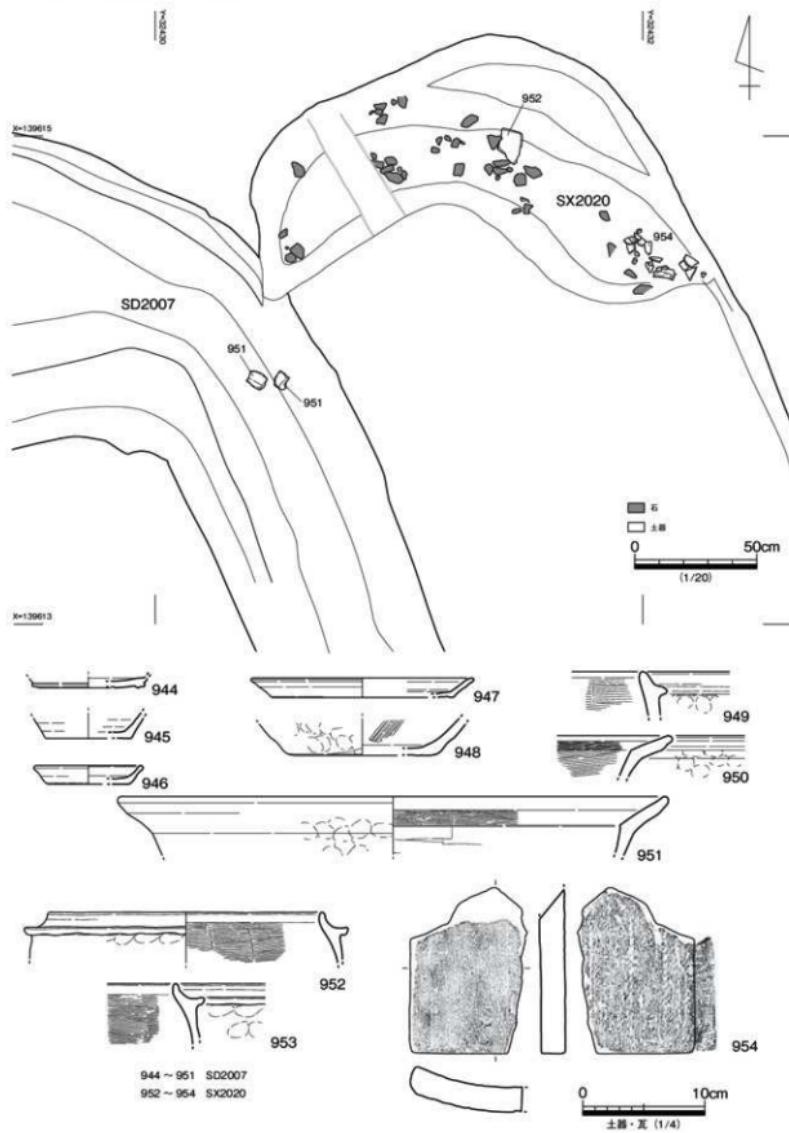
9世紀前半頃の須恵器は、1面の遺構であるSD2008からの混入と考えられ、SD2008の時期を反映し



第300図 SD2006遺物・石出土状況(1/20)



第301図 SD2007・SX2020 平・断面図 (1/80・1/40)



第302図 SD2007・SX2020 遺物出土状況 (1/20)、出土遺物 (1/4)

ていると考えられる。

遺構の時期は、出土遺物や、概ね SD2006 と同時期と考えられることから 14 世紀前半頃と考えられる。

2 区 SX2020 (第 301・302 図)

SD2007 の東側に接して検出した。SD2007a-a' 断面により SX2020 の方が古い。南部は削平のため消失する。検出長 7.10 m、幅 1.80 ~ 2.40m、深さ 4 cm 程度を測る。方位は N25.55° W で、条里地割に近い方位を示す。遺構の北端では、幅 44cm、深さは検出面から 12cm 程度で屈曲する溝状に窪み、その内側は石が散乱していた。溝状の部分は石組が設置されていた可能性が考えられる。埋土中からは土師質土器足釜・土鍋などが出土した。

952・953 は土師質土器足釜。14 世紀前半頃。954 は平瓦。凹面には布目、凸面には縄目タタキ痕が残る。土師質の焼成。

遺構の時期は、出土遺物から 14 世紀前半頃と考えられる。遺構の前後関係からは SX2020 が SD2007 より古いが、出土遺物からは時期差はそれほどないと考えられる。

4 近世の遺構・遺物 (第 292 図)

おもに 2 区では近世の土坑群を検出した。検出面は、中世の遺構群と同じく包含層 1a 層上面である。概ね隅丸方形を呈し、現市道際である 2 区南端付近、2 区北端付近、それらの中間付近で、東西に連なって検出した。土坑列間の距離は南端列から中央列が 9m 程度、中央列から北端列が 17m 程度で、この空閑地に建物等があった可能性が考えられる。これらの土坑はいずれも廃棄土坑と考えられる。

① 土坑

2 区 SX2001 (第 303 図)

2 区南東隅付近で検出した遺構で、0 面で検出した。東半部は調査区外へ延びる。不整形で、底部は階段状に深くなる。南北方向は 5.80m、東西方向は 2.25m 以上、深さは中央部の最も深い部分で 44.7cm を測る。埋土中から須恵器杯身が出土した。須恵器は混入と考えられ、遺構の時期は周囲の遺構群と同じと考えられる。

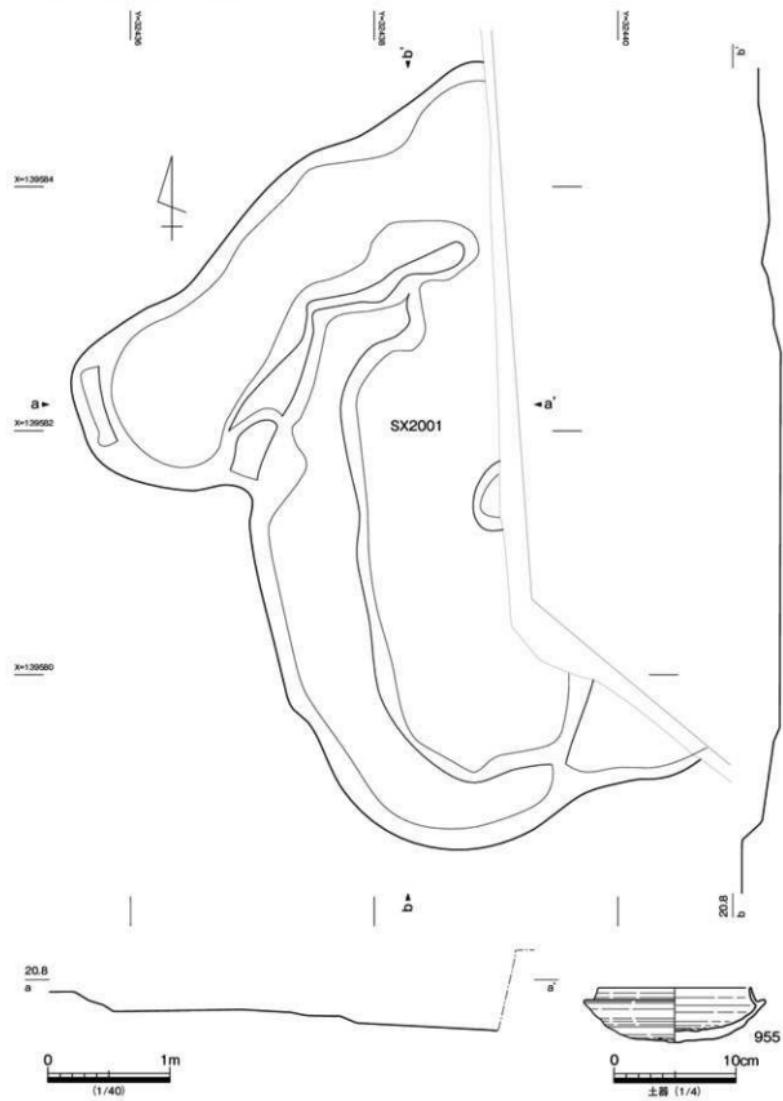
955 は須恵器杯身。6 世紀後半 (II -3 期) 頃。

遺物は包含層からの混入と考えられる。遺構の時期は他の土坑群と同じ 18 世紀代と考えられる。

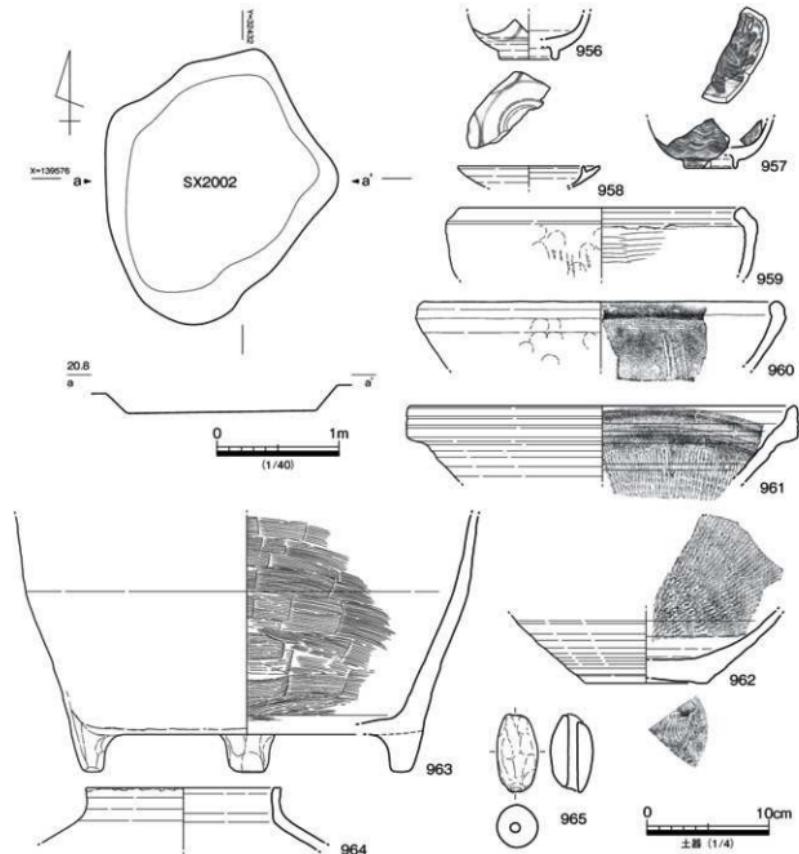
2 区 SX2002 (第 304 図)

2 区南端付近で検出した。隅丸方形に近い不整形で、長軸 1.81m、短軸 1.65m、深さ 16.9cm を測る。埋土中からは陶器片、土師質土器片が出土した。

956 ~ 958・961・962 は陶器。956 は陶胎染付椀。957 は刷毛目唐津椀。18 世紀前半 ~ 中頃。958 は備前焼灯明皿。口縁端部に煤が付着する。961・962 は陶器擂鉢。961 は備前焼。口縁部外面に重ね焼きによる色調の変化がある。962 は底部に糸切り痕が残る。959・960・963・964 は土師質土器。959 は擂鉢または捏鉢、960 は擂鉢である。17 世紀中頃。960 は 4 条 1 単位の鉢目が残る。口縁部内面に煤が付着する。963 は脚付の甕。1 脚のみ残存する。内面には煤が付着する。火を焚く焜炉として使用か。964 は甕。965 は管状土錐。



第303図 SX2001 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



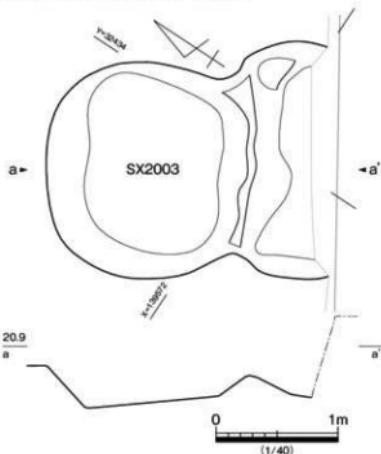
第304図 SX2002 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

遺構の時期は、陶胎染付や刷毛目唐津が出土したことから18世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SX2003 (第305・306図)

2区南端付近で、0面で検出した。南北に並ぶ2基の土坑が連結したような形状で、長軸2.26m以上、短軸1.78m程度、深さは深い部分が26.2～32.1cm、中央付近の浅い部分が11.4cmを測る。南部は調査区外へ延びる。埋土中から土師器片、陶器片、土師質土器片のほか、鉄器片、鉄滓片などが出土した。

966は土師器高杯。下層からの混入と考えられる。967は須恵器提瓶。包含層1b層との接合遺物で、本来は包含層1b層に帰属すると考えられる。968・969は陶器。968は陶胎染付椀。18世紀中頃。969は鉢。外面は施釉せず、内面の釉の発色が悪い。970・971は土師質土器擂鉢。17世紀中頃。970は3条1単位、971は5条1単位の卸目を施す。972は鍋。973は砥石。流紋岩。4面に摩滅痕がある。鍛冶加工に関わ



第305図 SX2003 平・断面図 (1/40)

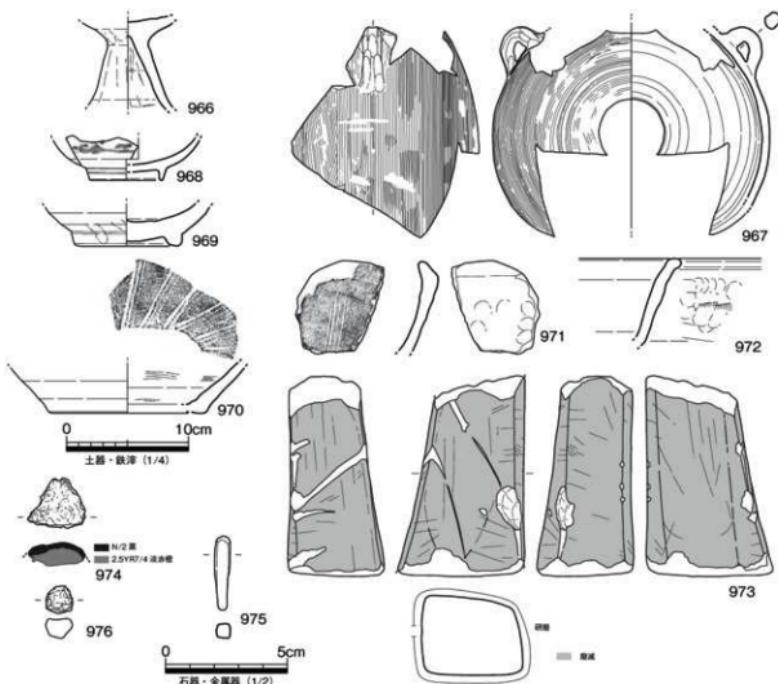
る砥石か。974はふいご羽口小片または炉壁か。975は棒状鉄片。976は鉄滓。973～976は古墳時代後期の鍛冶関連遺物と考えられ、下層からの混入と考えられる。

造構の時期は、出土遺物から、18世紀中頃と考えられる。

2区 SX2004（第307図）

2区南端付近で、0面で検出した。隅丸方形を呈し、長軸1.73m以上、短軸1.48m、深さ44.1cmを測る。埋土中からは陶磁器片、土師質土器片、瓦片などが出土した。

977は青磁碗。978～983は陶器。978は陶胎染付椀。979は刷毛目唐津椀。980は呉器手碗。体部を丁寧に打ち欠く。981は皿。見込みに蛇



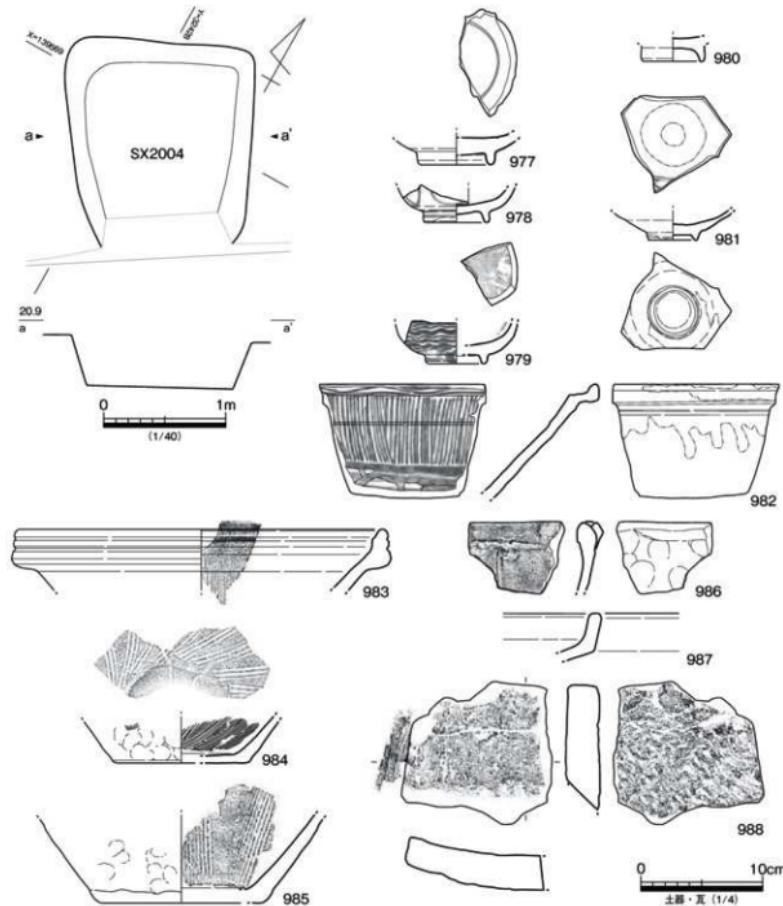
第306図 SX2003 出土遺物 (1/4・1/2)

の目釉剥ぎを施す。肥前系。982は鉢。内面に縦方向の刷毛目模様を施す。983は備前焼播鉢。984～987は土師質土器。984～986は播鉢。984は3条1単位の、985は8条1単位の卸目を施す。987は焰烙か。988は平瓦。凹面には布目痕、凸面には繩目痕を施す。古代に属する平瓦である。

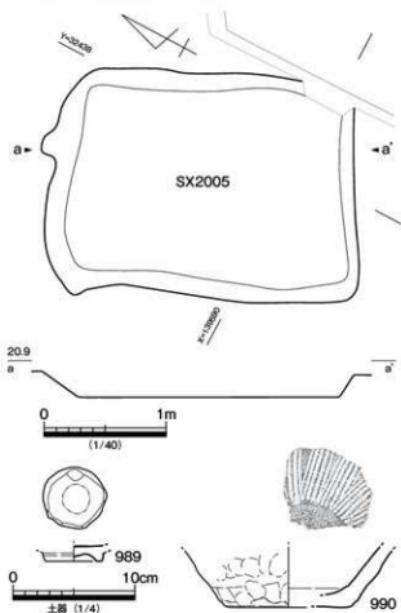
遺構の時期は、陶胎染付や刷毛目唐津、呉器手等の出土遺物から18世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SX2005（第308図）

2区南東部で、0面で検出した。方形の土坑で、長辺24.6m、短辺18.4m、深さ17.9cmである。埋土中からは陶器、土師質土器などが出土した。



第307図 SX2004 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第308図 SX2005 平・断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4)

989は陶器椀底部。体部は丁寧に打ち欠き、円盤状にする。内面には蛇の目釉剥ぎが認められる。990は土師質土器擂鉢。5条1単位の卸目を施す。

遺構の時期は、周辺の遺構同様18世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SX2006 (第309図)

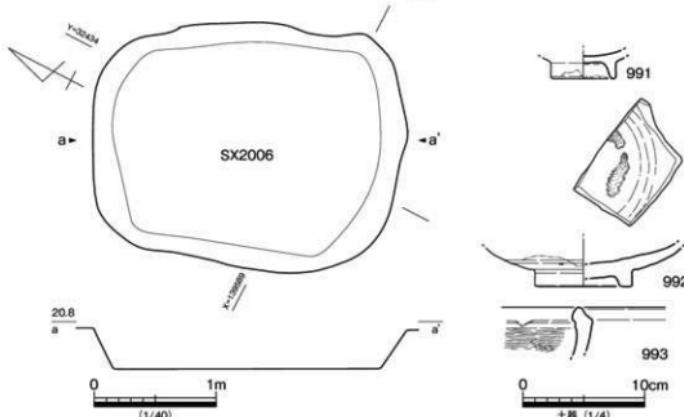
2区東南部、SX2005の約1.9m西側で、0面で検出した。隅丸方形の土坑で、長軸253m、短軸204m、深さ32.0cmを測る。埋土中からは陶器片、土師質土器片が出土した。

991・992は陶器。991は椀。992は鉢。見込みに砂目積みが残る。993は土師質土器擂鉢または捏鉢小片。17世紀中頃。

遺構の時期は、周辺の遺構同様18世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SX2007 (第310図)

2区中央南寄り、SX2006の2.4m西側で検出した。0面で検出した。隅丸方形の土坑で、長軸227m、短軸1.60m、深さ60.3cmを測る。埋土中からは陶器片、土師質土器片が出土した。



第309図 SX2006 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

994は陶器椀。呉器手。体部及び高台端部は故意に打ち欠き、円盤状の形状を呈する。995は土師質土器焰烙。内型作り。外面は指押さえが顕著で、内面にはハケを施す。18世紀中頃。996は土師質土器内耳付鍋。

遺構の時期は呉器手や焰烙から18世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SX2008（第311図）

2区中央付近東寄り、SX2005の北西部に近接して、0面で検出した。隅丸方形で、長軸2.79m、短軸1.87m、深さ5.5cmである。埋土中からは陶磁器片、土師質土器片が出土した。

997は磁器椀。薄手の半球形を呈し、外面に呉須で絵付けする。998～1001は陶器。998は刷毛目唐津椀。999は呉器手椀。高台部と体部は故意に打ち欠き、円盤状にすると考えられる。1000は刷毛目唐津鉢。1001は備前焼擂鉢小片。1002は土師質土器擂鉢または捏鉢片。内面には刷毛目を施す。

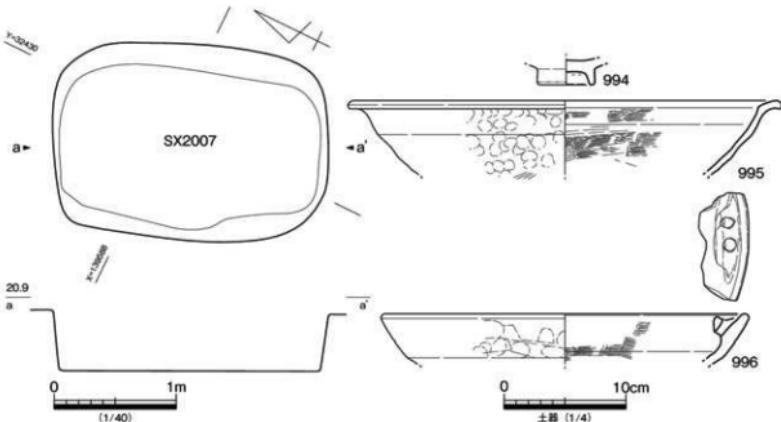
遺構の時期は、出土遺物により18世紀前半と考えられる。

2区 SX2010（第312図）

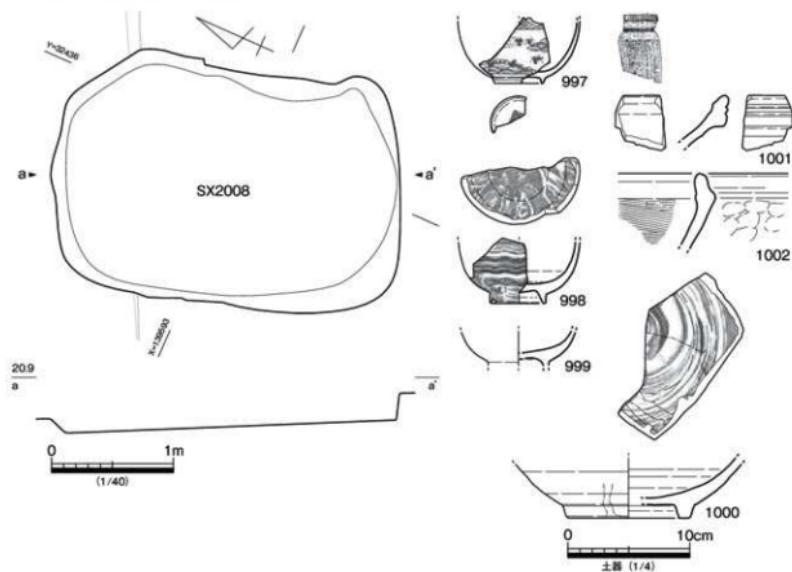
2区南端部で、0面で検出した。方形の土坑と考えられるが、南側は調査区外へ延びる。底部は南側が1段下がる形状である。方形で、南北方向は1.97m以上、東西方向は1.13m以上、深さは1段下がった部分が28.3cm、最深部が34.0cmである。埋土中からは土師質土器片が出土した。

1003・1004は土師質土器。1003は捏鉢または擂鉢。1004は鍋。

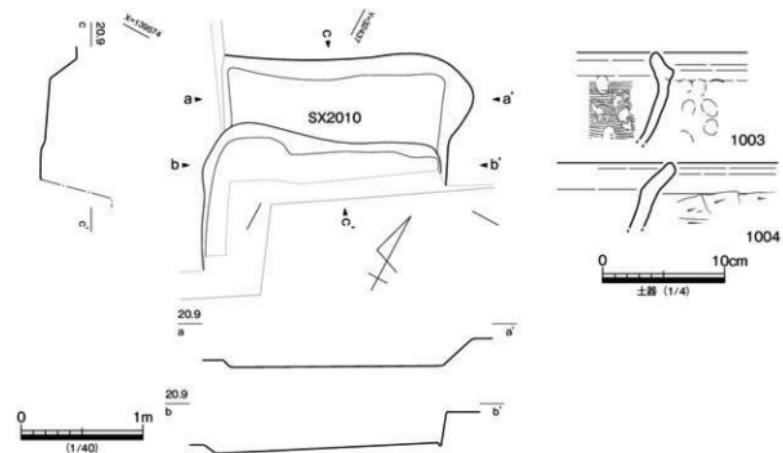
出土遺物からは17世紀前半頃と考えられるが、周辺の遺構でも18世紀前半の遺構から17世紀代の土師質土器擂鉢が出土していることを考えれば、周辺の遺構と同様18世紀代の可能性が考えられる。



第310図 SX2007 平・断面図 (1/40)、出土物 (1/4)



第311図 SX2008 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第312図 SX2010 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

2区 SX2013（第313図）

2区中央東端付近で、0面で検出した。隅丸方形と考えられるが、攪乱により削平される。底部は一部円形に深くなる場所がある。東西方向は0.76m以上、南北方向は0.86m以上、深さは1段下がった部分で7.9cm、最深部で16.7cmである。埋土中からは土師質土器片が出土した。

1005は土師質土器捏鉢または擂鉢。口縁部は歪みがあり、口径は不確かである。17世紀前半頃。

遺物の時期は、出土遺物からは17世紀前半頃と考えられるが、周辺でも18世紀代の遺構から17世紀代の土師質土器擂鉢が出土しているので、周辺の状況を考えあわせ、18世紀代と考えられる。

2区 SX2015（第314図）

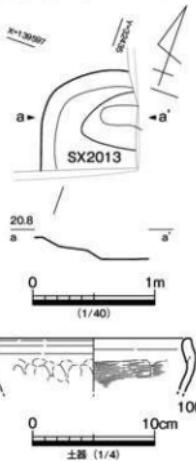
2区中央付近で、0面で検出した。隅丸方形で、長軸1.37m、短軸1.27m、深さ37.0cmを測る。埋土中からは土師質土器片、陶器片が出土した。

1006は備前焼擂鉢。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。18世紀前半。

1007は土師質土器擂鉢。3条1単位の卸目を施す。17世紀後半頃。

1008は土師質土器足釜口縁部。

遺構の時期は、備前焼擂鉢から18世紀前半と考えられる。



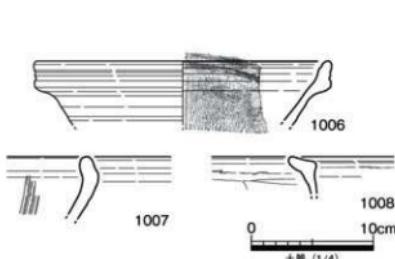
第313図 SX2013 平・断面図
(1/40)、出土遺物 (1/4)

2区 SX2016（第315図）

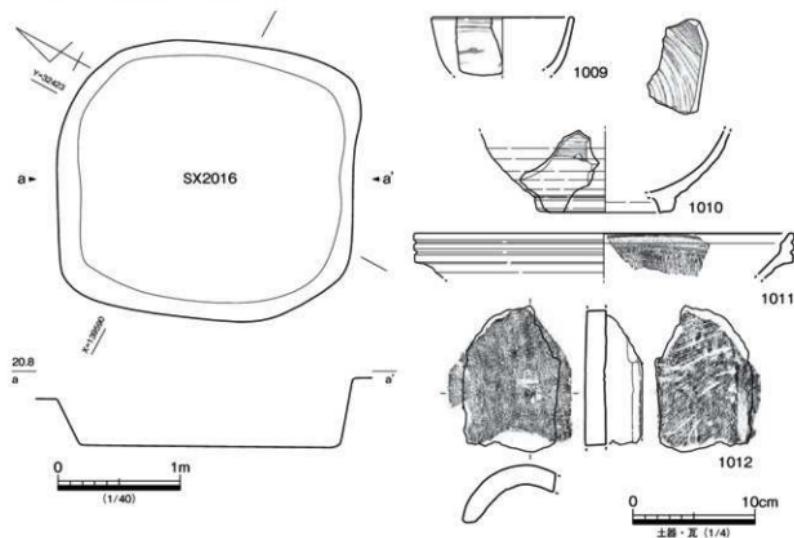
2区中央部やや西寄りで、0面で検出した。隅丸方形で、東西方向は2.27m、南北方向は2.43m、深さは52.3cmである。埋土中からは陶器片、瓦片などが出土した。

1009は陶胎染付椀。1010は刷毛目唐津鉢。1011は備前焼擂鉢。

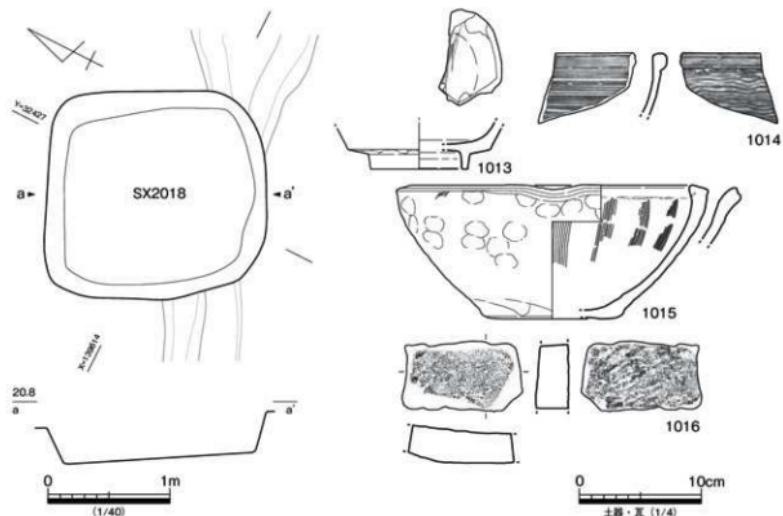
口縁部外面に重ね焼き痕跡が残る。1012は丸瓦片。内面には布目痕とともにコビキA痕が残る。



第314図 SX2015 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第315図 SX2016 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



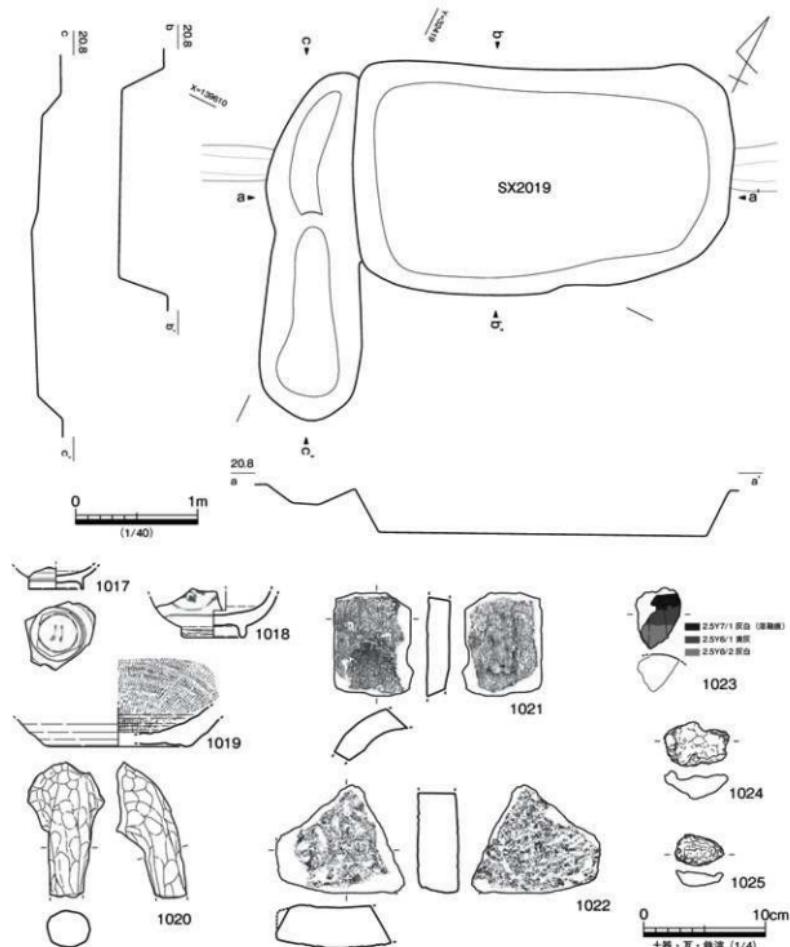
第316図 SX2018 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

遺構の時期は、出土遺物から、18世紀中頃と考えられる。

2区 SX2018（第316図）

2区北端付近で、0面で検出した。SD2007の上面から掘り込まれ、これより新しい。隅丸方形で、南北方向が1.79m、東西方向が1.71m、深さ39.5cmを測る。埋土中からは陶器片、土師質土器片が出土した。

1013・1014は陶器鉢。1014は口縁端部を外側へ折り、玉縁状にする。内外面は刷毛目模様を施す。



第317図 SX2019 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

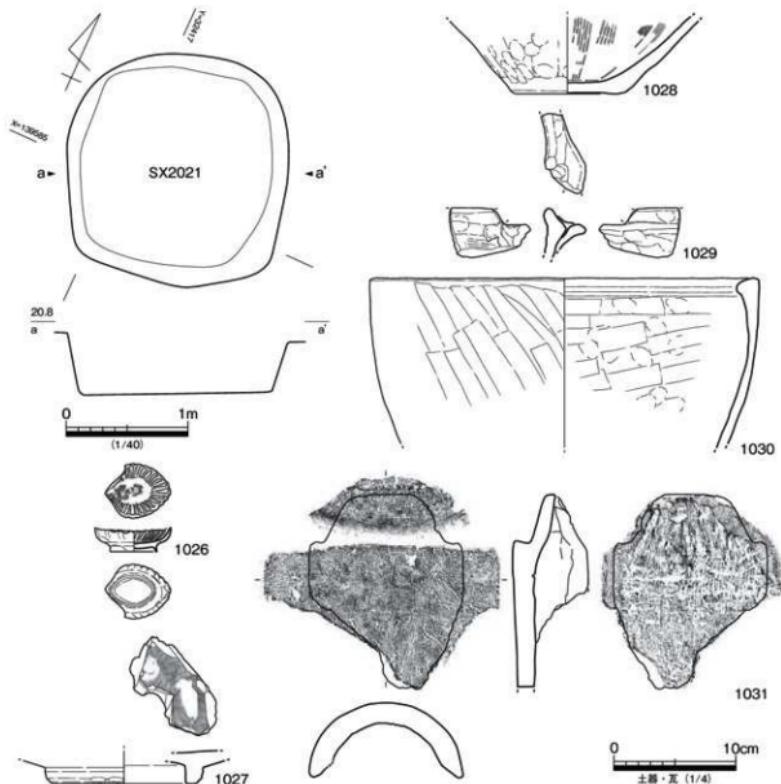
1015は土師質土器擂鉢。5条1単位の卸目を施す。14世紀前半。1016は平瓦。凹面には布目痕、凸面には繩目痕が残る。古代瓦片である。

遺構の時期は、出土遺物からや周辺の遺構検出状況から18世紀代と考えられる。1015は中世の遺構群から、1016は古代の遺構群からの混入と考えられる。

2区 SX2019（第317図）

2区北端付近で、0面で検出した。隅丸長方形の土坑の西側に溝状の土坑を連結させた形状で、隅丸長方形部分が長軸3.10m、短軸1.75m、深さ42.0cm、溝状部分が長軸2.87m、短軸0.71m、深さ29cmを測る。SX2018の約5m南西側で検出した。埋土中からは陶磁器片、土師質土器片、瓦片、鐵滓などが出土した。

1017は磁器碗。高台裏に染付で銘を入れる。1018は陶胎染付椀。1019は陶器擂鉢。外面にヘラ削り



第318図 SX2021 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

を施し、堺または明石産と考えられる。1020は土師質土器足釜片。1021は丸瓦片。内面には布目痕が残る。1022は平瓦片。凹面には布目痕、凸面には繩目痕が残る。1023はふいご羽口片。1024・1025は鉄滓小片。

遺構の時期は、陶磁器の時期から18世紀前半と考えられる。瓦片は古代の遺構群から、鉄滓、ふいご羽口は古墳時代後期の遺構群または包含層からの混入と考えられる。

2区 SX2021（第318図）

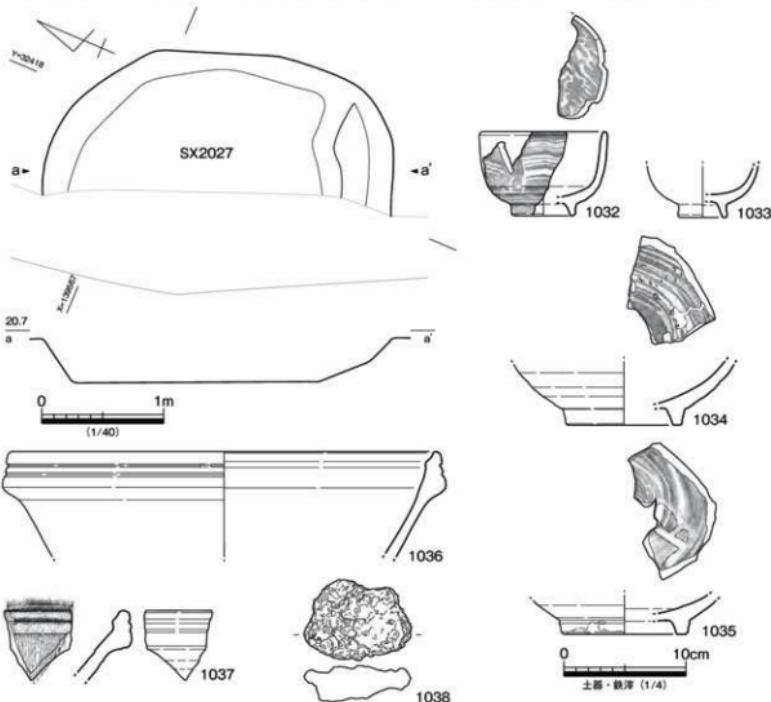
2区中央部西寄りで、0面で検出した。隅丸方形で、南北方向は190m、東西方向は180m、深さ51.6cmである。埋土中からは陶磁器片、土師質土器片などが出土した。

1026は磁器小皿。紅皿。型成型で体部全体に鏽を入れる。平面形は楕円形を呈する。1027は陶器鉢。1028～1030は土師質土器。1028は擂鉢。6条1単位の卸目を施す。1029は把手付鍋。1030は甕。口縁端部を内側に肥厚させ、体部は内湾する。1031は丸瓦。近世以降の焼し瓦。

遺構の時期は、出土遺物や周辺の検出状況から18世紀と考えられる。

2区 SX2027（第319図）

2区南西端で、0面で検出した。西半部は調査区外へ延びる。隅丸方形または楕円形で、長軸284m、



第319図 SX2027 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

短軸 1.10m 以上、深さ 62.0cm を測る。埋土中からは陶器碗・鉢・擂鉢、鐵滓が出土した。

1032 ~ 1037 は陶器。1032 は刷毛目唐津碗。1033 は呂器手。1034~1035 は内面に刷毛目文様を施す鉢。

1036 ~ 1037 は備前焼擂鉢。いずれも口縁端部外面に重ね焼き痕を持つ。1038 は鐵滓。

遺構の時期は、出土遺物から 18 世紀前半と考えられる。鐵滓は古墳時代後期の遺構群または包含層からの混入と考えられる。

2 区 SX2029 (第 320 図)

2 区南西隅で、0 面で検出した。隅丸方形で、長軸 2.30m、短軸 1.99m、深さ 52.9cm を測る。埋土からは須恵器の他、陶器片が出土した。

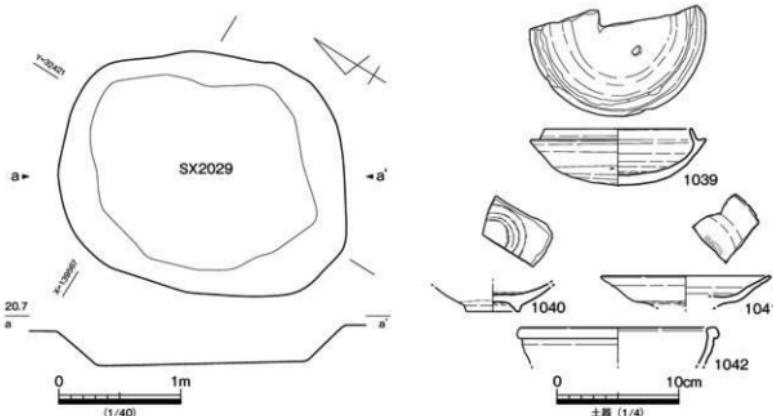
1039 は須恵器杯身。底部内面に須恵器胎土小片が溶着する。6 世紀末 (II ~ 4 期)。古墳時代後期の遺構や包含層からの混入と考えられる。1040 は磁器碗。内面には蛇の目釉剥ぎを施す。18 世紀代。1041 は陶器皿。肥前系で、内面には砂目積み痕を残す。17 世紀前半。1042 は陶器鉢。外面を肥厚させる。

遺構の時期は、出土遺物や周辺の状況から 18 世紀代と考えられる。

8 区 SX8002 (第 321 図)

8 区西端中央付近で検出した。西側は調査区外へ延びる。1a・1b 層の堆積ではなく、床土直下に堆積する 2 層を掘り込む。東西方向は 1.30m、南北方向は 0.58m、深さは、北側の浅い部分で 7 cm 程度、南側の深い部分で 20cm 程度である。埋土中からは須恵器片、瓦片、陶器片が出土した。

1043 は須恵器杯身。1044 は瀬戸美濃系陶器腰錆碗。18 世紀後半。1045 は平瓦。凹面に布目痕、凸面に綱目痕を残す古代瓦。1043 は古墳時代後期の遺構群や包含層から、1045 は古代の遺構群からの混入と考えられる。



第 320 図 SX2029 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

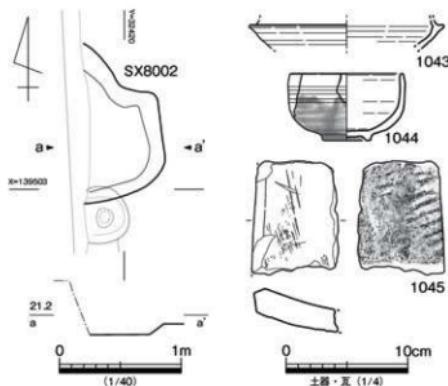
遺構の時期は、瀬戸美濃系陶器腰錫
椀が出土したことから、18世紀後半と
考えられる。

8区 SX8009 (第322図)

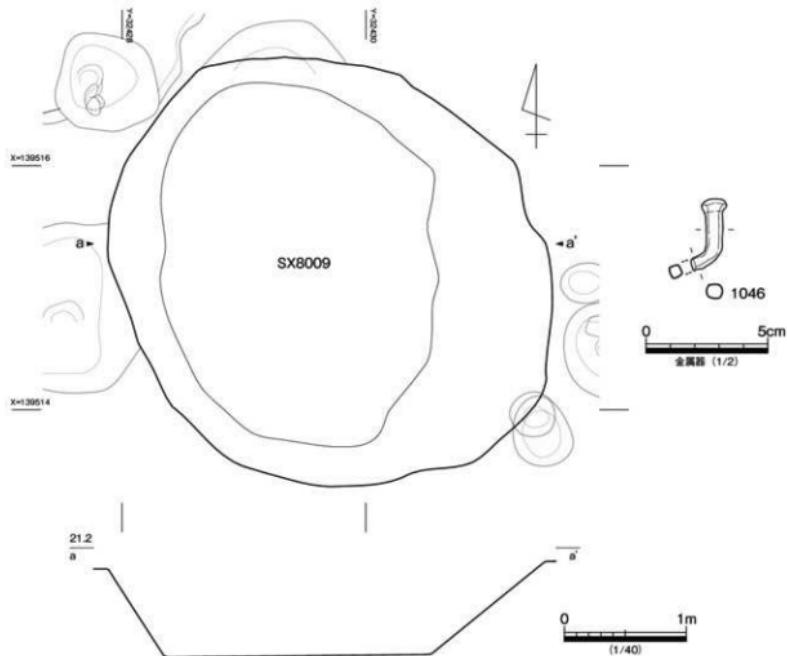
8区北東部で検出した。1面で検出した。
SB8010を構成する柱穴を掘り込む。
ほぼ円形で、直径3.34～3.90m、深さ
83.2cmを測る。埋土中からは須恵器杯身
または杯蓋片、壺片、釘片が出土したが、
SH11006やSB8010などを掘り込んで
おり、これらからの混入と考えられる。

1046は釘片。

遺構の時期は、SB8010より新しいこ



第321図 SX8002 平・断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4)



第322図 SX8009 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/2)

とから、7世紀中頃以降であるが、遺構の形状から近代以降の可能性が考えられる。

5 中世・近世の柱穴（第323～325図）

掘立柱建物や柵列に復元できなかった柱穴のなかで、調査時に断面図を作成したものと出土遺物を掲載したものをここで掲載した。

2区については、中世以降の遺構面を捉えて調査を実施しているので、その面で検出した柱穴をここで掲載する。他の区については、中世以降の遺物が出土した柱穴を掲載した。個々に記述すると煩雑になるため、一覧表とした。

6 遺構に伴わない遺物

ほぼ調査区全体に共通して広がる包含層を検出し、多くの遺物が出土した。これらの遺物を層位ごとに、同一層位の中では、概ね区ごとに出土遺物を記述する。

包含層の堆積状況については第3章第2節土層の記述を参照されたい。

①包含層2層

おもに暗褐色・黒色系の粘質土で、古墳時代後半の遺構群（2面）のベースとなる層である。出土遺物の年代は2面遺構の年代の下限を示す。ただし、遺物の出土量が多く、2層除去後には遺構は認められないことから、2層出土遺物は2面である古墳時代後半の遺構群が機能している時期に混じった遺物群が大半と考えられ、2層出土遺物は概ね2面遺構の年代を示す可能性が高いと考えられる。

1区出土遺物（第326図）

1060～1072は1区から出土した遺物である。

1060は弥生土器壺の底部。1061～1067は須恵器。1061・1062は杯蓋。肩部は丸く、口縁端部の形状も丸く収める。1063・1064は杯身。6世紀末～7世紀初頭（II-4～5期）。1065は高杯脚部。1066は提瓶口縁部。1067は甕口縁部。外面に突帯が巡る。内面には自然釉が掛る。1068・1069は土師器甕。1070は砥石片。流紋岩製で割れ面以外には磨滅痕が残る。鍛冶行為に関わる遺物と考えられる。1071・1072は滑石製白玉。

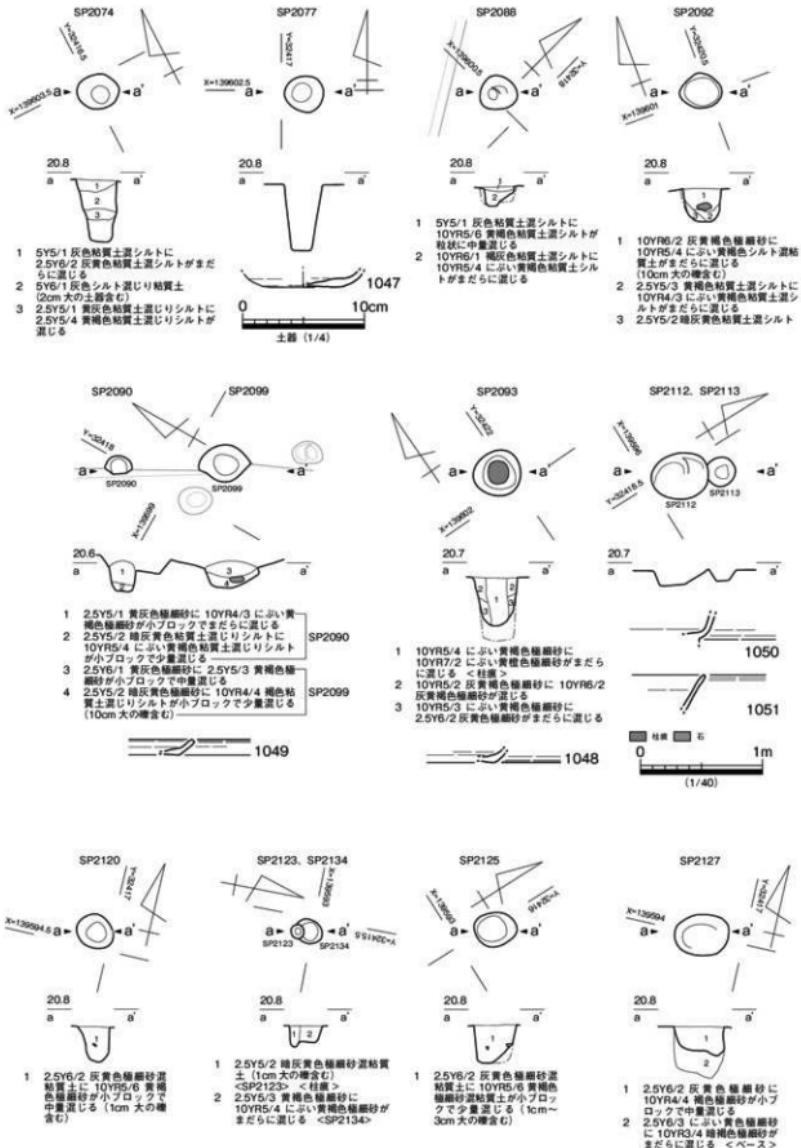
出土遺物は1060が弥生時代後期である他は、概ね6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

2区出土遺物（第327図）

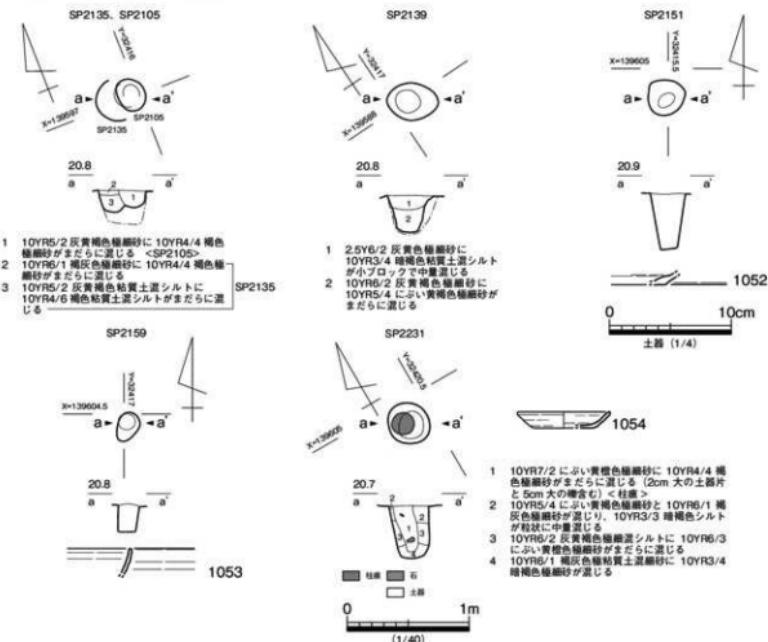
1073～1094は2区から出土した遺物である。

1073～1091は須恵器。1073～1080は杯蓋。肩部が丸いもの（1073～1075・1078）、わずかに段を持つもの（1079）、比較的はっきりした段を持つもの（1076・1077）がある。6世紀中頃～7世紀初頭（II-2～5期）頃。1081～1087は杯身。1081は底部外面に他の須恵器の胎土が溶着する。1083は体部の器壁が荒れている。6世紀後半（II-3期）頃。1088は有蓋高杯。脚部には上下2段の長方形の透かし孔を3箇所に施す。6世紀末（II-4期）。1089は甕口縁部。1090は甕口縁部。1091は平瓶の底部か。8世紀初頭頃か。1092は土師器甕。1093は鉄滓。1094は滑石製白玉。

1091は8世紀前半頃まで下る可能性はあるが、出土遺物は概ね6世紀中頃～7世紀初頭頃と考えられる。



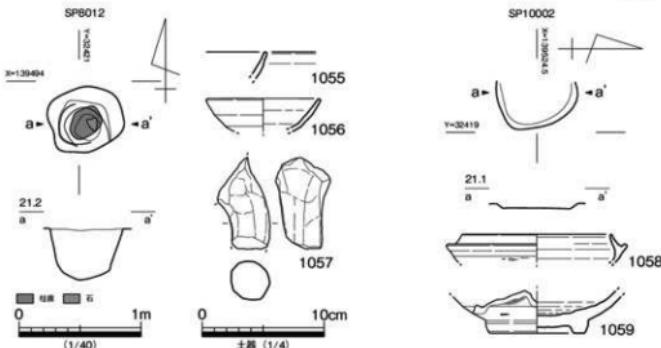
第323図 2区ピット（中世）平・断面図1 (1/40)、出土遺物1 (1/40)



第324図 2区ピット(中世) 平・断面図2(1/40)、出土遺物2(1/4)

第11表 報告ピット一覧表(中世以降)

区名	遺物名	面	平面形	規模 (長軸×短軸)	深さ	掲載遺物 (報告番号)	その他の出土遺物
2区	2074	0	梢円形	35×28	52		須恵器片
2区	2077	0	円形	32	55	1047(土師質土器杯)	
2区	2088	0	円形	31	17		須恵器片
2区	2090	0	—	22×15	31		
2区	2092	0	円形	35	28		根石
2区	2093	0	円形	39	40	1048(土師質土器杯)	
2区	2099	0	—	43×31	27	1049(土師質土器皿)	
2区	2112	0	梢円形	47×38	14	1050(須恵器高台付杯)	
2区	2113	0	円形	24	10	1051(土師質土器杯)	土器小片
2区	2120	0	円形	31	30		須恵器片、土師質土器片
2区	2123	0	円形	12	17		
2区	2125	0	梢円形	36×28	31		土器小片
2区	2127	0	梢円形	44×33	24		土器小片
2区	2134	0	梢円形	23×19	14		土器小片
2区	2135	0	—	35×17	19		須恵器片
2区	2139	0	梢円形	42×31	31		須恵器片
2区	2151	0	円形	31	46	1052(土師質土器杯)	土師質土器片
2区	2159	0	梢円形	25×17	23	1053(土師質土器杯)	土師質土器片
2区	2231	0	円形	36	44	1054(土師質土器皿)	須恵器片
8区	8012	0	不整円形	59×52	43	1055(須恵器杯) 1056(土師質土器杯) 1057(土師質土器足)	須恵器杯身又は杯蓋片
10区	10002	0	—	67×41	5	1058(須恵器身) 1059(土器脚跡)	平瓦(格子タキ)



第325図 8・10区ピット（中世以降）平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

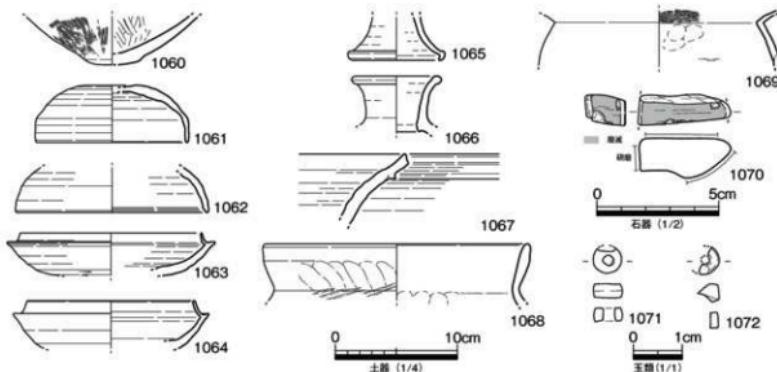
3区出土遺物（第327図）

1095は3区出土遺物。ふいご羽口。SF3001の周辺で出土した遺物。SF3001に由来する遺物と考えられる。

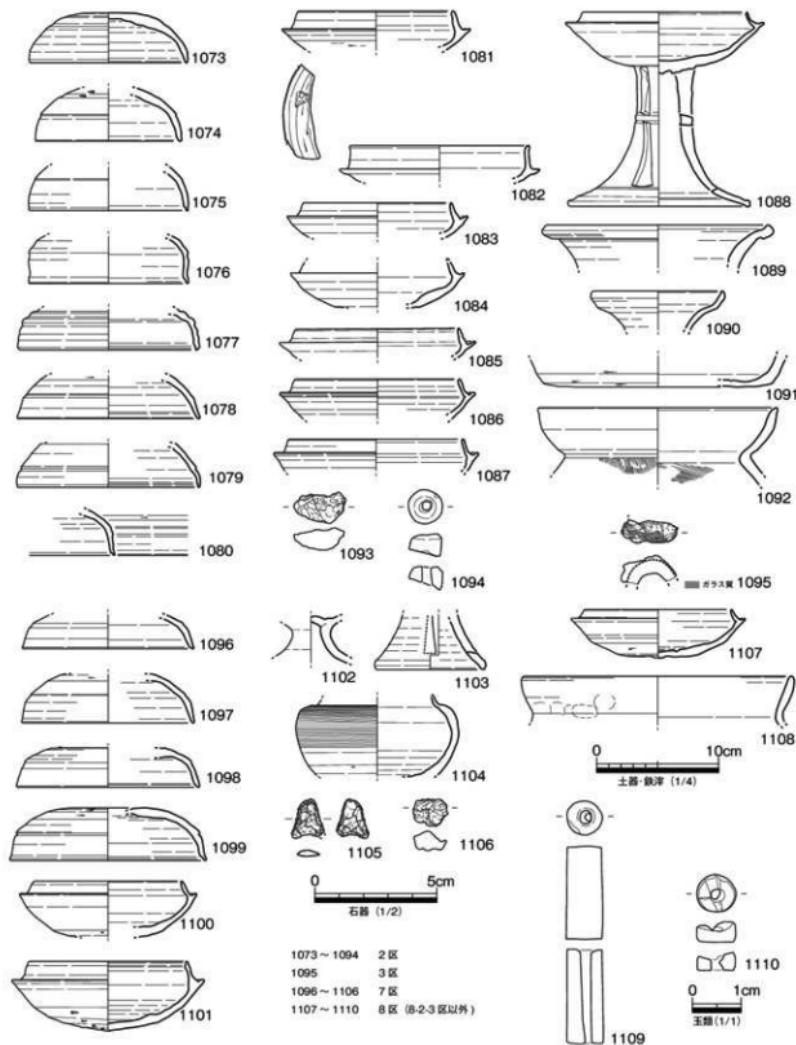
7区出土遺物（第327図）

1096～1106は7区出土遺物。1096～1104は須恵器。1096～1099は杯蓋。1096・1097は肩部、口縁端部はほぼ丸く仕上げる。7世紀初頭（II-5期）頃。1099は肩部と口縁端部の段が認められ、やや古い様相を呈する。6世紀中頃（II-2期）。1100・1101は杯身。6世紀後半（II-3期）頃。1102・1103は高杯脚部。1102は低脚の高杯、1103は脚部に長方形の透かし孔が2ヶ所に残る。6世紀末（II-4期）。1104は壺。体部上半部にカキ目を施す。6世紀末（II-4期）。1105はサヌカイト製石鎌。凹基式。1106は鉄滓小片。

出土遺物は6世紀中頃～7世紀初頭と考えられる。



第326図 1区2層出土遺物（1/4・1/2・1/1）



第327図 2区・3区・7区・8区2層出土遺物 (1/4・1/2・1/1)

8区(8-23区を除く)出土遺物(第327図)

1107～1110は8-23区を除く8区から出土した遺物。8-23区は、西接する10区南と場所のまとまりがよく、10区南とともに記述する。

1107は須恵器杯身。6世紀末(II-4期)頃。1108は土師器甕口縁部。1109は碧玉製管玉。1110は滑石製白玉。

8-23区を除く8区では、遺物の出土量は少なかった。

8-23区、10区南出土遺物(第328～332図)

10区南は狭い地区で、東接する8-23区と近接し、関連性が高いと考えられるので、まとめて報告する。しかし、遺物の大半は10区南から出土した。

10区南では、2面検出遺構が認められなかつた地点で、南北18m、東西15mの範囲で鍛冶関連遺物と滑石製白玉が集中して出土した地点がある。遺構のない空閑地で、鍛冶に係る遺物や大量に白玉を投棄する行為が行われたと考えられる。

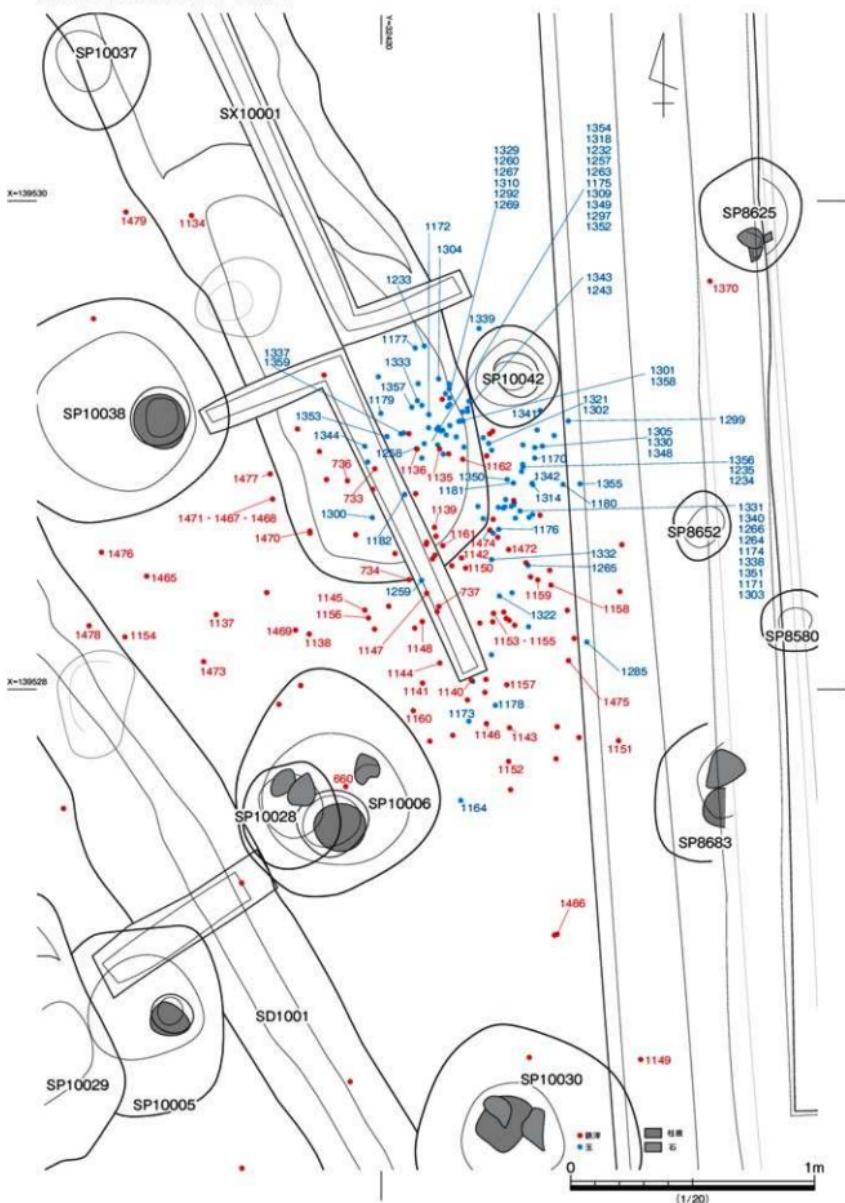
1111～1359は10区南とそれに東接する8-23区から出土した遺物である。大半は10区南から出土した。土器では1117のみ8-23区から出土した。1111～1133は須恵器。1111は、口径が小さく口縁端部を四角く仕上げ、壺の蓋と考えられる。1112～1116は杯蓋。1113・1115・1116は焼成不良で、1115・1116は土師器の色調を示す。概ね6世紀末～7世紀初頭(II-4～5期)頃。1117は蓋の摘み。有蓋高杯の蓋か。1118～1132は杯身。1118は底部外面に須恵器胎土小片が溶着する。1124・1125・1129～1131は焼成不良で、1131は土師器の色調を呈する。概ね6世紀末～7世紀初頭(II-4～5期)頃。1133は壺体部。外面にはタタキ痕のちカキ目が施される。

1134～1162は鉄加工関連遺物、すべて10区南から出土した。1134～1140は鉄器。1134・1135は鉄錠。1136～1139は棒状鉄片。1140は板状鉄片。1141～1162は鍛冶関連遺物。1141・1144・1149・1152・1154～1162は分析試料。1154・1161以外は鉄滓。1149は滓中に被熱した鍛造剥片が残る。1152は精鍊鍛冶滓。1155はふいご羽口先端の溶融物が付着する。1157は鍛鍊鍛冶滓。表面に白玉が溶着する。硫化鉄を非常に多く含む。1154は鍛造品。板状の鉄製品または鍛打加工途中の未成品。軟鉄(低炭素鋼)。1161は鉄塊系遺物。硫化鉄の影響が認められる。1162は精鍊鍛冶滓。ふいご羽口先端の溶融物がガラス質化して付着する。

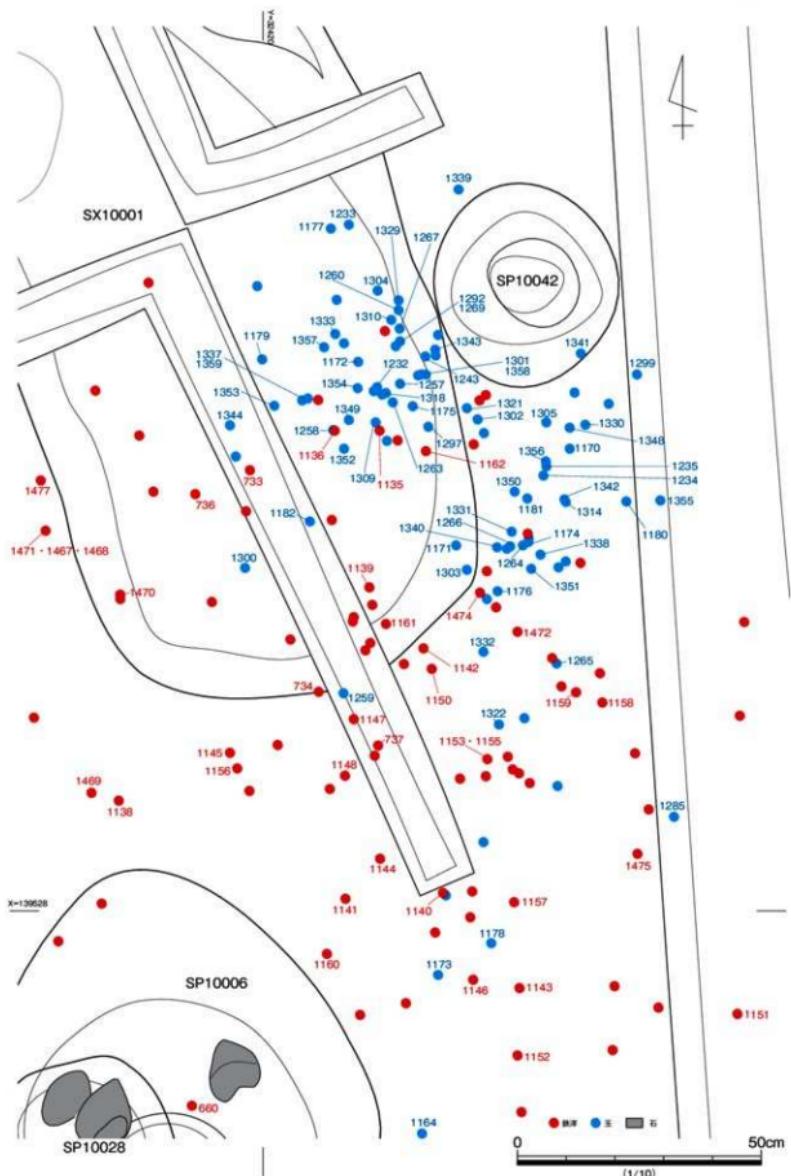
1163～1359は玉類。この中で8-23区から出土したのは1251・1262・1270・1271・1287～1290・1298である。1163は滑石製で、15cm×18cm程度の板状の長方形の石の中央付近を穿孔する。1164～1167はガラス玉。概ね直径4mm、厚さ2～3mm程度で、1164は緑、1165・1166は青、1167は黄色に発色する。1168～1359は滑石製白玉。直径6～8mm、孔径1～3mmであるが、大半は1～2mmに収まる。厚さ3～6mm程度であるが、上・下部とも水平ではなく斜めになっている個体が多く、同じ個体でも厚さは一定でない。軟質の滑石と硬質の滑石がある。1174・1178・1180には、滑石の上面に2条の刻みが認められる。

出土遺物は、概ね6世紀末～7世紀初頭と考えられる。多量の鉄器や鉄滓、滑石製白玉が投棄されたのもこの頃であろう。

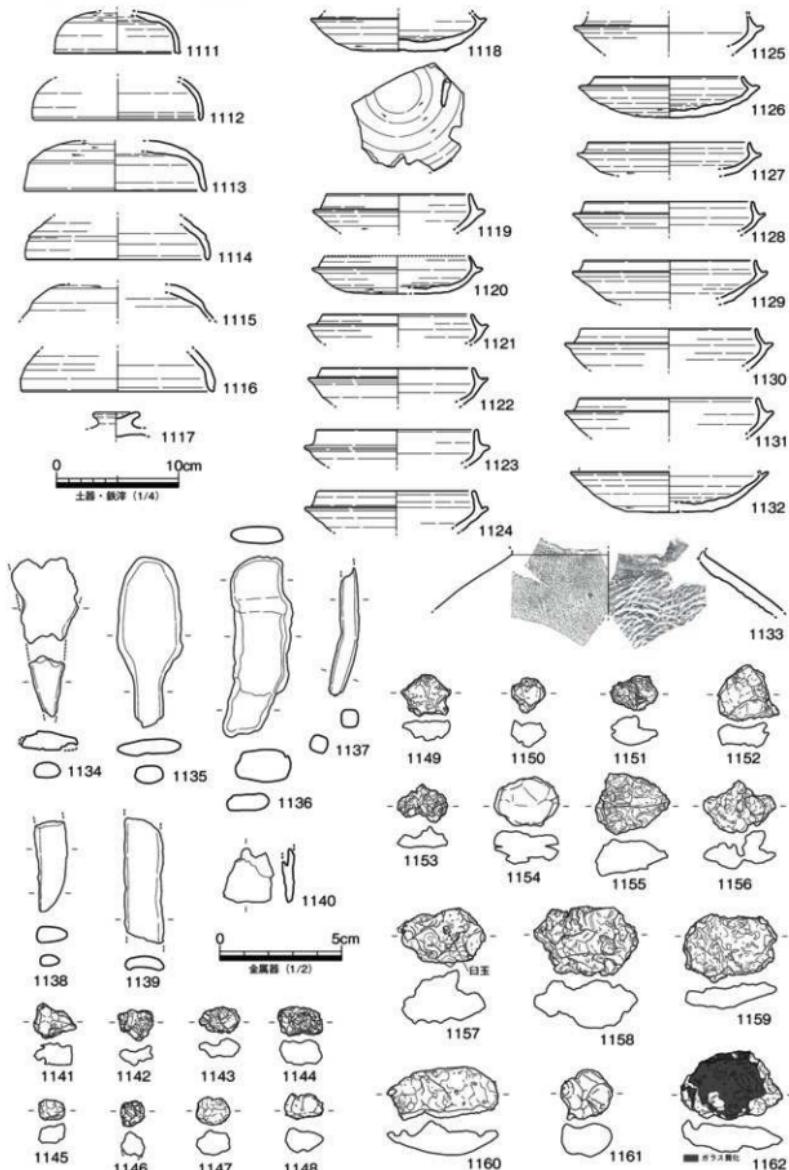
岸の上遺跡（香川県埋蔵文化財センター編 2023年）



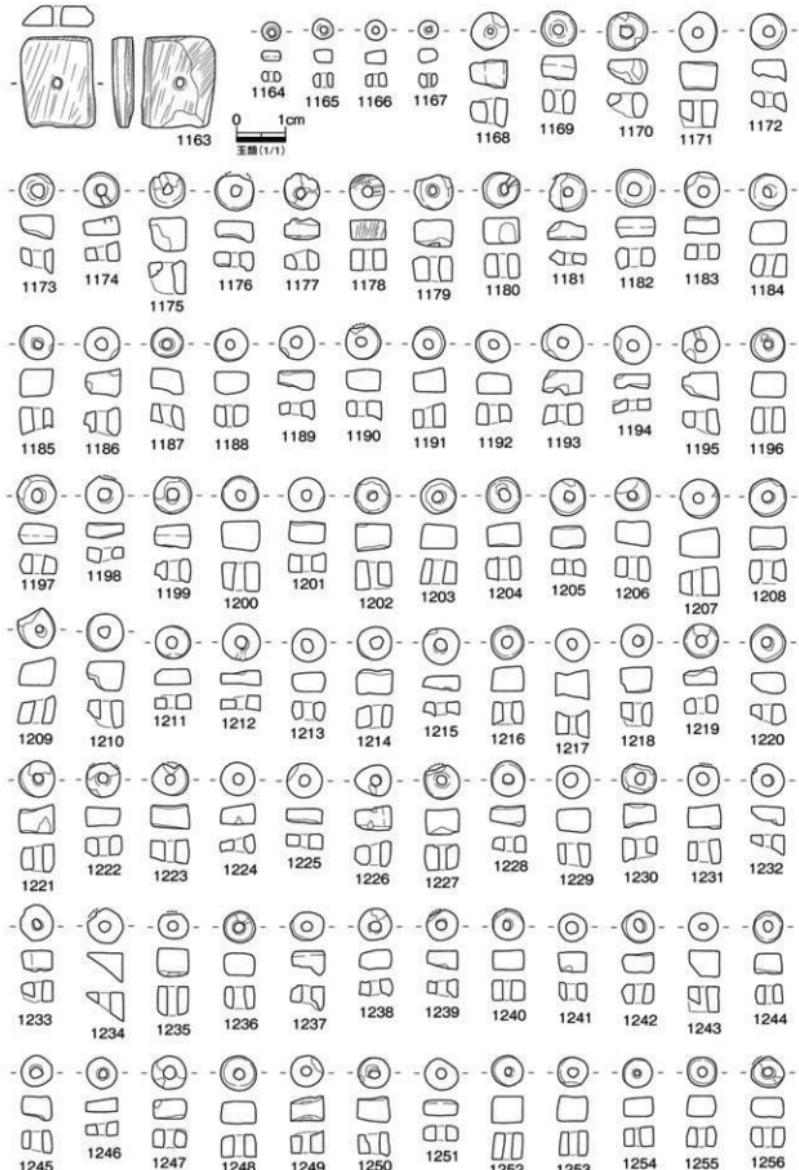
第328図 10区2層玉・鉄滓出土状況1 (1/20)



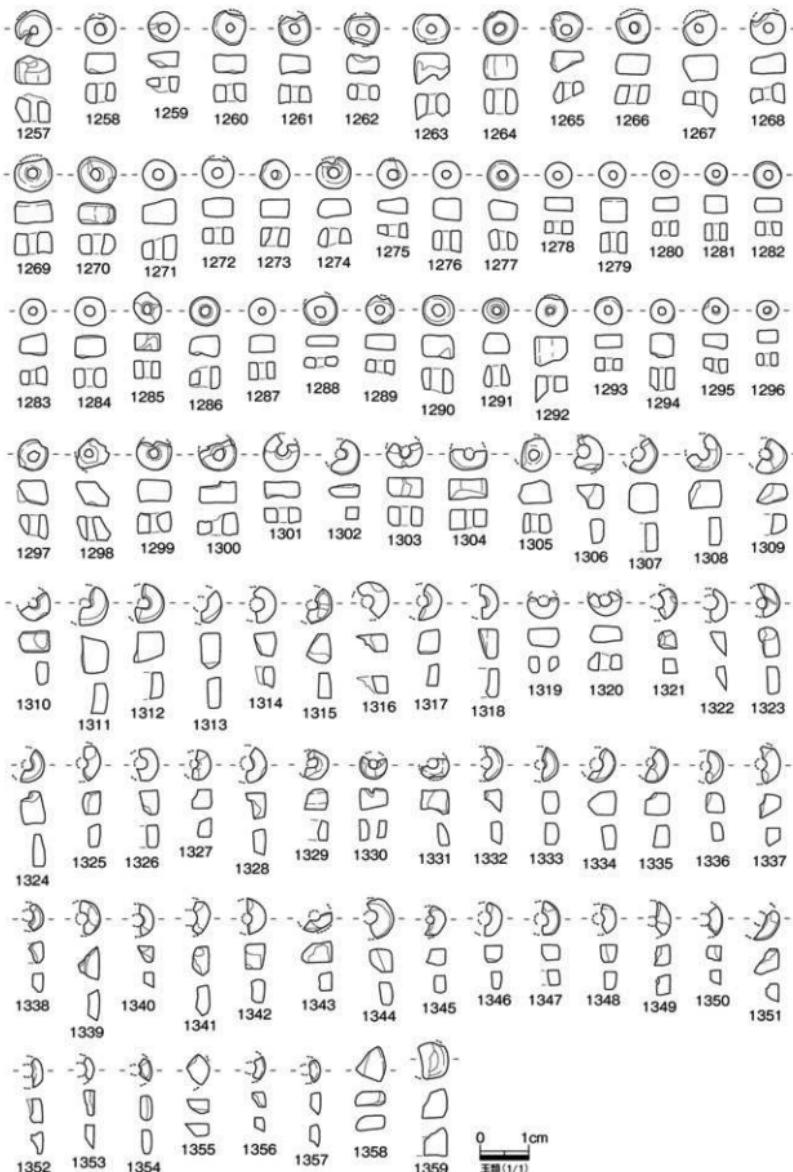
第329図 10区2層玉・鉄滓出土状況2(集中部拡大)(1/10)



第330図 8-2-3区・10区南2層出土遺物1 (1/4・1/2)



第331図 8-2-3区・10区南2層出土遺物2(1/1)



第332図 8-2-3区・10区南2層出土遺物3 (1/1)

9区出土遺物（第333図）

1360～1366は9区から出土した遺物である。1360～1364は須恵器。1360・1361は杯蓋。1361は肩部に段が残る。1362～1364は杯身。1362は底部外面にヘラ描きが認められる。1363・1364は口縁端部が欠損する。概ね6世紀後半～末（II-3～4期）。1365・1366は鉄滓。

出土遺物量は少なく、出土遺物の時期は6世紀後半～末頃と考えられる。

12区出土遺物（第333図）

1367・1368は12区から出土した遺物。1367は弥生土器壺。形態は下川津B類に類似するが、角閃石は認められない。弥生時代後期後半。1368は須恵器壺。頭部にはカキ目が施される。6世紀後半頃。出土遺物量は少なかった。

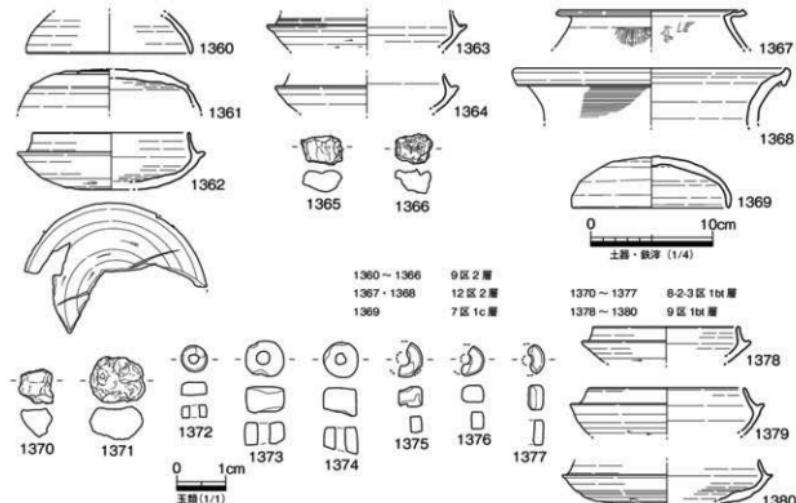
②包含層1c層（第333図）

7区でのみ確認された灰褐色砂質シルト層である。平成28年度年報の記載では、7区では後述する1b層の代わりに1c層が堆積するとされるが、遺物は1b層で取り上げられるものが多く、土層断面図で1c層に相当するのはSX7004の上面に堆積する層のみで、1c層で取り上げられた遺物は少ない。取り上げ層位は調査時の記載に従う。

1369は須恵器杯蓋。7世紀初頭（II-5期）と考えられる。

③包含層1bt層（第333図）

8-2-3区を中心として一部9区に広がる灰褐色シルト層である。限定的な堆積で、他の調査区では認められない。1b層の下部で堆積する。



第333図 9区・12区2層・1c層・1bt層出土遺物（1/4・1/1）

1370～1377は8-2-3区1bt層から出土した遺物である。遺物の出土傾向は10区南・8-2-3区2層と同じである。1370・1371は鍛冶関連遺物。1371は分析試料。鉄塊系遺物。木炭痕が残り、樹種は広葉樹環孔材であった。1372～1377は滑石製白玉。直径5.5～8.0mm、厚さ2.5～5.5mm、孔径は2～25mmである。

1378～1380は9区1bt層から出土した遺物。須恵器杯身。1380は口縁端部が欠損する。6世紀後半～末（II-3～4期）頃。

遺物の時期は、概ね6世紀後半～末であるが、出土遺物量は少なかった。

④包含層 1b層

概ね調査区全体に堆積する層である。1面の遺構のうち、条里地割を示す遺構は概ね1b層の上面から掘り込まれるが、7・8・10区西壁土層断面図によれば、条里方向を向くSB8003・SB8022は1b層の中でも下位層の上面を掘り込む遺構であり、それより古い正方位建物も1b層が堆積終了する以前の遺構と考えられる。SB8003・SB8022と正方位建物の年代は2層の時期と1b層の時期の間、それ以外の1面遺構の下限は1b層の時期と考えられる。

1区出土遺物（第334図）

1381～1387は1区で出土した遺物である。

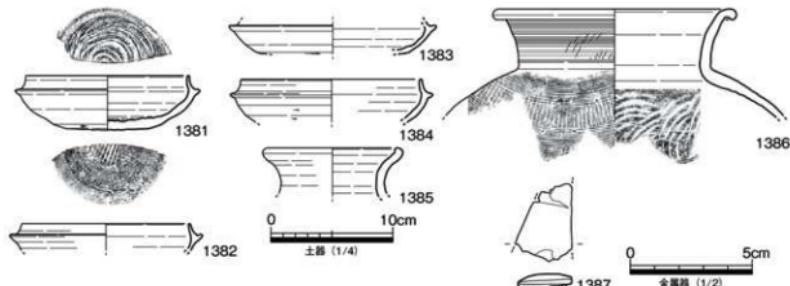
1381～1386は須恵器。1381～1384は杯身。1381は底部内面に同心円状の、底部外面には平行タタキ状の施文が認められる。6世紀末（II-4期）頃。1385は提瓶口縁部。1386は壺。頸部にカキ目が施される。6世紀末（II-4期）。1387は板状鉄片。

出土遺物の時期は6世紀末（II-4期）と考えられ、2層からの出土遺物との時期差は認められない。

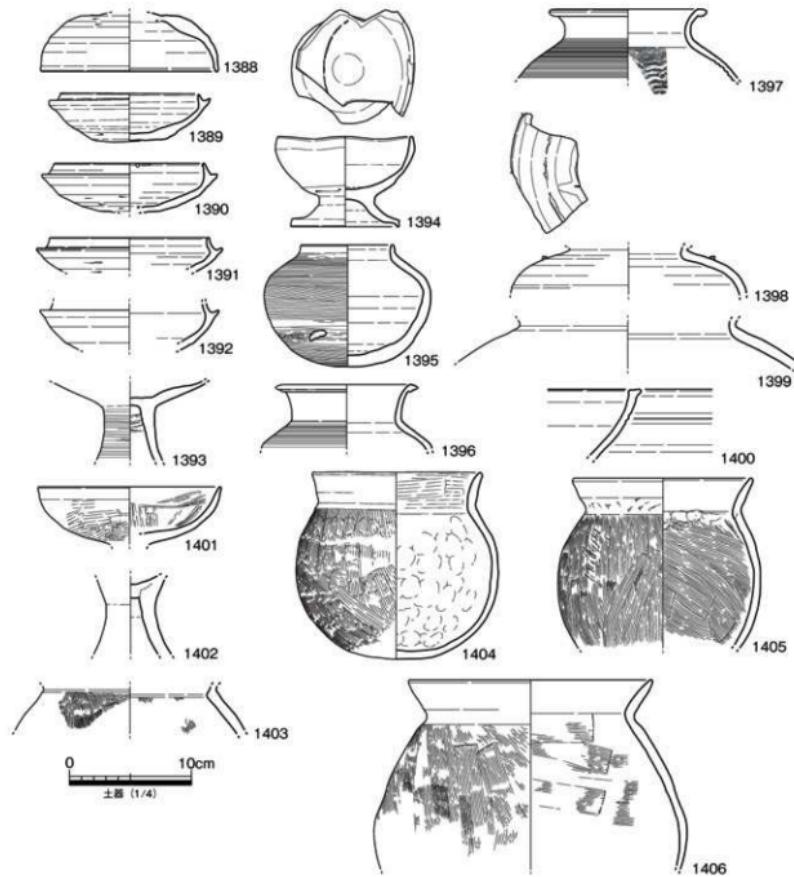
2区出土遺物（第335図）

1388～1406は2区で出土した遺物である。

1388～1400は須恵器。1388は杯蓋。器壁に気泡があり、ゆがんだ形状である。1389～1392は杯身。7世紀初頭（II-5期）。1393・1394は高杯。1393は脚部に横方向のカキ目が施される。1394は低脚で歪みが著しい。杯部内面には重ね焼きによる他の須恵器の溶着痕が残る。7世紀前半（II-5期）。1395



第334図 1区1b層出土遺物（1/4・1/2）



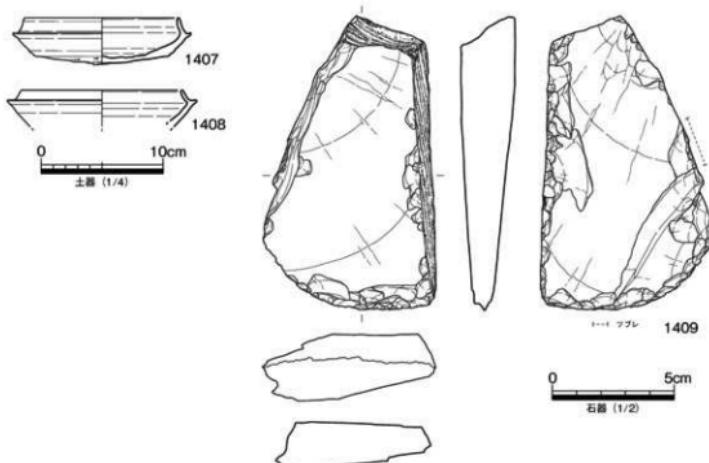
第335図 2区1b層出土遺物(1/4)

は壺。体部にはカキ目が施される。体部下半に、他の土器胎土小片が溶着する。7世紀前半(II-5期)。1396・1397は甕。体部にはカキ目が施される。6世紀後半(II-3期)頃。1398は壺体部。小破片のため、口径は不確か。肩部に他の須恵器の溶着痕が残る。1399は甕体部。1398・1399は自然釉が残る。1400は器種不明。1401～1406は土師器。1401・1402は高杯。1403～1406は甕。

出土遺物の時期は、6世紀後半～7世紀前半頃と考えられる。2層との時期差はほぼ認められない。

3区出土遺物(第336図)

1407～1409は3区で取り上げた遺物である。1407・1408は須恵器杯身。6世紀末～7世紀初頭(II



第336図 3区1b層出土遺物 (1/4・1/2)

-4～5期)頃。1409はサヌカイト製石斧。

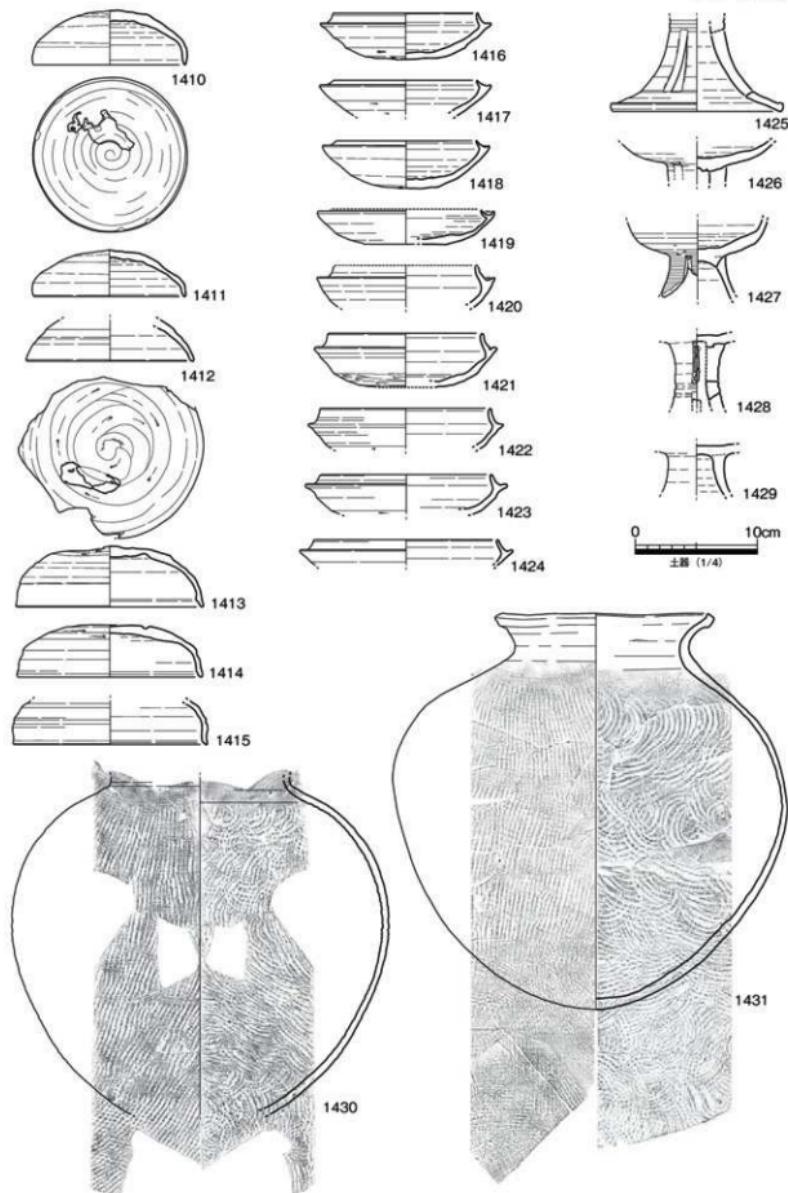
包含層からの出土遺物は少なかった。

7区出土遺物（第337～339図）

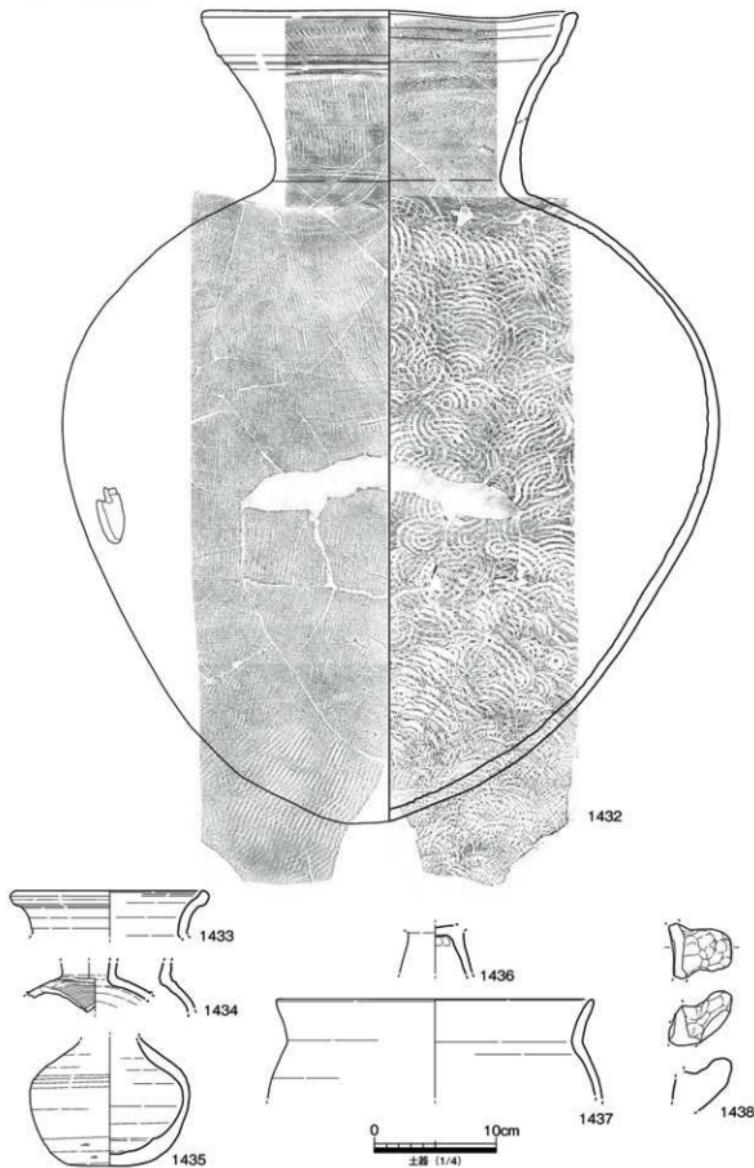
1410～1445は7区包含層1b層から出土した遺物である。

1410～1435は須恵器。1410～1415は杯蓋。1410は内面頂部に他の須恵器の溶着痕がある。1413は歪みが著しく、頂部外面に他の須恵器の胎土の溶着痕が残る。外面に自然軸が掛かる。1410～1412は7世紀初頭～前半(II-4～5期)頃、1413～1415は6世紀後半(II-3期)頃。1416～1424は杯身。概ね6世紀末～7世紀初頭(II-4～5期)。1425～1429は高杯。1425は脚中央付近に沈線を2条巡らせ、下段の方形の透かし孔が1ヶ所に残る。1426・1427は上段の方形の透かし孔の上部が、1428は上・下段の透かし孔の一部が残る。1427には脚部にカキ目を施す。6世紀末(II-4期)。1430～1433は甕。1430と1431は体部の形態が似る。1431は歪みがある。1432は頸部外面の上方に2条の沈線が、その上方に1段、下方に2段の縦方向の連続したヘラ描きが施される。かなりの部分が接合により復元されたが、体部の一部に該当する破片がない部分があり、穿孔を施した可能性も考えられよう。7世紀前半(II-5期)。1434は提瓶。体部に同心円状のカキ目が残る。1435は甕。孔部分は残らない。7世紀前半(II-5期)頃。1436～1438は土師器。1436は高杯。1437は甕。1438は甕または瓶把手。1439はサヌカイト製石鎌。凹基式。1440～1442・1444は鉄滓。1443・1444は分析試料。1443は鉄塊系遺物。木炭痕が残され、樹種は広葉樹環孔材であった。1444は精鍛鍛冶滓。1445は棒状鉄片を曲げたもの。

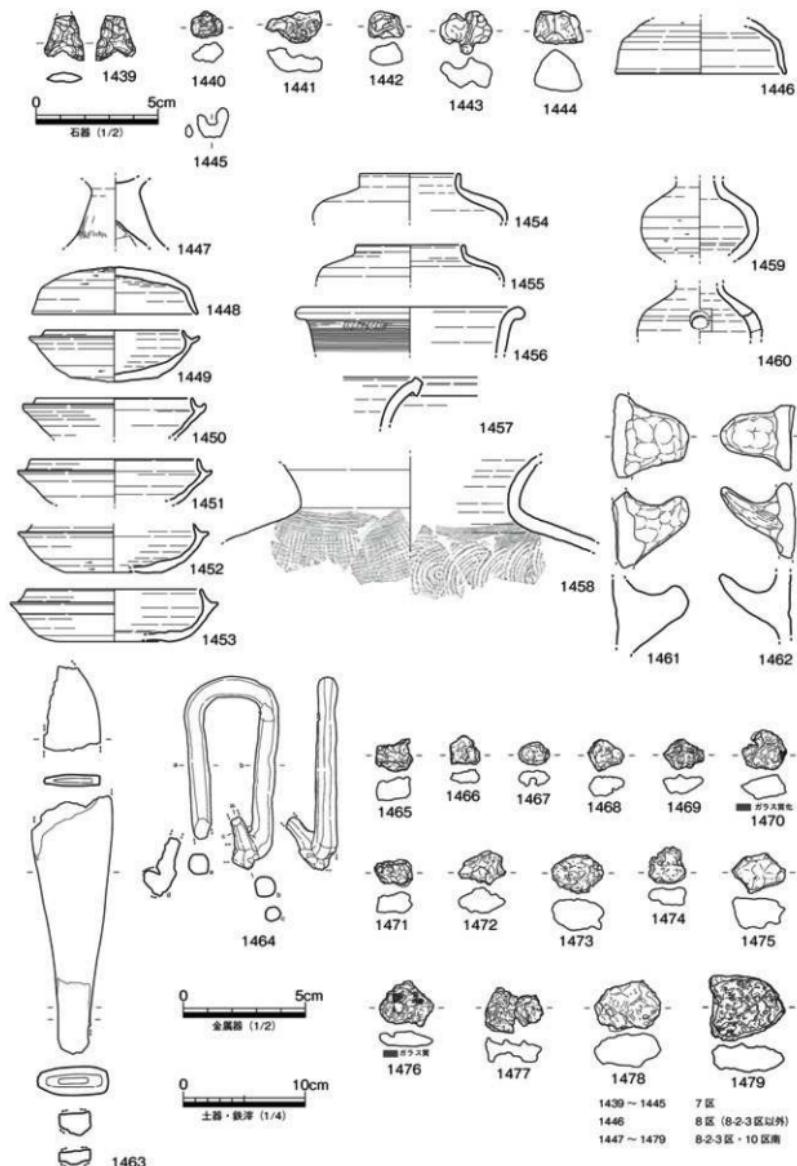
出土遺物の時期は6世紀後半～7世紀前半頃の遺物が出土した。このうち、1410、1418、1431、1432はSB7002周辺で出土した遺物である。特に、1432はSB7002内部で多くの破片が集中して出土しており、SB7002に関連する可能性もある（出土位置は第102図SB7002平面図参照）。



第337図 7区1b層出土遺物1 (1/4)



第338図 7区1b層出土遺物2 (1/4)



第339図 7区・8区・10区南1b層出土遺物 (1/4・1/2)

7区では多くの遺物、鐵滓や鉄片が出土した。これらの遺物は、概ね2面の遺構群に由来するものと考えられる。

8区(8-23区以外)出土遺物(第339図)

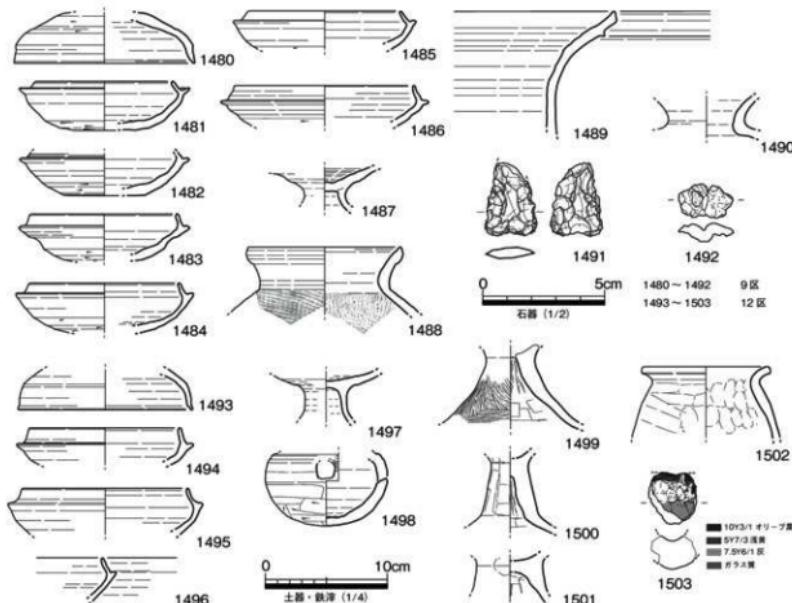
1446は8-24区から出土した遺物。SH8008直上で出土した。須恵器杯蓋。6世紀後半(II-3期)頃。SH8008の時期を示すと考えられる。

8区(8-23区以外)からは1b層からの出土遺物量は少なかった。当該区は正方位を向く大型掘立柱建物を検出した場所である。

8-23区、10区南出土遺物(第339図)

1447～1479は8-23区と10区南で出土した遺物である。

1447は土師器高杯。1448～1460は須恵器。1448は杯蓋。7世紀初頭(II-5期)頃。1449～1453は杯身。1453は外面受部より下部に重ね焼きによる色調の変化がある。7世紀初頭(II-5期)頃。1454・1455は短頸壺。7世紀前半(II-6期)頃。1456～1458は甕。1456は頸部にカキ目を施す。1459・1460は甕。1459は孔部分は残らない。1460は孔の高さで沈線が1条巡る。7世紀前半(II-6期)。1461・1462は土師器甕または瓶把手。1463・1464は鉄器。1463は鉄鎌。1464は鉗具。1465～1472・1474～1477・



第340図 9区・12区1b層出土遺物(1/4·1/2)

1479は鉄滓。1470・1473・1475・1477～1479は分析試料。1470は鍛冶炉材やふいご羽口の溶融物が付着する。1473は鉄塊系遺物。鍛打加工前の鍛冶原料。1478は含鉄鉄滓。

出土遺物は、7世紀初頭～前半（II-5～6期）頃と考えられる。土器は1451・1452・1455を除き8-23区から出土、鉄器はすべて8-23区、鉄滓はすべて10区南から出土した。

9区出土遺物（第340図）

1480～1492は9区から出土した遺物である。

1480～1490は須恵器。1480は杯蓋。1481～1486は杯身。いずれも7世紀初頭（II-5期）頃。1487は高杯。1488・1489は甕。1490は提瓶頭部か。1491はサヌカイト製石鎧。凹基式。1492は鉄滓。出土遺物は、6世紀後半～7世紀初頭（II-3～5期）と考えられる。

12区出土遺物（第340図）

1493～1503は12区から出土した遺物である。

1493～1498は須恵器。1493は杯蓋。口縁端部にわずかに段を持つ。1494～1496は杯身。6世紀末～7世紀初頭（II-4～5期）。1497は低脚の高杯。7世紀初頭（II-5期）頃。1498は甕。6世紀末（II-4期）頃。1499～1502は土師器。1499～1501は高杯。1502は甕。小形で指押さえ痕が顕著である。1503はふいご羽口。

出土遺物は6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

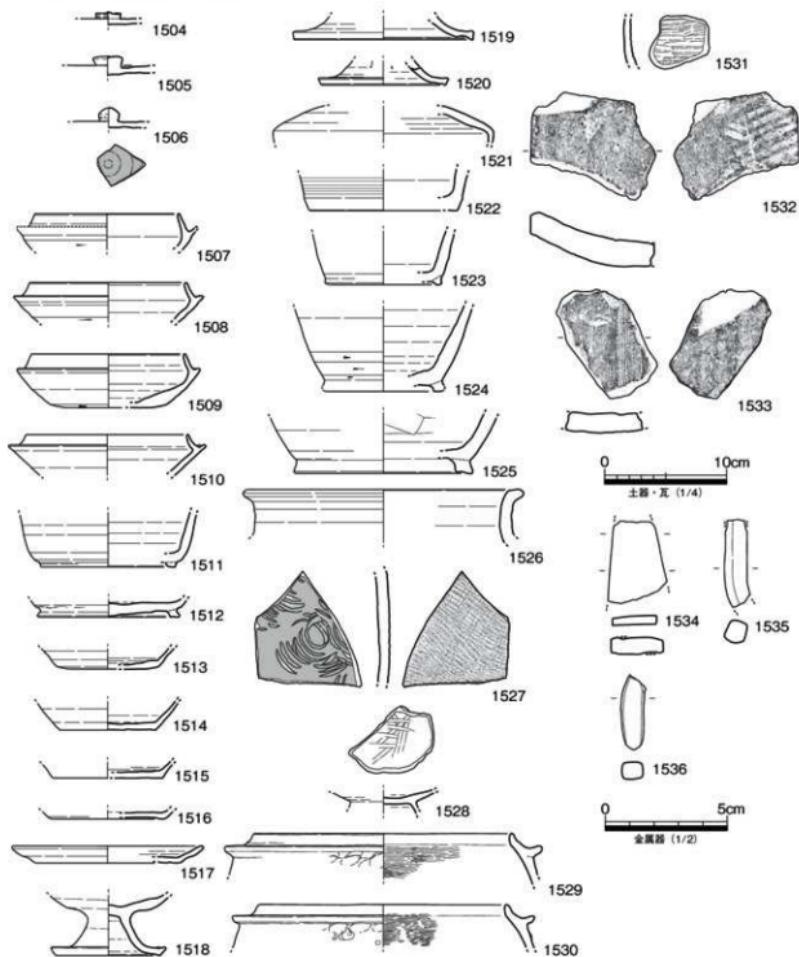
⑤包含層1a層出土遺物

1a層は概ね調査区全体を覆う層である。古代遺構群の上面に堆積する。2区では1a層を掘り込む中世の遺構群を検出した。

2区出土遺物（第341図）

1504～1536は2区から出土した遺物である。1504～1527は須恵器。1504～1506は蓋。いずれも摘み部分。1506は内面の磨滅痕が著しく、転用硯として利用したと考えられる。8世紀代。1507～1510は杯身。1509は器壁に気泡が入る。6世紀末～7世紀初頭（II-4～5期）。1511・1512は高台付杯。8世紀代。1513～1516は杯。1514には内面に、1516には外外面に火襷が掛かる。9世紀後半頃。1517は皿。9世紀後半頃。1518～1520は高杯。1521は壺体部。肩部が屈曲するもので、長頸壺または広口壺になると考えられる。1522～1525は壺底部。9世紀代。1526・1527は甕。1527は内面の磨滅が著しく、転用硯として利用されたと考えられる。傾きは任意。1528～1530は土師質土器。1528は椀。1529・1530は足金口縁部。14世紀中頃。1531は製塙土器。外側にはタタキ痕が残される。1532・1533は平瓦。1532は凸面にタタキ痕が残る。ともに凹面には布目痕が残る。1534は板状鉄片、1535・1536は棒状鉄片。

2区1a層からは、大きく①6世紀末～7世紀初頭、②8世紀～9世紀、③14世紀中頃の遺物が出土した。①は2面遺構群及び包含層、②は1面遺構群、③は0面遺構群の時期と概ね同じである。転用硯は2区南北区画溝であるSD2011でも出土したが、ここで出土した転用硯も同様の時期に使用されたものであろう。

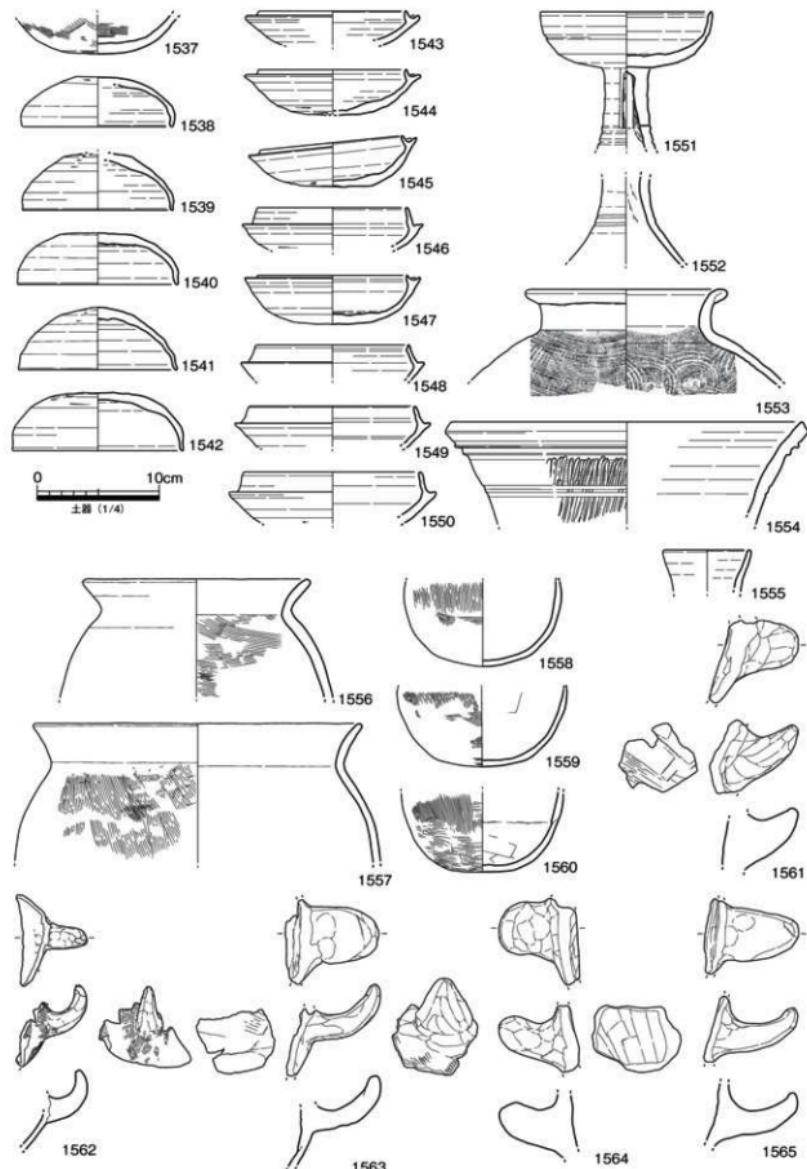


第341図 2区1a層出土遺物 (1/4・1/2)

7区出土遺物（第342・343図）

1537～1569は7区1a層で出土した遺物である。

1537は弥生土器壺または甕の底部。1538～1555は須恵器。1538～1542は杯蓋。7世紀前半（II-6期）頃。1543～1550は杯身。1545は歪みが著しい。1543～1545・1547は7世紀前半（II-6期）頃。1546・1548～1550は6世紀後半（II-3期）。1551・1552は高杯。1551は脚部の中位に沈線が2条巡り、



第342図 7区1a層出土遺物 (1/4)

沈線の上部に長方形の透かし孔が2ヶ所残る。1552は脚部の中位に沈線を2条巡らせるが、透かし孔は施さない。1553・1554は甕。1553は体部にカキ目を施す。1554は内面に自然釉が掛かる。7世紀前半（II-6期）頃。1555は平瓶口縁部小片。1556～1565は土師器。1556・1557は甕。1558～1560は底部。把手が多く出土しているので、甕の底部の可能性が考えられる。1561～1565は甕または瓶把手。1566は管状土錘。1567・1568はサスカイト製石器。1569は石庵丁片、1568は石鎧。凹基式。1569は鉄滓。

出土遺物は6世紀後半～7世紀前半である。それ以降の遺物が出土しなかったのは、7区では古代以降の遺構が認められなかったことと対応している。

8-2-3区、10区南出土遺物（第343図）

1570～1573は8-2-3区・10区南で出土した遺物である。1570・1571は須恵器。1570は高台付杯。1571は甕口縁部。8世紀代。1572は平瓦。薄手で凹面に布目痕、凸面に格子タタキ痕が残る。1573はふいご羽口または炉壁。

8-2-3区・10区南からはおもに8世紀代以降の遺物が出土したが、遺物の出土量は非常に少なかった。

10区北出土遺物（第343図）

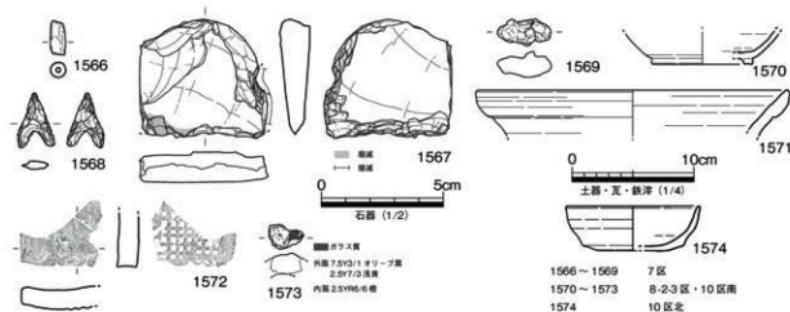
1574は10区北で出土した遺物である。須恵器杯。7世紀後半～末頃（III-2～3期）と考えられる。

⑥2区1a・1b層出土遺物（第344図）

2区では、1部で1a層・1b層を同時に掘り下げた。1575～1592はその際の出土遺物である。

1575～1586は須恵器。1575は蓋。内面に他の須恵器の溶着痕が残る。8世紀代。1576は杯蓋。7世紀前半（II-6期）頃。1577～1580は杯身。1577は体部外面に他の須恵器胎土の溶着痕が残る。歪みがある。1580は器壁に気泡が入る。6世紀後半～末（II-3～4期）。1581は高杯脚部下半部。中央付近に沈線が巡る。長方形の透かし孔が2ヶ所に残る。1582～1585は甕。1585は頭部に波状文を施す。1584・1585は体部外面に、1584は頭部内面に自然釉が掛かる。1586は提瓶。1587～1591は土師器。1587は高杯。1589は甕。1590・1591は甕または瓶把手。1592は板状鉄片。断面では、折り曲げたような状態が観察できる。

出土遺物は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。



第343図 7区・8区・10区1a層出土遺物（1/4・1/2）

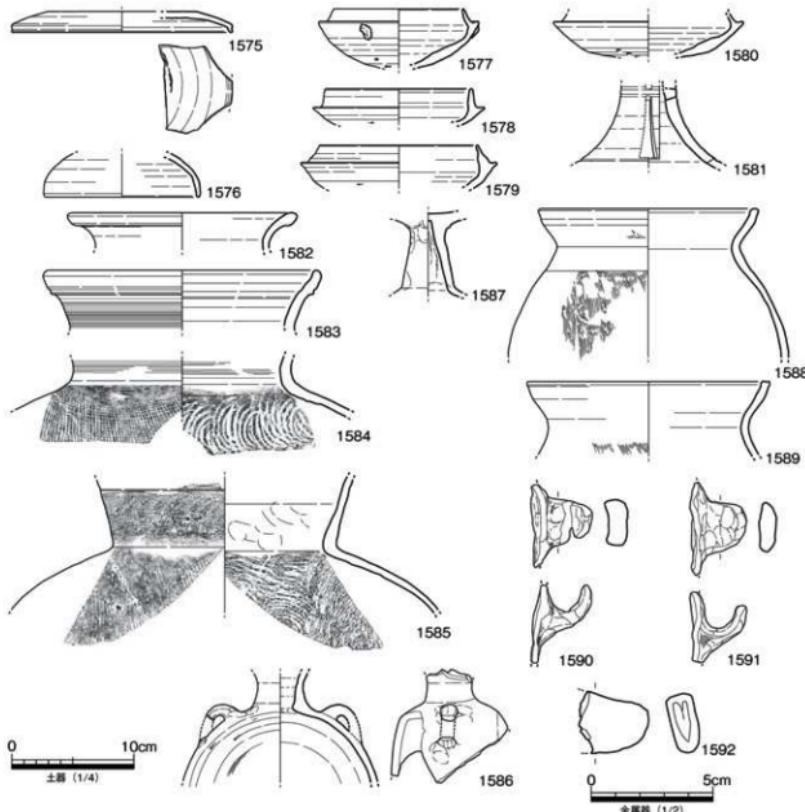
⑦層位不明出土遺物

1区出土遺物（第345・346図）

1593～1619は1区上面精査中に出土した遺物である。

1593～1595は弥生土器。1593は広口壺口縁部。内外縫ともにヘラ磨きを施す。1594・1595は鉢。弥生時代後期後半。1596～1612は須恵器。1596～1598は杯身。6世紀後半～末（II-3～4期）。1599～1605は杯蓋。1601は頂部外面にヘラ描きを施す。内面は土師器の色調を呈する。6世紀後半～7世紀前半（II-3～6期）頃。1605は肩部と口縁端部に段を持ち、やや古い様相を示す。6世紀中頃（II-2期）。1606・1607は高杯。1607は脚部の中位に沈線を施し、その上部に長方形の透かし孔が2ヶ所に残る。1608～1612は甕。1611は焼成不良で、土師質の色調を呈する。1612は頭部に沈線を2条施し、沈線の間に波状文を施す。

1613・1614は土師器。1613は高杯。1614は瓶口縁部か。1615・1616は製塩土器。1615は外面が剥離し、



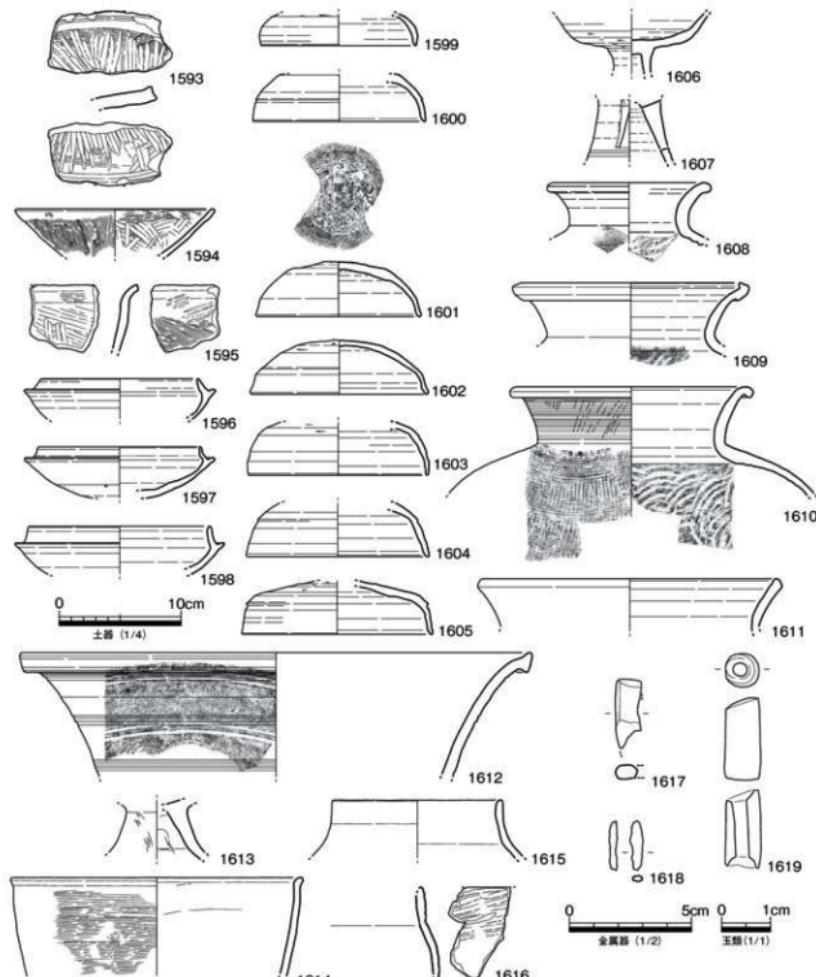
第344図 2区1a層・1b層出土遺物（1/4・1/2）

調整は不明。1616は外面に平行タタキ痕を残す。1617・1618は棒状鉄片。1619は碧玉製管玉。

1620・1621は東側溝掘削時に出土した遺物である。1620は須恵器杯蓋。肩部に稜を持ち、口縁端部は段を持つ。6世紀中頃～後半（II-2～3期）。1621は土師器壺。

1622・1623は西側溝掘削時に出土した遺物である。ともに須恵器壺。

1624・1625は機械掘削時に出土した遺物である。ともに須恵器。1624は杯蓋。1625は杯身。6世紀後半（II-3期）。



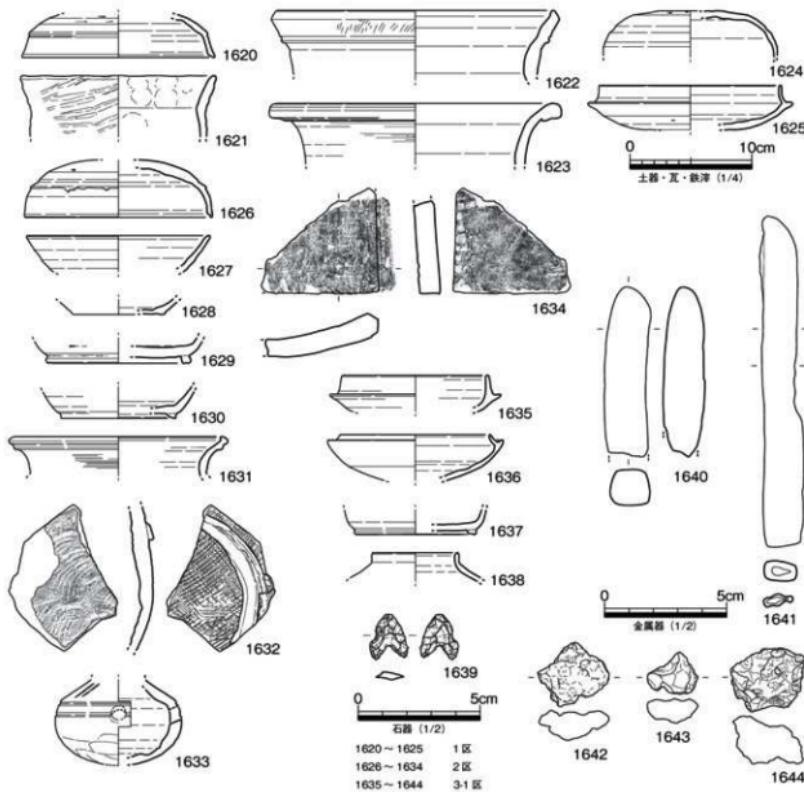
第345図 1区その他遺構外出土遺物1 (1/4・1/2・1/1)

2区出土遺物（第346図）

1626～1634は2区層位不明遺物である。

1626・1627・1629～1633は須恵器。1626は杯蓋。口縁端部、肩部に僅かに段を持つ。6世紀後半（II-3期）頃。1627は杯、1628は土師質土器杯。須恵器と同じ形態・製作技法で、焼成のみ土師質である。須恵器焼成不良品の可能性もある。9世紀後半。1629・1630は高台付杯。8世紀代。1631は壺。1632は壺体部。傾きは任意である。外面に別個体の須恵器が溶着する。内外面ともに自然釉が掛かる。1633は甌。体部に沈線を2条巡らせる。肩部にヘラ書きを施す。7世紀前半（II-6期）頃。1634は平瓦。外面に格子タタキ痕をわずかに残す。

1635～1644は3区から出土した層位不明遺物である。

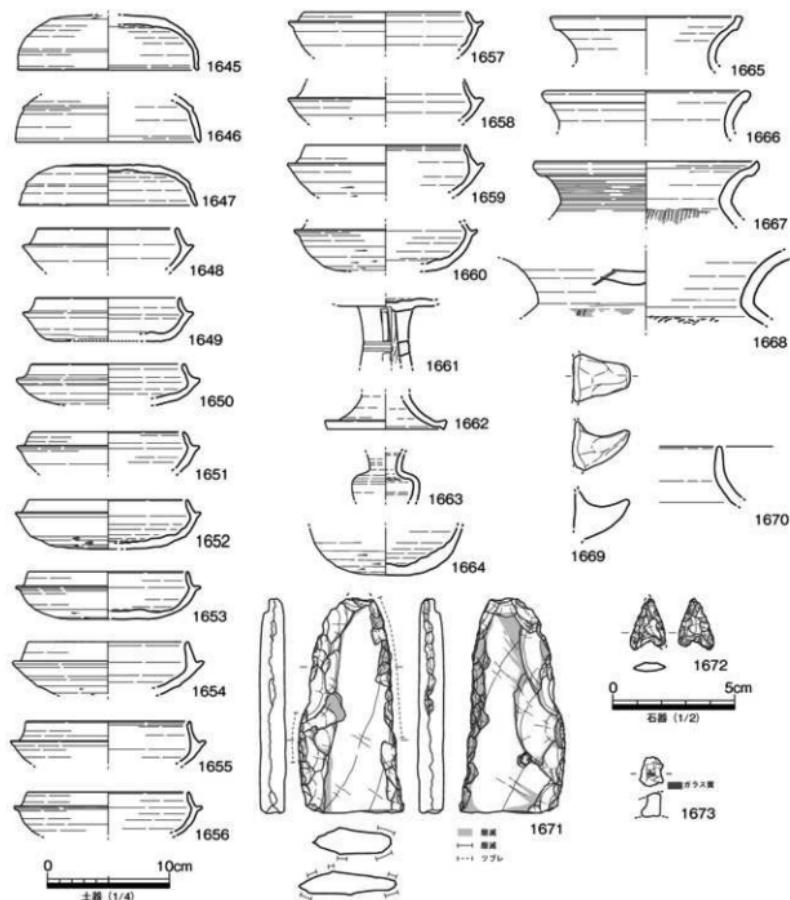


第346図 1区 その他遺構外出土遺物2(1/4)、2区・3区その他遺構外出土遺物(1/4・1/2)

1635～1638は須恵器。1635・1636は杯身。6世紀後半～7世紀初頭（II-3～5）。1637は高台付杯。8世紀代。1638は壺。1639はサスカイト製石鎌。凹基式。1640・1641は棒状鉄器か。1641は長辺方向で折り曲げており、中空となっている。1642～1644は分析試料。1642は鉄滓。1643は鉄塊系遺物。1644は褐鉄鉱。鉄滓の可能性を考え分析を行ったが、その結果自然物の可能性が大きいことがわかった。鍛冶関連遺物は、2面 SF3001・3002に関連すると考えられる。

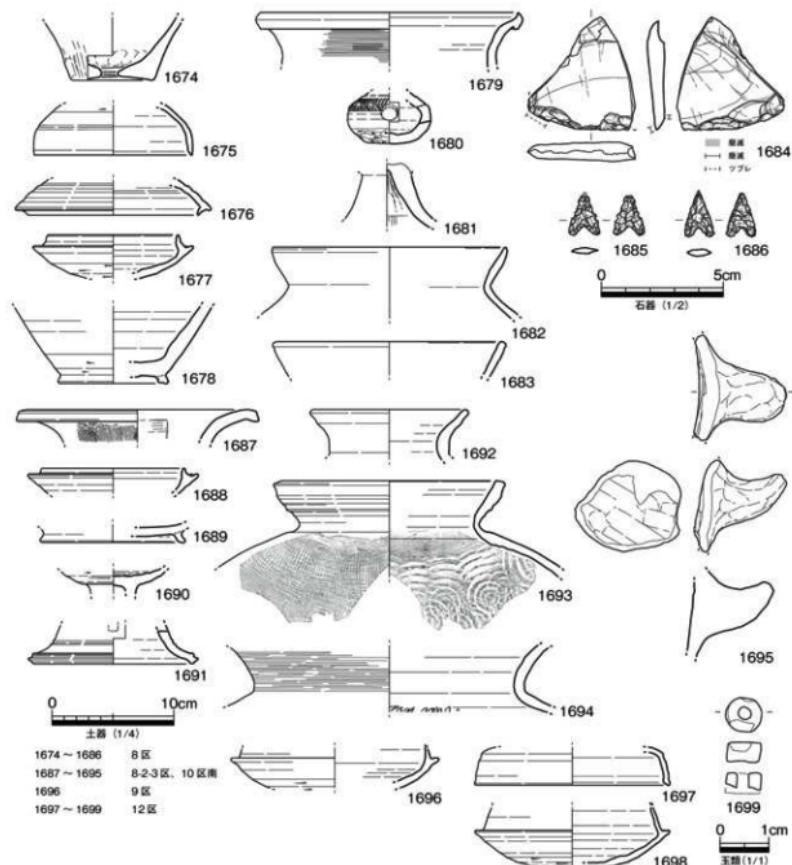
7区出土遺物（第347図）

1645～1673は7区から出土した層位不明遺物である。



第347図 7区その他構外出土遺物（1/4・1/2）

1645～1668は須恵器。1645～1647は杯蓋。いずれも肩部、口縁端部にわずかに段を持つ。6世紀後半(II-3期)頃。1648～1660は杯身。1648には外面に重ね焼き痕が残る。6世紀後半～末(II-3～4期)頃。1661・1662は高杯脚部。1661は脚中位に沈線を巡らせ、その上・下部に長方形の透かし孔を施す。1663はミニチュア壺。1664は壺または鰐底部か。1665～1668は甕。1668は頸部外面にヘラ描きを施す。1669は土師器壺または瓶把手。1670は製塙土器片。1671はサスカイト製打製石斧(石庖丁か)。刃部に磨滅痕が残る。1672はサスカイト製石鎌。凹基式。1673はふいご羽口または炉壁。一部に高温によるガラス質化を認める。



第348図 8区・9区・10区・12区その他遺構外出土遺物 (1/4・1/2・1/1)

8区出土遺物（8-2-3区以外）（第348図）

1674～1686は8区（8-2-3区以外）から出土した層位不明遺物である。

1674は弥生土器底部。底部穿孔土器。焼成後に穿孔を行う。1675～1680は須恵器。1675は杯蓋。1676は蓋として図化したが、杯身の可能性もある。1677は杯身。1675～1677は7世紀初頭～前半（II-5～6期）頃。1678は壺底部。1679は壺。頸部外面にカキ目を施す。1680は腹。肩部にヘラにより綾杉状に施文する。小型のもの。1681～1683は土師器。1681は高杯。1682・1683は壺。1684～1686はサスカイト製石器。1684はスクレイバー。1685・1686は石鎌。凹基式。

出土遺物は、弥生土器を除けば概ね7世紀初頭～中頃と考えられるが、1678は8～9世紀まで下るものである。

8-2-3区、10区南出土遺物（第348図）

1687～1695は8-2-3区、10区南で出土した層位不明遺物である。

1687は弥生土器広口壺。弥生時代終末期。1688～1694は須恵器。1688は杯身として図化したが、蓋の可能性もある。1689は高台付杯。8世紀代。1690・1691は高杯。1691は長方形の透かし孔が1ヶ所に残る。1692は壺口縁部か。1693・1694は壺。1695は土師器壺または瓶把手。

出土遺物は弥生土器を除けば7～8世紀代の遺物が認められる。

9区出土遺物（第348図）

1696は9区で出土した層位不明遺物である。須恵器杯身。口縁端部は欠損する。6世紀後半～末（II-3～4期）。

12区出土遺物（第348図）

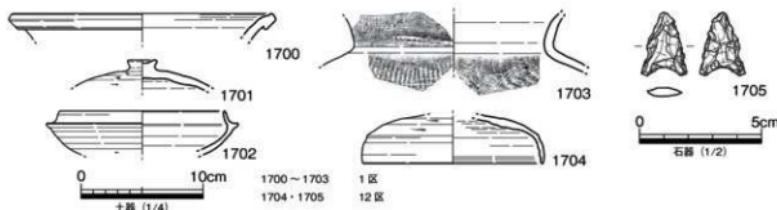
1697～1699は12区から出土した層位不明遺物である。

1697・1698は須恵器。1697は杯蓋。1698は杯身。6世紀中頃（II-2期）。1699は滑石製白玉。

⑧その他出土遺物（第349図）

1700は1区攪乱で出土した。須恵器壺。1701～1703は1区出土位置不明遺物。すべて須恵器。1701は蓋。7世紀末頃。1702は杯身。6世紀末頃。1703は壺。

1704は12区出土位置不明遺物。須恵器杯蓋。6世紀後半頃。1705は12区攪乱土から出土した。サスカイト製石鎌。凹基式。



第349図 1区・12区攪乱その他遺構外出土遺物（1/4・1/2）